松浦武四郎の四国遍路をたどる

あれから二百年

コロナ時代のへんろ考現学

序

松浦武四郎という人物を一面的に捉えることはできない。近世後期の蝦夷地事情に精通し、蝦夷地を改称するに当たって「北加伊道」の道名を提唱した〝北海道の名付け親〟としての一面がとりわけ有名であるが、それ以外にも、時に体制批判をも含むルポルタージュや紀行文を執筆し、それらの多くを上梓した記者・作家および出版人としての側面、また、古物の蒐集にいそしんだ当代有数の好古家としての側面も指摘される。そして、十代の頃から七十一歳で生涯を閉じるその直前まで、全国各地、いやその域外までもひたすらに歩き続けた〝旅の巨人〟としての側面を見過ごすことはできない。むしろ、多様な事績が指摘されるなかで、旅こそがそれらの根底にあったことは間違いない。武四郎の旅は、その時々で目的も立場も様々である。ある時は家出のため、ある時は志士としての使命感から、またある時は幕吏としての役目を負って。ただし、目的はともあれ、何より旅という動機がなければ、蝦夷地・北海道との接点も生まれなかったし、それを題材にした出版事業を手がけることもなかったし、全国の古物を得る機会に恵まれることもなかっただろう。まさに、松浦武四郎という〝巨人〟の中核をなすのが、旅だったのである。

〝旅の巨人〟松浦武四郎が四国遍路の旅に出たのは、天保七年（一八三六）、十九歳の時。彼の旅人生全体からみれば、かなり早い段階である。おそらく明確な目的のない、諸国放浪の旅の一環であったと思われる。この遍路旅の詳細は、数年後に武四郎自身が『四国遍路道中雑誌』（生前は未刊）としてまとめることで、後世の我々の知るところとなった。数年を経ての執筆を可能にした

のが、旅先で書き留めた精細な記録である。卓越した洞察力に加え、見聞した事柄を即座に文章や絵に表現する能力があったればこその業績である。十代の旅において早くも見られる、矢立（携帯用筆記具）と野帳（小型帳簿）を携えて道中の事象を鋭く洞察する武四郎の旅のスタイルは、後に蝦夷地探査において真価を発揮することになるルポルタージュ作家としての原点といえるだろう。

本書は、『四国遍路道中雑誌』からルポルタージュ作家松浦武四郎のメッセージを受け取った著者が、フォロワーとして同じ道を歩き、それに現代的解釈を加えた意欲作である。武四郎のルポルタージュを追った、時代を超えた第二のルポルタージュとでもいうべきか。武四郎の精神は、旅先であるここ四国でも受け継がれている。

歴史は現在を問えるか、歴史は未来を向けるか。この普遍的な問いに答えることは容易ではない。歴史を学ぶということは、ある種の追体験を伴う。武四郎の時代から、四国霊場はほとんど当時のままに残され、歴史に根付いた四国遍路の文化も遍路道とともに今に伝わり、そして人々の遍路旅への思いも形を変えつつ連綿と続いている。先人の軌跡をたどって旅することは、机上で歴史を学ぶにとどまらない、真の追体験である。これこそ、先人の営為を通じて、現在を問い、その先にある未来を見通すという、歴史が有する大きな可能性だろう。本書が、その試金石として、読まれ、評価され、受け継がれることを望む。

令和三年七月

高山　嘉明（高知県立坂本龍馬記念館学芸員）

目次

序

■はじめに　四国を「歩く」ということ　……14
■本の構成　何を記録したか　……18
活動日記　……19
武四郎の軌跡　……19
■旅する巨人・松浦武四郎　……21
松浦武四郎の生き方　……21
あだ名・ニックネーム・ペンネーム　……22
■四国遍路道中雑誌　……27
四国遍路道中雑誌とは　……27
四国遊行の順路　……28
松浦武四郎の遍路姿　……30
『道中雑誌』は「民俗調査報告書」　……31
松浦武四郎の歩き方　……32
旅姿と記録の道具　……34
今回のザックの中身（秋遍路）　……35

歩き遍路の時期……36
歩き遍路の費用……37
タビはタマワル（物乞い）……38
■コロナ時代の四国遍路　四国遍路の移ろい……40
四国遍路の変容……40
神仏分離令による変容……43
宗教と政治の変容……45
山の暮らしの変容……48
四国遍路　一日目（四万十町～37～黒潮町）……54
へんろ宿……61
この世とあの世の境界「坂と峠」……62
行路病者……63
消えた白田川村……64
四国遍路　二日目（黒潮町～土佐清水市）……66
吹上という海風のチカラ……70
高島か竹島か……71
川と渡し……71

蟹味噌……72
四国遍路　三日目（土佐清水市〜38〜土佐清水市）……74
椿は春を告げる花……79
亀と補陀落渡海……80
「打ち戻り」は歩き遍路のご褒美……81
四国遍路　四日目（土佐清水市〜三原村）……84
シシ垣……86
シカの耳は奨励金……87
長谷は「ながたに」か「はせ」か……87
四国遍路　五日目（三原村〜39〜愛南町）……90
土佐の食事……94
かしき……95
番所……95
四国遍路　六日目（愛南町〜40〜宇和島市津島町）……98
札掛……103
篠山……104
する木村……104

四国遍路　七日目（宇和島市津島町～宇和島市）……106
願成寺……109
宇和島は南予の中心地……110
和霊神社という御霊信仰……110
中間（なかいだ）村……111
四国遍路　八日目（宇和島市～41・42・43～西予市宇和町）……112
組という集落名……119
トウという峠・窓峠……119
水神の岡象女が三間……120
「ひとうがわ」という難読地名……121
明石さん……122
西予市……122
四国遍路　九日目（西予市宇和町～内子町）……124
鳥坂……127
大洲……128
都夜（ッヤ）の橋（十夜ヶ橋）……128
四国遍路　十日目（内子町～44～久万高原町）……130

川の道……135
五百と五十……135
田渡……136
臼杵……136
鵜田峠……137
四国遍路　十一日目（久万高原町～45～松山市）……138
熊野修験の拝所「一ノ王子」……141
峠越えの入口「坂本」……143
タンガと風呂……143
四国遍路　十二日目（松山市～46・47・48・49・50・51～松山市道後）……146
衛門三郎の札始大師堂……156
道後温泉……157
四国遍路　十三日目（松山市道後～52・53～松山市北条）……160
伊予の国名……166
あハい坂（粟井坂）……169
四国遍路　十四日目（松山市北条～54・55・56・57・58～今治市）……170
北条という地名……178

四国遍路　十五日目（今治市〜59〜西条市）……180
桜井の石風呂……183
孫兵衛作という開発地名……184
道前と道後……185
壬生（にゅう）と入は水銀鉱床……187
四国遍路　十六日目（西条市〜62・61・60・63・64〜西条市）……188
石鎚山……196
「追分」という往来地名……198
四国遍路　十七日目（西条市〜四国中央市三島）……202
「中村」という往時の中心を示す村……204
四国遍路　十八日目（四国中央市三島〜65〜三好市池田町）……206
奥の院……209
平山……211
四国遍路　十九日目（三好市池田町〜66・67・68・69〜観音寺市）……212
生木地蔵……219
小松尾寺という「あだな」……220
四国遍路　二十日目（観音寺市〜70・71・72・73・74・75・76・77〜坂出市）……222

下勝間の宝塔 …… 233
西行の四国旅 …… 233
四国遍路 二十一日目（坂出市～78・79・80・81・82～高松市）…… 236
天皇という寺 …… 244
松山の津 …… 245
崇徳院、七百年の怨霊 …… 247
四国遍路 二十二日目（高松市～83～高松市）…… 250
当国第一の産物は「塩」…… 254
四国遍路 二十三日目（高松市～84・85・86～さぬき市志度）…… 256
さぬき市という合併地名 …… 260
日本学術会議の提言「地名は公共財」…… 263
四国遍路 二十四日目（さぬき市志度～87・88～さぬき市多和）…… 266
和三盆を伝えた遍路 …… 270
香り米・ヘンドヨリ・幾治ヨリ …… 271
四国遍路 二十五日目（さぬき市多和～板野町）…… 274
徳島県の小字は「グーグルマップ」で …… 278
四国遍路 二十六日目（板野町～1・2・3・4・5・6・7・8・9・10～吉野川市）…… 280

吉野川という「四国のいのち」……291
黒谷村という「黒」……293
四国遍路　二十七日目（吉野川市鴨島町～11・12～神山町）……298
そうち村という「左右」の話……303
弥山という霊山……305
四国遍路　二十八日目（神山町～13・14・15・16・17～徳島市）……308
止宿するによろし……315
四国遍路　二十九日目（徳島市～18・19～勝浦町）……316
「星」という行場……320
四国遍路　三十日目（勝浦町～20・21・22～阿南市新野町）……322
「亡所」という捨てられた村……328
四国遍路　三十一日目（阿南市新野町～23～美波町日和佐）……332
さかせ川……336
鉦打……339
峠の鯖（生飯）……339
牟岐は南海道の駅・武芸……339
四国遍路　三十二日目（美波町日和佐～海陽町）……342

カリト坂はカロウト坂 …… 344
四国遍路　三十三日目（海陽町～室戸市佐喜浜町） …… 348
強羅とゴウロ …… 351
四国遍路　三十四日目（室戸市佐喜浜町～24・25・26～奈半利町） …… 354
何を食べてきたのだろう …… 361
虎杖と熊野信仰 …… 362
田舎の暮らしぶり・遍路商い …… 363
川村与惣太 …… 366
四国遍路　三十五日目（奈半利町～27～安芸市穴内） …… 368
イシイモと石蛤 …… 372
四国遍路　三十六日目（安芸市穴内～28・29・30～高知市高須新町） …… 374
ものい川 …… 381
二期作という消えた季語 …… 382
四国遍路　三十七日目（高知市高須新町～31・32・33・34～土佐市高岡町） …… 384
四萬八川という仁淀川 …… 391
四国遍路　三十八日目（土佐市高岡町～35・36～須崎市安和） …… 394
土佐の八坂八浜 …… 400

今在家……401
四国遍路　三十九日目（須崎市安和～四万十町茂串町）……404
仁井田五社と河野玉澄……406

コラム
地名アラカルト……53・65・123・211・221・307・353・393
佐々木愚草の川柳集……73・83・89・97・105・145・201・205・273・279・297・331・341・367・403

■あとがき……410

【付録】
参考図書 416／四国遍路宿泊先等行程一覧 421／索引 422／注記 424

■はじめに　四国を「歩く」ということ

今宵しも夢にもみつる故里を
胡井志の里に草枕して

今から、二百五十年前。土佐の歌人・川村与惣太が二十六番札所西寺（金剛頂寺）の別当職を辞して土佐一国の辺地紀行の旅に出たのが五十二歳だった。理由は記されていないが、隠居の身として土佐一国を吟遊したいというのが本来の願いと考える。東は甲浦から西は松尾坂までくまなく見聞し、折々の歌が詠まれた紀行歌集が『土佐一覧記』である。当時の滝や古城跡の名所のほか川や山、集落の地名が五百五十八カ所にわたり記され、安永の「土佐風土記」ともいえる。この『土佐一覧記』を広く世に知らしめたのが山本武雄（室戸市在住）である。山本は『校注土佐一覧記』を出版するにあたり「はじめに」として、歌碑を写真に載せ、旧大正町には三つの与惣太の歌を石に刻んでいると紹介している。その一つが同町江師にある右の歌碑である。

「胡井志」とは江師の対岸にあたり、私が生まれた四万十町小石である。実家のすぐ下にあった茶堂で「草枕」したのであろう。

この与惣太の歌を訪ね歩く旅をしたのが六十の春だった。

人生百歳時代を迎え、リタイア組には「一身ニシテ二生ヲ経ル」が大きな命題である。稼ぎはないが十分な時間だけはある。与惣太が詠んだ五百五十八カ所の地名・地物の一つ一つを訪ね歩いた。海岸沿いはもとより野根山街道や香美郡の塩の道も歩いた。

そんな折に松浦武四郎の一冊の本に出合った。吉田武三『松浦武四郎著作集』に所収されている「四国遍路道中雑誌」は武四郎、十九歳の時に四国遍路をした記録である。残りの命四十年を地名と民俗を紡いでみようと決意したときであった。

いまや退職者の通過儀礼ともなった四国遍路であるが、歩くことは大好きである。一日に三十キロメートル歩くことはこれまでの経験でも苦にはならない。これを四十日続けたら四国遍路になってしまうのだ。とはいっても四十キロメートルを超える行程のときはつらかった。それでも右足を一歩送れば左足が前に進む。段差のある歩道にぶつぶつと呪文のいちゃもんをつける。路傍の人に声をかけると元気をいただく。

そうこうすると宿には着くし、一日の疲れを風呂に入り夕食とお酒で癒してくれる。「歩く修行」とはこの苦楽の振り子なのだ。

動物と植物の違いの一つに「前進運動」があるという。植物は地面に植わって雨などの環境の好転をじっと待つばかりであるが、動物はよりよい環境を求めて移動する。その手段としての前進運動器官を持つことになった。その効率的な移動方法が「歩く」こと。それは「這う」という四足歩行から直立二足歩行に進化した結果であり、それによりヒトは「自由

な手」を獲得し、さらに人に進化するなかで他の道具をつくり、狩猟と栽培により生活空間を大きく変容させ、多くの文化的遺産を創造することとなった。

姫路市山田町に「歩行田（あるきだ）」という小字がある。アルキというのは村（大字）の寄り合いなどの行事を村人に触れ歩く役目を持っており、このアルキの費用をまかなうためにあてがわれた田が歩行田である。長崎県壱岐島には「触（フレ）」という村の下を構成する小区画（組とか班といった回覧板を回す範囲）がある。このアルキや触は人と人との共同体を育むコミュニケーションの基本域である。

この「歩く」という移動手段は、足に変わる「車」などの発明により退化の一途をたどることになったようだ。それは、身体的な歩行能力の退化だけでなく、対面する人とのコミュニケーション能力や五感による情報収集能力をも退化させていった。

「歩く巨人」松浦武四郎のすごさはこの情報収集能力と記録にある。そのまねごととして武四郎のたどった四国の二百年後の世界を検証しようと試みたのが今回の四国遍路の旅である。

人類が初めて経験するコロナ禍でのヘンロである。移動に対する不安と迷惑の両面からの困難があった。いくぶん躊躇したが年齢から最後のチャンスととらえ、当初は春の計画であったのを秋に変更し出立となった。この記録は、武四郎の軌跡をたどることが主テーマであるが、四国遍路としての所作もそれなりに整え、地名と民俗のにわか探求者として楽しく歩いた記録をまとめることとした。

■本の構成　何を記録したか

ここの本の構成は、「はじめに」で四国遍路のいきさつを述べ、「旅する巨人・松浦武四郎」の章では武四郎の人となりを紹介し『四国遍路道中雑誌』の概略を説明する。続いて「コロナ時代の四国遍路」と題して江戸末期に歩いた武四郎の四国遍路がどのように変容していったか、明治初頭の神仏分離令が日本人の信仰にどう変化をもたらしたかについて考えてみた。

今回の三十九日の四国遍路を「活動日記」として日めくりで章立て。コロナ時代の考現学として歩いた汗のインクであぶりだしのように寄せ書きしてみた。また、その日に訪ねた札所の所感も加えてみた。その次に、「武四郎の軌跡」と題してその日歩いた武四郎の記録などをまとめ、印象に残った地名・地物を考えてみた。

また、参考となる参考図書・地図・宿泊先行程一覧を「付録」として掲載し、加えて時系列で検索することができない地名や印象に残る用語について「索引」を設けることとした。

また、ページの余白には、コラム「地名アラカルト」と友人の「佐々木愚草の川柳集」からコロナ時代の写し絵として数首を引用し、勝手な解釈を添えることとした。

活動日記

「活動日記」は、その一日の行程と歩いた距離と時間とそのログを示し、令和の時代におけるへんろの道しるべとなるよう個人的な思いで綴ったものである。加えて、その日に訪ねた札所を項立てしてホームページ『四国八十八ヶ所霊場会』から御詠歌、本尊等の概略を引用し、澄禅の『四国辺路日記』（一六五三）や真念の『四国偏禮道指南』（一六八七）や寂本の『四国偏礼霊場記』（一六八九）と武四郎の『四国遍路道中雑誌』（一八三六）に書かれている札所の概説並びに各県の地誌を織り交ぜてその変遷を探り、熊野信仰の痕跡を訪ねることとした。また、歩き遍路をしてみたい人へのアドバイスとして歩く道具や遍路道に関するいくつかのポイントを加えることにした。

この本では武四郎の歩いた道を説明する場合「へんろ道」と表記するが、時に「ヘンロ道」と「遍路道」に使い分ける。山道など今も使用されている歩き遍路の道を「ヘンロ道」、車道（歩道を含む）が併用されている道を「遍路道」とした。

武四郎の軌跡

武四郎は江戸末期の郷村の地名、札所、へんろ道沿線の山や坂や川などの地物、名所旧跡の項を立てて、その説明を分かち書きで記している。

札所についてはその縁起や御詠歌、本尊はもとより、境内の本堂をはじめとした堂宇の配置を絵図とともに示し、また郷村については人家の構成や産業、何を食しているかといった暮らしの日常も切り取り、説明している。

この「武四郎の軌跡」では、武四郎が項に起こした郷村の地名を現在の市町村単位でまとめて列記し、その変遷した行政区等の地名（郷村の多くは現在の大字になっている）を括弧書きで示した。

武四郎が歩いたへんろ道については、江戸初期の澄禅や真念の歩いた道との変化も含め紹介し、現在との比較も試みてみた。その概説の後に、地域的に特徴のある小地名などについて項を立てて説明してみた。武四郎のようなスケッチは不得手であることから、地名を入れ込んだ写真を添えてみた。

遍路橋（松山市久米町）

電力柱オヘンロ（西条市小松町）

へんろ石バス停（南国市下末松）

■ 旅する巨人・松浦武四郎

この章では、松浦武四郎の人となりを簡単に紹介し、四国遍路の記録集である『四国遍路道中雑誌』に至るエピローグとする。

松浦武四郎の生き方

松浦武四郎は、文化十五年（一八一八）二月六日、伊勢詣の街道筋である伊勢国一志郡須川村（現在の松坂市小野江町）で生まれた。江戸末期の当時、「お蔭参り」の伊勢詣には五百万人もの旅人が全国から訪れるといわれる。多くの旅人の姿やお国言葉を見聞きして育った武四郎は、遠い世界に夢馳せたことだろう。

そんな武四郎が初めて旅したのは十六歳。それも江戸への家出だった。親に連れ戻されるのだが、帰りは中仙道を通り戸隠山も登山している。次の年、親の許しを得て一両の路銀を渡され旅に出たのが十七歳。遊歴のはじまりである。近畿・中部・関東・東北・四国・本州と駆け巡り富士山にも登頂している。四国の札所を巡ったのは十九歳の時だった。「一小冊を懐にして日々の順路、村名、里程をしるし」て四国遍路を通し打ちし、《歩く・見る・聞く・記録する・本にする》という旅のスタイルを確立するに至った。

探検家・松浦武四郎の名を有名にしたのは「北海道の名付け親」である。

北海道に改称されて百五十年の節目。ＮＨＫドラマ「永遠のニシパ～北海道と名付けた男　松浦武四郎（大石静作・松本潤主演）」が放映された。明治新政府の役人でもない武四郎が、未開の蝦夷地を六度にわたり踏査して見聞と野帳をもとにまとめた膨大な著書と地図。アイヌ語を習得しアイヌの人との交流の中でその土地の名前や暮らしや文化を日常の細部にわたって描写した本が『石狩日誌』など。地域ごとに絵師による図を入れ読みやすい工夫を加え刊行した。圧政に苦しむアイヌの実情を『近世蝦夷人物誌』で世間を喚起し、蝦夷地がどこにあるか子どもにも分かるよう『絵双六』を発刊するなど「伝える技術」も卓越している。まさに「歩く記録装置」ともいえる武四郎である。

あだ名・ニックネーム・ペンネーム

探検家、北海道の名付け親、歩く巨人、歩く記録装置とさまざまなキャッチフレーズが付けられている。旅と記録、モノの収集に生きた武四郎であるが、人となりが分かるこの他の肩書・ニックネームを年代にそって紹介する[1]。また、ペンネームも武四郎の年代に応じて違うので武四郎の心の変化を読み取るうえで面白い。詳しくは大山晋吾が「志士松浦武四郎の人間像―特に署名の変化を通じて（『シンポジウム松浦武四郎・北への視角』一九九〇年所収）」に書いているので読んでいただきたい。

家出少年　家出をしたのが十五歳。「私わ江戸、京、大坂、長崎、唐または天竺へでも行き候

か」との家出の手紙が松浦武四郎記念館（松阪市）に所蔵されている。家出の真相は武四郎の師匠平松楽斎先生の火事頭巾を古道具屋に売ってしまったことが発覚したことによると思われる。この家出は一カ月で連れ戻されたのだが、この江戸で篆刻の技術を身につけたということで、今後を見通したしたたかさもある。

篆刻家　この篆刻の技術は玄人はだしで若い頃は旅の路銀稼ぎにもなったという。旅先の収入源ばかりか人とのコミュニケーションを取る手段としても生かされたようだ。弘化三年（一八四六）二度目の蝦夷地調査のおり江差で儒学者頼山陽の三男・頼三樹三郎と出会い、互いが得意とする詩と篆刻の技を競い合った作品が「一日百印百歌」として残っている。

手八丁脚八丁・鉄の脚を持つ男　武四郎も一日に二十里歩くと豪語しているが、当時の武士のナンバ歩きといい、現代と違う歩き方があるのかもしれない。手八丁口八丁ならぬ「脚八丁」と表現されたり、「鉄の脚を持つ男」と評されるのは誰もが武四郎の脚を認めていたことだろう。

古銭蒐集家　天保三年（一八三二）の秘蔵品の目録に「紅毛銭二種　津　松浦武四郎」とあることから少年（十五歳）の時からの趣味であったようだ。慶応元年（一八六五）の新聞記事に北野天満宮へ神鏡を奉納した「古銭蒐集家松浦武四郎翁」とある。当時四十八歳で六回の蝦夷地調査を終え出版にいそしむ時期であった。慶応三年（一八六七）の古銭愛好家の「古銭番付」に「前頭二十九枚目　江戸　下谷　多氣志楼」とある。この後すぐの明治元年（一八六八）に函館府判事に任じられる。

函館府判事・従五位下　六回目の蝦夷地調査を終えたあと、出版にいそしんでいた武四郎に明治新政府の大久保利通から御召状があり上洛したのは明治元年（一八六八）、武四郎五十一歳の時。辞令は「任徴士箱館府判事・叙従五位下」。

馬角斎　箱館府判事から開拓判官に昇進するが、賄賂が横行する政治や、アイヌに対する圧政に嫌気が差し辞表を提出している。この辞職する際に使った雅号が「馬角斎」。中国の史記では「馬の角」はありえないことのたとえの意味があるというが、「ばかくさい」と読めば武四郎の蝦夷政策に対する批判とも読める。この明治三年（一八七〇）を節目に「蝦夷の旅」を封印したように思える。

古物収集家。好古家　大森貝塚を発掘したエドワード・モースの日記に「かなり有名な古物蒐集家松浦武四郎を訪問したところが、非常に親切に迎えてくれた。主としてコンマ形の石である勾玉……」と『週刊武四郎・第六号（発行松坂市）』に記されている。年代確認のためモースの『日本その日その日』を見たが、「古物蒐集家松浦武四郎を訪問した」という段を探し当てることができなかった。二度目の来日となる明治十一年（一八七八）年以降のことか。晩年、全国各地の有名な神社仏閣、いわれのある珍しい古木片を集めて「一畳敷」の書斎を作った。紀州熊野本宮大社誠證殿扉、肥後熊本城瓦釘、安芸厳島海中大鳥居根・楠、山城嵐山渡月橋々桁・松、出雲大社本殿床板・檜、日蓮上人七色桜の枯木、駿河久能山五重塔縁板・檜などその数九十。これも『木片勧進』として記録されているが、それぞれに寄進者・出所・寸法・いわれ等を記し、絵図には「一畳敷」の使用場所を示している。この「一

畳敷」は神田五軒町から国際基督教大学の泰山荘に移築されて現存する。毎年学園祭で公開されるというから行ってみたいものだ。古物蒐集は武四郎の生涯の真骨頂でもある。

イヤミ老人・乞食松浦　武四郎は出版や『武四郎涅槃図』の作成に当たって当時活躍した絵師・河鍋暁斎に描いてもらっていたが、彼の絵日記に「イヤミ老人」と似顔絵の横に添えられているという。また古物コレクターの間では「乞食松浦」と呼ばれていたという。欲しいものがあればなんでも「くれくれ」と相手が根負けするまでねだることによる。おしゃべりで、収集癖の老人というところか。ただし、集めたモノや記録、古物品の整理術は天下一品であった。武四郎没後に松浦家から旧三雲町に寄贈され、「松浦武四郎記念館（松阪市）」に保存されているモノのうち、千五百五点が国の重要文化財という。

北海翁・北海道人　尾形乾山の名を継ぐ名工・三浦乾也（武四郎の義兄）が焼いて河鍋暁斎が彩色をした焼物「妙楽菩薩」の箱書に「北海翁」とある。自身も明治二年（一八六九）ごろの署名に「北海道人　松浦弘」と書いていたときもあり、その名にふさわしいニックネームだろう。晩年の『木片勧進』にも北海翁・北海道人の名が出てくることから万人も納得する一番のふさわしい名といえる。

天下の奇男児・奇人なり　松浦武四郎は「蝦夷通の志士」として天下に知れ渡っていたころ多くの有名人が武四郎を訪ねていたようで水戸藩の思想家・藤田東湖は「松浦武四郎　天下の奇男児也」と記している。吉田松陰も「奇人なり」と評している。

餐煎豆居（さんごうとうきょ）　臨終最期の言葉が「もう好物の炒り豆を腹いっぱい食えんのう」。歯もない武四郎

が若い頃からの大好物であった炒り豆がいまわの際の言葉となった。「餐煎豆居」は数ある号の一つ。明治二十一年（一八八八）二月四日脳溢血となり同月十日東京神田五軒町の自宅で逝去。七十一歳。墓所は東京の駒込・染井霊園にある。

『松浦武四郎紀行集』を編集した吉田武三は「探検家であり、登山家であり、地理学者であり、国士であり、画家であり、考古学者であり、蒐集家であり、大著述家であり、開拓判官であり……等々の、多角多面的なその生涯を貫き通していたものは、近世においての数少ない大旅行家であり、そこに本領があり、本来の面目があったとみてよいのである。」と記している。

このように、多くの名を持つ武四郎だが、まとめれば「どこにでも出向き誰とも仲良くなれる話す力・聞く力」と「記録して整理するまめさ」が備わった「旅する巨人」だと思う。

この本の扉ページに載せている地図は『東西蝦夷山川地理取調図』十六枚のうちの一枚の一部である。弘化二年（一八四五）の第一回目の蝦夷地調査により完成させた根室半島、風蓮湖、野付半島の地図である。沿海部は伊能忠敬や間宮林蔵の地図を利用して内陸部の川や地名を記録したのが武四郎の手法である。武四郎は忠敬のような測量士ではない。コンパスは持ち歩いたが現地をつぶさに見て記録する探検家である。六回の蝦夷地調査を行い、百五十一冊の調査記録を作成し、九千八百ものアイヌ語の地名をまとめ地図を完成させた、まさに旅する巨人である。

その膨大な記録の一つが天保七年（一八三六）の四国八十八ヶ所お遍路参りの記録『四国遍路道中雑誌』である。

■ 四国遍路道中雑誌

四国遍路道中雑誌とは

松浦武四郎が親の許しを得て諸国遊行の旅に出たのが天保五年（一八三四）九月九日、十七歳の時である。この年に備前から讃岐、阿波、淡路と四国に一度わたっている。次の年（十八歳）に高野山から北陸、飛騨、信州、江戸、日光、仙台、水戸、熊野路、阿波、讃岐と歩いたのちに八栗山（高松市牟礼町）で越年となっている。翌年十九歳に四国霊場を歩いた記録が後の弘化元年（一八四四）武四郎二十七歳の時に発表した『四国遍路道中雑誌（以下『道中雑誌』と略す）』である。前年に『西海雑誌』を発表しているが旅の記録としては『西海雑誌』の前の記録と言える（『飛騨紀行』があるという説もある）。

『道中雑誌』は巻之一（はじめに・丸亀七十八番道場寺～阿波二十三番薬王寺）、巻之二（土佐二十四番最御崎寺～讃岐分六十六番雲辺寺・予州分付録として大三島）、巻之三（讃岐六十七番大興寺～讃岐七十七番道隆寺・附録として箸蔵寺・剣山）の三部構成となっている。

巻之一の書名のあとに「五十瀬松浦弘著」とある。武四郎は年代に応じて多くのペンネームを持っているが、「五十瀬松浦弘」「五十瀬雲津松浦弘」の署名は二十歳代のころの作品に多く使用されている。

文章のスタイルは、札所や奥の院などで項を起こし、地名・地物を見出し語にして、その説明文を二行に分かち書きとしている。札所などは俯瞰した図絵を描き、堂宇などには名称も付記している。野帳に順路、村名、里程を記し、その土地の人々の話から暮らしをスケッチしている。地名の順序など相違するところもあるが、今風の「裏取り」取材は無理な話で、歩くだけでもしんどい旅で、このようなルポルタージュができることに驚きを感じる。

四国遊行の順路

『道中雑誌』では四国の上陸地が「丸亀」となっているが、武四郎の自伝では「撫養（鳴門市）」となっているのはどうしてか。

『道中雑誌』には、

天保七年丙申の年余十九歳なり山陽之地ニ遊歴し、播備之両州を経て下津井の湊（備中の国児島郡人家千餘軒）に船を求て（海上七り、船賃七十二文、毎夜出船有）渡海し（中略）丸亀、是より多度津弐り。

とあり、船で丸亀に渡り、弘法大師の源となる善通寺へは行かずに、まず象頭山（金毘羅さん）に参詣し、それから七十八番札所道場寺（道隆寺）から順打ちする書き方である。

一方、『新版　松浦武四郎自伝』によると、二度四国を訪ねている。

天保五年（一八三四）**十月**　坂地を出て播州地より備前を過て讃岐（丸亀）に到り、東讃基の浦（碁浦）を過て阿州に至り、**十二月**淡路に越是を一周して紀州和田に渡り（中略）

天保六年（一八三五）和田より阿州撫養（鳴門市）に渡り、四国八十八ヶ所の霊地を探らん為、爰より讃岐国八栗山の麓□□村と云に到りて越年す。**十九歳**の時（天保七丙申年）に、再び阿州に出て、坂東霊山寺より順次拝之二十番札所鶴山の奥の院、灌頂ヶ滝、黒滝寺、一つとして是を余すなく、**三月**土佐に入り、**四月**伊予国五十七番札所横峰寺奥の院なる石鎚山に上る。時に**五月二十五日**、実に是予が望足りと言つと思はる。巡拝相終て讃岐国金毘羅より山越して阿州なる箸蔵寺に上り、祖谷山に越、怒竈、鳴滝、七段滝を過て剣山に上る。**六月十七日**爰に到るや鎚岳を南西に見、焼山寺岳を東に見ゆ、当春焼山寺に上るや（中略）翌**十八日**朝山回りしてまた祖谷に下り、其より撫養に出、又紀州和田に渡り……

一度目は備前から讃岐（丸亀）に入り東に回り碁の浦から阿州に入り淡路に渡り、二度目は阿波の撫養に渡り讃岐の八栗山麓の村で年を越し四国遍路を順打ちで回っている。

『道中雑誌』は武四郎が四国遊行の八年後に書かれたもの。「巻中月日のことは是また贅物たりしかばしるさず。只簡ならんことを主とすればなるべし。」と記しているように、二度の四国の旅を合わせて書いたことから、月日を書き込むと混乱するため省略したものと思える。例外として月日が入っているのが四カ所。この月日が記された地名から概略の流れを読み解くことができる。

その例外となるのが、土佐の国分川付近の気候があまりに温暖であるため「三月廿日前　その気こうは畿内辺の五月此之やうニ覚えたり」と記し、石鎚山や剣山は修験道の山であるため山開きの日しか入山できないことから、その便宜を図るため「五月廿八日豫州石槌山に登り、六月十二日箸蔵寺へ」「剣山　六月十六日夜より十八日迄」と記した都合四カ所のみである。

『道中雑誌』の「巻之一」の書き初めの文脈の不自然さは、二度の四国の旅をまとめて書いたことによるものと思われる。一度目目は二カ月弱の四国滞在である。金毘羅詣りと弘法大師の誕生と修行の場である七十五番札所善通寺をはじめとした讃岐巡りが主目的で、八十八ヶ所霊場巡りに向けて、四国遍路名所図絵の蒐集など四国遍路の事前調査ではなかったかと思える。二度目は八栗山（讃岐）で正月を迎え順打ちで四国を回り、六十六番札所雲辺寺で二年併せての結願とし、箸蔵寺、剣山へと脚を延ばしたのではないかと推測する。野帳の原本を見れば判読できるかもしれない。

松浦武四郎の遍路姿

『道中雑誌』の冒頭には莎（菅）笠、札梜（挟）、杖、納札など遍路において用意するものを示し、それぞれ細かく説明している。例えば菅笠には「四句之文、国所姓名同行何人、又一人ならば二人と書く」。納札は「札所、接待所、宿屋等に此札一枚づつ皆置くこと。七度回りしものは赤紙札、十四度より青紙札、廿一度より上は皆文字なしの白札」と当時の四国遍路を回った回数で納札の色を表すしきたりを書いている。

また、「一手一銭の功徳をうけて廻るものを上遍路と云ひ、左もせで廻るものを中遍路と號（なづけ）、合力を連是ニ荷物を負ハセて歩行を下遍路と云る也」と遍路に格を設けているが、武四郎は自身を中遍路といっている。

四国遍路には切手（通行証文）が必要で「往来を書認（したゝ）めもうふこと也。右之代銭八十五文也」とある。落語の演目『時そば』では蕎麦一杯が十六文（ワンコイン五百円くらい）といわれることか

ら二千五百円くらいとなる。五年間有効パスポートの手数料が六千円であることからみればそれ相当の額ということか。

『道中雑誌』は「民俗調査報告書」

武四郎が幼少のころから憧れた外の景色。各地の名所図会を読みながら、松坂の町筋を通り過ぎる人のよもやま話を耳学問として夢馳せた世界。駆り立てるエネルギーは「知の蒐集」への無限の興味に他ならない。四国遍路であるがゆえに札所の設えから奥の院や名所旧跡、遍路道や宿の情報といった「遍路ガイドブック」的な役割を主に担っているが、訪ねる土地の生業や食習慣などを観察し記録する「民俗調査」も行っているから驚きだ。例えば十二番札所焼山寺を下りて廣野村（徳島県神山町阿野広野）にさしかかったころ「此辺道の傍に竹を立是にわらじをくくり付、銭の丸を四ツ、五ツ位ヅツ書て直段をしらしうり置。また重箱ニ蓬餅を入道のはたにうり置。昔しより是を一ツとして盗去りしものなしと云伝ふ也」と今でいう良心市の原型のような商いを記している。また土佐・おさき村（室戸市佐喜浜町尾崎集落）では干し芋やイタドリを食用にしていることに驚いたのだろう「此辺多く甘藷（いも）を作る。皆切彫ミて干おき是を夏分より、また来秋迄の喰とす。米は到而少し。また此辺りに而虎杖をとり来りて喰。其餘山野に有るとあらゆる艸をもち来り喰よし也。虎杖は塩につけ置きたるは随分よきもの也。」と詳しく紹介している。

また、ここでも遍路への商いの様子を「道ニ姥、媳（かし）ども出て、御遍路様着もののうりものは無かく〳〵かと尋居る也。皆四国へんろども春より夏にかかりて暖気になるにしたがひ、無用の着類をう

る故ニ在中より街道すじえ来りて皆着類をうれうれとすすむ」と記している。歩き遍路は軽量化が一番。暖かくなれば重たい冬着は荷物になるだけで、路端の古着商いでことを済ませていたのだろう。今では宅急便で送ることができるのだが。

武四郎は土佐の食習慣について、干し芋、イタドリの塩漬け、カニ味噌、煮キビ、はったい粉などを紹介し、伊予国境の松尾峠で「以上土州分也。札数十六番、里程五十丁里、九十四里半。米穀他国より高直にし而甚難所也。」と土佐路の感想を述べている。

『道中雑誌』には札所の概要のほか三百九十七の郷村を項立てしている。属性別に表にすると次のようになる。

松浦武四郎の歩き方

鉄の脚を持つ男といわれる武四郎だが「一日二十里歩いた」と豪語する。

武四郎が少年時代に竹川竹斎（たけがわちくさい）に「神足歩行術」と

『道中雑誌』の県別属性

	徳島県	高知県	愛媛県	香川県	合計
札所	23	15	27	23	88ケ寺
遍路道	57·0	94·5	119·5	34·5	305·5里
	222·3	368·6	466·1	134·6	1191·5ｋ
城下村浦	72	134	147	44	397カ所
川	11	21	5	1	38河川
坂	9	24	13	0	46
止宿	12	18	18	4	52
茶店	10	20	17	6	53
茶堂	7	15	19	4	45
茶屋	3	2	0	3	8
渡船	1	16	0	0	17
絵図	15	10	9	11	45

いう速歩術を学んだといわれる。参考にはならないと思うが、これが面白い。

一、歩き方　初の一里はゆるゆると歩み、気が丹田（たんでん）に落付き、体中の凝が解けて足が軽くなってから速歩に移る。

一、山地と平地　山登りの時は足先三尺を見詰めて歩く。遠くや左右を見るのは禁物、平地も同様で小腰小刻みに歩くこと。

一、掛声　ササササザザ、オイトショ、登り道の時はマダマダマダマダ、之れ以外の掛声は一切相成らず。

と、このほかにも細かく書かれている。「初の一里（四キロメートル）はゆるゆると歩き気が丹田に落付き」は科学的であり感心するが、現代人はこの一里でリタイアする人が多いのでは。坂本龍馬の歩行距離もしかりで、現代の歩行とは違った技があるのかもしれない。日本を測った伊能忠敬は三万五千キロメートルを歩いたという。幕末を駆けた坂本龍馬は四万六千キロメートルを歩いたという。

歩く巨人である松浦武四郎は何万キロメートル歩いたのだろうか。武四郎の健脚ぶりは老いても衰えを知らず、六十八歳には大台ケ原を三回も踏破している。十八歳で富士山を登頂しているが七十歳になった折にも富士山を登っている。

『NAGI』特集・松浦武四郎の歩き方から複写

旅姿と記録の道具

武四郎を「歩く記録装置」といったが、持ち歩くのは矢立と野帳である。

安政三年（一八五六）、幕府の役人として樺太に向かう武四郎（当時三十九歳）が旅の準備について送った書状に次の「持ち物メモ」がある。

一、装束は半纏・股引・下着・綿服、羽織なし、笠・三尺手拭・足袋・桐油類、草鞋は腰に銘々附くべし

一、夜具は不要ゆえ、綿入れ一枚ずつ用意すべし

一、茶碗一つ・箸一膳銘々懐中すべし

一、杖は勝手次第

一、小鍋三・やかん一つ用意すべし

加えて、蝋燭・火口・鉄砲・鉈・文房具・薬を挙げ「無用の品、一切持越べからざる事」と書かれている。これは一行十八人の調査団なので四国遍路とは趣は違うが、軽快な旅支度として「無用の品」を持ち込まずは、登山ザックのパッキングに通じるところである。

矢立と野帳で書いた記録を持ち運ぶのは大変である。武四郎はお伊勢参りに向かう人を探し当てては手紙や野帳などを実家に送り届けるよう依頼したようである。「持参したこの者を一泊させるように」と書状にした

武四郎の野帳と矢立

ため、運賃代わりにしたとのことだ。

今では、矢立と野帳はｉＰｈｏｎｅとなり、より軽量になった。

私が歩いた毎日の記録は、武四郎の現代版として、登山アプリ『ＹＡＭＡＰ』の「活動日記」に公表することとした。次の〈https://yamap・com/users/279155〉サイトで全行程のルートと写真を見ることができるので参考にしていただきたい。

ＹＡＭＡＰには低登山から北アルプス、ロングトレイル、遍路道など全国の登山情報（地図や写真）が網羅されており、標準的な歩き遍路道も二十枚の地図でルートの確認ができる。オフラインの山中でも現在地が確認できる優れものである。ＹＡＭＡＰの「活動日記」への記録は、一日の遍路を終え風呂に入り、食事の前後の時間で書きまとめたスケッチ的な「備忘録」である。

記録の道具は、ＹＡＭＡＰを搭載する『ｉＰｈｏｎｅ11』の他に、ログのバックアップとして『AppleWatch』の「フィットネス」アプリを利用した。加えて四万十町が健康増進のため町民に無償貸与している『健康運動量計（Mizuno）』も持参した。スマートフォンアプリには、遍路の費用を確認するため簡便な『家計簿』アプリも入れた。支出から記憶がよみがえるので記録の道具としてぜひお勧めする。この本の付録に四国遍路の行程と距離などをまとめているので歩き遍路の参考にしていただきたい。

今回のザックの中身（秋遍路）

服装　ベースレイヤー（半袖と長袖）、ボトムス（伸縮ロングパンツとハーフパンツ）、薄手

フリース一枚、ソフトシェル上下各一枚、手袋一双、バケットハット一枚

下着等　速乾性トランクス二枚　厚手ソックス二枚、薄手タオル一枚

雨具　レインウェアー（ゴアテックス）、スパッツ

靴　サロモン・トレイルランニングスピードクロス４ワイド

衛生用品等　マスク、除菌ウェットチッシュ、底マメテープ、テーピングテープ、長時間持続型保護クリーム、サングラス、日焼け止めクリーム

記録用品　ｉＰｈｏｎｅ11、アップルウォッチ３

地図　四国遍路ひとり歩き同行二人〔地図編〕（へんろみち保存協力会編・第十一版）

行動食　チョコレート、塩飴、エナジーバー

その他　ＬＥＤランタン（crêer）、モバイルバッテリー、キーボード（ブルートゥース）

遍路用品　頭侘袋、納経帳、経本、珠数、納札、ボールペン、錫杖

ザックと錫杖とマスク（コンビニ）

歩き遍路の時期

武四郎は、一度目は十一月の概ね一カ月間、その翌年の正月から六月下旬の六カ月間、都合七カ

月の四国遍路である。

ただ、四国遍路も札所巡りではなく、奥の院を必ず詣で、石鎚山や剣山の修験登山、大三島詣でや金毘羅詣でなども行っていることから相当な期間が必要となる。

一般的な遍路は、やはり一番のシーズンとなる「春遍路」といえよう。昭和五十三年から平成十年までの統計によると、最も多いのが四月、次いで五月、三月となる。春三カ月で全体の四十パーセントを占めるという。梅雨時期を避けた、桜開花の絶好の季節。一般的には年度の節目であり、人生の節目でもあることによるものだろう。天候の安定する十月も三月に次いで多い。秋シーズンは三十パーセントという[2]。ただし、年度別に見ると春遍路は減少傾向で秋遍路が徐々に増えている。遍路の移動手段の変化、徒歩や団体バスから少人数の自家用車に変わったことが、繁忙期を避けた時期を選ぶようになり、季節の平準化になったのものだろう。

歩き遍路の費用

武四郎は、渡船の費用は記しているが、一番の支出となる宿泊については「止宿するによろし」とだけで、詳しい記述はない。

歩き遍路では「止宿する」場所の確保が一大事である。テント、寝袋を利用すれば泊まる場所の事前予約も必要なく一日の歩行距離も適度に調整ができる。ただ、ザックの重さがコンロ、食糧を含むと五キログラム程度は重くなる。若ければテント泊と遍路宿の組み合わせもあるが、ザックの軽量化を優先させ全泊有料宿泊所にした。有料宿泊所も、「宿坊」「遍路宿」「民宿」「農家民宿」

「ゲストハウス」「ビジネスホテル」「ホテル」「旅館」と多種多様に楽しむことができる。当然ながら宿泊費用はかさむことになる。結果的に、遍路費用の総額は、三十五万円となり、その内訳は、宿泊費二十四万円（酒代含む）、食費五万円（コーヒー含む）、納経賽銭等五万円、雑費一万円である。ちょうど、ＧＯＴＯトラベルが始まったこともあり、都市部での宿泊では利用することができた。宿泊先はイエローブック掲載の「宿泊施設一覧表」を参考にして、原則、前日の午前中までに予約を入れた。宿泊先、日行程の距離、時間、歩数のデータは巻末の付録に掲載した。

タビはタマワル（物乞い）

柳田国男は「タビという日本語は、或はタマワルと語源が一つで、人の給与をあてにして歩く点が、物乞いなどと一つであったのではないか。英語などのジャーニーは「その日暮らし」ということであり、トラベルはフランス語の労苦という字と本一つの言葉らしい[3]」と述べている。

柳田の少年時代の読書歴や移住歴は精神と身体の漂泊から「旅」をかたちづくり、文献史学と民俗学、漂泊と定着、官僚としての身分と無名の人々など両極の振幅を膨大な文字に記録していった。特に諸国を歩く山伏、比丘尼、六部衆や旅芸人、木地師など漂泊するものへの共感するところは武四郎に似ている。柳田の著作集を見てみると、武四郎について『石神問答』所収の山中共古との書簡に二カ所出てくるが詳しい記述はない。

高野聖であった真念も「頭陀」と自称し修行としての物乞い巡礼を数十回行っている。頭陀袋は、お遍路さんが肩にかける同行二人の文字が刻まれた布製の袋である。頭陀は捨てる・落とすを

意味する梵語で、衣食住に関する欲望を払い、修行する意味を持つ。この頭陀について武四郎は、頭陀の旅を「上遍路」、合力を連是に荷物を負わせて歩行を「下遍路」と名付け、自らを「中遍路」だという。

いずれにしても、旅は宿と食が楽しみである。妻に遍路費用を物乞いし、武四郎のまねをして「中遍路」の旅となった。

■ コロナ時代の四国遍路　四国遍路の移ろい

四国遍路の変容

『今昔物語』に「今は昔、仏の道を行ひける僧三人ともなひて、四国の辺地と云ふは伊予、讃岐、阿波、土佐の海辺の廻りなり」とある。当時の辺地修行者は海や山を巡り各所の霊験所を参って厳しい修行の旅を重ね、「日暮れにければ、人の家に借り宿りむ」と寺院（旦過・布施屋）や善根宿等の一定の援助を期待していた。一方で仏教本来の教えとして「乞食の中にこそ、古も今も仏菩薩の化身は在す」と乞食修行をする高僧もいた。

この四国の旅人として西行、澄禅、真念、伊能忠敬、松浦武四郎などが旅の記録を留めている。諸国をめぐる漂泊の旅とともに多くの和歌を残した西行（一一一八－一一九〇）。中四国を旅したのは仁安三年（一一六八）で弘法大師の遺跡巡礼も兼ねていたといわれる。澄禅は承応二年（一六五三）に四国遍路を行い本格的な文献資料として最古といえる『四国遍路日記』を著した。このなかに「〃世間流布ノ日記〃には、「札所八十八か所、道四百八十八里、河四百八十八瀬、坂四百八十八坂」とある。私は、「阿波六十里半一町、土佐八十六里、伊予百二十里五町、讃岐三十七里九町、合わせて二百九十五里四十町である」と言おう。」と記していることから『世間流布ノ日記』を参考にしてはいるものの、寺の縁起だけでなく寺の現況、村の暮らしぶりなどの記述もある。貞

享四年（一六八七）に出版された『四國徧禮道指南』は最古の遍路ガイドブックといわれるベストセラー、その作者が真念である。四国遍路ではないが伊能忠敬（一七四五－一八一八）はセカンドライフとして日本を歩き尽くして日本地図を完成させた。十七年間で三万五千キロメートル、四千万歩である。四国を調査したのが第六次測量（文化五年・一八〇八）で、土佐藩はその年の四月十九日（新暦五月十四日・甲浦）から六月二十六日（新暦七月十九日・宿毛・深浦）となっている。その愚直な旅人の生き方は松浦武四郎（一八一八－一八八八）に引き継がれているようだ。伊能忠敬の没年が武四郎の生年である。加えて寂本の『四国徧礼霊場記』を読めば、江戸初期における開花期の四国遍路から江戸末期の四国遍路の様子を比較しながら、遍路の変容を垣間見ることができる。

旅は日常と非日常の境界にある。巡礼は「聖地」への一時回帰であり、時に日常から解き放された快楽性も伴うこととなる。この聖地巡礼は「定着」から自由となる免罪符でもあり、とりわけ移動そのものが大切な「修行」の一つにもなる。メッカ巡礼、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステラ、チベットのラサへ向かう五体投地、お伊勢参り、熊野詣など多様な巡礼が世界各地にある。世界の巡礼はそれを可能とする宿泊・道路・治安など周辺の社会資本の充実が図られ、巡礼者が文化や情報の伝道師の役割を担うことになる。

これら辺地巡礼行為ではあるが四国を廻行することを特徴とするのが四国遍路である。

「ヘンロ」の意味を表す言葉には辺地、辺路、徧禮があり高知県などではヘンド（辺土）とも呼ばれる。世界遺産「熊野参詣道」に小辺路（高野山～熊野三山）、中辺路（田辺～熊野三山）、大辺

路（田辺～串本～熊野三山）がある。「辺」は物のはし、この世とあの世の境を意味し、「地・路」はその極楽浄土に見立てた苦難と悦楽の修行の場であり、「辺地・辺土」は巡礼の道に修験の重みをおいた言葉であろう。真念はあえて「偏禮」の字を当てているが「偏禮」の意図について稲田道彦は『全訳注四國偏禮道指南』で「〝偏〟は広くゆきわたるとか、あまねくという意味で、遍と同じ意味である。〝禮〟は、たんなる道ではなく、人として生きる道という意味を含んでいる。路が人の通行する道を示すのに対して、禮の字を使ったということは〝へんろ〟という行為に人の道を求める修行者という意味を込めたかったのであろう。」と述べている。

江戸期に入り政治的安定が確立されると四国遍路は大きく発展していった。それは修行僧の辺地から民衆の遍路へと変化する節目でもあった。伊勢詣や熊野詣のように強固な庶民信仰の支えから、真念の遍路ガイド本の発行などにより、徐々に遍路道や宿など移動に伴う社会的基盤の整備が進み、遍路が一般化されていった。

その江戸期の最終章が、武四郎の四国遍路の記録である。

あれから二百年、車社会の到来は四国遍路の一般化、大衆化とともに、修行から汎用的な観光へと進化し、現在の四国遍路の興隆を迎えることとなった。

今では「四国八十八箇所霊場と遍路道を世界文化遺産に」と観光から一段階高みを目指す新たな展開へと進んでいる。

神仏分離令による変容

空海が四十二歳の厄年（八一五）に現在の四国霊場八十八ヶ所を開創したというのは史実ではない。空海入定後に弘法大師信仰が高まり、空海誕生地（讃岐）、四国で修行し悟りを開いたといったことから信仰の中で「四国」が注目された。加えて「四国辺地」を修行する聖（ひじり）、修験の山伏など複層的な要素が数百年の歴史の中で四国遍路の祖型がつくられたのである。四十三番札所明石寺の熊野曼荼羅図は熊野神だけでなく役行者や弘法大師も描かれていることだ。また、六十七番札所大興寺（小松尾寺）は真言天台二宗の兼学寺院（本堂の右に天台大師堂、左に弘法大師堂、その左に熊野神社）であった。ここの弘法大師座像の胎内墨書に「建治二年（一二七六）大願主勝覚生年四十五山林斗藪修行者金剛仏子」とあり、弘法大師信仰と熊野信仰の習合が見られる証左である。

江戸期の真念が当時の巡礼の作法である紙札の奉納について「其札所本尊大師　太神宮　鎮守惣して日本大小神祇　天子　将軍……」と『四國偏禮道指南』で示している。このように、千年を超える神仏習合の歴史を変容する大きな事件が「神仏分離令」であった。

武四郎の四国遍路の後、明治の宗教維新ともいえる「神仏分離令」は、四国八十八ヶ所霊場にも大きな影響を与える変節点となった。札所であった神社から別当寺が分離され新たな札所となったものの、寺領を失い寺の運営ができなくなって廃寺となる札所が続出した。僧籍を捨てて神官になった者もいた。その暗雲は昭和の中期まで続いたという。例えば土佐の一ノ宮（三十番札所）や伊予の一ノ宮（六十二番札所）は別当寺や神宮寺が廃寺となり、土佐一ノ宮は本尊や大師像を二十九番札所国分寺に移し、伊予一ノ宮は六十一番札所香園寺が納経を代行することになった。こ

の混沌期を示すものが当時の納経帳に記された札所名である。

『えひめの記憶[4]』は「廃仏毀釈と札所」について詳しく説明している。なかでも高知県（藩）はきわめて強力な廃仏毀釈の政策が展開された。高知県内の寺院総数六百十五のうち四百三十九が廃寺になったという実に七十パーセントを超えるすさまじい廃仏意図を持っていた。四国八十八ヶ所霊場のうち、土佐十六カ寺中、津照寺、大日寺、善楽寺、種間寺、清滝寺、岩本寺、延光寺の七カ寺から廃寺届が提出され、その他の寺院についても実質的に廃寺に近いものもあったという。これら寺院の名称が順次復活していくのは明治十年代以降であり、例えば雪蹊寺は明治十二年、種間寺・清滝寺は明治十三年に再興され、遅れて岩本寺も明治二十二年（一八八九年）には一応の復興がなされたとある。高群逸枝の『娘巡礼記』に記されているように、岩本寺が明治十八、九年頃に八幡浜の吉蔵寺に三千五百円で売却された話と符合する。三十番札所一宮の別当寺が廃寺となりその混乱が解決されたのは平成六年というから高知藩の社寺係・北川茂長の罪は重たい。どうして高知県の廃仏毀釈が激しかったのか、寺院や僧侶に対する恨み反感が強かったのか、北川茂長の行動の基層にマグマのようなエネルギーがあったのだろう。

この神仏分離の政治的背景は、王政復古にあり、白村江の戦い（六六三）における倭国連合国家の敗戦後、「ヤマト王権」の正統性のため神話伝承を源として「大王」から「天皇」へ変容していったことに似ている。一つは内的な統制として、士農工商の身分制度に変わる現人神と臣民という新しいヒエラルキーであり、二つは外的からの防御としての「富国強兵」の統一された国づくりとして藩主から天皇に変える必要があった。そのための思想的な基底にある神仏信仰の変容。つま

り、個人としての信仰である仏・寺院ではなく、儀式としての権威信仰を全体で受容する神社でなくてはならなかったのではないか。天皇家においても葬儀方法を仏式から神式に変えるなど徹底された。戦後において国家神道は解体されたものの、そのコアな部分は今も「神社本庁」として引き継がれている。

神仏分離によって、札所は明治の混乱はあったものの、結果的にはその後の四国遍路の興隆を迎えた。その中で神仏習合の歴史を消去し、弘法大師信仰のみが今日の四国八十八ヶ所霊場を培ってきたという物語に変容していった。覆水盆に返らずは札所側の意思だろうが、神仏分離も百五十年以上昔の話で、国民もこんなものだと思っていることだろう。

宗教と政治の変容

四国遍路の起源は、山林斗藪の修行から海辺を回る辺地修行となり、四国辺路の修行が四国遍路に形づけられていったといわれる。この四国巡礼は、空海や同行二人の僧遍路だけでなく熊野の御師、高野聖、比丘尼、山伏、六部など多くの修験・修行の場として培われてきた宗教遍歴の結実である。それはとりもなおさず神仏習合の歴史的背景から実に寛容な宗教風土が日本人の基底に存在していたことにほかならない。日本人の寛容な宗教風土は仏教や神道の教義を理解するものではない。神も仏も合わせて、前世の悪行から解放され、現世の利益の達成を願い、来世に極楽の世界を期待する「装置としての寺社」に手を合わせるだけである。試しに産土神社に詣でる人に「祭神は何か」と問うても全員が「知らん」というだろう。

そのような日本人の宗教観に変容をもたらしてきたのが時の権力者である天皇・朝廷・豪族・大名・幕府などの政治勢力で、ときに弾圧であり庇護で持って支配してきた。

四国遍路も江戸期になり政治が安定することで開花期を迎えた。徳島藩は駅路寺を設け、澄禅は土佐藩の領主権力の援助が厚い、と述べている。遍路から「鬼の土佐」といわれるように遍路規制令が出されたのも遍路が多くなったことの証しでもある。遍路の通過に当たっての切手（往来手形）は土佐藩が一番厳しかったようで、武四郎も「当国に而は其泊り泊りに而村長の印形をとり行也。何月何日此処泊りと皆書て印形を押出す。若此印形を失念する時は、先へ行て一宿たりとも宿かす人なし。又木賃宿に而もゆるさず。また庄屋よりのさし宿に而も中々出来がたし。遍路の衆よく心得べきことなり。」と土佐藩の遍路取り締まりが厳しいことを記述している。特に冬の遍路者は温暖な土佐路に多く足を運んだことから「密規制」が行われたのだろう。

これが、明治政府の一つの太政官布により簡単に人心は変わってしまった。「明治維新百五十年」は、四国遍路の世界においても、神仏習合の歴史を消し去ってしまった。

寺はこの神仏分離令（廃仏毀釈）によりこれまでの藩の庇護（村人管理の檀家制度）から離れ、寺領や僧籍身分を失い、郷村（現在の大字区域）にあった寺庵は消滅してしまった。土佐の廃仏毀釈の嵐は特にひどかったが、淘汰されながらかろうじて生き延びたのが現在の葬式仏教と揶揄される寺である。一方、神社は国家神道として非宗教化のもとに祭祀儀礼を重んずる「形式集団」となった。各集落の産土神社として、その多くは神社本庁の包括宗教法人として旧郷社（明治二十二年の市町村単位）の管理のもとに維持されてきた。この神社が、限界集落や消滅集落の下で風前の

灯火となっている。「明治維新百五十年」の神社本庁（もと神宮教会）の統制は、宗教が本来的に持つ想像力を失わせてしまった。

この国家神道は終戦を迎えてもなお戦争責任の総括をすることはなかった。贖罪はキリスト教のみならず信仰の基底をなすものと思われるが、国家神道は戦争への罪に対する贖罪が信仰の根本を否定とすると考えるのか頑なに拒んでいる。ドイツのヴァインツゼッカー大統領は「あの過去に対して眼を閉ざす者は、結局は現在に対しても盲目となります。いやしくも非人間的な出来事を想起しようとしない者は、新たな感染の危機に対して再び抵抗力が弱くなります。」と第二次世界大戦終結の四十周年記念日（五月四日）の演説で述べている。ドイツ国民全員が「罪責のあるなしにかかわらず、老幼を問わず、あの過去を我と我が身に引き受けなければなりません」と述べる覚悟。日本会議は「英霊の尊い犠牲」を無にするものとしてこれを全否定する。この二つのベクトルが、国民の「宗教」への忌避感情を強めることになったと思える。

戦後の昭和二十一年（一九四六）、伊勢神宮を本宗とする神社本庁が設立される。全国八万神社の教義の固定は困難であることから、いっそう形式集団としての形を強めていった。その国家神道の「埋れ火」は終戦から半世紀を経て、靖国・神社本庁を中心とした宗教関係者が多く参加する日本会議が設立され、政財界の面々が加入する日本最大の保守勢力となった。

国家に利用される宗教は必ず衰退することは歴史の実証でもある。

この政治と四国遍路の関係について、さぬき市へんろ資料館の片桐館長は「四国遍路に政治がかかわるとあまりいいことがない。阿波藩にしても土佐藩にしてもそうだった。四国遍路の世界遺産

登録にしても政治や行政が先に出過ぎるとあまりよろしくない。」とお灸をすえていた。
国分寺の栄枯盛衰がそうであったように、国家の庇護より民衆が堂宇を支える「万人講」のような支持基盤が末永く維持されていくのだろう。

山の暮らしの変容

日本の歴史は山と太陽から始まるといわれる。縄文以前から人々が畏敬して大きな力を感じる存在として山があり、多くの実りをもたらしてきた。ときに信仰の対象として神々の森となり、ときに狩猟などに伴う移動にはラウンドマークともなり、必要に応じて山の名前を付してきた。
山の名称について松尾俊郎は『地名の探求』で「山の名称は、地名のうちでも、いろいろな地名学分野においてたいへん重要な意義を持っている。山に因むさまざまな名称は、人間生活の広い領域にわたってかかわりあいを持つからである。山谷からきた名や祀られた神仏の名からきたもの、そこの地域名との関連、水源地としての役割、境界的性格を示すもの、また山そのものをさす名称の多様性、山名の分布から見た地域的差異、交通路に関するもの、動植物の関係、気象現象とのかかわり、あるいは語源的に外来語との関係を考える上にも、山名は特異の対象ともなり、その地名的性格は複雑である」と述べている。
武四郎も最期の棲み家を大台ケ原に求めたように、山に対しての憧憬は強く、生涯において数多くの山に登っている。それは暮らしとしての山ではなく、信仰のような畏敬の対象であり、聖なる領域に入る探検心であったように思う。

百年前までは山の暮らしの移動は当然ながら「歩く」ことであった。山並みの鞍部を越えながら移動をしていた。その峠は村の境でもあり、あの世とこの世の境界でもあった。それは村から離れてはいけない掟であり、村への「定着」は年貢を納める装置でもあった。それゆえに困窮した農民は、年貢課役の減免一揆や強訴を起こし、最終手段として「逃散（ちょうさん）」という荘園外・村外に逃亡する手段を取ることになった。この逃散のことを「山林に交わる」「山野に入る」「山上り」「山籠り」などと呼ばれた。今でいう同盟罷業（どうめいひぎょう）（ストライキ）の形態であるが、どうして逃散する先が村外であり山林であったか。

それは、山が神聖な場所であり、治外法権となる領域であったのではないか。木地師が奥山の八合目以上の利用権限を持っていたのも統治権力が及ばない領域であったことを示すものである。その奥山も木材を供給する場所として価値が高まるようになった。奥山となる御留山（藩有林）の木材は土佐藩の時代から幕府への献上品・都市への商品として供給され、その資源保護のために輪伐法を制定し、植林政策も実施された。この江戸期以来の藩の林業政策は、今の持続可能な循環型社会に通じるものがある。

また、奥山と区分された里山は、村人の衣食住に関わる暮らしに必要な素材を供給する場所であった。江戸期に入り椎茸仕成り、木炭仕成り、楮三椏仕成りといった奥山の利用許可も含め多様な商品経済が持ち込まれた。「山の畑」は自然の生産物も蜂蜜、椿油、ハゼの実、鹿猪獣の毛皮、山菜、杉皮、蔓などなんでも商品になり、行商人が買い付けにも来た。この他者との分業の交換によって成立する山の暮らしは、農地に定着する村里とは違った活動領域が広くなり、新しい技術が

導入され、閉ざされた空間のような山の暮らしのイメージとは逆に自由な気質を備わるようになったのではないか。

米中心の経済社会において、このような豊かな「山の畑」であっても租税徴収の対象とはならず、余剰価値の蓄積も多く進んだのだろう、山深い遍路道筋の神社仏閣は思いのほか立派である。

土佐の山間、本川郷（吾川郡いの町寺川）の焼畑や狩猟など当時の生活や習慣をよく物語る『寺川郷談』という江戸中期の古文書がある。そのなかに

昔は土佐にもあらず、伊予へもつかず。河水は悉く阿州へ流るといへども、阿波へも属せず。筒井・和田・伊東・山中・竹崎の五党、此郷を各分ちて司るとなん

とあり、当時の為政者にとって山の生産性などに関心は少なく、国境の村としての位置づけであったのだろう。

そんな関心のない山間が戦後になって大きく変容した。戦後復興に伴う木材需要に対応した供給の場として、森林軌道が敷設され、チェンソーが導入された。高知営林局の稼ぎ頭が魚梁瀬営林署で、西の雄が大正営林署であった。一九六四年の東京オリンピック前後が木材供給のピークで、その頃の大正町役場が五十人前後であった職員だが大正営林署には臨雇さんを含め二百人近い職員であった。その国有林は伐りつくし、その後の植林も終えて、今では営林署（森林管理署）も廃止となり数名の担当区職員しかいない惨憺たる状況である。

山間のヘンロ道を歩くと廃屋や廃屋に覆いかぶるクスバカズラの杜、集落の墓標のような鳥居。屋地に植林された木の大きさがいつの時代の「亡所」であるかを証明する。この千年を超える山の

暮らしの始まりは「逃散」であり「平家落人」であり「朱」の採掘であり、「木地師」「鉦打」「山伏」など流浪の民の定着によるものだろう。「亡所」となったのはここ数十年のことである。今でも高齢者がひっそりと暮らして里を守っているが、あと五十年でその記憶すら忘れてしまうだろう。

確かに「ポツンと一軒家」が人気番組となっているが、憧れだけでは豊かな「山の畑」での暮らしを再建することはできない。ポツンでは、山で暮らす技術の伝承すらできない。一定の集落機能があることによって山の暮らしは守られるのである。

焼山寺の麓の神山町ではテレワークによる「二拠点居住」政策も積極的に進めているが、都市型労働の補完であって、山林を育て山の畑で働く者が増えることではない。焼山寺を下った衛門三郎の「杖杉庵」で老婦人に出会い山の暮らしをお聞きした。息子二人を医学部へ、娘一人を高知女子大にやったという。当時、ひと山の百年生の立木を売れば大学奨学資金にはなったことだろうが、子どもは山を離れ、その後の山林が育つには百年かかってしまう。

山で暮らせるとは、山での稼ぎが十分あることにほかならない。

歩き遍路は、山の暮らしの変容を五感で見て聞いて体感できることである。

信仰の対象となる「森（盛り）」と、暮らしの場となる「林（生える）」が合わせ持って四国遍路は成り立っている。

山林斗藪（さんりんとそう）する熊野や石鎚の修験、札所の奥の院で籠山行をする修行僧、作善廻行する高野聖。この遊行する人々が来世の安堵を民にもたらし、現世の利益であるモノづくり技術も伝播する主体となっていた。その遊行する人々を支える村があることで相互に成り立つ千年の暮らしであった。「林

（生える）」という人工林は山の民が育てないとクスバカズラの「森（盛り）」になってしまうのだ。

四国遍路の世界文化遺産に向けた「顕著な普遍的価値の証明」の作業が進められているが、弘法大師信仰の巡礼者と遍路道だけに焦点が向けらている。澄禅や寂本も記すように明治以前の神仏習合の多様な宗教者が守り発展させてきた歴史があり、それを支える四国の地形・風土・景観・無形の文化など複層的な価値があったからこそ今の四国遍路があることを忘れてはいけない。弘法大師も修行の地としてそれまでの海の信仰、山の信仰の四国の行場をめぐり、悟りを開眼したのである。

「四国遍路」は、辺地を行場として海と山を回遊する多様な階層の庶民信仰と、それを支える「辺境＝山国」に暮らす人々の相乗作用によって維持されてきたと考える。「顕著な普遍的価値の証明」の作業に当たっては、山の暮らしを考える無形の文化運動にも取り組んでいただきたい。また、「四国八十八ヶ所霊場会」にあっては、弘法大師信仰の世界だけでない四国遍路を支える周辺があることを理解していただきたいものだ。

地名アラカルト①

－数える地名－

モノを数えることは、有史以来繰り返されてきた暮らしの中で使われてきたしぐさである。目の前にあるものを数えるときは指を使わないが、過去の記憶から思い浮かべて数えるときは、自然と指を折るしぐさになるのではないか。その時、あなたは指を折りますか、それとも立てますか。古代の数え方は、左手の握った指を親指から一本ずつ立てたという。このとき、言葉に出すのが数詞である▼日本語の数詞には「ひ、ふ、み」の古語と、その後移入された「イチ、ニイ、サン」の漢語がある▼このような数詞は地名にも表れる。高知県の小字のうち「イチノ谷」が59ヶ所、「ニノ谷」が6ヶ所。「イチノ又」が30ヶ所、「ニノ又」が11ヶ所となる。ただ、「イチ」の場合、数詞ではなく「市」の漢字が当てられている小字「市ノ又」が14ヶ所も所在する。この地名群の中に長宗我部地検帳のホノギとして記された中世以前からの「イチ」地名が多く比定される。ホノギの脇書きに給地として「佾給」、「イチヤシキ　佾ゐ」とあることから、イチ地名は巫女をあらわす「佾」であることがわかる。地名を漢字で理解すると土地の歴史景観を誤って読み解くことになる。また、「ヒノ谷」も85ヶ所ある。暮らしにおける水利用の「樋ノ谷」が大部分だろうが、古語としての数詞「ひ・ノ谷」かもしれない。

四国遍路　一日目（四万十町～37～黒潮町）

高知県高岡郡四万十町茂串町（三十七番札所岩本寺）
～　三二・六キロメートル／八時間二三分
高知県幡多郡黒潮町上川口（民宿みやこ）

活動日記

三十七番札所岩本寺から三十八番札所金剛福寺へ向かう途中、黒潮町上川口（民宿みやこ）で泊となった。四国遍路のなかでも札所間の距離が八十キロメートルと長く、健脚で二泊三日の行程となる。

今回の旅の主題は「松浦武四郎の軌跡をたどる」である。

松浦武四郎は十六歳で江戸に旅立ち連れ戻された。故郷の松坂は年間五百万人ともいわれる伊勢詣で賑わう所。幼少から往来する全国の旅人の話をそば耳立て、いつかその地を訪ねたい思いに駆られたことだろう。十八歳で西国の旅に出て四国に立ち寄ったのが江戸末期の一八三六年頃。四国遍路の旅をした武四郎の記録『四国遍路道中雑誌（以下「武四郎」と引用する場合はこの「道中雑誌」をいう）』は吉田武三編

37番札所岩本寺本堂の天井絵（四万十町窪川）

『松浦武四郎紀行集・中（冨山房）』に収録されている。

その地名をたどる旅レポートをＹＡＭＡＰの「活動日記」（〈https://yamap・com/users/279155〉）として毎日報告したが、それを再編集したものが四国遍路三十九日の日めくり「活動日記」である。武四郎の記録した地名の今を訪ねる「令和の考現学」として読んでいただきたい。

ＹＡＭＡＰに掲載する写真は武四郎が記録した地名を入れ込んだ風景。地名と風土が少しは見えてくるその日の印象的な一枚の絵とした。

この「活動日記」では、「歩く」ことを楽しむ個人的なメモと、歩いた道のログと写真を持って道案内とすることを目的とした。路地裏を覗いたりバス停の表示板を写真に撮るなど不審者に間違われたらいけないのでヘンロ姿の装束で手には錫杖を持った。錫杖は山道での熊鈴がわりでもある。とはいえ、札所を参拝し知人の病気平癒などの祈念もしっかり行う。

初日は「歩くことの慣らし」と思っていたが、結果三十キロメートルを超える道程となった。

朝、自宅から妻の運転で岩本寺へ向かう。三十分の間、コロナ対応の注意点をコンコンと言い聞かされた。五社（高岡神社）からの出発にしようかと悩んだが納経帳などを整える必要があり直接岩本寺に向かった。初めての遍路の所作である。山門で一礼し、手水口に向かったがコロナの時代は消毒スプレー。岩本寺は非接触型の自動で噴霧される優れものだった。鐘・ろうそく・線香も省略し、本堂前で一礼してまずお賽銭を百円。五円があればそれを足してお賽銭箱に入れる。作法は先に読経ということだろうが、ろうそく・線香が含まれているのでお賽銭を先にした。鰐口を鳴らし、御本尊御真言を書いている所に進み、不慣れな棒読み三回。山本洋Ｄｒの病気平癒、母の三回

忌追善供養、百歳まで健康に妻ともども生きる決意表明をした後に、まっさらな経本の般若心経をたどたどしく読経となる。大師堂では、読経をして歩き遍路の決意表明をする。その後に納経所に向かうという手抜き遍路の作法である。納経所に寺のパンフレットがあれば境内の配置図など必要な所を写真に撮る。納経所がすいていれば御朱印をいただく人に思いつく質問を簡便にする。遍路の所作がすんでから境内の調査となる。岩本寺は本堂の天井絵が有名である。高田屋嘉兵衛のヘンロ石もある。境内を散策して次に向かう。こんな流れが札所のルーティーンとなった。

五社から岩本寺へのへんろ道は、四万十川に架る橋を渡って右に曲がり堀切を抜けると窪川中学校にさしかかる。ここから学園通りを東に向かい窪川高校を過ぎた頃に左側に旧道の側道がある。それを進むと四国電力窪川お客さまセンターの三差路となる。左側にヘンロ石がある三差路を右折して琴平町筋をまっすぐ進むと岩本寺である。門前通りには古い商店が軒を連ねる。「水口」の芋天や、ラーメンの「駒鳥」「田辺ベーカリー」のメロンパン、コーヒーの「純」、和菓子の「松鶴堂」、旬の柑橘類をそろえる「まるい」など遍路の道草が楽しめる。

岩本寺を半時間くらいで納め、遠い足摺への道となる。町筋を抜け国道五十六号線を南に進む。昨年、四国遍路の練習に足摺までは歩いた道なので迷うことはないがイエローブック（歩き遍路の必携冊子『四国遍路ひとり歩き同行二人　地図編』のこと）の遍路道を確認する必要がある。金上野の高知自動車道四万十町東ＩＣ入口を過ぎると一気に車の量が少なくなる。上り道を進むと「カロウト峠」。県下に多いカロウト地名だが信仰地名・葬送地名のように思える。この緩やかな峠が「五在所ノ峯」の窪川側の登り口となる。東の横倉山（越知町）とともに古来より土佐修験の山と

して有名で、頂上付近には修験場の跡もあり、麓には山伏野・ミコノ川といった小字地名も刻んでいる。山名の由来は、山頂から五つの在所（人里）を見渡せる峰であるといわれている。五在所とは地元の五社、五羽の瑞鳥伝説、仁井田五人衆の領地をいったものだろう。また地元の別名に降在所山というのもある。信州の上高地が神降地から転訛したものといわれる。由来は同じといえる。

少し下れば峰ノ上集落。ここから国道を離れヘンロ道となる。ここは郡境で道番所の跡もあり、石畳で設えた旧往還道である。このヘンロ道らしい片坂はその名のとおり下るだけの坂である。澄禅が江戸初期の四国遍路を記録した『四国辺路日記（以下「澄禅」と引用する場合はこの「四国辺路日記」をいう）』には「窪川を出、片坂を越える。東から西へは登る感じもなく峠まで上がっていく。下りはつるべ落としのような急な坂である。」と片・坂であることを説明している。実際、海岸の中土佐町から「添え蚯蚓」か「大坂」のへんろ道を一気に上りつめると「七子峠（標高二九〇メートル）」となり、ここから高南台地（窪川台地）の平坦な道を二十キロメートル（途中に三十七番札所岩本寺がある）進んで郡境の片坂である。二十キロメートルも歩けばきつい登りはすっかり忘れて片坂と思うのだろう。

下ると市野瀬、そこから程なく橘川となる。平成の合併で旧大方町にも橘川の大字があるため佐賀橘川と変更された。振り向くと五在所ノ峯の山容が火打のように美しい。この橘川で初めてのお接待を受ける。「ちょっと休んでいかんかよ」との誘いで庭に入ると冷たい飲み物、あったかい飲み物、ちょっとした食べ物を用意してある。小型冷蔵庫に入っていたトマトジュースをいただいた。Ｉターンでここに暮らすようになったとのこと。それ以上詳しくは聞けないようなので礼を述

べておいとました。

拳ノ川にはヘンロ小屋十三号がある。その隣には「土佐佐賀温泉こぶしのさと」があり、こちらで昼食とした。国道五十六号線の上りは、この黒潮拳ノ川ＩＣ入口から高知に向かうことから、これまで少なかった車の通行が一気に増すことになる。イエローブックによれば、ここから国道を離れ伊与木川を右岸に渡り町道を進むことになっているが、そのまま国道に足を進めた。ヘンロ道である熊井隧道は自動車専用道の工事により通行止めとなっているため、そのまま国道を藤縄へと迂回した。

熊井隧道　（明治38年竣工）

「熊井隧道」は明治三十八年に建設された自然石とレンガの隧道でお遍路さん人気のトンネルである。「トンネルというものは入口は大きいが出口は小さいものぢゃのう」と言った人がいるというが、今ではお遍路さんしか利用しない静かな土木遺産の遍路道トンネルだ。高群逸枝が熊井のトンネルを歩いたのは大正七年（一九一八）八月三日。「単調な道にトンネルという一つの変化がある事は愉快である。足の痛さも一時忘れた。声を出すとガンと響く」と少女のように大はしゃぎして歌を歌い大声を出してトンネルの反響を楽しんでいる。

佐賀の町に着いたのは十四時を過ぎていた。明治以前は佐賀の下馬地から山越えで伊田に抜けていたようだが、イエロー

ブックにも表示はなく、武四郎の歩いた海岸通りを進んだ。この佐賀は南海トラフ巨大地震の津波予測が最大で「三四・四メートル」だと公表された地域。町なかには二十二メートルの津波避難タワーがそびえている。ここ佐賀から足摺まで海岸に沿った遍路道が続く。

宿の「民宿みやこ」に着いたのは十七時を回っていた。遅くても十六時には宿に着くという目標が道草をくいすぎて初日から遅れることになった。宿は夕食の準備ができないとのことで、すぐに友人に連絡。今日二度目のお接待は夕食である。友人山沖幸喜のお接待を「居酒屋ぽこぺん」で受けた。旅の出立に当たり頭を丸めてみたが、今風の「二ブロックボウズ」になってしまった。そんな坊主モドキも般若湯をやり過ぎて初日から先祖返りの酒飲み坊主。「南」と「久保田」をご馳走になった。肴も実に美味しかった。

岩本寺（第三十七番札所 藤井山（ふじいさん） 五智院（ごちいん） 岩本寺（いわもとじ））

御詠歌：六つのちり五つの社あらわして　ふかき仁井田の神のたのしみ

宗　派：真言宗智山派　本尊：不動明王・観世音菩薩・阿弥陀如来・薬師如来・地蔵菩薩

開　基：行基菩薩（寺伝）

創　建：天平年間（七二九～七四九）（寺伝）　所在：高岡郡四万十町茂串町

五社の別当寺　五社（仁井田神社・高岡神社）の別当寺として天長三年（八二六）に建立された福円満寺（廃寺）の後身として役割を担ったのが岩本坊。岩本坊は五社から足摺の金剛福寺へ向かう宿坊としていたが、十六世紀末に焼失し再興され岩本寺となった。また、川の増水で五社に

詣でることができない場合に、岩本坊が仮の札所となっていたようだ。高野山の学僧・寂本が元禄年間に著した『四国徧礼霊場記（以下「寂本」と引用する場合はこの「霊場記」をいう）』に「仁井田五社の別当は岩本寺という。社から十町余り離れた久保川の町にその寺がある」とある。江戸期になると京都の仁和寺末寺となり仁井田郷、窪川郷の神社は全て当寺の管掌下にあったという。明治の神仏分離令により明治三年（一八七〇）には岩本寺も廃寺となった。高群逸枝の『娘巡礼記』（朝日選書、八四ページ）には、八幡浜の大黒山吉蔵寺に三千五百円で本尊と納経の版を売却。札所番号が遠く離れることから混乱もあり、後日、買い戻され元に戻ったと、当時のいきさつについて書かれている。

37番札所岩本寺（四万十町茂串町）

岩本寺だけではないが、札所もそれぞれ深い歴史を持っているということである。高群は「寺（岩本寺）を出て坂（呼坂）を上り暑さに苦しみながら仁井田村平串といふ村落の宿屋に泊まる」とある。

武四郎の軌跡

■高知県高岡郡四万十町

久保川村（窪川）おほさき（窪川字岡崎）古市川（吉見川）坂（カロウト坂）峯のうへ村（峰ノ上）かた坂（片坂）

■高知県幡多郡黒潮町

一ノ瀬村（市野瀬）立花川村（佐賀橘川）こぶしの川村（拳ノ川）かいな村（荷稲）こくろの川（小黒ノ川）ふバわら村（不破原）熊井村（熊井）駒越坂（不明）藤縄村（藤縄）獅子石村（佐賀・白石集落）中津の村（佐賀・中角集落）佐賀浦町（佐賀）いよき谷（伊与木川）白濱町（白浜）なだミね坂（灘坂）いだ村（伊田）いがわ村（有井川）川口村（上川口）

へんろ宿

高野聖であった真念が貞享四年（一六八七）に書いた遍路案内本『四国徧禮道指南（以下「真念」と引用する場合はこの「道指南」をいう）』に「○くぼ川村　此町しももと七郎兵衛宿をかし善根なす人あり」と書いているように、江戸中期には、善根宿も遍路道沿いに構えられるようになったのだろう。武四郎は「久保川村」を「少しの町也。止宿するニよし」と書く。三十六番札所青龍寺から八十キロメートル、三十八番札所金剛福寺まで九十キロメートルと長いへんろ道の中間の町となる窪川でゆるりと滞在したことだろう。ただ、武四郎は「止宿するによし」とは書いているが、どこに泊まったかの記載はなく宿の事情も不明である。

岩本寺周辺には、旅館からホテルまで何軒もあるが、近年「美馬旅館はなれ　木のホテル」がで

きた。それは京都の町家風の洒落た木のホテルだが、バックパッカー風の遍路には似合わないかもしれない。歩き遍路は、岩本寺の宿坊を利用するのが便利で、境内の離れには無賃の宿坊もある。岩本寺から逆打ち二キロメートルに「ファミリーロッジ旅籠屋・四万十店」、五キロメートル西の仁井田には「ゲストハウス四〇〇一〇」もある。

遍路にとって宿は一番の心配事である。一応、朝七時頃に出立して夕方四時前には宿に着く日程で、休憩も入れて一時間に四キロメートルの速度で計算し、次の宿泊地を決めるのだが、ちょうどの具合で宿があるわけでもない。天気や坂の高低により歩く時間が大きく変わってくる。また、歩き遍路の情報交換で得る「泊まってみたい遍路宿」に泊まれるとは限らない。その日の体調や行程を見極めて宿の予約を入れるのだが、遅すぎては満室で泊まることができないこともあり、宿の食事の準備に迷惑もかけてしまう。そんなあんばいで、目標は、前日の昼前に予約を入れることにした。宿は、広い風呂・洋式ウォシュレット・ＷｉＦｉ・二食付きの六時から朝食の四項目が個人的な選択基準である。

この世とあの世の境界「坂と峠」

坂や峠は歩くのには難渋するが、まだ見ぬ向こうの世界には期待を寄せてしまう。車社会となり、新しい道やトンネルが造られ、今では忘れ去られた峠である。坂はその道すがらの思いを巡らす夢の途中。峠には決まって地蔵がすえられており、新しい風が吹く。この世とあの世、世俗と修験、日常と非日常。その空間を仕切る結界の地物が峠ではなかろうか。

その往来の峠は山の尾根のたわんだ鞍部をさすが、四万十町では「タオ」「トー」と呼ぶ。小字で見れば「越・腰・串（コエ・コシ・クシ）」も多く、これも鞍部をさす地名だろう。

武四郎は道中雑誌で四十六カ所の坂を記し、そのうち三十六カ所に坂の名称を付している。ここでは、高岡郡と幡多郡の境界となる片坂があるが、武四郎は「片坂　下りて」とのみの書きようである。

『大方町史』の遍路道の変遷の項に「佐賀の藤縄から山越えで米原に入り、ニガキ坂を下って蜷川を経て浮津に入る近道（伊与木近道）がある。」と書かれている。佐賀の郷土史家・野坂さんが「この伊与木近道を通る人は三分の一くらいか」といっているが、澄禅、真念、寂本、武四郎などの遍路道程を見てもだれもこの道を記していない。六部、聖、木地師、修験、マタギ、かったいといった特定の者が利用する「かくれ道」ではないだろうかと考える。

真念や寛政の名所絵図には「くま井村」「くまこえ坂（武四郎は駒越坂とある）」「しらいし」「中つの」とあることから江戸期も現在もこのルートが通常のへんろ道であったようだ。

行路病者

山本和加子の『四国遍路の民衆史』に病人遍路の話がある。天保二年（一八三一）のこと、越前からきた亀吉という遍路が橘村で病気となり五日後に死亡。その養生と死亡の手続きに合計銀四十一匁かかったという。その費用を一村ではまかないきれないため幡多郡役所は仁井田郷、上山郷、下山郷の沿道各村に費用分担させ一件落着となったという。著者は橘村を伊与喜郷（幡多郡黒

潮町）の橘川村としているが、下山郷（四万十市西土佐橘）の橘村のことである。土佐藩の法制史史料集『憲章簿』の第五巻遍路之部に「於橘村病死辺路作配取扱之事（四七八ページ）」にその顛末が詳しく書かれている。あの当時でも「行き倒れ」者の援助は村の役割であったということで遍路道沿いの村にとっては大変迷惑な話でもある。今でも「行路人」に対しての援助は村（市町村）の役割となっているのは昔からの慣行ということだろう。この『憲章簿』には江戸期における土佐藩の遍路事情が分かる古文書六十七件が翻刻されている。

消えた白田川村

武四郎が歩いているころにはない明治の町村合併でできた合成村名。この明治の合併で武四郎が記録した地名の多くは大字となっている。明治二十二年（一八八九）、幡多郡上川口村、伊田村、白浜村、有井川村、蜷川村が合併して生まれた自治体名称で旧村名の一字をとり白田川と名づけられた。大方町に合併後も白田川中学校の名は残ったが学校統合により今は消えた地名となった。旧校庭は防災用のヘリコプター発着場となっている。

明治の合併でこのような合成地名が多く生まれそして消えていった。土佐郡宗安寺村、行川村、針原村、成山村、槇村、上里村、葛山村、去坂村、横矢村、竹ヶ奈路村、領家村、唐岩村、小山村、梅ノ木村、増原村、中追村の十六カ村を「十六村」とした。この山道の往来でまとまっていた山の村は、大正・昭和と車社会の到来によりそれぞれの交通の便利な里の町に合併されていった。明治の合併で極め付きの自治体名称は「清哲村」。山梨県巨摩郡水上村・青木村・折居村・樋口村

が合併してそれぞれの村の漢字の部首を組み合わせてつくったものある。

平成の合併は自治体名称をイメージ戦略に利用した命名が多くみられる。四万十町、黒潮町、四万十市もその一つだろう。「南セントレア市」もこの最たるものだが住民の反発で、合併そのものも頓挫した結果となった。

地名アラカルト②

－山の暮らし・焼畑－

民族文化映像研究所の姫田忠義所長が、自ら撮影した記録映画「椿山ー焼畑に生きる（1997/ 高知県）」を携えて大正中央公民館にやってきたのは 20 年位前であった。それ以降「粥川風土記（2005/ 岐阜県）」「シシリムカのほとりで（1996/ 北海道）」「奥会津の木地師（1976/ 福島県）」なども上映された。上映会の呼びかけ人はいつも無手無冠酒造の山本紀子さんで、映画鑑賞の後、姫田所長を囲んでの座談会は恒例となっていた▼姫田氏が亡くなったのは 2013 年 7 月 29 日、84 歳であった。日本各地に残る基層文化と狩猟や焼畑、川漁などの山の生業を映像におさめた氏の作品群は 150 本を超える▼この「椿山」は、石鎚山系の南方、池川町を流れる土居川の上流域の急峻な渓谷の斜面にある。当時は戸数 30 戸ほどの小集落。この椿山の焼畑を中心とした一年の生活と集落の人々の生きざまを 4 年間にわたって記録した民俗映像である。日本での焼畑は終焉している。これが最後の焼畑記録映像であろうが、姫田氏はこのほかにも「西米良の焼畑（1985/ 宮崎県）」「奈良田の焼畑（1986/ 山梨県）」「茂庭の焼畑（1992/ 福島県）」「竹の焼畑（2001/ 鹿児島県）」の焼畑作品がある。もう消えた焼畑の暮らしが語る世界

四国遍路 二日目（黒潮町～土佐清水市）

高知県幡多郡黒潮町上川口（民宿みやこ）
～　三五・四キロメートル／一〇時間四六分
高知県土佐清水市大岐（民宿大岐の浜）

活動日記

三十七番札所岩本寺から三十八番札所金剛福寺へ向かう二日目は、黒潮町上川口の「民宿みやこ」から土佐清水市の「民宿大岐の浜」まで。コロナ禍で四万十川渡しや土佐清水市下ノ加江の安くて泊まれる人気宿（ロッジカメリア）など休止中であった。

「民宿みやこ」はサーファーの宿でもある。宿の下の入野海岸から平野海岸までの海岸線はサーファーの聖地。この入野海岸からはこれからの道のりが遠く足摺岬まで見える。今日の波乗りポイントは田野浦海岸の波がよかったようだ。サーファー仲間が連絡を取り合いながら多く群れていた。

この黒潮町は南海トラフ地震で想定津波「三四・四メートル」が公表された所。入野松原にある賀茂神社には津波の自

徳右衛門の道標（黒潮町入野松原）

然災害伝承碑が二つもあった。隣の大方あかつき館付近で徳右衛門の標石を偶然にも見つけることができた。

昨日のお礼かたがた、黒潮町出口の山沖宅を訪ね、重ねてコーヒーのお接待を求めた。次に、双海（ふたみ）、竹島へと向かう。双海で面白い電力柱を見かけた。電柱には表示板が付けられているが電力板は「イヤ（伊屋）」、電信板が「双海」である。昭和の合併で伊屋が大方町から中村市に配置分合されたとき、伊屋から双海に地名を改称した。つまり、電力が敷設されたときは伊屋で、昭和の配置分合後に電話線が張られたことから双海となったことが理解できる。また、電柱のルートは、昔の往来を示す痕跡にもなり、電柱表示板の「地名」は多くの歴史を持つ、有力な情報源となる。歩くとき電柱を常に見て確認することが習慣となっている。

四万十川の渡しが運行されていれば平野海岸を通って下田港をのぞいてみたかったがコロナで営業中止という。ここら当たりは思い出がいっぱい詰まっている所だ。高校一年生の夏休み同級生で平野海岸へ遊びに行ったとき、女子生徒の水着姿が眩しかったこと、江戸アケミ[5]と毎週土曜日に映画『祭りの準備』の舞台となった下田の港まで走っていったこと。途中、鍋島では町田恭子さんちの前でちょこんと頭を下げ「おやすみ」と言ったこと。下田の川港から浜提の町並みを越えると土佐湾に面した小さな砂利の海岸となる。その軽やかな潮騒の音が大好きだった。五十年たてば大きく様変わりで、オートキャンプ場や温泉もある観光地となっている。

竹島のファミマで四国銀行の現金引落とコンビニ昼食となった。大阪から遍路に来ている岩本青年とコンビニ脇の遍路接待コーナーで出会った。二日目にして初めての歩き遍路である。三十八番

札所金剛福寺までの区切り打ちとのこと。その後、三度会うことになった。
四万十川の河口の大橋を渡り、間崎のへんろ休憩所で一休し、津蔵渕から伊豆田峠へと至る。国道三二一号線の旧道に入り、峠の下付近からへんろ道の山道となる。峠越えは先日からの大雨で少し荒れていた。
ヘンロ道は、地元のボランティア組織が手入れをしている場合が多い。だれが管理者というわけでもない。伊豆田峠には遍路自らも手入れができるよう刈り込みバサミを置いていた。この取り組みにより一定整備は進められているが、地元の人に甘えてばかりはいられない。歩きやすいヘンロ道を維持するには遍路自らの「お勤め」も必要だ。枯枝や草を払い、浮き石を整える。そんなちょっとした積み重ねが歩きやすいヘンロ道となる。遍路が通るほどにヘンロ道は踏みならされ整っていくが、今年はコロナ禍でめっきり遍路姿が見えない。
歩き遍路は互いに遍路道情報を交換するのが常であるが、山越えの室津へのヘンロ道を思案していたら「まむしがおるぞ。そこから窪津に向かうヘンロ道はやめた方がええぜ」と教えていただいた。持参のイエローブックには載ってないが、現地には案内標識があり、外国人用のガイドブックにはこのルートが記載されているようだ。刊本は改訂が遅く、やはりクチコミの伝播が早く確かな情報だ。
今日は、思っていたより時間がかかり「民宿大岐の浜」に着いたのは十八時前となった。
登山と同じように午後三時から四時には宿に着く行程にしよう。宿では新潟と福岡の遍路おじさんと一緒になり、同年代のよしみか、小声ながらも話が弾んだ。

それと、二日目で感じた遍路の所作。

一つ目は、洗濯。遍路旅は自ら洗濯しなければならない。遍路宿は必ず洗濯機と乾燥機が備えられている。宿によっては無料で洗濯をしていただく所もあるが、無料で自らする所や百円から三百円の使用料を払う宿もある。今頃は厚手の服でなければ洗濯・脱水・部屋干しだけで朝には乾燥しているので乾燥機は必要ないといえる。

二つ目は、金剛杖や錫杖の取り扱い。宿によってさまざまで、女将さんが錫杖のもとをきれいに洗ってくれる所もあれば、何も気にしていない所もある。基本は自らがきれいに洗って床の間で休んでいただくのがルールかなと思う。

三つ目は、足のメンテナンス。「民宿大岐の浜」のお風呂には足のアイシングについて張り紙が掲示されていた。「足先・くるぶし、ふくらはぎ、膝に十秒間冷水をかけること」とイラスト入りで書かれている。それ以来、毎日冷水アイシングは続けた。それと、水ぶくれをつくらないよう、毎朝「皮膚保護クリーム」を塗り、ちょと違和感を覚えたら「底マメテープ」を張った。歩き遍路には足が命である。

武四郎の軌跡

■高知県幡多郡黒潮町

うきつ村（浮鞭・浮津集落）ふき上川（吹上川・加持川）いのり村（入野）かせぎ川（蛎瀬川）たの浦（田野浦）出口村（出口）

■高知県四万十市

高しま村（竹島）四萬十川（四万十川）さね崎村（実崎）まさき村（間崎）つくらふち村（津蔵渕）いつた坂（伊豆田坂）

■高知県土佐清水市

小川（市野瀬川）一ノ瀬村（下ノ加江・市野瀬集落）眞念庵（真念庵）市の野村（下ノ加江・市野々集落）おがた村（下ノ加江・小方集落）貝掛村（鍵掛）くもも村（久百々）おふさ村（大岐）

江戸初期に澄禅が記録した『四国辺路日記』や寛政の名所図会も同じ海岸ルートである。武四郎は「ふき上川」を渡り「いのり村（入野）」から「かせぎ川（蛎瀬川）」をまた渡り「たの浦」「出口村」から「高しま村」に出て「四萬十川」を渡っている。

吹上という海風のチカラ

吹上は、風の吹き上げによって形成された高みのある自然堤防などの地形語彙である。天皇の住まいが吹上御所であったことからそういった高みを吹上という意味は理解していた。この川は吹上川でなく加持川と思っていたが、真念も「ふきあけ川」と記していることから近世以前からの地名である。国土地理院地形図には「吹上川」と、加持川と湊川の合流地点の河口部に示しているが、高知県河川調書には加持川も湊川も合流点は海となっており「吹上川」の河川はない。

高島か竹島か

武四郎の「四万十川之図」に「高嶋村」と対岸に「サ子サキ」が描かれている。竹島村の誤記かと思いきや澄禅や真念にも「高島ノ渡」「たかしま村」とある。長宗我部地検帳にも高島村はなく竹島村である。ただ同時期の慶長二年の『秦氏政事記』には「井沢・高島・鍋島」とあることから、竹島村の枝村として高島があるかもしれない。寛政の名所図会に「高島村是より十五丁行竹島村」とある。

川と渡し

武四郎は「船せん壱人前廿四文より大水のせつは百文位までとなるなり。」と四万十川の渡船賃を二十四文、大水の時は四倍と記す。高知は東西に長く背面に四国山地の山並みを控えていることから河川が多く、遍路にとって川を渡る土佐路は大変だったことだろう。

武四郎が項を立てた「川」は高知県が一番多く二十一カ所、徳島はその半分の十一カ所、愛媛五カ所、香川一カ所である。

武四郎は土佐路の船渡賃について「川（浦戸の渡し）渡しせん壱人前三文」「ニ淀川　船せん廿六文」「横浪　船せん代廿四文より八十文位の乗合ニ而行事なり。然し壱人弐人ニ而はそんなり」「午の背川（宿毛・松田川）壱人前船せん十弐文ヅツ渡る」とそれぞれ示している。

武四郎は徳島の渡船事情について、徳島の遍路を終えた感想に「実ニ川々は皆無銭にし而ありがたき国政とぞ思われたりける。」と述べている。徳島藩は遍路を大切にする国柄であろう。

澄禅も「山海野沢も多い。ことに川が多いので行路に苦労する。」と記し、土佐の川は「大河（野根川）、田野の大河（奈半利川）、安田川、言云川（物部川）、眠り川（国分川）、大河（浦戸湾）、新居戸ノ渡リ（仁淀川）、横浪三里（浦ノ内湾）、平節の川（仁井田川）、大河（四万十川の上流域）、大谷川（伊与木川）、有井川、高島ノ渡（四万十川の河口）」を挙げている。

蟹味噌

武四郎は「まさき村」に一宿して「宿の子供等浜の津蟹を多くとり来り、其夜糠をつき是ニ塩を少し接え其の蟹をつき込み而置を見たり。其名を聞しかば蟹味噌と申よし答えたり」とカニ味噌の作り方を書いている。五十年前はどこの家にも唐臼がありカニ味噌はもちろんコンニャクづくり、穀物の脱穀をシーソー遊びの代わりに手伝わされたものだ。このカニ味噌、武四郎の嗜好には合わなかったみたいだが、年が寄って酒でも飲み出したらまた違っていただろう。

愚草の川柳集②選

「花いちもんめ」

2012 / 秋

花の値段か花いちもんめ

人の値段や花いちもんめ

原発かかえて花いちもんめ

ふるさと畳んで花いちもんめ

※「花いちもんめ」は子ども遊びの歌。「買ってうれしい花一匁」「まけーてうれしい花一匁」となるが、地方によって歌詞が変化するのが面白い。「花」は少女売りの隠語▽最終ページの連歌４首、愚草は貧しい農村の人身売買「花」を「原発」に投影したのだろう

HP「四万十町地名辞典」引用

高知県土佐清水市大岐（民宿大岐の浜）
～　三六・六キロメートル／一〇時間三六分
高知県土佐清水市大岐（民宿大岐の浜）

活動日記

三十七番札所岩本寺から三十八番札所金剛福寺へ向かう途中の三日目。

土佐清水市の「民宿大岐の浜」に連泊して、金剛福寺の「打ち戻り」を行う。宿の女将は、足摺岬の西海岸を回って、帰りを東海岸のルートにしたら日差しを遮ることができるのでいいよとアドバイスをする。往復四十キロメートル近い行程が不安で最短の東海岸の往復とした。松浦武四郎もその道を選択しているようだった。

早朝の大岐の浜を歩く。不思議にサーファーの影が見えない。足跡のない砂浜をゆっくりと歩く。途中、幡陽小学校の児童と「ジンベエザメ」の話をしながら同じ道を進む。以布利には大阪海遊館の研究所がありジンベエザメのセンターが

浜辺のへんろ道（土佐清水市大岐）

ある。楽しみにしていたが開館前の時間帯であきらめ、以布利漁港のここから海岸ルートの遍路道を選んだ。曲がりくねった県道二十七号線をショートカットするヘンロ道で、地元のボランティアグループ「あしずり遍路道保存会（会長弘田之彦）」が整備して復原していただいたもの。

土佐清水市は地域自治組織の長（区長・常会長・自治会長）が事務する場として「〇〇区長場」を設けている。以布利にもあったが写真は土佐清水市津呂の津呂区長場である。道筋で地域内の有線放送を耳にしたが区長場から放送したのであろう。区長場がどのような機能を持っているか気になったが足を先に進めた。窪津の手前で英語版ガイドブックにある遍路道の案内板に出くわした。「ここは行ってはいけない」とのアドバイスだったので整備された県道の歩道を波の音を聞きながら足を速めた。振り返ると遠くに大岐の浜の白亜のホテルや伊の岬が見える。

土佐清水市津呂の区長場

昼前に足摺岬に到着。足摺岬観光案内所では観光協会の浜田さんに松浦武四郎がこの地で刻んだ名だたる見どころの変遷を伺った。札所前のレストランでうどんを注文し、宿で頂いたお接待おにぎりとともに許しを得ていただいた。

田宮虎彦の『足摺岬』で有名になったこの地。中村高校時代、同級生の妹と二人で訪ねたことがあった。どうして岡村善樹の妹だったかは記憶にない。バスは海沿いの狭い県道を進

み、そのたびに肩が触れ合う戸惑い。岬に着くと二人で手をつなぐわけでもなく椿のトンネルを抜ける。そこには眩しい青い海が広がっていた。それから、ついぞ話したことも会ったこともない不思議な関係である。そんな少年も高齢者遍路となって追憶の貝殻を耳に当てる。聞こえてくる波濤は今も変わらない。

ゆったりとした昼休みを過ごし、これから復路である。歩き遍路の「打ち戻り」では、同宿の二人にあった。一日二十キロメートルくらいと決めてゆっくりの道中を楽しんでいるとのこと。今日は別々の宿ではあるが伊佐で泊まるといっていた。往路では見落とした景観に「幡多郡上灘村役場之跡」の石碑があった。足摺半島の東海岸を村域とする明治期の村である。

宿の手前、大岐の浜のサーファーはさすがにに多い。「西武大岐の浜を開発」の大ニュースはもう三十年くらい前のことだったか。今も変わらぬ人気である。今日は土曜日。サーファーだけでなくバイクもキャンピングカーもいっぱい。足摺観光もだいぶお客がモンテきたかな。

金剛福寺（第三十八番札所 蹉跎山（さださん） 補陀洛院（ふだらくいん） 金剛福寺（こんごうふくじ））

御詠歌：ふだらくやここは岬の船のさを　とるもすつるも法の蹉跎山

宗派：真言宗豊山派　　本尊：三面千手観世音菩薩　　開基：弘法大師

創建：弘仁十三年（八一二）　　所在：土佐清水市足摺岬

もう一つの空と海・辺路の端サダは足摺修験の道場　金剛福寺の山号は「蹉跎山」。「蹉跎」は辞書的には地団駄を踏む意味だろうが、この蹉跎山の説明ではこの地が難所だからつまづく意味の字

を当てたとある。地名には愛媛県の佐田岬、大隅半島の佐多岬などがあり、古い言葉で地形的な突出物を「サダ」は意味している。猿田彦は御神幸のときに鼻高面をかぶり先頭を切る案内役で、鼻が突き出て先に行く者のサダから来たものという。当地の蹉跎（さだ）岬は大隅の佐多岬と区別するためアシズリと読ませ足摺岬と書くようになったということだ。

金剛福寺については、享禄五年（一五三二）に土佐に下向した住持尊海が一条房家の願いにより書かれたという有名な『蹉跎山縁起』がある。日本古典籍総合目録データベースで閲覧すると「古老傳曰往昔金峯上人（役行者）住寺時、天魔常ニ障碍ヲナス上人一指ヲアケテ降伏シ給シカハ諸魔悲歎蹉跎セシム故ニ月輪山ヲ■改テ蹉跎山ト号スト云ヘリ」とある。金峰上人（役行者）が山号を蹉跎山に改めたとあるが、澄禅の『四国辺路日記』では金峰上人が大師に変わっている。江戸期初期から遍路の一般化が始まり、弘法大師信仰が高まってきたことによるものか。

38番札所金剛福寺（土佐清水市足摺岬）

海の断崖近くにある「一夜建立の華表（鳥居）」は大師が紀州・熊野権現を遥拝するために一夜で建立したと伝えられている。どういう訳か今は「一夜建立ならずの華表」と呼ばれている。澄禅は「鎮守熊野権現社、西ニ薬師堂、役行者堂」と、寂本は「愛染堂、薬師堂、役乃行者、大師堂、檐ニ接鎮守熊野権現」と、武四郎も「清水権現、足推権現、四社権現」と記して

いる。

足摺は補陀落渡海の地。空海だけでなく古来より役行者をはじめとした修験者、熊野修験道の山伏など詣でたはずなのに、明治の神仏分離により札所の多くは弘法大師の歴史しか語らなくなった。納経所で「熊野神社との関係を」とお聞きしたら「そんなの関係ない」と小島よしお風のつれない返事だった。境内には本堂から大師堂に向かう途中「当山鎮守　権現堂」の表示があり、扁額には熊野三所権現とあることから、熊野信仰とは大きな関係にあることは寺も承知のはずだ。「上山郷の熊野神社の仏像も明治の廃仏毀釈でここ金剛福寺に移されたと言われていますが、どこにあるでしょうか」とお聞きしたかった。

奥の院は「白山権現」。足摺の修験は、足摺山奥ノ院白皇権現の別当であるから、真言宗系の当山派と考えるのが常識であろうと広江清は『近世土佐の修験』で述べている。修験には当山派（真言宗系三宝院・金峯山を拠点）と本山派（天台宗系聖護院・熊野三山を拠点）に分かれるが、土佐の当山派の拠点は寺山・南光院（三十九番札所延光寺奥の院）であることから、足摺修験は当山派であるものの南光院系と違った流れといえよう。

武四郎の軌跡

■高知県土佐清水市

おほさ村（大岐）いふり村（以布利）久保津浦（窪津）大たに村（大谷）三十八番札所蹉陀山補陀落院金剛福寺（三十八番札所金剛福寺）いさ村（足摺岬・伊佐）おふさ村（大

岐）

武四郎は「まさき村」に泊まったとあるが次の宿泊先は記されていない。一日二十里の脚を持つ男であるが足摺岬は「無双の霊地」。足摺の七不思議や十二不思議を調査するなどゆっくりと逗留したものと思われる。

「是より足摺山へ七り。お月えかける時は荷物を持行なれども、篠山へかける時は此庵へ荷物を置是迄打もどり也。」と述べている。真念は「但初遍路はささ山へかくるといひつたふ」と初遍路は篠山へ向かうものとしている。武四郎は「お月（守月山南照寺・月山神社）」の記述はしているが道中の地名を記録していないので、初遍路の身、どこかで打ち戻りをしているのだろう。

椿は春を告げる花

武四郎は三十八番霊場の足摺岬にきて「一山椿のミ」という。土佐国分寺をたどるころが「余が此処を通りしは三月廿日前なりしが（中略）其気こうは畿内辺の五月此之やうニ覚えたり。」とある。新暦でいえば天保七年三月二十日は一八三六年五月五日であることから、武四郎の「一山椿のミ」は真っ赤に染まった椿の花が散ったあとのことだろう。

椿は春の喜びをもたらしてくれる花。特に雪国の人にとっては真っ白な雪の中から春を告げる花として植えられたことであろう。各地に八百年も生きたという八百比丘尼伝説がある。「村人が異人の贈り物を食べずに捨てて、一人の女性が贈り物（おもに人魚の肉）を食べて長寿を得た」という小浜の伝承譚。長寿を得た比丘尼が全国を旅して作善（善行）を行ったことから各地に八百比丘

尼伝説となって伝えられている。その作善の一つが椿を植えていったことである。椿が自生するのは日本列島と朝鮮半島、山東半島だけの固有種であり、オペラ「椿姫」は十八世紀に西洋に渡ってからのことである。

長命の八百比丘尼が椿を植えたように古来から椿は長寿の象徴である。足摺は補陀落渡海の地、五体投地の地であることから、俗世に執着することなく永遠の命を椿に託した八百比丘尼の作善かもしれない。

ツバキの語源については深津正の『植物和名の語源探求』に詳しく紹介されているが、筆者は「朝鮮語で椿を表す冬柏の古音“Tsu-Pak”（ツーパク）が“Tsu-Baki”（ツバキ）と転じたもの（与謝野鉄幹）」の説を挙げて、日本と朝鮮の交渉の歴史から重要な油源植物として利用法が伝来するとともにその名も伝播したものと朝鮮語説を支持している。

ぜひ、春にはくれぐれも投身することなく、椿のトンネルを楽しんでいただきたいものだ。

亀と補陀落渡海

武四郎は「七不思議。寺僧出て海岸に望てお亀様お亀様と呼に連て、大小の亀多く浮ミ出其声に応じて岸下に集る。（中略）是補陀落山への使者也と云ニ。」と補陀落渡海と亀の話を記録している。

補陀落渡海で最も有名なのは那智勝浦であり土佐の室戸岬とこの足摺岬である。

山本ひろ子は『変成譜』で「亀が海中の仙郷＝蓬莱山を背負っているという中国発祥の神仙思想の影響による。亀は尾から油を出すので御在所を〝油戸〟という。」と述べる。

四万十町大正の旧郷社熊野神社の神宮寺である長楽寺の山号は「宝亀山」で、四万十川と梼原川の合流点に蛇行残丘が形成されているがその名が「亀の森」である。この亀の森の尾となる所がウログチで、熊野神社の鎮守地となっている。この熊野本宮大社の鎮座地の景観を記憶しているものが、海の道を渡りこの山深い地・上山郷にたどり着き熊野神社を勧請[6]したのだろう。

浦島太郎伝説は丹後地方が本家のようだが、香川県荘内半島にも浦島太郎にまつわる地名として「生里（浦島太郎の誕生地）」「箱（太郎が箱を開けた場所」「紫雲出山（玉手箱から出た煙が紫の雲となった）」が刻まれている。ここ荘内半島の桜はそれはみごとでぜひ訪ねていただきたい。海岸寺、善通寺にも近く補陀落渡海や熊野信仰との関係が深いと思われる。

「打ち戻り」は歩き遍路のご褒美

四国遍路で打ち戻りしたら楽な所がある。武四郎は次のように案内している。

三十八番札所金剛福寺　「篠山へかける時は此庵（真念庵）へ荷物を置是迄打もどり也」

四十番札所観自在寺　「篠山へかくる人は此村（広見）ニ荷物を置而観自在へ札を納、」

四十五番札所岩屋寺　「村内（下畑野川）ニ住吉の社并ニ薬師堂また閻魔堂等有。過て左右へ道有。右の方岩屋寺山に六十五丁。この閻魔堂ニ荷物を置て是まで打ちもどる也。」※いやしの宿八丁坂は打ち戻り用の無料コインロッカー有。

六十番札所横峰寺　※打ち戻りルートではないが香園寺周辺に荷物を置けば軽装となる。

八十二番札所根香寺

※白峰寺と根香寺のへんろ道三叉路に「一九丁打ちもどり」の標石。天皇寺から白峯寺、根香寺、国分寺の流れで根香寺が打ち戻りとなる。

二十七番札所神峯寺

「扨此庵（唐浜）ニ荷物を預けて此処ニ打もどる也」

三十五番札所清瀧寺

「此町（高岡）ニ荷物を置て卅五番札所に行。又此処迄打ちもどりて来る」

三十六番札所青龍寺

「此処（宇佐）まで打もどり也」

愚草の川柳集⑤選

「鳴々蛙」

2014 / 春

鳴々蛙　鳴嚢のせわしけれ

夢々蛙　ジムドリビリアの碑を捜し

うし蛙　ねむる地霊の鼾かな

平伏沼　かわずの聖地被曝して

※「平伏沼」は注記に福島県川内村にあり、モリアオガエルの繁殖地とある。母校中村高校の校歌作詞者が福島の草野心平で「蛙の詩人」と呼ばれた。「雲うつす四万十の青・・」とあるが校歌には蛙はでてこない▽高知新聞が高知県立大学の焚書事件をつたえる。「灰まで焼け」の天野記者が、大正中津川に住む佐々木泰（愚草）を訪ねた記事を読んで、福島から東日本大震災の４年前に移住したことを初めて知った。

HP「四万十町地名辞典」引用

四国遍路 四日目（土佐清水市～三原村）

高知県土佐清水市大岐（民宿大岐の浜）
～　二一・四キロメートル／七時間五〇分
高知県幡多郡三原村上長谷（農家民宿今ちゃん）

活動日記

三十八番札所金剛福寺の「打ち戻り」の宿「民宿大岐の浜」から三十九番札所延光寺へ向かう途中、三原村の農家民宿「今ちゃん」で泊。これまで一日に四十キロメートル近く歩いたので今日は中休みだ。

新築となった眞念庵と伊豆田神社に寄り、市野瀬の沖上区長さんに話を伺う。区長は退職教員で私と同年代。区長の他集落協定の責任者など地区活動を積極的に取り組んでいるようで、伊豆田神社の祭事を維持する苦労をお聞きした。実は、代々伊豆田神社の宮司の家系であったとのこと。元の神社は伊豆田峠の旧往還道から市野瀬に下った所にあったが、大風で社が現在地に飛来。神さんがお気に入りと考え、その地に再興したという。延喜式土佐国二十一社の一つだけあっ

農家民宿今ちゃん（三原村上長谷）

て小さい社ながら百段の天上から霊気を感じるチカラがあった。市野瀬川を遡上し成川を通過すると三原村の成山に入る。

三原村は結構な田畑の広がりを見せる集落で、道路も圃場も整備されている。平成の合併にもくみせず自立で生き残った小さな村である。その三原村の農家民宿「今ちゃん」が今晩の宿。

宿に入ったのが四時前だったのに、ウェルカムコーヒーに酒蒸しの栗のデザートで迎えてくれた。すぐさま薪風呂に酒糟袋入のお風呂の二重奏。湯上がりのビールは五百ミリリットルで三百円。その間、自動洗濯機が静かにお洗濯してくれる。この広さを独り占めして、この後の夕食と三原村名物のドブロクが続くと思ったら、ビールの進みを抑えなければならない。

お支払いのときに「ドブロクはサービスです」とのこと。七百二十ミリリットルを一本飲み干して申し訳ない気持ちだ。

修行の身であるお遍路には来てもらいたくないような、泣いて喜ぶ宿だ。

武四郎の軌跡

■高知県土佐清水市
　おほさ村（大岐）
■高知県幡多郡三原村
　山村（成山）狼打村（狼内）長田村（上長谷）

武四郎は市野瀬（真念庵）へ「打ち戻り」して「山村（成山）」「狼打村（狼内）」「長田村（上長

谷）」と三原村へ進んでいる。山村は「三原村成山」のことか。成山から山越のへんろ道をたどると狼内へと下り立つ。

シシ垣

武四郎はシシ垣のことには触れていないが、三原村の成山から狼内へ向かう山越えのへんろ道に今でも使っているような立派なシシ垣があった。江戸時代の人も苦しめられていたのだろうが、石積みは大変な作業だ。今ではイノシシやシカの有害鳥獣柵やネットが万里の長城のように張り巡らされている。シカは弓矢を作ることを覚えた有史以来の獲物で、シカも住めない社会は「あるべき姿」ではない。昭和三十年代には石油燃料への転換により木炭や薪燃料が必要なくなり、平成前後には杉ヒノキの材価も暴落し椎茸栽培も海外産の進出により意欲を失い、山の暮らしで生計を立てるのが難しくなってきた。人工林を間伐する余力はなく、椎林は放置され、うっそうとした林内には下草は育たない。食べるものを失ったシカは人工林の樹皮を食み、里に下りて野菜を食い荒らすことになる。山林を放置すれば土佐の暖温帯では、植生の遷移から陰樹の主役である椎林が極相となる。地球の持続可能な社会は、この極相に至る前の状態、人の手を加えた里山林、加えることで暮らしが成り立つ人工林としなければならない。有害鳥獣柵の設置は当面の対処療法でしかない。経済成長と天然資源の利用や環境指標を連動させる取り組み、生産と所得の連動を切り離す取り組みこそ地球の持続可能な社会といえる。

シカの耳は奨励金

このネットにシカが絡んでいた場合、獲って食べていいか。答えは狩猟区域で猟期中ならば合法。鷹狩が許されるように自由狩猟と呼ばれ狩猟免許（銃・わな）はいらないそうだ。解体も家畜なら法律で規制されているが猟でとったシカは許可も資格も必要ないとのことだ[7]（猟期外ならば勝手に殺してはいけない）。

このシカやイノシシを有害駆除として捕獲した場合には奨励金が出る。自治体によっても違うがイノシシの場合一万五千円前後となる。捕獲したことを証明するために個体に捕獲した日付を入れ処理した証拠写真や尻尾や耳を提出しなければならないという。猟師はイノシシの耳は山の神に捧げなければならない習俗があるが、これでは山の神に叱られてしまう。

長谷は「ながたに」か「はせ」か

武四郎が長田村と記しているのは上長谷のことだろう。『長宗我部地検帳』にも「三原郷上永谷地検帳」とある。

長谷の漢字をハセと読むかナガタニ・チョウコクと読むかいつも悩んでしまう。

芸西村西分の西端、香南市夜須町に接する所が「長谷地区（ナガタニ）」で、旧村名として「長谷寺村（ハセデラムラ）」があり、その南の海岸部を「長谷寄（ハセヨリ）」といい長谷寄地蔵堂がある。『芸西村史』には香南市夜須町羽尾にある長谷寺（チョウコクジ）に、八百年前「長谷」と呼ばれる地にあったが大竜巻で羽尾に吹き飛ばされたという伝えがあることを記している。

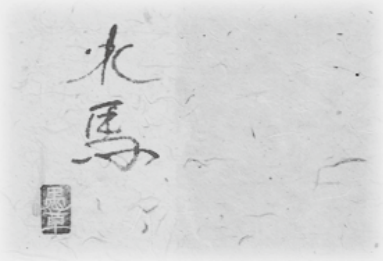
『和名抄』に「長谷　波都勢」とあることから読みとしてはハセだろうが、他の文書には「泊瀬（ハセ）」「初瀬（ハツセ）」の漢字も当てられている。いずれにしても「長谷」の漢字となった理由は不明である。

『地名用語語源辞典』には「①大和の長谷寺の伝播地名か②ハセ（挾）で山や川に挟まれた地形特に二又谷や道路の分れる分岐点。古くから日本人は二股分岐点を神聖視する風習があった。」とある。

また、『民俗地名語彙辞典』にハセについて「村の近くの山の中で谷間が森厳幽霊邃な雰囲気に満ちた所に人の死者を葬るということがあった。そういう墓所のある所をハセ、オハッセという」と書かれている。姥捨伝説のオバステは、葬る場所の谷合をオハッセ・ハセという意味が理解できなくなり、オハッセ・ハセがオハステ、姨捨に転訛していったものという。

姨捨に関連する地名に「ウバガフトコロ（姥ヶ懐）」があり全国に分布する。四万十町日野地の「優婆浮図所」は、地区の葬後の共同墓地で「うばがふつくろ」と呼ばれた。亡くなった人を習俗に従って野捨てはするが、弔う場所と考えてきたという。梵語で「優婆」は信徒のことで、「浮図」は浮屠とも書き、死せる人のこと。つまり、「優婆（うば）」の「浮図（ふつ）」の「所（ところ）」の信徒の亡き骸を埋葬する所が転訛して、「うばがふつところ」が「うばがふところ」となったのか。中山太郎は「自然の風を防ぎ 南に面して日当たりが良く乳母の懐にいるような地所」というなど諸説ある。

いずれにしても、地名はあぶりだしのようなもので、周辺の景観や地名、古文書、伝承を合わせ持って理解しなければならない。



愚草の川柳集⑥選

「水馬」

2014 / 秋

水馬　おのが時計を回しおり

あとになりさきになりして影遍路

かの戦　兵士鼠のしっぽ咬み

※みずすましは自分の立ち位置をどうやってはかっているのだろうか▽愚草は遍路旅の体験者なのだろう。夕暮れに今夜の宿を探しあて野辺の道を歩き廻る。前に後ろにと影はまわり、ときに踏みそうにもなる。影を見て自分というものが生きているとわかる▽インキュベーター（孵卵器）で育ったオテンキオンブオバケにはわからないだろうな▽「かの戦」はインパール作戦か。兵站を整えないで戦いを強いる参謀、補給を大切にしない最大の失敗。小田実はこれを「難死」と呼ぶ。

HP「四万十町地名辞典」引用

四国遍路 五日目（三原村～39～愛南町）

高知県幡多郡三原村上長谷（農家民宿今ちゃん）
～　三四・四キロメートル／一〇時間二九分
愛媛県南宇和郡愛南町増田（一本松温泉あけぼの荘）

活動日記

三原村の農家民宿「今ちゃん」に大満足していたら、「これはお接待の昼食」と、おにぎり二個、バナナ、ノリ、飴ちゃんと紙おしぼりをいただいた。宿泊料六千六百円にはドブロク一本（椿姫の伝説）がついているうえにお弁当のお接待とは、申し訳ない気持ちだ。

元気をいただいて、地蔵峠と松尾坂の二つの峠越えで、今日の宿、愛媛県愛南町一本松に向かう。

「今ちゃん」を出るとすぐに真念のヘンロ石に出合う。「右へんろみち、左大ミつのときハこのみちよし　願主真念　貞享四丁卯（一六八七）」とある。真念の標石で唯一年号が刻まれたものだという。ここを右に進む。江ノ村へ越える「地蔵峠」は、三原側は舗装道だが峠から江ノ村側は昔の往還

真念のヘンロ石（中央／三原村上長谷）

道。緩やかな下りは歩きやすかった。

武四郎は「ゑの村（江ノ村）」から「いすの川村（磯ノ川）」とあることからこの地蔵峠を降りたことは間違いない。イエローブックの遍路道は中村宿毛道路の側道を平田まで案内しているが、江ノ村から中筋川の左岸となる磯ノ川に渡った。「有岡村（有岡）」の手前に「焼米坂」とあるが地元の人に聞いても場所の特定ができなかった。

延光寺には正午に着き、さっそくお接待のおにぎりをいただいた。延光寺のすぐ脇から山越えのへんろ道がある。ここから宿毛市内を通り過ぎ、愛南町の一本松までは長い道のりで、今になって後悔しっぱなしである。ここは宿毛に泊まって、御荘の四十番札所観自在寺を打ってから一本松付近で泊まれば、観自在寺からの三ルートの一つ「篠山詣り」を選ぶことができた。「月山」に行ってないので「篠山詣り」を選ぶのは不文律であるという。宿の選択はじっくり考えて予約を入れなければならない。コロナ禍で宿の休業が多いのも悩みの種である。

イエローブックは宿毛市貝塚からの山道を「松尾峠」の遍路道として案内しているが、途中、錦と小深浦と大深浦で集落に一旦降りることになる。宿毛市内の一般道を進み大深浦の番所跡から登るのがいいように思う。

この松尾峠、高知側は勾配がきつく大深浦の番所から峠まで五十分近くかかる。重要な往還道として雨水による路面浸食を防ぐための石畳の設えもあるが、この勾配では馬借往来には苦労したことであろう。反面、愛媛側は勾配が緩やかで麓まで三十分で降りられる。ただ、柵の構造物が起点から終点まで続くのは、迷わないが味気ない。松尾峠の高知県側では、遍路道の調査測量を測量コ

ンサルタントが行っていた。国土交通省の「四国のみち」調査なのか、四国遍路世界遺産登録推進協議会が取り組む高知県の調査なのかは不明であるが、ここにきて熱心になったのが行政側。当初、四国霊場の宗教性から引けていたが、世界遺産登録のオブラートによって一気飲みする勢いだ。

松尾峠を越え、愛媛に入ると麓に宇和島藩の小山御番所（井戸跡）がある。宇和島藩のなかでも特に重要視された境目番所である。近くなるほど遠く感じる夕の道。一本松で十八時近くになり、いくぶん暗くなったころで、今夜の宿「一本松温泉あけぼの荘」に着いた。

延光寺（第三十九番札所 赤亀山（しゃっきざん） 寺山院（じさんいん） 延光寺（えんこうじ））

御詠歌：南無薬師諸病悉除の願こめて　詣る我が身を助けましませ

宗派：真言宗智山派　　本尊：薬師如来　　開基：行基菩薩

創建：神亀元年（七二四）　　所在：宿毛市平田町中山

奥の院は修験道の当山派の道場　『長宗我部地検帳』には「土佐幡多郡平田村地検帳」の平田寺山村として「寺山領」が記述されている。ホノギ中山に土居（上ヤシキ）があり、養受坊、北之坊、桜本坊、本坊、東林坊、中之坊、杉本坊の屋敷地がみられる。堂宇として二王堂、薬師御堂床、そして権現社の下に王子堂社・舞殿・大師堂・大日堂が設えてある。

延光寺について澄禅は「近所に南光院という妻帯山伏」とあり、寂本は「十町ほど行くと奥院というものがある。滝もあって俗塵をはらうかのような清い美しさだ」と記している。武四郎は「是（延光寺）より奥に奥の院と云もの有よし。魔境にして人をやらず」と書いていることから、はる

39番札所延光寺（宿毛市平田町）

か昔より土佐西南域における修験道の拠点道場であったことの面影を残している。

この地は、波多国であったころ、古代土佐西南域の中心地であった。すぐ近くの宿毛は天然の良港である。古代から往来は瀬戸内を渡り南予経由の海の街道であった。甘い醤油、皿鉢料理にタルトをのせる、トーストに砂糖をまぶすなど、高知でも幡多は南予文化との交渉が色濃く残る地である。

三十九番札所延光寺の奥の院（南光院）は修験道の当山派南光院系の道場である。享保二年（一七一七）の高辻帳によると土佐の修験の数は本山派（聖護院）が二百七十八人で、当山派（延光寺・南光院）が十六人となっている。修験道との関わりを納経所でお聞きしたが分からないとのことであった。イエローブックにも奥の院の記載はない。この延光寺の山号は「赤亀山」とある。赤い亀が境内にある池からいなくなったが、やがて銅の梵鐘を背負って竜宮城から戻ってきたという説話がある。浦島太郎伝説と補陀落渡海、亀と票着神、熊野本宮大社の亀など熊野神社の匂いのする札所である。この銅の梵鐘、銘に延喜十一年（九一一）とある由緒あるものだが、明治初期には高知県会の開会の合図として使われていたという。

武四郎の軌跡

■高知県幡多郡三原村
長田村（上長谷）
■高知県四万十市
ゑの村（江ノ村）川（中筋川）いすの川村（磯ノ川）有岡村（有岡）
■高知県宿毛市
山田村（山奈町山田）中村（平田町中山）三十九番赤亀山寺山院延光寺（三十九番札所延光寺）おし岡村（押ノ川）和田村（和田）すくも町（宿毛市街地）貝塚村（貝塚）
■うか原村（小深浦）大ふか原村（大深浦）番所（松尾坂番所・大深浦）松尾峠（松尾峠）
■愛媛県愛南町
小山村（小山）番所（小山番所）廣ミ村（広見）

武四郎は「三十九番赤亀山寺山院延光寺」に立ち寄った後、「午の背川（松田川）」を渡り国境番所を通り「松尾峠」を越して伊予側の「小山村・番所」に向かった。

土佐の食事

武四郎は「三十九番赤亀山寺山院延光寺」に立ち寄った際「此辺り皆蜀黍を喰とす。其喰方は是を少しつき大釜に而煮而ひらかし喰。また引而粉なにし而も喰なり。甘蔗（いも）もまた多し」とここでも土佐の国はキビやイモを主食にしていると貧しい土佐の国を紹介する。土佐の方言で麦を煎って粉

にひいたものを「ハッタイコ」というが、昔食べたのは麦ではなくキビの粉だった気がする。砂糖を入れたハッタイコを口いっぱい頬張ると必ずむせ返ったものだった。

かしき

武四郎は「大艸原村」の段で「此處より又うら番所有。土州の内三十日之餘もかかりし者は此處よりぬけ出る也。人家二三十軒。」と切手の期限を過ぎたものはこの裏番所より出ることと記す。裏番所とあることから大艸原村は大深草村ではない。続いて「大艸原村」について「四月比かし木と云而山の下艸、下木をかり而田ニ踏込こやしニする也。其刈ニ行時は何月何日と定り居而其日より皆刈初る也。其餘はかることを禁ずる也。其制到而きびしきもの也。」と春、山野にある青草・下木を刈って緑肥として田に入れる「かしき」の様子を書いている。どの村にも入会地の草刈り場があって、日にちを切って田の緑肥、屋根の萱場、牛馬の飼料としていたのだろう。「かしき」には炊ぐ（かし）の名詞形で山小屋や船での炊事をいう場合もある。地元では山仕事の休憩場所を「茶場（ちゃば）」といい、雨の日はここで、カルイや鍬の柄などものづくりをしていた。

番所

土佐の遍路の出入口と定められていたのが東股（甲浦）番所と松尾坂番所（大深浦）である。

武四郎は土佐の番所として「甲の浦番所」「番所（伏越）「番所（大深浦）」の三カ所を、真念は土佐の番所として「かんの浦（甲浦）」「ふしごえ番所（伏越）」「かうち城下（高知）」「大ふか原村

（大深浦）」の四カ所を記している。

宇和島藩は、隣藩土佐・大洲との関係には特に気を遣っており、十三カ所の境目番所の一つが小山番所（小山字茶堂）で、松尾坂を下り立った所に「番所跡の井戸」の表示板がある。

愚草の川柳集⑦選

「鵺」

2015 / 春

おこぼれと　トリクルダウン目に訳し

一本の流しソーメン待つ身かな

日銀の連れション泡と弾けおり

※川柳集のあとがき「三下り半」に、本土ヤマトンチュに突き付けた『琉球共和社会憲法』試案前文に「われわれはもうホトホト愛想がつきた。好戦国日本よ、好戦的日本国民と権力者共よ、もはやわれわれは人類廃滅への無理心中の道行きをこれ以上共にはできない。」とある。

「沖縄に寄りそう」といいつつ舌を出す素行の悪さである。愚草は「場違いの不沈空母に熨斗をつけ」とくくる▽トリクルダウンと流しソーメン。ぴったり腑に落ちる。

HP「四万十町地名辞典」引用

四国遍路 六日目（愛南町～40～宇和島市津島町）

愛媛県南宇和郡愛南町増田（一本松温泉あけぼの荘）
～　三七・九キロメートル／一一時間五二分
愛媛県宇和島市津島町岩松（三好旅館）

活動日記

一本松町の「あけぼの荘」から四十番札所観自在寺へ、それから灘道のコース。内海の柏坂を登り思案坂を降るロングトレイルである。結局、朝七時三十分に出立し津島町岩松の「三好旅館」に着いたのは日がとっぷり暮れた十九時二十分ごろ。なんと半日歩いたことになる。六十六歳の体は軋んでいた。やはり午後の三、四時には宿に入りたいものだ。

月山に行かなかったので篠山詣を決めていたが、宿の都合で「灘道」となった。

広見台地の朝は気持ちよく、一本松中学生の挨拶を受けながら足を進めた。途中、権大僧都……法印の墓を見つけた。紀州熊野の神官の家系となる鈴木、義経、河野通信などの名が出てくるから興味をそそる。鈴木の姓が全国で多いのは、

柏坂登り口（愛南町柏）

熊野の御師（おし）・鈴木氏が熊野詣を世話し、各地で熊野神社を勧請させた経緯で地元に根付いたものだという。この墓標もその一つだろう。

「札掛」を過ぎると旧遍路道「赤坂」の案内がある。イエローブックにも掲載されていないルートだが、迷うことなく、土の路面も足に優しく歩きやすかった。赤坂は東京の高級クラブが立ち並ぶ赤坂を思い起こすが「赤根山にのぼる坂」の意味だという。全国に分布する地名である。赤の付く山は多いのでこの地の赤坂もその例かもしれない。ただ、赤土の赤であり、閼伽（あか）は梵語で水のことであり、砂鉄の混じった赤でタタラ製鉄の赤かもしれない。ここは、広見と城辺を分かつ高台の脇を流れる惣川を横切るヘンロ道である。登りつめると満倉の台地「上大道」となる。大宮神社脇の遍路休憩所で朝の光をたっぷり浴びて気持ちよく足を休めた。

少し進むと「駄場」。南予から高知県西部に多い地形地名が「駄場」である。私の地元、四万十町大正の酒蔵が、栗焼酎を新開発したのは三十年近く前のこと。名前の募集があり同僚の岡本小夜子さんが「火振り」で応募し一席となった。実際は「ダバダ火振」であるが爆発的にヒット。九月に発売された『半沢直樹　アルルカンと道化師』で半沢直樹の飲む酒が「ダバダ火振」である。作者の池井戸潤は、二十五年来、ダバダを愛飲しているという。このダバダ。人の集まる「駄場」でワイワイ楽しく歌い踊る、そんなイメージから「ダバダ」にしたと命名秘話を聞いたことがある。火振りは四万十川流域の伝統的鮎漁法である。先代の山本彰宏社長も11ＰＭのオープニング「シャバダバ、シャバダバ、ダバダバダ、ダバダバダダー」の世代なのだろう。

平成の合併で愛南町となったが城辺と御荘の境界が分からないくらい町並みが連なっている。土

手沿いの遍路道を付近のおばさんと話しながら歩いた。一人遍路は話す機会がないことから思わず喋りすぎた。

四十番札所観自在寺に着くと、地元の小学生が境内のあちらこちらで写生をしていた。

武四郎は「是よりいなり（龍光寺）え道すじ三所有。灘道通り拾三り。大かんとう越十三り。篠山道十四里」として、そのルートを紹介している。たぶん、武四郎は篠山道を選択していたと思われるが、悩みながら「灘道」を歩くことにした。

灘道の起点である内海の柏に着いたのが十五時。秋の早い夕暮れに不安を抱きながら進むと、道沿いのおばさんにへんろ道の案内とともにミカン一袋の「お接待」をいただいた。荷が重くなる心配があったが、長くしんどい上りの柏坂が一つまた一つとミカンを頬張ることになった。津島側の峠に着いたときには全て食べてしまった。ミカンに感謝。お接待に感謝。柳水大師堂にたどり着くともう少しで大師峰（五〇二メートル）の横道となり程なく清水大師堂となる。暮れゆく宇和海の光が眩しい。それにしてもこの灘道は、津島側の「思案坂」がことのほか長かった。

「思案」は、長崎の思案橋が有名だが、高知市上町五丁目にも思案橋がある。いずれも遊郭に行くかいくまいかの思案というが、ここ灘道は山の奥、何を思案した意味なのだろうか。

やっとのこと、暗くなる前に上畑地に降り立つと「泰山」の酒蔵があった。宿に着いたら「ヌル燗の泰山」が飲めると思うと、あと四キロメートルのエネルギーとなった。

今夜の宿「三好旅館」は一人客。到着が遅かったためか玄関先で女将さんが待っていてくれた。食事は豪華。「今日はいっぱいサービスします」との言葉どおりだった。宇和島市の地域ＧＯＴＯ

トラベルプラスの三千円の応援券付きにはぶったまげた。三千五百円で一泊二食の宿代となる計算だ。お国の「ＧＯＴＯトラベル」は小さな遍路宿に関係ないお金持ち政策。宇和島市の取り組みは立派だ。このお金でドラッグストアに寄って歩き遍路の命「足ケア用品」を買おう。六・三・三の大人の義務教育をやっつけ、念願の「泰山」の二合徳利をゆっくりと飲み干した。酒は立派な足ケア用品だ。

明日こそ宇和島市内までの短ルートにして、ゆっくり歩こう。

観自在寺（第四十番札所　平城山（へいじょうざん）薬師院（やくしいん）観自在寺（かんじざいじ））

御詠歌：心願や自在の春に花咲きて　浮世のがれて住むやけだもの

宗派：真言宗大覚寺派　　本尊：薬師如来（伝弘法大師作）　　開基：弘法大師

創建：大同二年（八〇七）　　所在：宇和郡愛南町御荘平城

篠山の奥の院観世音寺　観自在寺の奥の院は観世音寺。土伊国境にある霊山・篠山（一〇六五メートル）には篠山神社があり山岳信仰の修験の場として篠山権現（寂本は三所権現と記す）といわれた。その神社の下に観世音寺があった。

観自在寺の寺名と本尊の薬師如来とが不整合であることから、伝わる由緒も疑わしい。「御荘」は延暦寺の荘園による地名であり、「平城」の地名も含め、南宇和地方の中心地として栄えていたことは疑いない。確証もないが中世以前は奥の院である観世音寺が札所として詣でていたが、いつしかその名を受けて観自在寺として里に移し、篠山の観世音寺を奥の院としたのでないか。五来重

は奥の院を詣でなければ札所の歴史は読めないというが、この寺もその一つである。

武四郎の軌跡

■愛媛県南宇和郡愛南町

廣ミ村（広見）宇和おう道村（上大道）じやうへん村（城辺甲）平城村（御荘平城）四十番平城山薬師院観自在寺（四十番札所観自在寺）中須村（御荘長洲）する木村（菊川）柏村（柏）

■愛媛県宇和島市

上はたち村（津島町上畑地）下はたち村（津島町下畑地）ほうはら村（津島町下畑地・芳原集落）阿弥陀堂（不明）岩松町（津島町岩松）

※篠山道（観自在寺から）

篠山前札所（愛南町広見・札掛）廣ミ村（愛南町広見）板尾村（愛南町増田・板尾）眞崎村（愛南町正木）はらい川（篠川・板の川）篠山観世音寺（跡）槇川村（宇和島市津島町槇川）みうち村（津島町御内）野井村（津島町岩淵乙・野井集落）

※中道（観自在寺から）

中月村（愛南町御荘長月）大かんとう坂（愛南町御荘長月・大岩道）さうず村（愛南町僧都）小かんとう坂（愛南町僧都・小岩道）秀松村（宇和島市津島町増穂）岩淵村（津島町岩淵）

武四郎は「お月」を詣でなかったので「篠山道」を通っていると思われるが、「是よりいなりえ道すじ三所有」として「灘道」「中道」の道程については村名を挙げて記し、「篠山越」については地名・地物に段を設けて説明しているので間違いなかろう。

この三径路はいずれも真念由縁の満願寺（宇和島市津島町）に向かうのだが武四郎は満願寺のことには触れられていない。

今の歩き遍路はほとんどが「灘道」それも国道五十六号線を歩いているようだ。

札掛

広見に「札掛（ふだかけ）」の地名がある。この地で篠山神社（観自在寺の奥の院）のお札を置いて遙拝すれば篠山を打つことになるとされたことからの「札掛」地名であり、また、篠山ルートの遍路にとっては四十番札所観自在寺を打ち戻る拠点ともなる。札立と同じように往来地名でもある。今でこそ納札は紙でできているが、江戸時代の納札は木でつくられていたというから札を掛けるである。

札掛（愛南町広見）

篠山

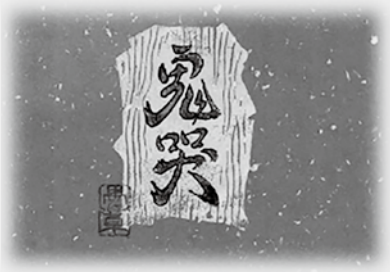
『長宗我部地検帳』は「伊与ト土佐トノ堺ノ事　一　篠矢筈、西ノ森ハ与州分、東ノ森ハ土州分也」とあり、『土佐州郡志』は「笹山　在笹矢筈山北、西南予州正木村、東北土州楠山村也」と記している。

土予国境の篠山（一〇六五メートル）に神仏習合の山岳信仰の対象となった篠山権現（篠山観世音寺）があり、しばしば国境の争いがあった。この寺中は「東ノ森」にあるので土佐領ということになるが、観世音寺の鐘銘には「与州御荘篠山観世音寺正長二年（一四二九）」、鰐口には「与州御庄篠山観世音寺鰐口　寛正七年（一四六六）とあることから室町時代には伊予の国に属していたものと思われる。明治の神仏分離で観世音寺は廃寺となり、篠山権現は篠山神社に改称し、篠山神社は愛媛県に属することになった。

植物には国境の争いはない。五月には全山アケボノツツジが満開となるので春遍路は篠山越がおすすめだ。

する木村

武四郎は「する木村（摺木）」としているが、宝暦三年（一七五三）に摺木の名が火災を呼び起こすので「菊川村」と改名されたと伝えられている。多分に為政者が考えること、百年近くたっても地元の人は馴染んだ地名をそうやすやすと変えられるものではない証左でもある。



愚草の川柳集⑧選

2016 / 冬

メビュウスの環をひねりて遍路ゆき

星条旗見掛けぬ星が一つ増え

※共感する二句である。四国遍路の動機はいろいろあるだろうが編集子は退職者の通過儀礼といったとこか。なかにはこのメビウスの環のようにエンドレスな周廻をする、村を失った者、不治の病の者など死国ときめて漂泊する者もいた。へんろ道はかったい道でもあった。メビウスの帯のおもしろいところは表と裏がないところ▽愚草が日本を 51 番目の「星」と詠むほど、アメリカにおもねっている姿がみえる。祖父の膝で育ったぼうやは尊大な態度をとる大人になり「云々（でんでん）」という。

HP「四万十町地名辞典」引用

愛媛県宇和島市津島町（三好旅館）
～ 二一・一キロメートル／八時間一四分
愛媛県宇和島市高串（へんろ宿もやい）

活動日記

津島町岩松の「三好旅館」を女将の見送りで出立。真念ゆかりの満願寺に立ち寄り、野井坂を越え宇和島市内の馬目木大師に向かい、今日の宿「へんろ宿もやい」となる。

女将も「野井坂」は不通だから国道の松尾トンネルを勧める。とりあえずと、篠山道、中道、灘道の要となる満願寺に向かう。満願寺の付近のおばさんに「朝早くからご苦労さま」と手を合わせ拝まれた。

野井の里で尋ねると「橋がなくても渡渉は可能。倒木もくぐれば行けないことはない」とのこと。小谷の渡渉も難なくこなせ草の茂みはあるが「勝手に通行可」といった状況だった。どうして長期間通行不可のアナウンスをするか理解できない。イエローブックのホームページもそのようなお知らせ

真念ゆかりの満願寺（宇和島市岩淵）

をしているが、「通行不可」の首謀者は誰なのか。へんろ道の管理責任者は誰なのか。四国遍路を世界遺産にと意欲のある自治体が多いが、イエローブックを頼りに巡る歩き遍路にとって、遍路道が誰のものか知らないが、安心して歩き遍路ができる「道」であることを願う。木地師は「木地師の道」があり、お殿様には「参勤交代の道」があり、忍びには「その道」があるという。札所間の往来に都合がよいから、自然と踏みならされて「へんろ道」となり、往来の賑わいから茶店ができ木賃宿が生まれてくる。「道」は往来の者が育てる生きた道だ。

イエローブックに記載されている道が歩き遍路の道とは限らない。旧街道を遍路道として記載されているが、車のリスクはないが往来が少なく「コンビニ」がない。トイレやコーヒーブレイクするには不便極まりない。目的に応じた歩き遍路道を自分なりにアレンジする必要がある。

ややこしい話は別にして、「野井坂」は眞念以前からの歴史の街道で灘道、中道、篠山道を集めた重要なへんろ道ある。ぜひ整えていただきたい。女将が案内するとおり津島町岩松から宇和島市街地までは「松尾トンネル」が近くて早い。が、歩き遍路にとってトンネルは一番の恐怖だ。歩道があるにしても轟音とともに疾走する車は凶器としか言いようがない。

そうこうするうちに宇和島の市街地に入る。国道五十六号線から山際の旧道が遍路道で、宇和島警察署の裏を過ぎると、程なく「元結掛」の馬目木大師である。

いただいた宇和島市ＧＯＴＯトラベルプラスの三千円は銀天街の薬局でエアーサロンパスなどしっかり利用させていただいた。時間があったのでＪＲ宇和島駅の横にある宇和島中央図書館（パフィオうわじま）で郷土資料を閲覧。その後、市街地のぶらり散歩となった。昔の往来の痕跡を探

すのは面白い。宇和島城下の町筋は不等辺の五角形、死角をつくる町筋がディフェンスとなっている。さすが藤堂高虎の大した守りだ。が、ぶらり散歩では迷子になってしまう。和霊中町の路地裏を歩いていると古い橋柱だけ残る「ふるか巳はし」と読める。すぎると道連橋のたもとに標石があった。正面の読める部分が「(梵字　大師座像)いなりへ　二り」左に「徳右衛門」。こういった発見が楽しいのだ。もう十五時近くである。昼を忘れるくらい面白く歩いていた。今日の宿「へんろ宿もやい」は宿泊のみの三千円。途中、珈琲伝説のピザを宿に持ち込んで遅い昼食となった。今日は一人独占のくつろぎの宿である。サービスがきめ細やかで清潔。ビールやカップラーメン、洗濯機利用など全て空き瓶に百円、二百円と入れるセルフ方式である。近くに量販店や食堂、コンビニもあるが、ここで用が足せる、使い勝手も良い最高の宿だ。

橋柱と徳右衛門の道標（宇和島市和霊町）

武四郎の軌跡

■愛媛県宇和島市

岩松町（津島町岩松）岩淵（津島町岩淵）野井村（津島町岩淵乙・野井集落）いわいの

森村（祝森）ひえ田村（保田）寄松村（寄松）宇和島（宇和島城下）願成寺（元結掛大師堂）和霊大明神社（和霊神社）下村（現・宇和島市和霊中町周辺）なかあいだ村（現・宇和島市伊吹町）

武四郎は野井坂を通り宇和島城下に入る。今は国道五十六号線があるため一般的な遍路道はこの歩道を進むが、トンネルが危険ということで旧道の松尾坂を選ぶ場合もある。願成寺、和霊大明神に立ち寄り宇和島について「入口出口ニ番所有。両口ともニ土橋有てよろしき城下也。また海辺は船着ニ而繁栄の地なり。（和霊神社）境内より西を望めば九州并ニ当国の島々を一望し、風景筆紙ニつくしがたし。」と述べる。

願成寺

弘法大師が開基とされる願成寺（四十番札所観自在寺の奥の院の一つ）が宇和島湾の九島にあったが、海を渡る不便がある。ある僧が「これに納め札を掛けよ」と馬目木（マメギ・ウバメガシ）の杖を立てたら、やがて根を下ろし大木となった。あるとき、一人の武士が発心して髪を落とし、その元結を馬目木に掛け仏道に入ったという「元結掛」の地名由来である。これも「札掛」と同じような遍路地名の一つとい

馬目木大師（宇和島市元結掛）

えよう。イエローブックには「馬目木大師」とあり道筋なので遍路は立ち寄る所である。

宇和島は南予の中心地

宇和郡七万石の領主として入府した藤堂高虎は六年をかけて板島城（現存する宇和島城）を築いた。その後、伊達政宗の子・秀宗が伊予国にに十万石を賜ったのは慶長十九年（一六一四）。それまで板島丸串城であったのを宇和島城に、板島も宇和島に改名したのは元和三年（一六一七）のことである。宇和でなく宇和島としたのかは不明である。いずれにしても全宇和郡十三万石の政治・経済・文化の中枢として繁栄した南予の中心都市である。

和霊神社という御霊信仰

武四郎は「宇和島和霊神社」の絵図を示し「茶所、神田、社司、二王門、末社、神宮、絵馬堂、茶所、大神主、東門、カリラ〇、千代之屋、宝庫、五月堂、本社、御供所」などと多くの地物名を加える大社である。和霊神社は山家公頼の御霊の祟りを鎮める御霊信仰の一つ。菅原道真の祟りを鎮める天満宮と同じである。

伊達政宗の忠臣山家公頼は宇和島領主伊達秀宗の家老として宇和島に派遣されたが、程なく桜田玄蕃らが公頼に異心ありとして斬殺。その後領内には事件の関係者が変死することとなり「公頼の怨霊の祟り」として領民は恐れた。承応二年（一六五三）、公頼の三十三回忌に宇和島藩は公頼の冤罪を証明し山頼和霊社を祀ったのが始まり。現在地に遷宮したのは享保十六年（一七三一）のこ

とである。公頼の妻すみは仙台にたどりつき政宗にことの顛末を報告。その後公頼の霊を弔うため宇和島に向かったが土佐の仁井田郷六反地（現四万十町六反地）で病となり村人の看護も甲斐なく病死。「幸霊様」と呼び祠を設けたがすみ夫人一人では寂しかろうと和霊神社を六反地桑原山に勧請したという。

創建年から澄禅や真念の記録には和霊神社の記述がないが、だんだんと四国八十八ヶ所の遍路、修行僧などが宇和島を訪れ「和霊さま」の存在を知ることになり、幕末・明治維新期にかけてその信仰圏は四国・九州・中国地方一円に拡大したという。四十一番札所龍光寺へ向かうへんろ道にある「和霊さん」は必ず祈願をかけたことであろう。

『高知県神社明細帳』によると高知県に鎮座する和霊神社は、先の四万十町六反地の他、大豊町梶ケ内、高知市薊野、土佐市西鴨地、須崎市下郷、津野町白石、四万十市下田の七社ある。

中間（なかいだ）村

武四郎は「なかあいだ村」と記すが、中間村（なかいだむら）のことであろう。難読地名の一つである。宇和島市街地の東北方面、現在の宇和島市伊吹町周辺で大型商業店舗が広がる所である。遍路道を進み三間町に入ると同じ漢字と読みの「中間（なかいだ）」の地名がある。宇和島の中間と区別するため三間中間と改められた。現在は宇和島市と合併して旧自治体名を冠したため宇和島市三間町三間中間とややこしくなっている。

愛媛県宇和島市高串（へんろ宿もやい）
～　二三・六キロメートル／九時間〇四分
愛媛県西予市宇和町卯之町（まつちや旅館）

活動日記

宇和島市の「へんろ宿もやい」を六時十五分に出立。四十一番札所龍光寺、四十二番札所仏木寺、四十三番札所明石寺に向かい、宇和町の「まつちや旅館」に泊まる段取りだ。

宿から光満川とＪＲ予土線が並行する県道を上りつめると三間町の「窓峠（まどのとう）」という峠にさしかかる。朝から雲行きが悪かったがここにきて小雨となった。歩き遍路の準備に靴の選択には大いに悩んだ。歩き遍路は登山とは違う。山越えのへんろ道があるといっても、八割が平坦なアスファルト道であるという。秋遍路なら雨があっても二、三日といったところだろう。ゴアテックスのハイカットな靴となると重くて軽快には歩けない。雨が降れば靴にポリ袋でもかぶせりゃいいと割り切って軽量靴にした。使ったのはサロモンのトレイルラ

徳右衛門の標石（41番札所稲荷山）

ンニングシューズ・スピードクロス四ワイド。通常より二センチメートルサイズアップでフィット感もワイドでちょうどいい。締める緩めるもワンタッチなので平地では全開放のユルユル、山にさしかかればキュッと絞り込む。靴底の接触ブロック面が狭いため摩耗が早いのが難点でもある。歩きだして一週間が過ぎたが靴擦れはなくマメもできなかった。あとは雨の具合である。

龍光寺は地元では「お稲荷さん」と呼ばれるという。明治以前の神仏習合の名残りとなる鳥居をくぐりまっすぐ進むと、左側が本堂、右側には大師堂となる。そのまま階段を進めば稲荷神社である。石段の途中に徳右衛門の標石がある。正面は「四十一番札所稲荷山」、右側面に「（指さし）越智郡徳右衛門」の銘がある。神仏分離の前、四国霊場八十八札所には神社が札所となっていた所が多くある。御詠歌から読み取れば、大山祇神社別宮（五十五番札所南光坊）、石清水八幡宮（五十七番札所栄福寺）、一宮（六十二番札所宝寿寺）、石鎚神社本社（六十四番札所前神寺）、琴弾八幡宮（六十八番札所神恵院）、白峰宮（七十九番札所天皇寺）、田村神社（八十三番札所一宮寺）、一宮神社（十三番札所大日寺）、一ノ宮（三十番札所善楽寺）、五社（三十七番札所岩本寺）などがそれであり、大麻比古神社（一番札所霊山寺）、神峯神社（二十七番札所神峯寺）もそれらしい。

龍光寺西側の山越え道が仏木寺に向かうへんろ道となる。程なく仏木寺。向いにある熊野神社傍から歯長峠越えのへんろ道である。事前の問い合わせでは「通行止め」となっていたが、迂回してでも行ってみようと現地まで進むと応急道を設えていた。通行止めの看板に「可！」の落書きがあった通りだ。これが遍路道だろうかと疑うほどの急登を這いずり上がると、程なく宇和海が広が

る歯長峠に着いた。小雨で風のある日は、かえって山道が楽である。木々が風を遮り、柔らかい落ち葉の道は足裏に優しいのだ。遍路道をコンクリートで固めるのはよかれと思っての道路普請の「お接待」だろうが「おせっかい」である。歩き遍路を体験した人ならそうだと納得するだろう。

峠を下り、明石寺に向かう。明石寺の山門前に茶店があったので、立ち寄ってアイスクリームで小休止。愛媛県歴史文化博物館に回って調べたいことがあったが、八日目にして初めての雨。雨具は付けているが、体が濡れて寒いのだ。寺の裏側のヘンロ道（四国のみちでもある）を宇和町の「まつちや旅館」に急いで向かった。十五時三十分着。女将さんは「雨で大変やったね。服を洗うので、風呂の前に出しといて」とありがたいサービス。その晩はちょっと寒気がして暖房を入れて寝た。今夜も一人宿だ。

へんろ石と送迎庵（歯長峠）

龍光寺（第四十一番札所 稲荷山（いなりざん） 護国院（ごこくいん） 龍光寺（りゅうこうじ））

御詠歌：この神は三国流布の密教を　守り給わむ誓いとぞ聞く

宗派：真言宗御室派　　本尊：十一面観世音菩薩　　開基：弘法大師

創建：大同二年（八〇七）　　所在：宇和島市三間町戸雁

「おいなりさん」という札所　なんとも不思議な龍光寺の景観だ。村の鎮守へ向かうように鳥居をくぐり石段を上る。札所が龍光寺で弘法大師創建の頃から神仏習合の寺であったという。地元の人に「お稲荷さん」といわれる稲荷寺。明治の神仏分離令により階段の一番上の旧本堂が稲荷神社となり、その下に本堂が建立された。いまでも本地仏である十一面観世音菩薩の隣に弘法大師勧請の稲荷明神が鎮座している。御詠歌にも「この神は」と神仏習合の歴史を刻んでいる。

澄禅は「本地十一面観音。田中にある小さな社」と簡潔に記すのみである。寂本は「稲荷　此社の鎮座年代は明らかではない」としながらも「此神我大師と九州筑紫であい、その後紀州田辺であった。名を問うと京八条の二階堂紫守長者と申す……」と大師と稲荷神との出会いを述べるとともに、「近世になり神道が儒教の悪い部分だけを習って仏教を排斥し、儒教の鬼神を持ってきて日本の神を抹殺しようとする儒者がいるなど利己のために虚を弄している。」と非難する。高野山の広範な学識を持つ寂本は『四国偏礼霊場記』を著すに当たって「聖語本説にたがひ又は道理に応ぜざる事はとらず」「浮説妖妄にわたる事は、いまのとらざる所なり」と述べている。この稲荷の段で寂本は、儒家の道理にたがう「愚人を惑はす」浮説の類を強く批判する。

41番札所龍光寺（宇和島市三間町戸雁）

稲荷神社は全国に三万社あるという。赤い鳥居と狐の狛犬の

イメージだが、稲荷神は稲を象徴する穀物神・農耕神で、今では商工も含め日本で最も広く信仰される稲荷神社ではないだろうか。大坂では「けつねうどん」と呼ぶが、「ケ」は草木の総称、雑木林の木（キ）も同じで母音交替によるもので穀物・食を意味する。大阪の方言で田の上の作物の総称を「ケショー」と言うそうだ。「ツ」は助詞の「の」。「ネ」は根で先祖の意味。つまり稲荷神が「けつね」でもあるわけで、狐ではないということだ。

仏木寺（第四十二番札所　一カ山（いっかざん）毘盧舎那院（びるしゃないん）仏木寺（ぶつもくじ））

御詠歌：草も木も仏になれる仏木寺　なお頼もしき鬼畜人天

宗派：真言宗御室派　　本尊：大日如来（伝弘法大師作）　　開基：弘法大師

創建：大同二年（八〇七）　　所在：宇和島市三間町則

消えた熊野神社　仏木寺の縁起はこうである。大師は牛を引く老人に出会い、誘われ牛の背に乗って歩むと、楠の大樹に大師が唐で投げた宝珠を発見、その楠で本尊大日如来を作像し堂宇を創建したというもの。御詠歌もその物語を示すものである。この縁起から、家畜守護の寺として信仰されていったという。大日如来を本尊とする札所は、仏木寺のほか六十番札所横峰寺、六十一番札所香園寺、七十二番札所曼荼羅寺、四番札所大日寺、二十八番札所大日寺の六ヶ寺である。

この本尊の背面に胎内仏が納められているとの墨書がある。胎内仏は、修験道における胎内くぐり、笈に入れた小さな仏を各地に運び勧請する山伏を想起するが素人の考えであろうか。

澄禅は「今日（十五日）は鎮守権現の祭礼日で近在の男女が集まりにぎわっている」と述べると

ともに当時の縁起を詳しく述べている。寂本は「本堂の右に鎮守の熊野三所権現、弁才天、地蔵堂がある」と記している。武四郎は「境内に熊野社」と記す。

現在、境内地に熊野神社はない。明治期の神仏分離令の際に仏木寺の向かいの則集落に移されたのではないか。宮家準は『熊野修験』に「北宇和郡三間町成妙（なるたえ）に建久元年土佐から勧請した熊野権現がある」（二五一ページ）の記述がある。愛媛県神社庁のホームページによると、三間町の熊野神社は則集落に鎮座する熊野神社しかなく、神社由緒には「建久元年土佐国幡多郡上山之内田野々村より勧請された。」とある。宮家のいう「土佐」とは、上山郷（四万十町大正）の熊野神社（旧郷社・建久元年勧請）に間違いない。宮家は三間町成妙（宇和島市三間町則）としているが旧成妙村則の間違いであろう。

宮家氏は「四国八十八ヶ所霊場のうち十八ヶ寺が熊野神社の影響が見える」とも述べている。

42番札所仏木寺（宇和島市三間町則）

明石寺（第四十三番札所　源光山（げんこうざん）円手院（えんじゅいん）明石寺（めいせきじ））

御詠歌：聞くならく千手の誓いふしぎには　大盤石もかろくあげ石

宗派：天台寺門宗　　本尊：千手観世音菩薩　　開基：円手院正澄

創建：六世紀前半　　所在：西予市宇和町明石

色こい熊野修験者　澄禅は「本尊千手観音。本堂は朽ち傾いて本尊は小さい薬師堂に。源光山延寿院。寺主なく上ノ坊という妻帯山伏が住す。」と記し、寂本は「右に熊野十二所権現（中略）白王権現石というのがあって籬で囲ってある。この神石によって、寺を明石という。土地のならわしではアゲイシというそうだ。今ここを領している人は神主ではなく修験者だという。」と書く。二人とも熊野修験者が寺を守っているという。

明石寺本堂の横に十二社が一列に並んでいるのが熊野神社。愛媛県神社庁の記録には聖武天皇の天平六年（七三四）、役行者五世の孫、寿元行者が紀州熊野から十二社権現を勧請し十二坊を建立し鎮守社としたとある。奥の院は、白皇神社。

武四郎の軌跡

■愛媛県宇和島市

なかあいだ村（伊吹町）ミつま村（光満）牟田村（三間町務田）窓峠（窓峠）務清山常善坊（不明）とかり村（三間町戸雁）四十一番稲荷山龍光寺（四十一番札所龍光寺）成江村（三間町成家）四十二番珠山佛木寺（四十二番札所仏木寺）坂（歯長峠）

■愛媛県西予市

下河村（宇和町下川）川村（不明）貝田村（宇和町皆田）いなんぼう村（宇和町稲生）明石村（宇和町明石）四十三番源光山圓手院明石寺（四十三番札所明石寺）宇の町（宇和

町卯之町）

宇和島城下からは光満川を遡上し三間台地となる。四十三番札所明石寺まで数百年変わらないへんろ道。途中に歯長峠を越えなければならない。

組という集落名

宇和島市の光満に入ると「江の組」「日の組」「中組」と組地名が続く。組とか班は町内会の下部組織（回覧板を回す範囲）として構成される名称。その意味かと思っていたら、宇和島藩には二百十三の郷村を十組に分けて構成されていたという。光満村は城下組に入っている。国土地理院地形図では城川町に多く見られる。ただ、郷村の上部区分というより、郷村（現在の大字・町内会）より狭い集落を組と呼んでいるようだ。

トウという峠・窓峠

三間町務田の窓峠（まどがとう）（一五〇メートル）から来た道をふり向くと宇和島の海である。あと海まで七キロメートルというのに窓峠は分水嶺。三間川、広見川と名前を変えつつ、四万十川に流れ込み土佐湾へと向かう。四万十川が三十七番札所岩本寺付近から土佐湾まで七キロメートルというのに踵を返して西の山間へと逆流するさまと同じだ。この窓峠から三間の台地が広がる。その反対側は景観がまるで違う狭隘な谷間が宇和島へと向かう。隙間のある所から「間（ま）・処（ところ）」がマドになり窓の漢字が当てられたのだろう。「とうげ」でなく「とう」と長音化し、愛媛県や高知県

に広く分布する。峠の古い言葉である「タオ」は中国地方に多く「垰」の国字が当てられる。山の鞍部である弛みが転訛してタオというがそのタオを越えることからタオゴエ。それがトオウゴエ、トウゲに転訛したものだろう。四万十町では桜峠を「サクラントー」といったり「サクランタオ」と言ったりもする。また山の鞍部を「切（キリ・キレ）」「越（コシ・コエ）」「串（コシ・クシ）」と呼ぶ場合もある。

水神の罔象女が三間

『日本書記』の持統天皇五年（六九一）の条に伊予国司が「宇和郡御馬山」の白銀三斤八両を朝廷に献上したと記されているのが「ミマ」の初見である。「三門」「美萬」「美万」の字が当てらてのちに「三間郷」となったもの。

『古事記』にある伊予宇和別命の祖が国乳別命で、『日本書記』には国乳別命は水沼別の始祖であるとされていることから三間郷は国乳別の末裔が治めた所とするのが地名由来の一つである。

谷川健一は『日本書記』に出る多遅比瑞歯別天皇（たじひみつはのすめらみこと・反正大王）に注目して説明する。「多遅比（たじひ）」は蝮のことで、「瑞歯（みつは）」は生まれてすぐ生える歯のこと。歯の長さ一寸（三センチメートル）、広さ二分（六ミリメートル）上下等しく整うとある。また、『古事記』には「水歯別命」と表記される。水神の罔象女（みつはのめ）のミは水、ツは助詞で、ハは蛇の古語のハハに由来し、ミツハは水の蛇であると説明する。

罔象女神は水の神であり、その流れが川身をくねらせる蛇をイメージしたものだろう。民俗信仰

では竜や蛇の姿となるのが水神である。水は命の源泉であり、「国を治める者はまず水を治める」である。水の力は宗教儀式の「禊」にも表れる。神道の水の祓、仏教の垢離でありキリスト教の聖水など水の浄化力にはチカラがある。コロナ禍も早く水に流してもらいたいものだ。

「みつはの女神」信仰は筑紫からはじまり九州の海人族が東へ移動して阿波や淡路で活動するようになり水神の罔象女信仰もそれとともに広まったという。この海人族の到来がこの地に「三間」の地名を残したと論考している。

神話の話になると意味がよく分からないが「歯」が長いとなると、ここから「歯長峠」と呼ばれるようになったかと思うし、徳島の美馬郡も同じ由来かなと思ってしまう。

「ひとうがわ」という難読地名

武四郎は「下河」と記しているが正しくは「下川」で読みは「ひとうかわ」である。先に「芳原（ほうはら）」「中間（なかいだ）」を紹介したが、愛媛県にも難読地名が多い。

慶安元年（一六四八）の伊予国知行高郷村数帳には「伊南坊村」とある。真念も「いなん坊村」と記す中世以前の地名である。理由は不明だが安永三年（一七七四）に稲生村と改称された。武四郎が歩いたのは五十年過ぎのことだが、読み

「下川（ひとうかわ）」のバス停（西予市）

はそのままだったのかもしれない。稲生は「いのう」と読む。青森県津軽地方、名古屋、三重県鈴鹿地方にも同じ「稲生村」があったが、高知県南国市の稲生は「いなぶ」と読む。

明石さん

武四郎は「明石村」と記しているが「あげいしむら」と読む。寺の名称は「めいせきじ」だが地元では「あげいしさん」。御詠歌には「きくならく千手不思議の力にて、大盤石もやすく上げ石」とありその「上げ石」に由来するものだろう。

西予市

平成の合併で誕生した「西予市」。宇和海から四国カルストの大野ヶ原までの東西に長い市域となった。伊予の西を意味する名付けだろう。伊予の西には違いないが、どちらかといえば宇和郡の北を意味する北宇和市がなじむように思える。旧大洲市や旧内子町の郡域が貞観八年（八六六）に宇和郡から分立して喜多郡となった。宇和郡の北部の意味に佳字を当てたもので、従前から宇和島を中心とした文化圏が「宇和」であった。いずれにしても東西南北、上中下といった方角地名はどこを基準にするかが歴史的な認識である。昭和の合併でも自治体名称は合併の障壁でもありいろんな工夫がされているが、その一つが合成地名。西予市を構成する城川町は公募による町制施行の名称で、旧村の土居村の土偏、魚成村の成を合わせて「城」。旧高川村・遊子川村の「川」を合成したものであった。丸く収めるとはこういうものかもしれないが「城川」も時を経ることによってな

じみとなっている。

地名アラカルト③

－山城のニオイ－

「中世の城跡のにおいがプンプンする」と見定めた山を駆けずり廻るのは窪川の北琴平町在住の城郭探検家・中川豊氏。多くの城郭のつくりの形状を踏査する経験知から臭覚・視覚を研ぎ澄ませたことだろう。これまでの文献資料にはなかった新発見の城郭を自ら探しあて往時の景色を思い浮かべるのが楽しみという氏の目は少年のように輝いている。▼中川氏の野帳を見せていただいたが、膨大な山城探索の記録であった。野帳には、踏査の日、場所、防御施設等の名称と簡便な要図、目視距離その他のメモとなっている。そのフィールドは四万十町だけでなく四国一円である▼山城探検の注意点は「山城は防御施設。急峻で道なき道は当然。マダニ、マムシ等の危険もあり、それなりの服装が大事」とのこと▼ hp『四万十町地名辞典』は高知県文化財地図情報を Google マップで公開しています。山城も。

Google マイマップ

四国遍路 九日目（西予市宇和町～内子町）

愛媛県西予市宇和町卯之町（まつちや旅館）
～　三三・二キロメートル／九時間二三分
愛媛県喜多郡内子町内子（民宿シャロン）

活動日記

宇和町の「まつちや旅館」を七時に出立。鳥坂を越え大洲に向かい、今日の宿、内子町の「民宿シャロン」に台風十四号の雨風を心配しつつ足を早める。

旧道はへんろ道であるとともに通学路。朝の一時間の間「おはようございます」におうむ返しの連発。最初は元気を頂いたが、後半はなおざりで、宇和中学校の生徒も遅刻を心配して急いでいた。中学時代は私と広瀬定久、敷地泰子の三人が遅刻三銃士と言われていたので「気をつけて行けよ」と心でエールを送った。

ここ信里には路傍の石と花壇でへんろ休憩所を設えている。看板には「ひとやすみ一休み」とある。心を癒すお接待を受けた。

お接待の一つ（西予市宇和町信里）

あとすこしで宇和町の最北、鳥坂となる。国道から左に分かれると、旧鳥坂番所を通りヘンロ道となる。三十分くらいで峠となる旧往還道は、当時の人とモノの往来が多かったと思わせる緩やかな勾配である。

鳥坂が源流点となる肱川は、左回りの円を描くように大洲に向かう。故に四万十町の「片坂」のようで、峠からは長い下り坂が麓の大洲の北只まで続く。

鳥坂の峠から長い坂を下る途中、日天月天様を過ぎて、野佐来の「札掛」のバス停で国道五十六号線に出合う。愛南町広見の「札掛」と同じ地名である。この「札」地名は各地にある。御触書を張り出す「札場」の札もあれば、国の境界を示す札を立てる「札立（傍示）」や、広い採草地で入会料を徴するために区分する札を示す「札野」もある。高知県で多く見かけるのは「札場」である。

札掛大師堂（大洲市野佐来）

愛媛新聞のコラム『伊予の地名』には「野佐来の札掛は弘法大師がこの地の悪病を退散させるため釈迦の像を松の枝にかけて祈願したことからという」と書かれている。このお寺、仏陀懸寺札掛大師堂は峠を下り札掛の集落の手前にあった。が、荒廃著しく、イエローブックに掲載するのはちょっとはばかれる様相だ。

特養ホーム札掛の里から国道五十六号線に入り、まっすぐ

大洲に足を進めた。

大洲の町は大きい。大洲城下の観光施設をぶらりと歩き、若宮の商店街を通り抜けると周辺には大型店舗が連なっている。

明治の一時期に八幡浜に三十七番札所があったと高群逸枝の『娘巡礼記』に書かれてあった。元の札所は高知の岩本寺で、札所番号が遠く離れることから混乱もあり、後日、買い戻され元に戻ったという顛末だ。

幾分だれてきた右足を前に出すと左足が一歩進む。そんな繰り返しで内子に向かう。その途中、国道五十六号線から県道二三〇号線の昔の街道筋に入り、新谷の帝京第五高校付近で徳右衛門の標石を見つけた。正面に「これより菅生山（四十四番札所大宝寺）へ十里」とある。あと六キロメートルで目的地「民宿シャロン」だ。五十崎の黒内坊から山越えのへんろ道を進み内子運動公園に出た。内子の町並みを楽しみながら今日の宿に着いた。

「民宿シャロン」は、宇和町のまつちや旅館の女将の紹介でお世話になることになった宿である。整えられた宿は落ち着いた気持ちになれる。今日も一人のお客のようで、ゆるりと風呂に入った。一階のレストランが宿の食事の場となる。亭主のお父さんに二時間くらいにわたってお話を伺った。小学五年生の時、北京で終戦となる。父が軍属であったためか翌月には佐世保に帰国できたという。五十崎と内子の関係、八幡浜文化圏と宇和島文化圏の違いなどなどたくさん話していただいた。どういうわけか足の膝下が赤くかぶれていた。酒を口に塗って早く寝よう。

武四郎の軌跡

■愛媛県西予市

宇の町（宇和町卯之町）下まつば村（宇和町下松葉）上まつば村（宇和町上松葉）あう江村（宇和町大江）東ただ村（宇和町東多田）番所（大洲藩鳥坂口留番所）とさか村（宇和町久保・鳥坂）

■愛媛県大洲市

北ただ村（北只）大洲（大洲）下村（中村）若宮村（若宮）都夜の橋（十夜ヶ橋）新屋町（新谷）

■愛媛県喜多郡内子町

黒地村（黒内坊）内のこ村（内子）

武四郎は卯之町から大洲藩に向かう「番所（大洲藩鳥坂口留番所）」について「宇和島領是限り也。番所の手前に茶店有。この領分廿一里を七日の内ニ通らざるものは陸ヶ敷云也。」と当時の遍路ルールを述べる。この番所は「とさか村」に所在する大洲藩領である。鳥坂の下流で宇和島藩領の正信となる。鳥坂は昭和三十三年（一九五八）に大洲市から分離し宇和町（現・西予市）に編入された。

鳥坂

喜多郡と宇和郡の境目にあり大洲藩はこの峠路に鳥坂番所を置いて宇和島藩との境界警備に当た

らせた。澄禅も真念も「戸坂」の漢字を当てている。

鳥坂峠は全国に見られる「鳥が越える鞍部」で「鳥越」地名と同じ意味を持つ。鳥は空を飛ぶためにいろんな工夫をしている。食べたらすぐに糞を排出する体重コントロール、三角の編隊を組む風抵抗と揚力コントロールなどあるが山並みの鞍部を通るのもその一つ。そこが最適な猟場となるため「鳥打場」「立目」「マツバ（松葉・待場）」の地名を刻んでいる。高知県の字一覧には、鳥越が百二十五字、立目が二十七字、鳥打場が二十三字、待場が十四字見られる。その多くが狩猟の最適地のようである。

大洲

武四郎は「商戸多く町繁花也。町内紙を多く出して富むるよし。また合羽を多く製す。また此辺り蜀黍を多く作り皆是を喰ふなり。」と大洲の暮らしぶりを記している。大洲和紙は平安時代の書物『延喜式』にも登場する歴史のある紙で書道半紙が特に有名という。「合羽を多く製す」を示すのが浅草と上野の間にある「合羽橋」。調理・厨房用品のかっぱ橋道具街が有名である。その由来は大洲藩の支藩であった新谷藩の下屋敷があり、貧しい藩の侍や足軽が雨合羽づくりの内職をしたことにあるという。

都夜（ツヤ）の橋（十夜ヶ橋）

武四郎は「橋の傍ニ庵有。弘法大師此処ニ而野宿し給ひしと。則其あとに一庵を後世立しものな

十夜ヶ橋（大洲市東大洲）

らん。惣而此あたりは人気邪見にし而ありしとて、此間廿一里には一ヶ所の札所も建立なし給ハざりしとて、明石より菅生山迄廿一里の間霊場とては少しの場所もなし。然るに世うつりて当時は此辺り大ニ人気よろしくなりしとかや」と明石寺から次の菅生山（大宝寺）まで札所がないことを説明している。この地の人の「邪見」により宿を借りられなかった弘法大師にとって一夜の野宿が十夜にも思うほどであったということから起こったと伝えられているが、もとは都谷橋で後の人が十夜伝説に結び付け「十夜ヶ橋」の漢字を当てたということだ。

松山自動車道の高架下と大洲ＩＣの入口が十夜ヶ橋となる。なんとも無粋な扱いは、昔と一緒ではないか。「お大師さまが寝ておられるかもしれないので橋では杖を突かない習わし」というが、これでは杖の音はなくても車の轟音に飛び起きてしまう。

四国遍路 十日目（内子町～44～久万高原町）

愛媛県喜多郡内子町内子（民宿シャロン）
～　四二・一キロメートル／一一時間〇一分
愛媛県上浮穴郡久万高原町下畑野川（いやしの宿八丁坂）

活動日記

内子町の「民宿シャロン」を七時三十分くらいに出立し、砥部町総津で泊まる予定だったが、どこもやんわりと断られ、久万高原町の宿にやっと決まった。四十キロメートル超えの行程に加え、下坂場峠（しもさかば）（五七〇メートル）と鵜田峠（ひわだ）（八〇〇メートル）の二つの峠が待ち構えている。アドレナリン全開で足を早めた。久万高原町に降り付いたのは十六時過ぎで、十七時前に四十四番札所大宝寺を参拝することができた。「いやしの宿八丁坂」には十九時三十分過ぎの到着予定と連絡していたが、十八時三十分には宿に到着。女将さんは心配して玄関前に立っておられた。感謝です。

今日の長い道のりの途中、内子町大瀬を通る。大江健三郎の生家があるので立ち寄ろうと思ったが何の表示もない。今

民宿シャロンのレストラン（内子町）

日の出立の前に民宿の主人に大江のことを尋ねたが「帰省しても町のイベントは何もない」とのこと。街並みは古い商家が並ぶ内子と小田の中間に当たる中心地。街の観光案内地図にも表示はない。街角で挨拶しても愛想がなく二、三回声掛けしたが同じである。遍路姿はあやしくない土地柄であるはずだが不思議だ。松山東高校から東大、学生時代に芥川賞、のちにノーベル文学賞とキャリアが立派すぎて地元から遠い関係となったのか。高校時代に数冊読んだが難しすぎてついていけない。井上ひさしや藤沢周平の本がいい。登場人物に心を寄せられ文体も優しく馴染みがある。

ここ小田川流域は林業の町。「筏流し橋」があった。オススメするネーミングではないが橋名板や親柱とともに筏流しの様子を描いた絵を入れ込んでいるのはイイ。

「突合」「落合」と川の流れの変化と激しさを示す地名が見える。林業の盛んな豊かな村であったのだろう、どこも神社の社殿が立派なことに驚く。林業が衰退し過疎となる奥山集落の神社の維持は大きな課題となるだろう。そうこうするうちに、砥部町総津にさしかかった。ここから右折して臼杵に入り二つの峠を越えることになる。

下坂場峠の麓の集落が上畝々（かみうねうね）。天に昇るような畑をウネウネと呼んだのでしょうかね、と地元のおばさんに問いかけると「つづら折れの道を呼んだんかもしれん」と笑っていた。「これは大角豆（ささげ）やないで。サイトウマメというて、ヘタを取らんでも鞘ごと食べれるがよ」という。ササゲは美味しゅうない、内子では小豆を作っているとのこと。キビジリ、イモジリ、ゴマシリの小字が四国各地に見られる。シリは尻の漢字が当てられるが畑の意味である。山のてっぺんまで石を積み畠にし、山は焼畑で雑穀を育てる。山で生きる先祖の人々はえらい。武四郎も「黍ヲ食ス」と

各地で記録している。

二名を過ぎ、二つめの鵜田峠にたどり着くとホッとした。

峠を下り、久万の町中を進み、大宝寺の総門橋が迎えてくれた。札所にたどり着いたのは納経所が閉まる直前の十七時前だった。納経所の僧侶も用事があるらしく「間に合ってよかったです。どうぞゆっくりとご参拝ください」といってそそくさと車に乗られた。

久万高原町畑野川の宿まであと四キロメートル。とっぷりと日は暮れたが、途中八百メートルの歩道なしのトンネルを通らなければならない。遍路の天敵である。役に立ったのが点滅機能付きLEDランタン。「一人キャンプのひろしです」ご推奨で、USBのインとアウトのモバイルバッテリー機能もある。ぜひ購入をお勧めするイッピンだ。車が減速とともにスイスイよけてくれる。

地酒「雪娘」（久万高原町の御宿「八丁坂」）

「いやしの宿八丁坂」では美味しい食事をいただいた。地元の酒を一本付けてくださいとお願いすると「雪娘」がきた。昨年に廃業した地元の酒蔵の残り一本という。大吟醸や純米酒がもてはやされ金太郎飴のような「人気の酒」の宅急便時代。最高ではないが最低でもないこんな普通の不器用な日本酒が淘汰されていく。

部屋の隣では大人数の大宴会を行っていた。親指を立てグー

のサインを宴会客に送る。コロナ禍の緊張が溶けてしまうほどの大声は気持ちがいい。ここはコロナが発症した高知をバイキンマンのように思っている中村時広知事の地元だ。

大寶寺（第四十四番札所 菅生山（すごうざん） 大覚院（だいかくいん） 大寶寺（だいほうじ））

御詠歌：今の世は大悲のめぐみ菅生山　ついには弥陀の誓いをぞまつ

宗派：真言宗豊山派　本尊：十一面観世音菩薩　開基：明神右京・隼人

創建：大宝元年（七〇一）　所在：上浮穴郡久万高原町菅生

菅生の岩屋は山岳修験の行場　江戸期以来の遍路記や標石には「菅生山」と記される。

澄禅は「地元を支配していた猟師が、月輪の中に十一面観音の尊像が現れそれを拝み奉って一宇の草堂を建て安置した。猟師は昇天して消えた。猟師を当山の鎖守の神とし赤山権現となった。」と縁起を記し鎮守社を赤山権現と書いている。寂本は同じような説話ではあるが昇天した猟師を「高殿明神」としている。武四郎は「四十二代此寺人皇文武帝大宝元年（七〇一）に建立せり。其年号を寺号とせり。また本尊は生たる菅の上ニ立セ給ふよしニ而山号とせり。」と札所名の説明を記している。弘仁十三年（八二二）に、弘法大師がここで深い

44番札所大宝寺（久万高原町菅生）

瞑想に入り、これより山中に入って岩場を登り奥の院を創建。これが岩屋寺である。

このように、大宝寺と岩屋寺を合わせ「菅生の岩屋」と呼ばれることがあり、古岩屋も加え一つの行場であったようだ。寂本は菅生に十二の坊があるということから、岩屋から石鎚にかけての修験者の拠点となったのがこの大宝寺であったことだろう。

寂本の『四国徧礼霊場記』には「菅生図」の絵図があり、境内の入口付近に「一之王子」「二王子」の王子社が示されている。「岩屋寺図」にも「一ノ王子」「二ノ王子」「大那智」「一ノ王子」があり、三坂峠の上り途中にも「一ノ王子社跡」があることから、熊野詣の九十九王子と同じく熊野修験の痕跡といえよう。

武四郎の軌跡

■愛媛県喜多郡内子町

内のこ村（内子）川（小田川）ちせ坂（知清）むらさき村（村前）坂（不明）よき村（五百木）合瀬村（大瀬・中央）川のぼり村（川登）むめ津村（梅津）下たど村（下田渡）中たど村（中田渡）上たど村（上田渡）うすき村（臼杵）

■愛媛県上浮穴郡久万高原町

二明村（二名）ひわだ坂（鵜田峠）久間能町（久万）四十四番菅生山大覺院大寶寺（四十四番札所大寶寺）八田の川（下畑野川）

武四郎は「内のこ村」と記録し、澄禅、真念ともに「うちのこ」と記すように江戸期を通じて

「うちのこ」とよんだが、明治になって「うちこ」に改称する。ここからへんろ道は二つの峠を越えて久間能町（久万）へ向かう。

川の道

武四郎が「川」と記したのは小田川だろう。この道筋は林業の村。その木材を搬出するために重要なのが小田川である。遍路にとっては行く手を阻む障害ではあるが筏等による流材は最も効果的な方法であった。武四郎が刻む「よき村（五百木）」「合瀬村（大瀬）」「川のぼり村」「たど（田渡）」「うすき村（臼杵）」の地名は狭隘な山に生きる暮らしを刻んでいる。

五百と五十

五百木の「五百（いお）」は数の多いことを表す言葉の一つ。「九十九島」「百も承知」「千軒〇〇」なども多いさまを表す。高知県安芸市に「伊尾木（いおき）」、香南市香北町に「五百蔵（いおろい）」がある。ただし、真念が「いよき村」と示すように読みは「イヨキ」である。地名の理解は漢字ではなくまず読みの音韻である。

イヨは樹木が高いさま、そびえるさまを表す語で一般的には深い谷に多い地名。深い谷を意味する地名に同類のイヤ（祖谷・伊谷・伊屋・弥谷）がある。旧国名の「伊予」は愛媛県だけでなく全国に分布するのは国名伝播というよりイヤと同じ意味で人が足を踏み入れるのにも困難な深い谷奥の土地を意味することによる。この五百木も小田深山の深い谷奥に位置する。高知県幡多郡黒潮町

に「伊与木・伊与喜」がある。

付近に「五十崎」がある。古語のイカ（厳・重・茂）シからきた地名で、植物の繁殖が盛んなさま、はなはだしい地形・大きい地形をさす。イカを大きい・大変な・たくさんの意で使われている所は伊香保、伊賀、五十沢など多い。五十七番札所栄福寺の麓に「五十嵐（いかなし）」がある。

田渡

田を渡るでは理解できない。田はハタ（端）、コナタ、アナタ、タイラ（ヒラ）のタで場所を表す意味ではないか。そうなると川を渡る所の意味になる。昔の遍路にとって一番の煩わしさは川渡りであったろう。川は往来を阻むもので昔より恰好な渡渉地点に地名を刻んできたものと思われる。高知県の小字に「渡り上り」が五十四カ所、「飛渡」が二十九カ所と各地に分布する。渡るのは人だけではなく牛渡、馬渡、猿渡、熊渡もある。渡り上りなどは長宗我部地検帳にも見える中世以前の往来地名である。比定される渡り上りの小字の位置を確認すると確かに川を渡って往来するのには最適な所である。黒潮町蜷川には「ヘンロ渡」の小字がある。

臼杵

字義とおりに読めば臼と杵で大分県の臼杵市と同じかと思われるが、奥山の地名なので「薄木（ウスキ）」ではないかと思える。『民俗地名語彙辞典』に「ウス（薄）はアサと同根の語。臼の字を宛てる例が多い。臼谷は字義通りに解すれば、臼の形をした谷となるが、これらの多くは浅谷の

意である。ウスは、アサの母音交替と考えるとアサギ（浅木）はフシの多い雑木。このような雑木林になっている所がウスキであろう」と明快に説明する。『高知県方言辞典』にも「木質のやわらかな雑木。桧松杉などの針葉樹以外の雑木であれば、たきものとして扱う場合は全てアサギである」と述べるように、高知県の各地、特に奥山（御留山）に分布する。

鵜田峠

「鵜田峠（ひわだ）」の説明板に主要街道として賑わった所で、昭和三十年頃までは茶屋もあった。名前の由来は弘法大師が大洲から雨続きでこの峠でやっと晴れ「日和だ」といわれたのが訛って「鵜田」となったとある。何でも弘法大師頼みですませる悪い風潮だ。澄禅は「ヒワタノタウ」と記している。江戸前期にはタウと呼ばれていたようである。

前から気になっている地名に「ビワクビ」がある。本間雅彦が『牛の来た道』に詳しく書いてあるが、漢字に当てると「枇杷ノ首」「琵琶ノ首」など。ビワがミヤに転訛して「宮首」となったものが高知には特に多いという。高知の方言で枇杷をビヤと言うことからビヤを冠した「ビヤノキ」「ビヤガタニ」「ビヤクビ」「ビヤサコ」「ビヤノコ」もある。ビワは牛の古語である。ダ（ド）は処を意味する音であるので「ビワタ」は牛の牧場となる。この地を歩いて実感する地形地名・生業地名である。地元の小字図を見てビワ・ビヤ地名を探してみたらどうだろう。

四国遍路 十一日目（久万高原町～45～松山市）

愛媛県上浮穴郡久万高原町下畑野川（いやしの宿八丁坂）
～　二八・五キロメートル／九時間二五分
愛媛県松山市浄瑠璃町（長珍屋）

活動日記

久万高原町の「いやしの宿八丁坂」にザックを置いて、納経帳など必需品を頭陀袋に入れ出立。四十五番札所岩屋寺の打ち戻りである。今日は友人が「お接待」に高知から来るという。昼食をゴチになって、四十六番札所浄瑠璃寺の門前宿「長珍屋」に向かう。

岩屋寺への行きは八丁坂の山道、帰りは県道を歩いた。どちらも片道一時間四十五分程度だが、山道が足に負担がかからない。アスファルトはボディーブローのように効いてくる。

岩屋寺の山号が「海岸山」。山深いこの札所の山号に海岸山と刻むのは辺地から奥山へ山林斗藪（さんりんとそう）する熊野や石鎚の修験の影響を色濃く残しているからだろう。五来重は『四国遍路の寺』で石手寺から岩屋寺までのルートをそのように解説する。

友人の出張お接待（久万高原町）

八丁坂からのヘンロ道は逼割（せりわり）行場へと下り、岩屋寺の山門へと続く。立派な山寺だ。

宿の「八丁坂」で四万十町の林瑞穂・八重夫婦が待っていてくれた。久万高原町の道の駅で昼食の「お接待」を受けた。新高梨とホットコーヒーの持参で美味しくご馳走になった。

二人と別れた途端にパワーダウン。三坂峠まで遠く感じた。「仰西」「高殿宮」「本明神」「横道」とバス停表示が信仰の往来を刻む。三坂峠に着いた。坂と峠は同じ地形地名だから馬から落馬といった重複表記だが、見慣れたせいで違和感はない。ここから足に一番負担となる下りだ。途中、一ノ王子の跡に出くわす。ここから石鎚まで三十三とも九十九ともいわれる祈りの場が続く。熊野詣の九十九王子社と同じだ。現在は石鎚登山道西条側にのみ三十三王子が残っているというが、このルートには「王子」地名も刻まれているはずで、小字を探すことにしよう。

逼割禅定、坂本屋、網掛石と有名どころを見学。振り返る山容は山林斗藪にピッタリだ。橋が跨線する地物の名を橋名版で見ると「御坂川」とある。もとは御坂で三坂に転訛したものだろう。坂本の桜地区で先に見える三角の山は何かと聞くと「カチヤマ」と答えた。振り返り見える「険しい山がクズカケノダイ」と加えた。カチは火打を打つ音カチカチからきた名ではないかと思った。ダイは八幡平のタイだろうか。

麓に降り立つと一遍上人修行の地とあるが、バス停の表示には「丹波」とある。

ここのへんろ道筋の人々は遍路巡礼者に声かけをよくしてくれる。車から「つまらないものですがお接待」といって坂本屋を焼印した手作りのキーホルダーをいただいた。遍路のお接待で有名な「坂本屋」の地は血筋なのだろう。いろいろと話を伺って今夜の宿「長珍屋」に着いたのは五時

三十分になっていた。

岩屋寺（第四十五番札所 海岸山（かいがんざん） 岩屋寺（いわやじ））

御詠歌：大聖のいのる力のげに岩屋　石のなかにも極楽ぞある

宗派：真言宗豊山派　本尊：不動明王　開基：弘法大師

創建：弘仁六年（八一五）　所在：上浮穴郡久万高原町七鳥

45番札所海岸山岩屋寺（久万高原町）

海岸山という海への約束　五来重は「四国遍路の札所は海岸や島にあったり、海が見えたりして、海岸となんらかの関係を持っていることが条件です。」と述べる。京から紀州へ向かう九十九王子信仰の大辺路修行といった辺地をめぐる海洋宗教が山岳宗教に変遷していった。まさに岩屋寺は山岳宗教としての行場である。岩屋寺の公式ホームページに俯瞰映像が流れているので見ればよくその景観が理解できる。加えて五来重は「寺峰と洞窟が辺路修行の行場であったことは、海岸山の山号で知ることができる。」と述べている。

澄禅は、山を登り切り山頂から下って「仙人ノセリ破リ石」（奥の院逼割禅定・白山権現）から仁王門をくぐり岩屋寺に向かう。「堂のうしろに閼伽井。不増不減の水で、これを往生岩

屋という。」と寂本は「穴禅定」を説明する。多くの札所の縁起によく説明されているのが「不増不滅の水」。つまり、海とつながっているということを意味する海洋宗教の痕跡である。

武四郎の軌跡

■愛媛県上浮穴郡久万高原町
八田の川（下畑野川）四十五番海岸山岩屋寺（四十五番札所岩屋寺）八田の川（下畑野川）坂（不明）峠（三坂峠）

■愛媛県松山市
大師堂（窪野町）浄瑠璃寺村（浄瑠璃町）

武四郎は八田の川（下畑野川）の段で「過て左右へ道有。右の方岩屋寺山に六十五丁。この閻魔堂ニ荷物を置て是まで打ちもどる也。」と岩屋寺を打ち戻りして三坂峠から松山に下っている。岩屋寺の山号を海岸山というように、四十七番札所八坂寺から岩屋寺、石鎚山へ向かうこのルートは熊野修験者が修行する「中辺路」に当たるといえる。武四郎が大宝寺の記述に「一ノ王子」「二ノ王子」と示すのもその痕跡といえよう。

熊野修験の拝所「一ノ王子」

三坂峠から鍋割坂を中ほど下った所に「一ノ王子社跡」の表示板があり、「中世から近世にかけて石鎚信仰に熊野信仰が結びつき、ここから石鎚山頂までの道に王子が続いていたといわれていま

す。現在は石鎚登山西条側にのみ三十三王子が残っています。」とある。

王子は熊野権現の末社で大坂・八軒屋浜船着場を起点として熊野古道の紀伊路（一六二キロメートル）と中辺路（八四キロメートル）沿いに九十九の王子社を祀っている。紀伊路は田辺から中辺路となり、熊野本宮大社に向かい、そこから三つの峠を越えて熊野那智大社。那智から海に出て熊野速玉大社に至る。熊野詣はこの王子を参詣し神楽や舞を奉納しながら熊野三山に向かう。この上皇から庶民まで「蟻の熊野詣」と言わしめる一大ムーブメントとなった。

歌人藤原定家の日記『後鳥羽院熊野御幸記』には建仁元年（一二〇一）の後鳥羽上皇の熊野詣の様子が記録されている。熊野詣は古代からの「死者の国」という山中を他界とする信仰が昇華したもので、「山越えの弥陀」は、道中の禊祓や山林斗藪の苦行を成し遂げた後に開ける世界であり、浄土を体感できる彼岸の地であったことだろう。熊野詣はそんな必ず一度は来るあの世への予行演習である。後鳥羽上皇は二十四年間の院政期間に二十八回も熊野詣をしたという。この熊野詣の総まとめ役が熊野御師であり、各地の修験者（先達・山伏）が参詣を案内していった。

熊野修験者の行場となったのが四国辺地であり、その中でも四十七番札所八坂寺から岩屋寺や石鎚山への道は山林斗藪の苦行の場として多くの痕跡を残している。その一つがこの「王子」であり、熊野に倣って拝所としての王子を設けていったのだろうと思われる。

この鍋割坂に「一ノ王子」とあるがその数が九十九カ所もしくは三十三カ所あるとするならば一番となると位置的には不自然である。

峠越えの入口「坂本」

鍋割坂の麓にある「坂本」。坂の元と字義のとおりの往来地名で「坂本・坂元」の地名があれば山越えの道があると思われる。坂本と同じ意味の地名に「折付」もあり、登り口となる所に「登尾」の小字もある。

この地の坂本の桜地区には、有名な遍路宿「坂本屋」がある。明治末期に建てられた遍路宿であることから武四郎は利用することはなかっただろうが、現在は歩き遍路の交流の場、接待所として地元の人に運営されている。

旦過地名「丹波」（松山市窪野町）

タンガと風呂

服部英雄の『地名の歴史学』に「愛媛県にも旦過地名がすこぶる多い」として明治十六年愛媛県字調書の小字からタンガ地名を上浮穴郡久万高原町西明神・丹花（タンカ）、西予市宇和町下松葉・反花（タングワ）など八例示し「これらは遍路道に沿ったものが多く、また風呂地名と重なる」と述べる。「旦過」は、修行僧が寺に来て一宿の後、翌朝（旦）去ることから名づけられたもの。修行僧の宿泊所・旦過寮などの記録が残る。この旦過を維持するための米をとる田（仏供田）に、タンガ、タンバという地名がついていると東昇の『愛媛県におけるタンガ

地名と四国遍路』に書いてあった。服部の門下生である東は丹波（写真）の事例などを挙げ「タンガ地名は、本来は禅宗の修行僧の旦過に由来するものだが四国の事例では札所付近や街道の要衝にあることから、交通地名であり、消えてしまった道の発見にもつながる」と述べている。

寺の本院とは別に修行僧が住む所の地名に「別所」がある。五十八番札所仙遊寺の麓に玉川町別所の大字があり、その小字に「風呂ノ谷」がある。聖や修験者の作善として「蒸し風呂」があることから、大いに関連する地名である。

服部はタンガと風呂の関係を指摘しているが、寺の所在地が「風呂ノ谷」である所は私の地元、旧大正町の下津井（西源寺）と江師（極楽寺跡）にもある。ここの郷社が熊野神社である。筒井功は『風呂と日本人』で熊野信仰と石風呂について東かがわ市水主にある「水主の石風呂」の事例を挙げ述べている。地形図でも分かるように与田川流域に「風呂」「那智山」「本宮山」がある。ＮＨＫ番組の「サンドのお風呂いただきます」もあるが、お遍路にとって宿とともにお風呂接待は作善の際たるものだといえる。

愚草の川柳集⑨選

2016 / 夏

日本死ね!!　本丸めがけ石飛礫

むのたけじ百一歳の鬼骨かな

マスメディア国の器に飼育され

※むのたけじを知ったのは高校時代だった。権力の報道統制に屈服した責任をとって朝日新聞社を退社。秋田県横手市に帰郷し週刊新聞『たいまつ』を創刊し記事を書き続けた。まさに骨のある新聞記者である。愚草も、むのたけじのファンなのだろう。ゆえに「国のインキュベーターに飼育」されるＮＨＫは大嫌いのようだ。

HP「四万十町地名辞典」引用

四国遍路 十二日目（松山市～46・47・48・49・50・51～松山市道後）

愛媛県松山市浄瑠璃町（長珍屋）
～　十七・三キロメートル／七時間〇四分
愛媛県松山市道後多幸町（ビジネスホテルさくら）

活動日記

浄瑠璃寺の門前宿「長珍屋」を六時五十分に出て四十六番札所浄瑠璃寺を参拝。この筋は札所が四十七番札所八坂寺、四十八番札所西林寺、四十九番札所浄土寺、五十番札所繁多寺、五十一番札所石手寺と続く。ちょっと早く終えて道後温泉を拝することにする。近くのビジネスホテルさくらを予約した。

ここから、札所が石手寺まで軒を連ねる。途中、遍路道筋に四国遍路開祖と呼ばれる衛門三郎の「衛門三郎札始大師堂」がある。最初に逆打ちしたのが衛門三郎といわれるが、これは物語。いつの間にか、閏年は逆打ちの歳となった。

西林寺を過ぎたころ、波賀部神社がある。もとは墓辺神社で嵯峨天皇の皇子寛王の遺骸を葬るために創建されたもの。

遍路橋（松山市久米窪田町）

後世、墓の字を忌み嫌って波賀部神社とした由緒である。その脇を流れる川が「悪社川」。これもついでに改名してもらったらと願っているのだろう。

石手寺までのへんろ道に「遍路橋」が二カ所。橋の四方には橋名板がある。自治体の工事発注仕様書によって異なるが一般的には、道路起点側から見て左に「漢字表記の橋名」、同じく右に「交差する河川等の名称」、道路終点側から見て左に「ひらがなの橋名」、同じく右に「竣工年」となっている。橋柱のデザイン、橋の形の変遷、橋名の命名意図、竣工年による往来の変化など昔の景観を思い描くことができる。この「遍路橋」もその名のとおり遍路往来の賑わいを示す橋名である。

49番札所浄土寺の「三密加持」（松山市鷹子町）

遍路橋をまっすぐ北に進むと四十九番札所浄土寺。境内に「三密加持」の五輪塔があった。世間の「三密回避」とのギャップに笑ってしまった。若い頃「身口意の三業」について教えてもらったことがある。「身」は美味しいものを食べたい飲みたいという欲求、「口」は悪口陰口をたたき言葉で人を欺き大声で自慢話をすること、「意」は不幸を願う心、妬みや恨む心の犯罪。これらいつも酒場でやっていることだ。この「三密回避」することで仏の加護があるのだろうなと勝手に解釈する。

ここ辺りのへんろ道筋は稲刈りをしていた。食文化研究家の近藤日出男が「ほんのりと香る稲を一房そそり、持ち帰っ

て育てたことから、〝香り米〟のことを〝へんど選り〟と呼ばれた」と言っていた。その「へんど選り」の選定者が母方の祖父市川幾治である。同郷の史家伊与木定は「幾治選り」と命名して頂いた。遍路は、全国から集まりまた散らばる文化の伝播者でもある。コロナ禍で歩き遍路は心苦しいが、「その地の良いところを伝える伝道者」でありたい。

松山市の東山の麓を繁多寺、石手寺へと進む。

石手寺の広い境内に住職のお勤めの声が聞こえてくると思ったらスピーカーだった。納経所はお守りなどの販売所と一体である。お客対応の販売を待つことはそれも修行である。それはいいが、納経（聖）と物販（俗）は分離してもらいたいものだ。

石手寺裏の道後山のヘンロ道をたどると伊佐爾波神社に下りたった。今日の宿「ビジネスホテルさくら」はこの道後温泉街のこじんまりしたホテルで、十四時にチェックイン。早速に道後温泉に下駄履きででかけ、帰りはコンビニで夕食の準備をした。

歩き遍路にとってコンビニはありがたい存在だ。コンビニコーヒーは安くて美味しい。加えてありがたいのが「イートインスペース」。コロナ禍で閉じている所もあるが、食べ物とホットコーヒーを注文し「お接待でいただいたおにぎりを一緒に食していいですか」と依頼する。持ち込みは厳禁なのだがお接待のおにぎりといえばむげにも断れないのだろう、やさしく「どうぞ、ごゆっくり」と言ってくれる。ゆっくり食事してトイレも行って水の補給もする。セブン-イレブンではペイペイのチャージもできる。

「コンビニは遍路最強のステーションや」

浄瑠璃寺（第四十六番札所 医王山（いおうざん） 養珠院（ようじゅいん） 浄瑠璃寺（じょうるりじ））

御詠歌：極楽の浄瑠璃世界たくらえば　受くる苦楽は報いならまし

宗派：真言宗豊山派　本尊：薬師如来　開基：行基菩薩

創建：和銅元年（七〇八）　所在：松山市浄瑠璃町

近所が守る札所　澄禅は「本堂三間四面、本地薬師如来、日光・月光両菩薩、十二神将。昔は大伽藍だったが今は衰微し小さい寺一軒。」と記す。

『えひめの記憶』には「廃仏毀釈と札所」の章で、愛媛県の札所の困窮を「浄瑠璃寺では住職が庫裏の裏を畑にして芋などを作りしのいでいたが、とうとう耐え切れず出て行って無住になったため、檀家の総代が建物を管理し、葬式や法事の際には近所の寺から僧侶に来てもらった。遍路が納経を頼みに来た時には、近所に住んでいた総代が出て行って朱印を押したという。」と述べている。

八坂寺（第四十七番札所 熊野山（くまのざん） 妙見院（みょうけんいん） 八坂寺（やさかじ））

御詠歌：花を見て歌詠む人は八坂寺　三仏じょうの縁 とこそきけ

宗派：真言宗醍醐派　本尊：阿弥陀如来（伝恵心僧都作）　開基：役行者小角

創建：大宝元年（七〇一）　所在：松山市浄瑠璃町八坂

熊野山は熊野修験の根本道場　八坂寺は山号が「熊野山」。熊野修験の根本道場があっただけに本堂の隣に今も十二社神社が鎮座している。「熊野山」の山号を持つ札所は石手寺もそうであり、石手寺、八坂寺、菅生の岩屋、石鎚山といった辺地が熊野山伏の山林抖擻の行場であったことが分

かる。寛政の名所図絵、武四郎ともに、山号を熊谷山と示しているのは不明。
八坂寺の開基は修験の祖役行者小角。毎年四月二十九日には全国の修験者が集まり、火渡りの儀式を行うという。
澄禅は「熊野権現を勧請。昔は三山権現立ち並ぶため二十五間の長床があった。今は小さな社だ。昔、この国の長者が熊野権現の露験あらたかなることを知り三年続けて参詣、当国に勧請。寺は妻帯山伏が住持。」と記し、寂本は「古堂に吹く清風も寂しく、垣や石段には蔓草が延びほうだいだ。」と荒廃した寺を嘆いている。

西林寺（第四八番札所 清滝山（せいりゅうざん） 安養院（あんよういん） 西林寺（さいりんじ））

御詠歌：弥陀仏の世界をたずね行きたくば　西の林の寺に詣れよ

宗派：真言宗豊山派　　本尊：十一面観世音菩薩　　開基：行基菩薩

創建：天平十三年（七四一）　　所在：松山市高井町

杖の淵という命の水　寂本は「寺の前に池があり、杖の淵と名づけている。」と、ここでも弘法清水と杖の伝説を寺の縁起としている。集落の形成には、「命の水」を得るための水利に恵まれていることが一番の根本である。寺の勧請も、この「閼伽井」を確保する必要から境内地を探す。また、滝は大地から湧き出る「聖水」として、修験者は浄めの行場として大切に守っていく。
西林寺の鎮守は熊野三所権現。奥の院はこの「杖の淵」である。

浄土寺（第四十九番札所 西林山（さいりんざん）三蔵院（さんぞういん） 浄土寺（じょうどじ））

御詠歌：十悪のわが身を棄てずそのままに　浄土の寺へまいりこそすれ

宗派：真言宗豊山派　本尊：釈迦如来（伝行基菩薩作）　開基：恵明上人

創建：天平勝宝年間（七四九～七五七）　所在：松山市鷹子町

落書きが歴史を語る　浄土寺に入ると子規の句碑「霜月の空也は骨に生きにける」がある。浄土寺にはこの空也上人（九〇三―七二）の像がある。杖をつき鉦を叩きながら行脚する「阿弥陀聖」の姿である。

浄土寺の本堂厨子には遍路の起こりを知る手掛かりとなる落書きがある。厨子の製作は大永二年（一五二二）。五来重は『四国遍路の寺』でこの落書き、「金剛峯寺谷上惣識善空、大永八年五月四日」「金剛峯寺満□同行六人、大永八年五月九日」「四国辺路同行四人川内□津住□覚円廿二歳」「三川同行□□遍路大永五年二月十九日」「四国中えちぜんのくに一せうのちう八いさの小五郎」「四国中辺路□善冊□辺路同行五人のうち阿刕名東住人□大永七年七月六日」「書写山泉俊長盛□□大永七年七月吉日、なむ大師辺照金剛」の七つを詳しく紹介している。

「同行二人」とは一人遍路でもお大師さんと一緒ということの理解になっているが、当時は同行○人の数詞は弘法大師を含んでいないと五来重は説明する。「四国中辺路」とあるが、熊野では紀州田辺の海岸から本宮大社に向かう山道が中辺路であることから石手寺から菅生の岩屋、石鎚山から土佐の横倉山、青龍寺へと向かう道が四国の中辺路ではなかろうか。「辺路同行五人のうち阿刕名東住人」も僧職遍路から遍路の一般化（阿洲名東郡住人）になりつつある過程を推測する資料で

あると述べる。

こうなると落書きも重要文化財級である。

浄土寺の奥の院は牛之峰地蔵堂という。

繁多寺（第五十番札所 東山瑠璃光院繁多寺）

御詠歌：よろずこそ繁多なりとも怠らず　諸病なかれと望み祈れよ

宗派：真言宗豊山派　本尊：薬師如来　開基：行基菩薩

創建：天平勝宝年間（七四九～七五七）　所在：松山市畑寺町

かつては六十六坊の大伽藍　澄禅は「昔は律寺で六十六坊あったというが、本堂、仁王門は雨漏りし、塔も朽ちて心柱九輪も傾き哀れだ。」と寺の衰退ぶりを嘆く。寂本は「江戸時代になって龍狐という比丘が本願となって堂舎を修復したのが現在のお堂。護摩堂にある本尊の不動明王は伝教大師の作。堂の左方には鎮守の熊野権現があり、後には求聞持堂がある」と記す。

繁多寺には一遍上人の木像があるというが、寺のホームページには一遍上人の石柱があるとしか書いていない。

繁多寺の本堂の左手に鳥居がある。「神仏混淆の名残りですか」と問うと「あれは鳥居でなく歓喜天の……」と聞き取れなかった。中興の祖、竜狐が歓喜天の行者であったことによるものという。

奥の院は不明だが、麓に繁多寺、浄土寺、日尾八幡などがあることから、裏の山（東山）が行場であり、奥の院ではないだろうか。行者が多く集まることから祈祷、病気平癒を願う信者が集ま

り、やがて麓の「畑の寺」として堂宇となったのが繁多寺と思われる。

石手寺（第五十一番札所 熊野山（くまのざん） 虚空蔵院（こくぞういん） 石手寺（いしてじ））

御詠歌：西方をよそとは見まじ安養の　寺に詣りて受くる十楽

宗派：真言宗豊山派　本尊：薬師如来　開基：行基菩薩

創建：天平元年（七二九）　所在：松山市石手二丁目

熊野修験から弘法大師信仰への分岐路　石手寺は「衛門三郎伝説」の石を寺宝とする所である。衛門三郎伝説は、弘法大師信仰に深く関わる伝承であり、ときに、四国遍路の草分け、逆打ちの元祖といった説明が一般的である。伝説の要素は、①強欲非道な衛門三郎が托鉢僧の鉢を八つに叩き割った②衛門三郎の子ども八人が相次いで亡くなる③托鉢僧が弘法大師であったことに気づく④自らの振舞いが不幸を招いたことを悟り⑤お詫びをするため弘法大師を追って四国廻行の旅に出る⑥二十回を重ねても会えず、逆打ちをすると⑦焼山寺の近くで病に倒れ、やっと弘法大師に出会い懺悔する⑧弘法大師が衛門三郎に願いを聞くと⑨来世は国主（河野家）に生まれたいと願う⑩弘法大師は衛門三郎に石を握らせる⑪翌年、河野家に左手を握りしめた男子誕生。石には「衛門三郎再来」とある。

この伝説は「弘法大師信仰の装置」にもなっているが、その伝説の元となるものが、永禄十年（一五六七）の「石手寺刻板（板書）」である。

天長八年辛亥載、浮穴郡江原郷右衛門三郎、求利欲而富貴、破悪逆而仏神、故八人男子頓

死、自爾剃髪捨家、順四国辺路、於阿州焼山寺麓及病死、一念言望伊予国司、爰空海和尚一寸八分石切八塚右衛門三郎銘封左手、経年月生国司息利男子、継家号息方、件石令置当寺本堂畢

この板書には、前段に示した今に伝わる一般的な衛門三郎伝説における①から⑥の前段部分に弘法大師の姿は見えないことに特徴がある。この板書が書かれたのが江戸期以前でまだ四国遍路が一般化していない時期であるが、江戸期に入り各種の遍路日誌などの記録に衛門三郎伝説が出てくることとなる。

澄禅の『四国辺路日記』には衛門三郎伝説をより詳しく記述されていて、今の衛門三郎伝説の手本になったものと思われる。

寂本は『四国徧礼霊場記』に衛門三郎伝説についても詳しく書かれているが弘法大師の鉢を八つに割ったこと、弘法大師に会うために遍路に出たことなどの記述はない。加えて「息方（衛門三郎の再生）は当社の権現を崇敬し神殿と拝殿を再興させ、手に握っていた石は宝殿に納めて後世に伝えた。また彼は熊野十二所権現を勧請した。これまで安養寺としていたものを、熊野山石手寺に改めたという。」と熊野権現との関係性を記している。寂本の「衛門三郎伝説」は弘法大師一辺倒ではなく、学僧らしく学研的に石手寺の板書の内容に沿ったものとなっている。

つまり、江戸期に入り四国遍路が盛んになるに従い衛門三郎伝説が「板書」の内容から変容し徐々に弘法大師信仰に圧倒されていったことを示すものである。このことは札所における「大師堂」の有無の推移がその変容を表している。

それにしても、衛門三郎の八人の子どもを殺すといった異様な物語は因果応報の教えといっても今では「子殺し」の怪奇譚である。

この板書の後段には、弘法大師と熊野信仰の関係が示されている。

寛平三年（八九一）辛亥載、創権現宮拝殿新堂、同四壬子載三月三日、奉勧請熊野十二社権現、改安養寺号熊野山石手寺

この板書の衛門三郎伝説では石手寺と寺名を変えたのは寛平四年（八九二）とあるが、五来重のいう「鎌倉時代」が相当と思える。平安末期は熊野別当田辺湛増の興隆する時代であり、源平合戦では、熊野水軍、伊予の河野水軍が源氏に援軍した。その縁で熊野十二所権現を勧請し、別当寺として石手寺としたのが正しい解釈のように思える。もう一つの衛門三郎伝説の意図は、熊野信仰の由来縁起にあるのではないか。

澄禅は「札所の本尊は薬師。本社は熊野三所権現で二十余間の長床がある。伊予には例のない大伽藍。昔は熊野山安養寺虚空蔵院といったが、中古より石手寺と改称した。」と述べ、寂本は「寺の草創は元明天皇の御代、この州の大領玉興という人物が和銅五年（七一四）に白山権現を勧請したとあるが、白山権現は養老元年（七一七）に越の泰澄が白山に登り持念して感応したものでこれより先の伝承はあやしい。」と述べる。加えて「息方（衛門三郎の再生）は当社の権現を崇敬し神殿と拝殿を再興させ、手に握っていた石は宝殿に納めて後世に伝えた。また彼は熊野十二所権現を勧請した。これまで安養寺としていたものを、熊野山石手寺に改めたという。」と熊野権現との関係性を記している。

御詠歌は「安養の……」と安養寺を詠んでいる。どの御詠歌も詠まれた時期は定かではないが、元札所であった神仏習合の神社や退転前の寺名、旧札所寺名を記す御詠歌はよくあり、三十番札所善楽寺（一ノ宮）、三十三番札所雪渓寺（高福寺）、三十七番札所岩本寺（五つの社）四十四番札所大宝寺（菅生山）六十七番札所大興寺（小松尾寺）など多数ある。

武四郎の軌跡

■愛媛県松山市

四十六番醫王山養珠院浄瑠璃寺（四十六番札所浄瑠璃寺）八坂村（浄瑠璃町）四十七番熊谷山妙見院八坂寺（四十七番札所八坂寺）大師堂（衛門三郎札始大師堂）四十八番清涼山安養院西林寺（四十八番札所西林寺）土井村（土居町）鷹子村（鷹子町）四十九番西林山三蔵院浄土寺（四十九番札所浄土寺）畑寺村（畑寺）五十番東山瑠璃光院繁多寺（五十番札所繁多寺）下馬村（不明）石手寺村（石手）五十一番熊野山石手寺（五十一番札所石手寺）道後町（道後町）

浄瑠璃寺から石手寺、道後温泉に向けて北上するへんろ道。四十六番札所浄瑠璃寺から五十一番札所石手寺までの十五キロメートルくらいの間に六つの札所が続く。

衛門三郎の札始大師堂

八坂寺を過ぎて恵原町に入ると「四国霊場札始大師堂」がある。衛門三郎はこの地・荏原村（恵

原町）に生まれたことからこの地に大師堂が建立されたのだろう。

逆打ちを初めてした人といわれる衛門三郎。この衛門三郎伝説の最古の記述が「石手寺刻板（板書）」にあり、それを底本にしていろいろな伝説が生まれている。板書の説は、「衛門三郎は私利強欲にして神仏の道を破り、そのことで八人の子を次々に頓死する。罪責の念により家を出て四国遍路をしてついに焼山寺の麓で行き倒れとなるが、国司になりたいと希望し、弘法大師が石を握らせ、河野家その石を持った男子が誕生し、その石が石手寺にあるという」である。因果応報や輪廻再生思想、反外見至上主義など仏教思想の色濃い内容となっている。

石手寺住職の加藤俊生は『巡礼遍路研究・第三号』に「衛門三郎信仰の考察」と題して青年空海と衛門三郎伝説の類似性について詳しく述べている。「石手寺古文書などには逆打ちの記述はない。順打ちは自分の修行を表し、逆打ちは利他行を表す」と衛門三郎逆打ち伝説の疑義を示し「弘法大師に会うということは弘法大師と同じ発心の境地＝自他兼救済の境地になったということ。」と未熟な遍路の逆打ちを勧めていないように思える。

看板には「四国霊場（遍路開祖衛門三郎）札始大師堂」とある。

道後温泉

日本最古の温泉といわれるのが道後温泉。『伊予国風土記』逸文には大穴持命（おおなむちのみこと）は少彦名命（すくなびこなのみこと）が仮死状態になっているのを見て、これを蘇生させるために別府の温泉から地下の水道を通して湯を持ってきた、少彦名命をその湯のなかに入れると程なくして回復したという話がある。別府の温泉を泉

源としたということは最古でもないが、『風土記』逸文に出る説話であることから古いことには間違いない。

この「大穴」が地中の世界を連想させ、この「あなぐら」の室（むろ）が風炉（ふろ）に転訛したようだ。井原西鶴「好色一代男（一六八二）」の挿絵にあるのも蒸し風呂で江戸中前期には湯風呂ではない。十辺舎十九の『東海道中膝栗毛（一八〇二）』にあるように、弥次さん（弥次郎兵衛）と喜多さん（喜多八）が小田原宿で初めて入る五右衛門風呂が出てくるのは江戸の後期のことである。

映画『テルマエロマエ』にあるように戦傷者などの湯治の意味を持つ温泉であるが、もとは自らの穢れを祓う浄めの行為（水垢離）であり、作善のための風呂接待であったように思う。というのも、「風呂ノ谷」の小字の多さである。高知県の小字十一万カ所をホームページ『四万十町地名辞典』は公表しているが「風呂ノ谷」を主としたフロ地名が八十七カ所出現する。柳田国男も『風呂の起源』で風呂地名の事例を示して言及しているが、全国に分布する「風呂ノ谷」地名については記述がない。

歩き遍路にとって風呂は極楽である。

武四郎は道後温泉について「人家三百軒斗。湯の町と云。町中ニ湯壺三ヶ所有。遊女有而奇麗なる町なり。商戸多く止宿するニよし。温泉の功能は先第一疼痛、疥癬、切疵、其外腫物類何と云こと無よろしき」と記す。湯壺が三カ所からなるとあるが、『愛媛面影』に図絵があり、一乃湯は武士・僧侶用、二之湯は婦人用、三之湯は庶民男子用に分かれていたという。江戸期においてはレディーファーストであることに五輪の森会長も驚きだろう。澄禅は三つの湯の他にハンセン病の者

が入る湯があると書いている。別の本には馬湯もあったと書かれていた。安政二年（一八五五）の定書によれば湯治目的には宿泊を認めないが遍路は三泊までは許される、正体不明の者や病気けが人は養生湯に入ることとされているが、遍路は二之湯・三之湯を使ってよろしいといった遍路を癒す道後温泉であった。

日本人の風呂好きは江戸末期の安政四年（一七七五）に来日したツンベルクの『日本紀行』にも「旅にある時も、家にいる時も、彼等は一日として体を洗うのを欠かしたことがない。町のみならず村落にも公衆風呂がある」とあり、混浴と合わせて日本人の風呂好きについて驚きの目で記録されている。

愛媛県松山市道後多幸町（ビジネスホテルさくら）
～　二八・三キロメートル／九時間二八分
愛媛県松山市北条（カフェと御宿まほろば）

活動日記

道後温泉の近くのビジネスホテル「さくら」を八時三十分に出立して愛媛県立図書館に向かう。郷土資料室で愛媛の地名、地誌に関する書籍史資料を探し、五十二番札所太山寺、五十三番札所円明寺を参拝し、北条に向かうのが今日の日程。今夜の宿は北条の「カフェと御宿まほろば」。幸いにも予約が取れた楽しみな宿である。

図書館の開館が九時四十分と遅く、十分な調査はできなかったが、『伊予国地理図誌』『愛媛面影』『伊予の地名』『愛媛県におけるタンガ地名と四国遍路』を探し当て、めくり読みした。服部英雄の『地名の歴史学』にも四国のタンガ地名について書いていた。タンガ（旦過）は、修行僧の宿泊施設である。以前調べた際に、高知県にも十一万の小字の中にタ

夕焼けの瀬戸内・鹿島（松山市北条）

ンガン（香美市土佐山田町植）、丹官（南国市廿枝）、壇願（梼原町梼原）、タンクワン（宿毛市小筑紫町田ノ浦）を見いだすことができた。高知県内の古文書では『手結浦日抄』に「往古旦過寺有シ号ナリ」と香美郡夜須郷に旦過寺があったと書いてある。

昨日、三坂峠の下り道、坂本地区の桜集落を過ぎて「丹波」の地名があった。石手寺から八坂寺、海岸山岩屋寺へ、その後石鎚山へと熊野山伏の山林抖擻の修験道が続く。その辺路（ヘジ）にタンガがあることは自然なことだ。丹波もタンガの転訛と思っていたら、この『愛媛県におけるタンガ地名と四国遍路』に坂本の丹波集落が紹介されていた。『伊予の地名』は愛媛新聞連載のコラムの切り抜き帳である。こういった資料は現地に赴かないと発見できないので今回はちょうどよかった。

図書館に長居していては北条までたどりつけない。堀之内公園を抜けて国道一九六号線を北上する。五十二番札所太山寺は山門から本坊、本堂と一キロメートル余り続く大寺の様相であり、和気の町中にある五十三番札所円明寺とは装いが異なる。が、奥の院は隣合いといった近い距離だという。

松山から北条までの本日の行程は三十キロメートル弱であったが、時間が迫って普段は時間四キロメートルのペースを五キロメートルにアップした。夕暮れの海岸通りは山暮らしの私にとって貴重な体験だ。気持ちよく足を運び、宿の到着はちょうど十八時になっていた。

「カフェと御宿まほろば」は二組限定の宿。隣は三重県伊賀市の区切り打ちの男性遍路で食事をしながら、ソーシャルディスタンスの間隔で女将さんと御主人と四人で小さな会話を楽しんだ。これだけは加えとこ。「御宿まほろば」が人気なのは、全体が清潔で整っていること。陽子さんの気

遣い、御主人のトークが噛み合って、心地よくくつろげる。力まず飾らずが一番である。後日、陽子さんにお願いした遍路宿の思いの一文を紹介する。

「カフェと御宿まほろば」雑感

上田　陽子

この仕事を始めて六年が経ちました。まほろばは夫が勤めていた会社を定年退職したあと、敷地内にあった両親、祖父母の家を取り壊し建てたものです。祖父母の残した昔ながらの池を囲むようにカフェと宿がコの字型に配置されています。店内からは四季折々の移ろいを感じながら癒やしの空間が臨めます。夫は定年退職後、職業訓練校で建築の勉強をしたり、料理教室に行ったりしながら開店に向けて準備をしたようですが、私は退職後のんびりと気ままに過ごす予定だったのが夫の計画に巻き込まれた形でした。

しかしながら、今ではカフェと御宿まほろばを始めたおかげで、多くの出会いに恵まれ、日々の生きがいになっています。この本の著者である武内様をはじめ北は北海道網走、南は沖縄、コロナ禍以前には海外の方もたくさんいらっしゃいました。夕食時は、お遍路さんたちと会話を楽しみながらいろいろな刺激を受けたり学ばせてもらったりできる楽しい時間になっています。皆様との出会いが私達夫婦にとっての宝物です。

古事記の中で「大和は　国の真秀ろば　畳なづく　青垣山籠れる　倭し麗し」と国を忍んで詠んだと言われています。この中の「まほろば」は優れて素晴らしい所という意味がある

そうです。

まほろばの名前に恥じないよう、お泊まりいただくお遍路さんにとって泊まってよかった、いい所だったと思っていただけるよう心を尽くしておもてなしをしていきたいと思っています。

太山寺（第五十二番札所　龍雲山（りゅううんざん）護持院（ごじいん）太山寺（たいさんじ））

御詠歌：太山へのぼれば汗のいでけれど　後の世思へば何の苦もなし

宗派：真言宗智山派　　本尊：十一面観世音菩薩

開基：真野長者

創建：六世紀後半　　所在：松山市太山寺町

長者が建てた札所　太山寺の縁起は面白い。豊後の臼杵に炭焼小五郎という鞴（ふいご）の炭焼きがいて、神のお告げで都の玉津姫と結婚。持参金の小判を「こんなもの裏山になんぼでもある」と池に投げつけ、金の山に案内した。以来、運が開けて真野長者になったというもの。この真野長者の商い船が暴風雨に遭い観音様に念じると瀧雲山から光が差し込み難を逃れた。その報恩に「一夜建立の御堂」太山寺を開基したのであ

52番札所太山寺（松山市）

る。

瀧雲山は龍燈信仰を意味する龍雲と思っていたら「瀧」であった。読みは「リュウ」であるし四国八十八ヶ所霊場会のホームページにも「龍雲山」と書いてある所があった。太山寺の山頂で龍燈の火を焚き海の安全を記念したことであろう。

この瀧雲山が地形図に見る経ヶ森であろう。太山寺の奥の院である。この海を見渡す山一帯が山岳修行をして龍灯の護摩を焚き、神秘的な霊力を修法した所だ。

鞴はたたら製鉄を意味し、その燃料となる炭を焼いたのが小五郎である。

真野長者（真名野長者）は臼杵の摩崖仏を創建されたといわれる。国東半島の姫島の黒曜石が西日本各地の縄文遺跡で発掘されるなど伊予と豊後は古来より交易の盛んな間柄。海民の交流がいかに活発に行われていたかを物語っている。

御詠歌は真っすぐな詠みで、「いま苦労することで後にはいいことあるよ」の歌のようだ。

円明寺（第五十三番札所　須賀山（すがざん）正智院（しょうちいん）円明寺（えんみょうじ））

御詠歌：来迎の弥陀の光の圓明寺　照りそふ影は夜な夜なの月

宗派：真言宗智山派　　本尊：阿弥陀如来（伝行基菩薩作）　　開基：行基菩薩

創建：天平勝宝元年（七四九）　　所在：松山市和気町

四国仲遍路と同行二人を刻む納札　円明寺は街の中に現れたてらいのない札所であった。縁起では天平勝宝元年（七四九）の開基で当時は、和気浜の西山という海岸にあり「海岸山・圓明密寺」

と称したという。「海岸山」の山号は岩屋寺と同じで、「密寺」は密教を示しており、山号、寺名、その変遷から寺の歴史を理解することができる。

円明寺で有名なのは江戸時代初期の銘のある四国霊場最古（一六五〇）の銅板納札で「奉納四国仲遍路同行二人　慶安三年今月今日　京樋口平人家次」と刻印されている。

江戸期の初めは辺路と遍路が混在していた時期だろうか。「仲遍路」は熊野詣の中辺路を真似たものとすれば、海辺を廻行する辺地・辺路から、山林斗藪する山岳修行道ができたのではなかろうか。現在の札所分布を見ても四国西南部は少なく、青龍寺から岩本寺（五社）まで六十キロメートル、岩本寺から金剛福寺まで八十キロメートルと離れている。青龍寺から石鎚山、岩屋寺、石手寺、海岸山円明密寺のルート。弘法大師生誕の海岸寺、我拝師山、竜王山、大滝山、焼山寺山、灌頂ヶ滝（慈眼寺）、鶴林寺、太龍寺、室戸のルート。その二つを結ぶ道が中辺路ではないかと想像する。

「同行二人」もこの時期になると弘法大師と一緒という意味になったのだろうか、平人家次の一人遍路から伺うことができる。

鎮守について寂本は「鎮守は市杵島明神だ。仁王門の内に池があり、その中の祠も弁財天である。」と記す。市杵島姫（イチキシマヒメ）は宗像三女神の一柱で、神仏習合の本地仏は弁財天に比定される。

武四郎の軌跡

■愛媛県松山市

道後町（道後町）豊國山寶窟寺（宝巌寺）松山城（松山城）大山寺村（太山寺町）五十二番札所瀧雲山護持院太山寺（五十二番札所太山寺）和氣濱村（和気町）五十三番須賀山正智院圓明寺（五十三番札所円明寺）堀江村（堀江町）あハい坂（粟井坂）柳原村（柳原）北條（北条）

武四郎は松山城から太山寺までの道のりを詳しく説明していないが「城の西は海岸ニし而諸国の船出入をなし繁華の地也。過て少しの坂を越而（太山寺村）追分。左り三津ヶ浜道」とあるので松山城の北側を海岸近くまで西進して三津浜経由で太山寺に向かったと思える。国土地理院地形図には三津浜と太山寺の間に「石風呂町」の地名がある。

伊予の国名

『日本書記』には「次生伊豫之二名嶋、此島（伊予之二名島）者、身一而有面四」と。続いて「面ごとに名あり伊予国は愛比売（えひめ）と謂い、讃岐国は飯依比古（いいよりひこ）と謂い、阿波国は大宣都比売（おおげつひめ）と謂い、土佐国は建依別（たけよりわけ）と謂う」とある。「此島」とは「伊予の二名島＝四国」のことであり淡路島の次、二番目の島生みとなった。

ここでの伊予は四国全体を意味している場合と四つの面の一つの国としての伊予があるという。伊予地名は国土地理院地図で探しても千葉県房総市の「伊予坊」、三重県伊賀市の「上野伊予町」、

長野県中野市の「伊予岡団地」、広島市尾道市の「伊予兼」、高知市春野町の「伊予川」や土佐清水市の「伊予駄場」などがある。全国に分布するのは国名伝播というより「イヨ」は「イヤ（祖谷）」の語彙と同じように人が足を踏み入れるのにも困難な深い谷奥の土地を意味することによるものだろう。つまり、伊予＝は山深い足を踏み入れるのも困難な四国を意味し、それゆえに熊野と同じような修行の地として発展していたと考える。今でこそ海岸地帯の平野部は市街地となっているが大部分は江戸期からの灌漑による農地開発と干拓による新しい景観であろう。中世以前の他国の人にとって海を渡る四国は他界であり死霊の籠る霊地と考えたのではないか。この辺鄙な非日常の空間は、「四国の辺地」として難行苦行の廻行修行をする者にとって最高の道場であったことだろう。坂東眞砂子の小説『死国』が出版されたときタイトルに驚いたが、今では腑に落ちる「死国」である。

小泉道の『伊予の説話資料の研究』がイヨの地名の語源を探るには一番分かりやすい。小泉はイヨ（伊予）、エヒメ（愛媛）、イシヅチ（石鎚）の地名の語源や諸問題を古代資料から地方文書（じかたもんじょ）まで紹介しつつ、現地を踏査して地元の研究者の話を傾聴し、上代特殊仮名遣の研究を援用しつつ、民間語源説的な域にとどまることなく検討を加えている。

小泉は「イヨ」由来の「出湯（イデユ）」説について、道後温泉の印象が強くその由来に湯を入れたいのだろうが、音韻の変遷過程上に疑問があるとして、「動詞〃いづ〃」が現代語の〃でる〃になったように、脱落するのはデではなくて狭母音のイの方になるのが自然。また〃湯〃をヨといった例は上代の資料には見いだせない。」と民間語源説的な域を出ないものとしている。

また、小泉は伊予の万葉仮名表記例を古代資料摘出し、「伊豫」「伊余」「伊與」「伊預」などからヨは全て乙類の漢字で表記されたものであり、上代の日本語においてアと乙類オの母音交替形は極めて多く、乙類のヨがヤと交替したものとして、前述の「イヤ（祖谷）」説を支持している。加えて興味を引いたのは「日本民族の神聖数として無限の数量・程度を意味する〝八（ヤ）〟に対し、それと倍数関係をなす〝四（ヨ）〟も古くは聖数の役割を果たしていたもので（中略）七・五・三の陽数（奇数・縁起の良い数）の尊重は中国伝来の思想によるものであり、日本では二・四・八などの倍数関係の数詞が重んじられたのである。」として、「イヨの二名島」は「面四つ」あり、次々生まれる島を合わせた結果「大八島国」と、二―四―八の展開を面白く示している。「イヨ（伊予）」は、そのような小地名であったものが国名となり四国の総称として日本書記に刻まれたものといわれる。

『伊予国風土記』逸文には「御嶋（大山祇神社）」「熊野岑（今治市）」「湯郡（道後温泉）」「天山（松山市天山）」「二の木（不明）」「湯桁之数（不明）」などの説話が残っているだけだがこのことについても小泉は『日本霊異記』を引きつつ述べているので読んでいただきたい。また、小千（越智）と土佐との関係、小千玉澄（河野始祖）と仁井田郷・五社との関係、大山祇神社と五社の大通智勝仏の関係など、伊予と土佐、なかんずく四万十町との関係は大きく、あらためて別の機会に調査を進めたい。

伊予の変遷の概略は次のとおりである。

七世紀ごろの伊予は、伊余（伊予郡一帯）、怒麻（野間郡）、久味（久米郡）、小市（越智郡）、風

早（はや）（風早郡）の五国造。

十世紀の『和名抄』には、「道前」の宇摩郡、新居郡、周敷郡、桑村郡、越智郡、野間郡、風早郡、「道後」の和気郡、温泉郡、久米郡、浮穴郡、伊予郡、喜多郡、宇和郡の十四郡。

十七世紀の江戸幕藩体制では、西条藩、小松藩、今治藩、松山藩、新谷藩、大洲藩、吉田藩、宇和島藩の伊予八藩。

明治維新の廃藩置県は大きな離合集散となった。明治四年（一八七一）には伊予八藩がそのまま県名となったが同年十一月には松山県と宇和島県に、翌年には松山県が石鉄県、宇和島県が神山県にそれぞれ名称変更、その翌年の明治六年（一八七三）には香川県と合併し愛媛県となる（同じく一時期、高知県も名東県（徳島）と合併し高知県となり四国二県の状態があった）。明治二十一年（一八八八）、明治の町村合併の前年に香川県が分立し現在の愛媛県となった。その間、大小区制が導入され明治二十二年の町村合併まで大混乱の時期であった。

あハい坂（粟井坂）

五十三番札所円明寺から粟井坂を通り北条に入るが、昔、粟井坂は難所であった。その後、改良された海岸沿いの旧国道が開通し、今では国道一九六号の粟井坂トンネルで難なく通過することができる。この粟井坂は「間ノ坂」であった。旧松山市側が「道後」、旧北条市側が「道前」である。平成の合併で松山市は北条市まで組み入れてしまった。昔の番所はこの先の淺浪村（浅海原）にあることから松山藩と今治藩の境目と道後・道中の区分とは違う領域となる。

四国遍路 十四日目（松山市北条～54・55・56・57・58～今治市）

愛媛県松山市北条（カフェと御宿まほろば）
～　三八・〇キロメートル／一〇時間四〇分
愛媛県今治市古谷甲（仙遊寺宿坊）

活動日記

北条の宿「御宿まほろば」を七時十五分に出立。御主人と女将さんともどもの見送りをいただいた。今日は五十四番札所延命寺、五十五番札所南光坊、五十六番札所泰山寺、五十七番札所栄福寺、五十八番札所仙遊寺と続き、仙遊寺の宿坊で泊まりとなる。四十キロメートル超えのロードで最後の山登りもおまけにつく。

宿から鎌大師を通る山越えのヘンロ道を間違えたが、それはそれで、朝の清々しい海岸を歩くことができた。浅海（あさなみ）を過ぎると今治市菊間となる。松山市も北条を合併し、今治市も多くの自治体を合併し広大な市となった。菊間の瓦製造は有名だが、中小の屋号が肩を並べる。越智の表札もあちこちにある。河野氏の越智一族は高知にも大きな関係

陽子さんと耕滋さん（松山市北条）

がある。そんな町筋から巨大なコンビナート。太陽石油の石油精製基地である。程なく坂を上りつめると地下備蓄施設が眼下に見える。やっぱり愛媛と高知は経済的には大きな差がある。ガソリン百二十八円／リットルとは驚きだ。

朝食がパンだったからか「ガソリン切れ」。七時過ぎから歩いたので仕方ない。十一時にファミマカレーとなった。米はチカラだ。

南光坊では同宿だった伊賀市の遍路と長珍屋で一緒だった遍路の南くんとであった。遍路仲間は今治市のＧＯＴＯホテルという。

南光坊から泰山寺までは今治の市街地をまっすぐ南西に進み、栄福寺へと南下する。石清水八幡宮に寄ってから別当寺である栄福寺を参拝する計画だったが、この後仙遊寺への山登りが待っている。それに仙遊寺は精進料理で有名な宿坊だったが、今は食事がないとのこと。四村のスーパーで食料を調達して栄福寺に直行した。ここから、犬塚池脇の山道を仙遊寺へと向かった。山門をくぐり急な参道を上り仙遊寺の宿坊「創心舎」に着いた。

延命寺（第五十四番札所　近見山（ちかみざん）宝鐘院（ほうしょういん）延命寺（えんめいじ））

御詠歌：くもりなき鏡の縁とながむれば　残さず影をうつすものかな

宗派：真言宗豊山派　　本尊：不動明王（伝行基菩薩作）　　開基：行基菩薩

創建：養老四年（七二〇）　　所在：今治市阿方甲

二つの円明寺　弘法大師が再興して「不動院円明寺」とした。円明寺（えんめいじ）は五十三番札所円明寺（えんみょうじ）と間

違うことが多いことから明治以後「延命寺」に改めたという。

延命寺の山号が近見山となっているのは、かつて近見山に信仰と学問の大伽藍として興隆していたが度々の火災により堂塔を焼失し、江戸中期に麓の現在地に降りてきたことによる。

本尊について五来重は『四国遍路の寺』に「このお寺の本尊は宝冠の不動明王。山伏などが〝大日大聖不動明王〟と称えて行をするのは、大日如来と不動明王が一つになっている。大日如来の宝冠を不動明王がかぶるかたちをとっている。」と述べている。

御詠歌には寺名は刻まれていないが「くもりなき鏡の縁」と詠っている。五来重は「薬師如来を拝むお寺であれば、鏡に罪・穢れ・病気を移して薬師様に受け取ってもらって治してもらうということで、病気平癒のために鏡を納めることがしばしば行われている。」として大伽藍時代に薬師も祀っていたのではないかと推理し「それが御詠歌の鏡だとすれば、非常に古い御詠歌になる。」と述べている。五来重はさらに旧寺名についても「薬師如来の円と燈火の明を結んで円明寺であった」とも書いている。

南光坊（第五十五番札所 別宮山（べっくざん） 金剛院（こんごういん） 南光坊（なんこうぼう））

御詠歌：このところ三島に夢のさめぬれば　別宮とても同じ垂迹

宗派：真言宗御室派　本尊：大通智勝如来　開基：行基菩薩

創建：大宝三年（七〇三）　所在：今治市別宮町三丁目

南光坊と岩本寺は親戚　大三島の大山祇神社の別宮として本地仏・大通智勝如来を祀っていたの

が南光坊である。

この関係は高知県四万十町の五社（江戸時代の札所。当時は仁井田大明神、現在は高岡神社で通称五社さん）と三十七番札所岩本寺（当時の岩本坊）の関係と類似する。大山祇神社は来島海峡を隔て、五社は四万十川を隔てる関係から参拝者が納経する利便を考慮し、交通の便利な宿坊を札所とした。また、五社の勧請は六世紀ごろ伊予の豪族・物部姓越智玉澄と言われており、当時は仁井田大明神であった。『南路志』には五社の中宮の本地仏をいつからか大通智勝仏としたと書かれている。大三島神社の本地仏も大通智勝仏で、南光坊の本尊も大通智勝仏であり八十八札所でただ一つの本尊とする札所である。かたや岩本寺は五社の本地仏を本尊とし不動明王、観世音菩薩、阿弥陀如来（大通智勝仏）、薬師如来、地蔵菩薩を併記している。

五来重は『四国遍路の寺』で「大三島のもとは、仁井田（四万十町）の五社だという伝承がいつからか伝わっていて（中略）もとは仁井田のほうにあって、それが転々と移って大三島にまつられたのではないか」と大三島と五社との関係を述べられている。

越智玉澄は伊予に復帰し河野一族の祖となった。その後も、窪川台地の開拓（仁井田の五人衆）や津野山開拓など河野家の子孫が土佐に流れ、その地を開拓するとともに多くの三島神社を勧請している。玉澄伝説はこの地だけでなく伊予三島にもある。いずれにしても不思議な縁である。

泰山寺（第五十六番札所　金輪山（きんりんざん）勅王院（ちょくおういん）泰山寺（たいさんじ））

御詠歌：みな人の詣りてやがて泰山寺　来世の引導たのみおきつつ

宗派：真言宗単立　本尊：地蔵菩薩（伝弘法大師作）　開基：弘法大師
創建：弘仁六年（八一五）　所在：今治市小泉

今ものどかな住宅地の札所　寂本は「茆堂蕭条として、樹木おほし。離落山華を帯、野風をのづから往来、数家の田村斜陽に対す」と漢詩のように朗々と述べている。原文がかつての景観をうかがえると思い引用した。今では寺の周辺は住宅街となっているが、往古、物寂しい草ぶきのお堂に、数軒の甍を連ねる農家と風になびく稲穂。その向こうには蒼社川が流れ、静かに陽は落ちていく。そんな情景だろう。

泰山寺の山号である「金輪山」は、かつてこの山頂に寺があったことを示している。その奥の院が石鉄山龍泉寺。石鎚権現の修験の行場であり、麓の泰山寺で納経をする所作であったことだろう。

栄福寺（第五十七番札所　府頭山（ふとうざん）無量寿院（むりょうじゅいん）栄福寺（えいふくじ））

御詠歌：この世には弓矢を守る八幡なり　来世は人を救う弥陀仏

宗派：高野山真言宗　本尊：阿弥陀如来　開基：弘法大師

創建：弘仁年間（八一〇～八二四）　所在：今治市玉川町八幡甲

村上節太郎撮影「蒼社川のへんろ」

八幡さんが札所　澄禅、寂本ともに「八幡宮」と記すとおり明治の神仏分離令までの札所で、本地堂として阿弥陀を祀る別当寺が栄福寺。山岳寺院の多くは神社が中心でその横に本地堂を建て、その別当は神社を護持していく。別当は社僧であり妻帯山伏であったという。

八幡宮は、海の神である八幡神を祀る、全国で一番多い神社。大分県の宇佐八幡宮を本宮としているが、福岡県の筥崎宮、同じく久留米の高良大社、京都の石清水八幡宮、鎌倉の鶴岡八幡宮などが有名である。旧札所の現在の名称は石清水八幡神社である。

寂本は「山麓に弥陀堂を構ふ。彼地（石清水八幡宮）の極楽寺に異ならず。牛王堂、大塔のあと及び三所に華表（鳥居）のあと等歴然たり。」と京都の石清水八幡宮の極楽寺と同じだと述べる。

寺にとって奥の院が歴史の原点なら、神社は御旅所がその昔を示す由緒ある所であるが、この八幡宮の御旅所は「四十餘町東浜衣干」にあると寂本は言う。ちょうど四百メートル北東の今治市衣干町に衣干八幡神社があることからここが元の御旅所であった所かと思う。

仙遊寺（第五十八番札所　作礼山（されいざん）千光院（せんこういん）仙遊寺（せんゆうじ））

御詠歌：たちよりて作礼の堂にやすみつつ　六字を唱え経を読むべし

宗派：高野山真言宗　　本尊：千手観世音菩薩　　開基：越智守興

創建：七世紀後半　　所在：今治市玉川町別所甲

風呂は作善修行　澄禅、寂本ともに「佐礼山」と呼ぶ。武四郎は「境内小き山の上ニ有。頗る風景よろしき処也」とある。日暮れ前にたどり着くと燧灘（ひうちなだ）が真っ赤に染まっていた。

仙遊寺の寺名から仙人が遊行する行場と思っていた。五来重は修験道を四段階に区分している。「原始修験道」は仏教渡来以前の日本の山岳宗教で、海や山の神を祀るために、洞窟に籠り、滝に打たれ、潮で浄め、穢れを祓うことによってヒョウエという神の力を得る。「初期修験道」は神の言葉が憑依する方法に道教・陰陽道が加わり星や龍を祀るようになる。「中期修験道」は、役行者のころから平安時代に成立した密教を主体とする三宝院や聖護院といった教団化が進んでいった。「後期修験道」は山岳修行より理論化に重きを置かれるようになった。

仏教の色彩が強くない時代の修行者を仙人といい、中・後期になると行者・修験者と呼ばれるようになったという。

仙遊寺の縁起は、天智天皇勅願により越智守興が開山し、初め千光院といわれたが、のちに阿坊仙人が養老二年（七一八）まで参籠したことにより寺名となったと伝える。弘法大師の加持水があることから泉が湧く所の泉湧が転訛して寺名となった思ったが、阿坊仙人の伝説によるものという。はたしてどうか。

仙遊寺の所在地が「別所」とある。別所には二つの意味があり、一つは本所に対する別所で別に立てられた所領で別名ともいう。もう一つが本寺とは別に修行僧が移り住んだ所で別院とも言われる。この修行僧などが住む別所を同時に「風呂地」とも言うそうだ。『角川地名大辞典』の字一覧を見ると「別所村」に佐礼下の小字があり括弧書きで「風呂ノ谷」とある。瀬戸内沿岸に多い蒸し風呂であろう。風呂を作善行とする高野聖を想起する。武四郎は雲辺寺から下った麓で「へつそう村」と記しているが、これも別所ではないかと思われる。

武四郎の軌跡

■愛媛県松山市

北條（北条）かうの坂（鴻之坂）淺浪村（浅海原）的坂（窓坂）

■愛媛県今治市

ひろゐあげ坂（ひろいあげ坂・長坂）きく間村（菊間町浜）法佛山遍照院（遍照院）たちは坂（たちは坂）たね村（菊間町種）さかた村（菊間町佐方）新町（大西町新町）縣村（阿方）五十四番近見山寶鏡院延命寺（五十四番札所延命寺）別宮村（別宮町）五十五番大積山金剛院光明寺（五十五番札所南光坊）ひよし村（日吉町）馬こえ村（馬越町）小いづミ村（小泉）五十六番金剛山泰山寺（五十六番札所泰山寺）惣蛇川（蒼社川）よ村（四村）いがなし村（五十嵐）五十七番八幡石清水別當榮福寺（五十七番札所栄福寺）五十八番佐禮山千光院仙遊寺（五十八番札所仙遊寺）

武四郎は北条から浅浪村（浅海原）に入ると「此処ニ少しの番屋有て切手を改むる也」と記す。ここから的坂（窓坂）を越えて菊間となる。ひろゐあげ坂（ひろいあげ坂）とあるが菊間町長坂のことだと思えるが、現在は松山シーサイドカントリークラブになっている。江戸時代から明治に至るまでこの道が主要街道（今治街道）であり、へんろ道でもあった。今の遍路道は海岸沿いを通ることになる。

北条という地名

『和名抄（九三一―九三八）』記載の風早郡五郷（粟井・河野・高田・難波・那賀）が旧北条市の領域であるが、郡名は明治になって温泉郡に編入され消えることになる。

『角川地名大辞典』には北条の名は律令時代の条里制に由来するといわれるがどうだろう。条里制の名残なら和名抄にも出てきそうだがその地名はない。

条里制とは大化の改新（六四五―七〇一）による律令制のもとで行われた農村の基本的地割制度。班田農民の口分田を分与する作業を効率的に行うため、大区分として六町間隔で正方形に区切った「里（こざと）」が大区画で、縦横に区切られた里の横列を「条（じょう）」、縦列を「里（り）」と呼んだ。その条の北を意味するというのだ。それをさらに区分したものが「坪（つぼ）」であり、その基準となるのが「一ノ坪」。高知県の小字に「一ノ坪」は二十六カ所見られるほど条理制遺構の地名として多く分布する。全国に北条地名はあるし人名にもある

土居聡朋が『別冊歴史読本・地名を歩く（二〇〇四）』に「条里制の地名」として愛媛県風早平野（旧北条市域）を事例として条里景観の復原を試みているが北条の地名が条里制の遺構とは論述していない。

また、江戸末期の地誌『愛媛面影』には「浜辺の一在所なり。河野親孝ここに住みけるよし。親孝北條大夫と称す、因りて此所を北條と云ふと俚諺集にみえたり。」とあり、また伊予国立烏帽子城北條重時と北条氏が出てくるが不確かな記述である。

ホウジョウ、ホウ・ジョウで地名の理解を深めているが、この地は道中・道後の境目であり、今

治藩と松山藩の国境である。村界や国境を示す石や山をボウジ・ホウジ（傍示・傍士）ということから、のちに転じて所在のムラをホウジと呼ばれるようになったとも考える。高知県には傍示ヶ森など「ホウジ」地名が十八カ所分布し、小字も香美市など高知県東部に多い。

余談であるが方角地名は実に多い。平成の合併でも合併調整として同一の大字については旧自治体名称を接頭語として加えたり、同じ大字名称に方角を示す字句を冠したりして区分した。この東西南北を含む小字について高知県の小字十一万カ所を調べてみたら「南」は二千百十三カ所、「北」は同じくらいの二千四百六十二カ所であったが、「東」は三千七百十九カ所となり、「西」は南北の二倍近い五千百四十六カ所あった。西がなぜ多いかはこれからの宿題である。同じように国土地理院地形図（電子国土Ｗｅｂ）で検索したら「南」は一万九千七百十七、「北」は二万八百九十四、「東」は二万八千二百四十、「西」は二万七千五十二ヒットした。北は北海道を冠した地名・地物があり、東は東京を冠した地名・地物が含まれることから正確な数値ではないが、概ね同じような傾向は読み取れる。

東西が多いのは、暮らしに大切な日照の位置を東西で示したものかもしれない。今後の検証をまちたい。

四国遍路 十五日目（今治市～59～西条市）

愛媛県今治市古谷甲（仙遊寺宿坊）
～　二四・六キロメートル／八時間〇〇分
愛媛県西条市三津屋南（ターミナルホテル東予）

活動日記

朝は仙遊寺のお勤めから始まる。北九州から来た同宿の人も一緒だ。住職の説教をお聞きし、お寺のお接待の栗ご飯をいただいた。朝の納経をすませ、七時三十分出立。山の下に位置する五十九番札所国分寺に向かう。次の六十番札所横峯寺は山寺である。この打ち戻りは無理のため小松町で宿を捜したがどこもコロナ禍で休業中のようであった。しかたなく手前の旧東予市の壬生川「ターミナルホテル東予」に予約を入れた。今日は「ゆったりコース」だ。

仙遊寺の住職の説教に四国遍路道の話があった。四国遍路を世界文化遺産にする運動の仕掛人的な役割を担っているようであった。世界遺産の「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」は巡礼路として保存・活用されているようだ

孫兵ヱ作のバス停（今治市孫兵衛作）

が、四国遍路道は国道から里道、山の私道までさまざま。管理責任も明確ではなく、地元のボランティア、遍路道保存会、遍路自らも整備する状況であり、国道の歩道ですら草が生茂り利用しづらいような所もある。四国遍路は歩き遍路の代名詞ではない。昔、箱車で巡礼したものも今では福祉仕様車で巡礼することができる。札所を巡る道は一つだけではない。周辺の名所旧跡を訪ねながら、奥の院のみならず神社も参拝する。八十八ヶ寺の宗派も様々、巡礼者もいろいろである。この日本的な「曖昧さ」が四国遍路の特徴だがユネスコには理解できないだろう。

仙遊寺から田郎兵衛坂を下り麓の新谷の集落から振り返ると寺が山の八合目当たりにあることが分かる。国分寺から山間を抜け今治から西条（旧東予市）に入るところで「孫兵ヱ作」のバス停を見つけた。バス停の表示板では「孫平工作」を「コウサク」と読んでしまう。「作」は焼畑地名の特徴的な一つで孫兵ヱの焼畑地の意味であろうか。しばらく進むと「道前育成園」の看板があった。道後温泉の「道後」と対となる「道前」である。

不思議なのは六十二番札所宝寿寺の門前にある「伊予一之宮」の石柱である。伊予の一ノ宮は大三島に鎮座する「大山祇神社」であるはずなのに、「伊予一之宮」と誇らしげに刻まれている。大山祇神社の札所は五十五番札所南光坊で、ここの一之宮神社の祭神も神紋も大山祇神社とは異なることから、大山祇神社の遥拝所が別の神社と合祀して一之宮と名乗り、その別当寺が宝寿寺であったということだろう。

十五時三十分にはホテルに入る。今日は遍路「中日」の休暇だ。

明日は六十番札所横峰寺と西条市の六十一番札所香園寺、六十二番札所宝寿寺、六十三番札所

吉祥寺、六十四番札所前神寺と続く。考えてみればＧＯＴＯがあった。あとで聞けばこの宿もＧＯＴＯ御指定店とのこと。アナウンスがなかったので電話予約で済ませた。それでもお遍路割引四百四十円で二食ついて七千五百円だから歩き遍路御用達の宿でないだろうか。

国分寺（第五十九番札所 金光山最勝院（こんこうざんさいしょういん） 国分寺（こくぶんじ））

御詠歌：守護のため建ててあがむる国分寺　いよいよめぐむ薬師なりけり

宗派：真言律宗　本尊：薬師瑠璃光如来　開基：行基菩薩

創建：天平十三年（七四一）　所在：今治市国分

国家守護の大伽藍も今では「ポツンと一軒寺」 寂本は「此寺天下国分寺の例にして、今茆堂矮陋にいたる、痛絶すべし」と述べ、国分寺図には薬師と春日が並び籬の外側に新田義助の墓、反対側に最勝院が描かれている。薬師は小さな茅葺のお堂。御詠歌のとおり国家守護のために建てられた国分寺も民の支援がなければ権力者から見放されるとともに衰退していくのだろう。かつて大伽藍であった国分寺も礎石を残すのみで、その一坊であった最勝院が薬師堂を本堂として国分寺の名を維持してきたと思われる。

武四郎の軌跡

■愛媛県今治市

五十八番佐禮山千光院仙遊寺（五十八番札所仙遊寺）新屋村（新谷）松木村（松木）

五十九番金光山最勝院國分寺（五十九番札所国分寺）櫻井町（桜井・石風呂）長坂村（長沢）

■愛媛県西条市

楠村（楠）臼井山微笑庵（御来迎臼井水）中村（三芳・中村）きたしん村（新町）たん原村（丹原町丹原）新田村（不明）生木山正善坊（生木地蔵正善寺）四尾山（四尾山）大戸町（小松町大頭）

武四郎は仙遊寺、国分寺を打って、生木地蔵に向かう。真念も「紫尾山八幡　ふもとに大師御作生木の地蔵　霊異をあげて計がたし」と記している。生きた木にホトケを彫る伝統は奈良時代にさかのぼるという。日本古来の霊木・巨木信仰と仏教信仰が習合した最初期の形だという。真念も「生木の地蔵」を訪ねていることから一般的なへんろルートであったのだろう。

桜井の石風呂

他国の遍路が、四国のいろいろな農業技術や農作物の作り方を習い、学んだ技術や種子が他の地域に広まったことは、十二日目の活動日記で、四万十町の香り米について述べた。逆に遍路が新しい技術を伝えたこともあったことだろう。人の移動があれば文化の伝播があり、その周りには新たな商いや接待も始まる。

四国遍路は「薬師信仰」が強いことは札所のうち十九の霊場の本尊が薬師如来であることからうかがい知ることができる。病気平癒・無病息災のための遍路が多く、そのためか針や灸の民間療法

が作善として行われ、また遍路への接待として行われてきた。その一つが瀬戸内海周辺に普及した石風呂（サウナ）である。瀬戸内海中心に最盛期には数千カ所あったそうで、地名としてその痕跡を残しているのが、愛媛県では松山市石風呂町（太山寺の近所）と松山市北条の石風呂集落などとともにこの「桜井の石風呂」の地名・地物が残る。

武四郎も桜井町の段で「少しの町家也。農家、商家入接り。繁華の所なり。また是よりして壱り斗浜ニ石風呂と云もの有。」と記している。本人は石風呂に入っていないようだが、この桜井の石風呂は燧灘の海岸にあり岩にできた自然の横穴を利用した約五十平方メートルの洞窟の中でシダを焼き、その上に海水で浸したムシロを敷きつめ、穴にこもった熱と蒸気で体を温める温浴施設である。平成二十年頃まで夏場シーズンに営業していたという。

孫兵衛作という開発地名

長沢村の一部であった未開の地・医王山麓の開拓に着手したのが長野孫兵衛、寛永十五年（一六三八）のことである。地名は開拓者の名を冠したもので以来新田村は孫兵衛作村と呼ばれるようになった。この「○○作」地名は五十九番札所国分寺付近に「出作」、西条市丹原町にも「安用出作」「徳能出作」がある。「出作（でさく・しゅっさく・でづくり）」は古代から中世にかけて、特定の所領の住人が、他の所領などの土地を耕作することをいうもので、近世に入っても居住以外の他の村で耕作することを出作といい、その土地を出作地と呼んだ。国土地理院地形図で出作を検索したら十三件ヒットしその多くは愛媛県と香川県に分布する。

「出作」も開発地名の一つだが、時代とともに特徴があるのでこの村がいつの時代に開発されたかを地名で推し量ることができる。集落名に開拓の時代を刻む地名として「出作」のほか、「一ノ坪」「新在家」「今在家」「新田」「新開・新改」「切明」「開発」などもある。

これなどは、村落が段々と拡張して耕地が不足となり、未利用地の開拓につながった勢いのある地名である。そんな開発地名ではあるが今では勢いはない。へんろ道沿いにある奥山の開拓地は段々の石垣に棄村の覚悟を示した植林が時とともに成長し光を遮り「忘所」となっている。戦後になって、土地の呪縛から解放され職業の選択も自由となった。この土地を捨てるのではなく希望のある土地に夢馳せたということだろう。

「○○作（つくり）」地名は焼畑地名の一つである。耕作者名の語尾に作を付して焼畑地の占有を表したものだろう。仁淀川町、梼原町など土佐の山間に多くある小字名だ。この焼畑地名と思われる小字を高知県字一覧で拾うと、「○○荒」は二百五十一カ所、「○○作」は五十七カ所で、「コバ・コナ・コノ」が四十八カ所、「○○切」は十二カ所となっている。「荒」は嶺北地方など高知県中部の山間に多く、「作」は県下全域に分布し、「コバ・コナ・コノ」は大豊町に多い特徴がある。

道前と道後

高縄半島を境として新浜から西条当たりの平野を「道前平野」だと山口恵一郎の『地名を考える』で読んだことがある。道前の「道」は南海道の道。当時、中央の都から伊予の国府のあった今治付近が「道前」で、国府を過ぎてその奥地に当たる所が「道後」となる。そういえば、伊予国の

国分寺は五十九番札所国分寺（今治市）にあり、伊予国の国衙は『和名抄』に「伊予国　国府在越智郡」と書かれている。越智郡のなかで特定された候補地がいくつかあるが、伊予富田駅近くの「上徳」説が有力地とされている。

今治平野に至る周桑平野、新居浜平野、宇摩平野の地域が「道前」の区域である。ただ、国土地理院地形図には西条市丹原付近に新居浜平野、道前平野を併記している。これは国土地理院が昭和二十九年（一九五四）新居浜平野に統一して地図上から「道前平野」「周桑平野」を消したが、その後地元の反発があり「道前平野」を加えたことによるものだ。

ちなみに、愛媛県を三分割した広域区分では道前は「東予」に当たる。道後が「中予」で、大洲（大洲藩）から南が「南予」となる。不思議なのは、越の国の越前、越中、越後である。「越」は古代からの地名であるが、七世紀末になって越前（コシノミチノクチ）、加賀、能登、越中（コシノミチノナカ）、越後（コシノミチノシリ）の五つに分割されたという。越後はその中でも、上越地方、中越地方、下越地方と区分されている。かつては、上方に近い方から上越後、中越後、下越後と呼ばれていたのが略した名称で地域名となったようだ。平成の合併で周辺十三町村を編入し、全国で初めて「地域自治区制度」が導入された所が上越市である。東京から上越新幹線で行くのが一番いいかと思いきや、ここは北陸新幹線で上越新幹線ではない。上越市を通らない上越新幹線とは不思議な話だが、からくりは起点の上州上野と越後の頭文字を取った合成名称だからという。それなら「新潟新幹線」と言えばいいものをと岡目は考えるが、こうなると群馬県が許さないだろう。行政関係者などが命名者となる場合は、「公平と忖度」が基準で、前例に倣いながら結果として合

成地名となってしまう。

壬生（にゅう）と入は水銀鉱床

「壬生川」の地名について『角川地名大辞典・愛媛県』は「徳能川・古子川などの入川に由来し、往古は毎年水害に悩まされ、火で水を乾かす意味から丹生川と改められ、その後文和年間に壬生川と改称した」と書かれている。現在の河川名称は大規模改修後に「新川（しんかわ）」となり、壬生川はなくなったが地名として残っている。この「丹生」は水銀が含まれた水銀鉱床（辰砂・朱砂・丹砂）であり、その産地は全国に分布し地名を刻んでいる。松田壽男は全国三百六十五地点の鉱床を調査して『古代の朱』を書き上げている。その「丹生（ニフ）」系の転訛に「壬生」「入」がある。壬生は京都の「壬生寺（みぶでら）」「壬生義士伝（みぶぎしでん）」といったようにミブと読ませているが壬はＭ音を持たずニフの音と訓を併用したものであるという。入川が丹生川になり壬生川、新川と名称が変遷することになる。今の新川の読みを「しんかわ」としたのはいただけない。新はニイであり英語でニューでもある。地名の音韻は多少の転訛はあっても連綿とつないでもらいたいものだ。高知県では安芸市入河内（にゅうがうち）も丹生に関連する地名という。四十六番札所青龍寺へ山越えする宇佐町井尻には丹生神社がある。

人名の壬生（みぶ）は長野県下伊那地方に多く百軒近くあり、次いで高知県越知町の十一軒となっている。

愛媛県西条市三津屋南（ターミナルホテル東予）
～　三九・〇キロメートル／一〇時間五三分
愛媛県西条市大町（西条ステーションホテル）

活動日記

旧東予市壬生川の「ターミナルホテル東予」を七時十五分に出発。六十二番札所宝寿寺、六十一番札所香園寺、六十番札所横峰寺、六十三番札所吉祥寺、六十四番札所前神寺の順で参拝し、西条の「ステーションホテル西条」に宿泊する予定である。

遍路体験本で読んだ小松町の宝寿寺、香園寺の後に横峰寺を「逆打ち」するルート。そのために「ビジネス旅館小松」に泊まって荷物を置いて「打ち戻り」する方法である。ただ、「ビジネス旅館小松」も「同行民宿鈴」もコロナ休業。ＪＲ小松駅近くにコインロッカーはなく、困ったときのコンビニ頼み。目についたローソン西条氷見小松店に飛び込み、ホットコーヒーを注文しザックの一時預かりを依頼したがマ

へんろ道に似合う「過行橋」（西条市小松町）

ニュアルになく拒否された。イートインコーヒーを飲みながらあれこれ考えた。「それでは置き去り」と勝手に宣告し、納経帳など入れた頭陀袋の軽装で、そそくさと飛び出した。

慌てたせいか香園寺から白滝奥の院のルートを選んでしまった。登り三時間で、途中に松山の長珍屋で同宿だった「へんろの南くん」に三度目の出会いとなった。昨日は「湯の里小町しこくや」だったという。最高のチョイスで、この宿なら横峰寺の出発地として最適だ。

横峰寺の下りは山門直下の「湯浪」「大頭」の順打ちルートで、コンビニに戻ったのが十五時を過ぎていた。ローソンに「置き去り」の断りを入れ遅くなった昼食をイートイン。十七時までに前神寺に行けるよう足を早めた。

宿に着いたのは十八時を回っていた。ＧＯＴＯトラベルのため朝食付きで四千百四十七円。その上、千円のクーポン付きである。これからは、「あべのす」（幡多方言で「安倍のやつ」の意味）が嫌いでも利用しない手はない。

横峯寺からの下り、「湯浪（ゆーなみ）」の手前の電柱の表示板を見ると「ヘンロ」とあった。地名を探すのに有効な方法は「電柱表示板」「橋名版・親柱」「バス停表示板」が三点セット。今日、気になった地名は「壬生川（にうがわ）」「過行橋」「馬返谷」「山之神橋」「氷見」「野々市」「安知生（あんぢゅう）」などである。

「過行橋（すきゆき）」の意味は不明であるが、小松町新屋敷の小字である。単純に読めば「通り過ぎていく」である。方丈記の序文のような旅情ある古い橋に想いをはせた。

西条の町に入るとあちらこちらで太鼓の音がする。ここ、「西条まつり」のだんじりやみこしは有名である。今年はコロナで中止になったといっていたが、子ども太鼓は運行されるのだろうか。

それにしてもだんじりの倉庫は公民館と兼ねていて、どこも立派なものだった。

横峰寺（第六十番札所 石鉄山（いしづちさん） 福智院（ふくちいん） 横峰寺（よこみねじ））

御詠歌：たて横に峰や山辺に寺たてて　あまねく人を救ふものかな

宗派：真言宗御室派　　本尊：大日如来（伝弘法大師作）　　開基：役行者小角

創建：白雉二年（六五一）　　所在：西条市小松町石鎚甲

神仏分離で混乱した札所　武四郎は「周布郡ニし而石槌山の前札也。本社は蔵王権現」と記し旧暦五月廿八日に石鎚山に詣でている。寂本は、横峰寺の縁起は石鎚の弥山や前神寺と同じとし「此縁起、石鉄権現の事、役行者の事、幷に石仙の事を書たり。其文神奇孟波なり」と記している。横峰寺を詣でるなら石鎚山に登らなければ始まらないことになる。

この寂本の「其文（横峰寺の縁起）神奇孟波（でたらめ）なり」の記述について五来重は、寂本の言う石仙は上仙のことではないか。『日本霊異記』や『文徳天皇実録』にも上仙のことが書いてあり縁起のほうがむしろ正しいという。

また、寂本の横峰図には「福智院・遍路屋・大日堂・蔵王堂」があり山上に「石土拝所」とある。石土は「石・ツ・チ」で「石・の・霊」。やはり、奥の院である石鎚山に登らなければ横峰寺は語れないのだろう。石鎚山は旧暦六月一日から三日までしか登れないのでここで遥拝する。

武田和昭は『四国へんろの歴史』で横峰寺の江戸時代末期から明治にかけての納経帳を調査し神仏分離令と廃仏毀釈の影響による札所の変遷を述べている。

嘉永五年（一八五二）別当横峰密寺、明治二年（一八六九）石鉄山蔵王権現別当横峯寺、明治三年（一八七〇）本尊阿弥陀如来仏生山清楽寺、明治五年（一八七二）豫州横峰山、明治九年（一九七六）本尊阿弥陀如来仏生山清楽寺、明治十二年（一八七九）本尊大日如来イヨ元横峰寺霊場大峯密寺、明治十五年（一八八二）本尊大日如来元横峰寺霊跡大峰密寺、明治十七年（一八八四）清楽寺、明治十八年（一八八五）清楽寺、明治二十五年（一八九二）本尊無量光如来仏生山清楽寺・四国六十番マエ札、明治二十七年（一八九四）横峰山、明治三十二年（一八九九）本尊無量光如来いよ清楽寺・四国六十番前札、明治三十四年（一九〇一）本尊無量光如来与州清楽寺・四国六十番前札、明治三十五年（一九〇二）横峰山、明治四十二年（一九〇九）本尊大日如来いよ横峰寺

※横峰寺と清楽寺の関係も詳しく述べられ神仏分離の混乱が伺える。

明治三年には新屋敷の清楽寺が六十番札所を引き受け、横峰寺の本尊は千足村の草庵へ安置し、檀家は香園寺へ移すことになった。その後、葬儀等が香園寺では遠隔地で不便のため村民は横峰寺再興を出願。明治十三年から大峰寺として本尊・檀家も旧に復した。ところが「元横峰寺六十番札所大峰寺」の案内板を出したことから遍路は混乱し札所争いとなった。結果、調停により「六十番札所」は横峰寺、清楽寺は「六十番前札所」となった。明治四十二年横峰社が廃止となり建物などが大峰寺に譲渡され、完全に元の横峰寺に復することとなった。

香園寺（第六十一番札所　栴檀山（せんだんさん）教王院（きょうおういん）香園寺（こうおんじ））

御詠歌：後の世を思えば詣れ香園寺　とめて止まらぬ白滝の水

宗派：真言宗御室派　　本尊：大日如来　　開基：聖徳太子

創建：六世紀後半　　所在：西条市小松町南川甲

大日が教王、それから香園へ　香園寺、宝寿寺、吉祥寺、前神寺の四寺はわずか五キロメートルの距離で市街地に連なっている。順打ちでは最初の札所となるが、香園寺の奥の院白滝不動を詣でそこから横峰寺を逆打ちする人も多いようだ。その場合は香園寺周辺に荷物を置いて頭侘袋と水だけで山のへんろ道を行き来することができる。

壬生川から国道一九五号線により小松町に入り中山川を渡ると「大日橋」がある。縁起では聖徳太子がこの地に本尊の大日如来を安置し、教王院を創建したとある。そこから大日の地名となり、大日如来を意味する教王を寺名としたもの。その後現在地に移り、教王の音韻変化により香園寺となったようだ。

御詠歌に札所と奥の院と両方が詠まれている。この白滝で滝垢離をしたことだろう。

宝寿寺（第六十二番札所 天養山（てんようざん） 観音院（かんおんいん） 宝寿寺（ほうじゅじ））

御詠歌：さみだれのあとに出たる玉の井は　白坪なる一宮かわ

宗派：真言宗単立　　本尊：十一面観世音菩薩　　開基：聖武天皇

創建：天平年間（七二九～四九）　　所在：西条市小松町新屋敷甲

二つ目の一国一宮　宝寿寺の門前に「一国一宮別当宝寿寺」と誇らしく標石が設えてある。

古くは河野水軍の菩提寺、大山祇神社の別当寺として栄えていたのが宝寿寺。縁起によると伊予の一の宮神社が建立されその法楽所（お経をあげる所）としての別当寺（金剛宝寺）を創建したのが始まりという。当時は中山川下流の白坪（寺の一キロメートル北の中山川北岸）にありそこには玉の井という霊水があったと記されている。『伊予国地理図誌（東予）』の周布郡全図には現在の所在地である新屋敷の北、中山川の北岸に「玉ノ江」「今在家」がある。玉の井が玉ノ江に転訛したようであるがこの愛媛県最初の地誌にも何ら記載がない。

寂本はつれなく「惣て聞所なり。推て一の宮と号す。いづれの神といふ事しらず。」と記す。

吉祥寺（第六十三番札所 密教山（みっきょうざん） 胎蔵院（たいぞういん） 吉祥寺（きちじょうじ））

御詠歌：身の中の悪しきひほうを打ちすてて　みな吉祥をのぞみいのれよ

宗派：真言宗東寺派　　本尊：毘沙聞天　　開基：弘法大師

創建：弘仁年間（八一〇～八二四）　　所在：西条市氷見乙

吉祥天を祀らずに毘沙門天を祀る吉祥寺　吉祥寺といえば若者に人気の町ジョージ。半世紀前、大学時代には首都高を「中央フリーウェイ」に見立て「片手で肩を抱いて愛してるって言ってもきこえない風が強くて　この道はまるで滑走路夜空に続く」と歌いながら神田市場の野菜を乗せて吉祥寺駅前の八百屋に向けて突っ走ったものだった。都会の眩しさと田舎者のギャップも気にならない自由があった。そんな若者の街・吉祥寺だが、吉祥寺という寺はないということを遍路の途中で知りあったＫＥＩＫＯさんに教えてもらった。

ここ伊予の吉祥寺は、吉祥天を祀る寺ではなく本尊は毘沙門天である。仏教の守護神である「天部」の一つ。神様仏様には階級はないものの役割の区別はある。

「仏」をカタチにする造像の区分に「如来部」「菩薩部」「明王部」「天部」がある。如来は悟りを開いた者、菩薩は悟りを目指して修行中の者、明王は民衆を怖い形相で教化する者、天部は仏・仏法の守護神といえるだろう。天部には毘沙門天（多聞天・北の守護神）・持国天（東の守護神）・増長天（南の守護神）・広目天（西の守護神）の四天王や弁財天、鬼子母神、梵天、帝釈天、歓喜天などがこれに当たる。吉祥天の母が鬼子母神、夫が毘沙門天である。

前神寺（第六十四番札所 石鉄山（いしづちさん） 金色院（こんじきいん） 前神寺（まえがみじ））

御詠歌：前は神後は仏極楽の　よろずの罪をくだくいしづち

宗派：真言宗石鉄派　　本尊：阿弥陀如来（伝役行者作）　　開基：役行者小角

創建：七世紀後半　　所在：西条市洲之内甲

石鎚信仰の拠点　前神寺も奥の院は石鎚山。明治の神仏分離により横峰寺と同じように、前神寺、医王院、前上寺を経て旧名に復するのは納経帳から見て明治二十八年（一八九五）頃と武田和昭は述べる。

石鎚神社は戦後になって神社本庁の包括宗教団体となったが、別に、石鎚信仰の神仏習合の歴史を踏まえ石鎚本教を石鎚神社の傘下宗派として創立している。

山の神も上宮、中宮、下宮と段々と麓に下りてくるように、石鎚山頂に石土大神の本地仏・蔵王

権現が祀られ、石鎚登山ロープウェイ成就駅から徒歩二十分くらいの所に石鎚神社中宮成就社がある。縁起では役行者が石鎚山を開山し「吾が願い成就せり」と山頂を見返し改めて遥拝したことから「成就」の地名となったとあるが、五来重は「常住」から名付けられたという。『四国遍路の寺』には「石鎚山の山頂は冬は住めないのでこの中宮に留守居の坊さんがいて読経するなどして蔵王権現を祀っていた。こういう坊さんを常住僧と呼ぶ。その場所がすなわち常住」と述べている。ここが中宮であり奥前神寺であった。

澄禅は「一里ほど行って前神寺という札所有。石鎚山の里坊である。ここにも札を納める。」と述べ、寂本は「里前神寺　この寺は石土山にいつも参詣できないから、この所で拝して去るためにある」と記している。武四郎も「西泉村　六拾四番石鎚山前神寺　従六十三番壱り。此処西條領分也。石槌山前札所と云也」と書き、この寺が下宮であり里前神寺であることが分かる。

武四郎の軌跡

■愛媛県西条市

大戸町（小松町大頭）ゆなミ村（小松町大郷・湯浪集落）ふかふ■村（不明）来迎の清水（不明）六十番佛光山福智院横峯寺（六十番札所横峰寺）遥拝所（星ヶ森）千足山村（小松町石鎚）御手洗川（不明）黒川村（小松町石鎚・黒川谷）女かへし（石鎚山三十六王子第十七女人返王子社）追分（石鎚山三十六王子第十八杖立王子社か）奥前神（奥前神寺・前神寺奥の院）小松町（小松町新屋敷）六十一番栴檀山教王院香園寺（六十一番札所

香園寺）六拾二番一ノ宮天養観音院寶壽寺（六十二番札所宝寿寺）氷見村（氷見）六拾三番密教山胎蔵院吉祥寺（六十三番札所吉祥寺）柴井（柴井の泉）楢の木村（楢木）西泉村（西泉）六拾四番石鎚山前神寺（六十四番札所前神寺）洲の内村（洲之内）あんちう村（安知生）川（加茂川）大町（大町）西條（西条城下・明屋敷）

武四郎は大戸町（小松町大頭）の段で「町内ニ庵有。此処而横峯寺之前札所を納る也。」と記す。前札所とは清楽寺（小松町新宮）のことであろうか。奥深い横峰寺へのへんろ道すがら「農家并ニ山稼ぎにし而到而貧村也。」と書く。千足山村では「人家十七八軒。山のここかしこに家居し皆畑作り、山稼のミ也」と山の暮らしを綴っている。

真念は「ふるほう村」、寛政の四国遍礼名所図会では「深方村」とあるが、武四郎の「ふかふ○村」とはどこだろう。千足山村は横峰寺、奥前神寺、成就社、石鎚山の所在地である。この村の小字に黒川、老ノ川、大平、土居、戸石、湯浪、虎杖などの小字とともに「古坊」がある。横峰寺の所在地であることから枝村（集落）であったのだろう。

石鎚山

武四郎は『自伝』に「時に五月二十五日、実に是予が望足りと言つと思はる。」と書くほどに石鎚登山を望んでいたし、それゆえに限定された石鎚入山日については第一回目の四国入りの段階で十分に調査したものと思われる。

この『自伝』の十九歳の段に記されている日付のある記録は、この五月二十五日のほか、六月

十七日（剣山登山）があり登山好きの武四郎をうかがうことができる。

武四郎は横峰寺から石鎚山へ脚をのばし「また是より奥院石槌山ニ上るは禅定と號て、古来より女人を禁じ、曾而六月朔日より三日まで山の口を開き、（中略）其参詣之人数は五十日前より別火を喰、曾七日前より塩こうりをとること六十度にして、大戸町ニ来りこりをとり、其夜此寺ニ而止宿至し朝夕七度のこうりをとり、翌朝八ツより支度して上ること也。」と石鎚登山の作法を述べ、各所で「こうり（垢離）」を行っている。

西日本一の標高を持ち日本百名山でもある石鎚山（一九八二メートル）。本来の顔は修験道信仰の山である。七月のシーズンともなれば「六根清浄」「おのぼりさん」「おくだりさん」と行き交う人に掛け合う声がこだまする。西条側からロープウェイを利用する「成就社ルート」、石鎚スカイラインやＵＦＯラインを走り土小屋を登り口とする「土小屋ルート」、面河から直登する「面河渓谷ルート」がある。稜線散歩を楽しむなら堂ヶ森登山口から二ノ森経由でたどる「縦走ルート」がおすすめだ。

石鎚山は『伊予面影』に「伊予の高嶺」と段を起こし書かれているが、他にも石土山、石鉄山、石槌山の別名が時代ごとにあり、一時は愛媛県が石鉄県となるほどの名前にチカラがある。

石鎚山への修験の道は「石鎚山旧跡三十六王子社」として年に一度敢行されている。王子社を一番から書くと、①福（ふく）　②桧（ひのき）　③大保木（おおほき）　④鞘掛（さやかけ）　⑤細野（ほその）　⑥子安場（こやすば）　⑦今宮（いまみや）　⑧黒川（くろかわ）　⑨四手坂（しでざか）　⑩二ノ（にの）　⑪小豆禅定（あずきぜんじょう）　⑫今（いま）　⑬雨乞（あまこい）　⑭花取（はなとり）　⑮矢倉（やぐら）　⑯山伏（やまぶし）　⑰女人返（じょにんかえし）　⑱杖立（つえたて）　⑲鳥居坂（とりいさか）　⑳稚子宮鈴之巫女（ちごのみやすずのみこ）　㉑大元（おおもと）　㉒恵比須滝（えびすたき）　㉓刀立（かたなたて）　㉔御鍋岩屋（おなべいわや）　㉕御塔石（おとういし）　㉖窟の薬師（いわやくし）　㉗祈滝（いのりたき）　㉘

八丁坂（はっちょうさか）　㉙前社森（ぜんじゃがもり）　㉚大剣（おおつるぎ）　㉛小剣（こつるぎ）　㉜古森（こもり）　㉝早鷹（はやたか）　㉞夜明峠（よあかしとうげ）　㉟裏行場（うらぎょうば）　㊱天狗嶽（てんぐだけ）　となる。

「追分」という往来地名

本来は牛馬を追い、分ける場所を意味しており、民謡「江差追分」が有名である。この民謡の元は碓氷峠の馬子衆の労働歌「馬子歌」。それが中仙道追分宿の座敷歌「追分節」となり全国に伝播したものという。

今でも新宿追分（甲州街道と青梅街道）など重要な街道が二つに分かれる所をさす地名として各地に残る。分岐点である点では「別」「落出」「落合」「出合」「丁字路」「三叉路」もあるがニュアンスが少し違ってくる。四国遍路では徳島県の九番札所法輪寺付近に追分の通称地名がある。高知県小字一覧で検索すると安田町に「追分ノ辻」が見られるのみである。

この往来を示す地名が小字には多く刻まれている。

山の往来は鞍部を通ることになることから「越」地名が多く、高知県の小字一覧を見ると、鳥越（百二十五）・馬越（三十一）・遅越（二十）・打越（十五）・吹越（十二）・蟹越（六）・鹿越（四）・猿越（四）・熊越（一）などその様子がうかがえる。また、橋が整備されていない時代は歩いて川を渡渉することが主流であり「渡」の地名として渡瀬（七十七）・渡り上り（五十四）・飛渡（二十九）がある。平坦地から山への登り口となる所は「登尾（十五）」や「折付（七十三）」がある。往来は難渋であり休む場所として刻まれる「休場（二百六十四）」がことさら多い。見通しがよく風も通り一本松があったりして涼むのにもよい。傍らには腰をかけたり笈を置くのに都合の良

い路傍の石もある。近くには必ず水飲み場も設えてある。休場は旅人のオアシスである。

また、山越えの坂の起点を示す地名として「坂本・坂元」地名があるがこれは小字の微細地名というより大字として集落名を示す場合が多い。国土地理院地形図で検索すると坂本が四百二十件ヒットするが、北海道には一件もない。

好みの往来地名は「枝折（二十九）」。土佐の山中には「柴折さま（しばおりさま）」という路傍の神を祀る習いがある。柴を折り手向けて道中の安全祈願、猟の感謝を山ノ神にささげるもので、畝や峠に祀られている。四万十町八千数には「シオリ山」がある。付近には猪ノ数、猪ノ谷、耳切山など狩猟に関連する地名（小字）があることからここの「シオリ山」は、柴（シキミ若しくは榊）を手向けた「柴折山（しばおりが転訛し、しおりやま）」と解したい。同じく四万十町米奥には山間往来の道標となる「枝折山」がある。手向けるためでなく、単なる枝を折ることは「道標（みちしるべ）」となる。読みかけの途中を示す「栞」と同じ意味だろう。旅人・西行の歌に「枝折（しおり）せでなほ山深く分け入らむ　憂きこと聞かぬ所ありやと」がある。道標をしないまま奥山にきたが桃源郷はあるのかしらといった意味だろうか。今でも初めての山道に入るときは帰りの道標として「枝折」をする習慣がある。特に分岐点は同じ道を帰るときに間違うので無意識にやってしまう。

このように、山のヘンロ道を歩くときに迷うのが分岐点である。車道の交通案内は道路管理者が表示板を設置しているが、へんろ道は、時に赤線と呼ばれる長狭物であったり、山林所有者の山道であったり、道路改良により所有者に了解のもとで暫定的に設えた道であったりする。いわば惣管理者といったへんろ道で、分かれの道標は「真念道しるべ（現存三十七基）」「武田徳右衛門標石

（現存百二十六基）」「中務茂兵衛標石（現存二百三十七基）」のように作善行として設えられてきた。今では「へんろみち保存協力会の札・シール」がきめ細かい道案内をしている。地元のボランティアの表示も元気をいただく道標である。

愚草の川柳集⑩選

「弔旗」

2016 / 秋

ファシスト　不断着姿で佇まい

ヒロヒトの十字架曳いて暮れ泥む

天皇を盾に巣籠る魑魅魍魎

弔旗垂れ　屍おののく宿痾哉

※私の父は天皇・三波春夫・美空ひばりが三嫌人だった。国民的歌手に全体主義の臭気を感じ拒否したのだろう、特攻隊の生き残りだった▽「普段着姿」でひたひたと迫りくる恐怖は「不断着」で抵抗しなくてはならない。憲法 12 条　この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によつて、これを保持しなければならない。「いいね」に騙された、優しくおとなしく従順な日本人。「いかんろー」ボタンを押そう▽憲法を弄ぶおぼっちゃまは「宿痾」なんだろうなー。

HP「四万十町地名辞典」引用

四国遍路 十七日目（西条市～四国中央市三島）

愛媛県西条市大町（西条ステーションホテル）
～　三八・八キロメートル／一〇時間三三分
愛媛県四国中央市三島朝日（ビジネスホテルマイルド）

活動日記

今日はそぼふる雨の中、ひたすら歩く行程である。伊予西条駅前の「西条ステーションホテル」から伊予三島の「ビジネスホテルマイルド」の概ね四十キロメートル。

ルートの多くは旧街道が遍路道となっている。静かで昔の町の佇まいがよく分かるが、ウォシュレットとコーヒーを求めるならコンビニだが、国道沿いしかないので現代版の茶屋を利用するには新旧の道を往復しなければならない。

コンビニで一日の行程をカラーコピーする習慣になった。イエローブックは重くかさばるがコピー一枚ならポケットに入るから便利だ。雨の日は防水のクリアファイルに入れているが、取り出しにくく、「遍路シール」頼みの道探しは見落として迷うことが頻繁となる。土居町上野では「ここはど

六地蔵・接待堂跡（西条市飯岡）

こ」状態になってしまった。

西条から、新居浜、土居町、豊岡町、寒川町と来たとき、「従是西　西條領」とあった。説明板を見ると、西條領、天領に加え今治領も入り乱れている。つまるところ寒川は西條領だということだ。平成の合併で「四国中央市」と気張った自治体名称となった。

今日の宿「ビジネスホテルマイルド」の料金は二食＋ヘンロ用おにぎり付で三千四百六十八円。それに千円クーポンも。このホテルは常連の大王製紙の作業員が多く利用していたみたいだ。ほんとにＧＯＴＯトラベルは、かまんろうか。

武四郎の軌跡

■愛媛県西条市

西條（西条城下・明屋敷）福竹村（福武）上しま山村（飯岡）

■愛媛県新居浜市

はんぎう村（萩生）なか村（中村）すミの村（角野）こくりやう村（国領）中野村（船木・長野集落）

■愛媛県四国中央市

關村（土居町上野・関集落）上野村（土居町上野）どい村（土居町土居）中村（土居町中村）小林村（土居町小林）つね村（土居町津根）野田村（土居町野田）おさだ村（豊岡町長田）さむ川村（寒川町）ぐぜう村（具定町）中の庄村（中之庄町）中曽根村（中曽根町）

武四郎は西条から浜通りとして新居浜、阿島村（阿島大師）を説明するも大町から福武、上嶋村（福武）へと法皇山脈の麓を進む。大師堂や六地蔵の接待堂や金毘羅道標もあり、さぞかし遍路の接待も盛んであったことだろう。沿道には自治会ごとのだんじりや太鼓の蔵が立派に設えている。澄禅は「大町よりカモ川を渡って大道」と記しているが、柴谷宗叔は『江戸初期の四国遍路』で、金毘羅街道は現在の国道十一号線に並行する旧街道だと比定する。武四郎もこの旧街道を六十五番札所三角寺に向けてひたすら脚を進めたことだろう。

「中村」という往時の中心を示す村

武四郎の歩いたこの近辺でも、なか村、中野村、中村、中の庄村と「中」を当てた村が続く。「中」はある地域の地理的中央をさし、三分割した上中下や南北、東西の組合わせで使われる方角地名でもある。那賀、那珂は郡域の広域地名で常陸国に仲国造（茨城県那珂郡。今の、ひたちなか市）、埼玉県、福岡県、香川県に「那珂」があり、「那賀郡」は静岡県、和歌山県、徳島県、島根県にある。時代とともに中（那珂・那賀）の位置も変わるものの、命名の時期から歴史の意味が読み解ける地名である。

中村地名は全国に分布する。高知県四万十市の旧市名は「中村市」で、郷村制の中村が町制施行のときに中町では語呂合わせが悪いのか中村町となり、中村市となったもの。

同じような地名に「土居」がある。旧宇摩郡土居町とあるがこれは地理的中央というより政治的な中央の土居（土豪の屋敷）を意味したものである。県庁所在地などの住居表示に「丸の内」「堀

ノ内」がよくあるがこれも土居と同じで曲輪の内側を意味する城の設えである。

愚草の川柳集⑪選

「たぶれしや」

2017 / 夏

たぶれしは瑞穂の国のかかし哉

火刑にしたくなるよな悪女かな

腰紐とダテメガネが閲兵し

おもらしの教育勅語朗唱し

※稲田朋美への川柳。「教育勅語のどこがいけないのか」と文科省に聞く稲田防衛相は教育勅語を読んだことがあるのかと疑う。「常ニ国憲ヲ重ジ、国法ニ遵ヒ」はあんたが一番遵守しなければならないトコロですよ。「たぶれ」の言葉はべつにして、狂気としかおもえない自己弁護士。

HP「四万十町地名辞典」引用

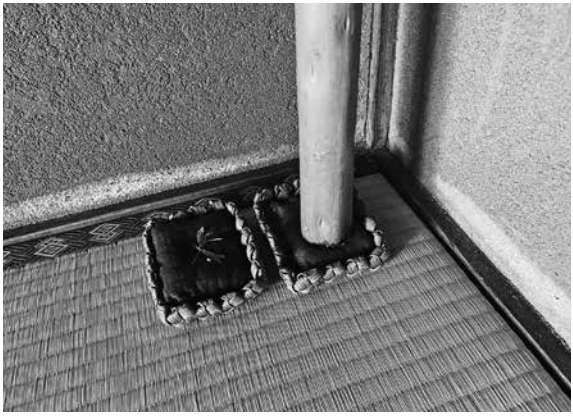
四国遍路 十八日目（四国中央市三島～65～三好市池田町）

愛媛県四国中央市三島朝日（ビジネスホテルマイルド）
～　二〇・六キロメートル／六時間三六分
徳島県三好市池田町佐野牛頭（民宿岡田）

活動日記

四国中央市の「ビジネスホテルマイルド」の朝は静かだった。普段は大王製紙などの工場の関係者で六時からごった返すというが、今日は日曜日。一人朝食を取って七時には出発した。池田町佐野の「民宿岡田」に予約したところ、同宿だった「へんろの南くん」は六十五番札所三角寺から山寺の六十六番札所雲辺寺と麓の六十七番札所大興寺へと向かうという。南くんは横峰寺の上りでも偶然出くわした遍路仲間で今回は四度目の遭遇となった。これも縁なので遍路情報を交換するため携帯電話を登録した。雲辺寺の麓の「民宿青空屋」で泊まりたかったが、ここのところ長距離の歩行で無理がたたっていることからこの宿となった。

三角寺から椿堂に足を進めると「平山」集落で土佐街道の



民宿岡田の錫杖座布団（三好市池田町）

北山越えに出合う。法皇山脈の中腹に広がる往来の拠点。雲辺寺への遍路、箸蔵寺、金比羅さんへの参詣者、塩の行商人、殿さんの参勤交代など往時の賑わいがしのばれる。もっと進むと伊予と阿波の国境となる「境目峠」。切り通しの峠を抜け左への山道が雲辺寺へのへんろ道となるが、直進して池田町佐野の宿までいったん降りることになる。

「民宿岡田」には十三時三十分に到着。御主人は「お先にお風呂をどうぞ」といい、大きな錫杖を洗って、部屋に納めていただいた。錫杖には座布団が敷かれていた。

「これが、ヘンロ宿の真骨頂だ」

三角寺（第六十五番札所　由霊山（ゆれいざん）慈尊院（じそんいん）三角寺（さんかくじ））

御詠歌：おそろしや三つの角にもいるならば　心をまろく慈悲を念ぜよ

宗派：高野山真言宗　　本尊：十一面観世音菩薩（伝弘法大師作）　開基：行基菩薩

創建：天平年間（七二九～七四九）　　所在：四国中央市金田町三角寺甲

十一面観音と弘法大師と弥勒仏の三角関係　伊予最後の霊場である。

縁起には、「弘仁六年（八一五）に弘法大師が訪れ、本尊の十一面観音像を彫造して安置された。さらに、大師は不動明王像も彫られ、三角の護摩壇を築いて二十一日間、国家の安泰と万民の福祉を祈念して「降伏護摩の秘法」を修法されたという。この護摩壇の跡が庫裡と薬師堂の間にある「三角の池」の中の島として現存し、寺院名の由来ともなっている。」とある。

寂本は「今弥勒堂を存す。慈尊院の名思いひあわす。もと阿弥陀堂、文殊堂、護摩堂、雨沢龍王

等、種々の宮堂相並ぶときこえたり。社の前に池有。大師の時、此池より龍王出て大師御覧ぜしとなん。（中略）当寺の奥の院は金光山仙龍寺と号す。五十八町道程（中略）南に仙人堂有、釈迦ヶ岳に大師修法の岩窟有」と書いている。寂本は絵図では「竜王山」としているがここでは釈迦ヶ岳となっている。

三角寺も往古は「三角関係」だったようで、十一面観音像を本尊とする三角寺、弘法大師を本尊とする奥の院・仙龍寺、弥勒仏を本尊とする旧奥の院の三つ巴だ。

このことについて五来重は「旧奥の院がもとの遍路修行の行場で、修験者は仙人堂へ下って滝行や窟籠りをしていました。時代が下ると、平石山の峰を越えてくる遍路の便を図って、山麓の弥勒菩薩をまつる末寺の慈尊院へ本尊十一面観音を下ろして、三角寺とした。行場も仙人堂を仙龍寺として独立して、谷川の上に舞台造りの十八間の回廊を建てて宿坊化。いま仙龍寺の大師は作大師として米作の神となっているのは、水源信仰があったから。」と推考する。

武四郎の軌跡

■愛媛県四国中央市

柏村（下柏町）瀧の宮村（新居浜市滝の宮町か）長谷寺（新長谷寺）横尾村（上柏町・横尾集落）六拾五番由霊山慈尊院三角寺（六十五番札所三角寺）金光山遍照院仙龍寺（奥の院仙龍寺）金川村（金田町金川）内野村（不明）平山村（平山）はんた村（金田町半田）りやうけ村（川滝町領家）國境（境目峠）邦地山常福寺（常福寺・椿堂）十六夜桜

（不明）たいを村（田尾）ねぎのを村（川滝町下山・葱尾集落）

■徳島県三好市

さの村（池田町佐野）

中の庄村（四国中央市中之庄頭王）に通称「へんろわかれ」の分岐路がある。讃岐街道はここで左側に進み市街地へと至る。へんろ道は真っすぐ進むことになる。武四郎は泊まった宿については詳しい記載がないが、これからの険しい六十五番札所三角寺や奥の院仙龍寺を考えれば、この中の庄村付近で泊まったものと思われる。「長谷寺」の段に「観音の霊場有。此処より讃州のしまじま皆見え風景よろしき地也。また三備州も手ニとるごとく見ゆる也。牛頭天王の宮并ニ薬師堂、かんおん堂等有。すこし行而横尾村」とある。眺望のいい所で、本尊が十一面観音であることから地元で昔から「観音さま」と呼ばれる。新四国曼荼羅霊場八十八ヶ所の第二十七番札所新長谷寺のことであろう。奈良長谷寺の本尊を像刻するするための試みとして彫られた十一面観音菩薩という。行基が開山した観音信仰の聖地であると解説している。ここから六十五番札所三角寺、奥の院仙龍寺へと進む。武四郎は常福寺（椿堂）の手前で「国境」と書いているが「ねぎのを村」の先が国境（境目峠）である。

奥の院

五来重は『四国遍路の寺』で「四国霊場は行をする場所です。行をすることによって大師の功徳をいただくということを忘れて判子を集めたから功徳があるとおもっています。」と述べ奥の院を

参らないと本来の四国遍路にはならないと喝破している。三角寺の奥の院は「仙龍寺」。四国霊場全体の総奥の院と称している。

この仙龍寺の所在地は四国中央市新宮町馬立である。この旧新宮村の村名由来は大同二年（八〇七）に紀伊国新宮から熊野神社を勧請したことによる。『伊予新宮鎮座熊野神社由緒略記』には「四国第一大霊験十二社宮と奉唱された。聖護院（天台修験の本山派）御門跡帳面にこれあり。古くは古美（こみ）村と申すところ本社を鎮祭。伊予国は熊山、阿波は岩津限り、土佐は保木峰、讃岐はことごとく皆氏子場として熊野宮の牛王の神符を配布せり」とある。修験道の山である西の剣山（徳島県）、東の石鎚山（愛媛県）をつなぐ法皇山脈に位置し、四国の総奥の院といわれる仙龍寺や熊野神社があることは興味深い。

武四郎もこの奥の院について「金光山遍照院仙龍寺　従三角寺五十六丁。則三角寺奥院と云。阿州三好郡也。夜ニ開帳する故ニ遍路之衆皆此処へ来り一宿し而参詣す。灯明せん壱人前拾弐銅ヅツ也。本堂、客殿皆千尋の懸崖ニ建侍て風景筆状なし易からず。」と述べる。

また、この奥の院を「阿州三好郡也」と記しているが、三角寺の法皇山脈を越えて銅山川に降りた所で、この地は新宮村（現愛媛県四国中央市新宮馬立）である。この銅山川は幾分下ると三好市山城町で県境となり、吉野川に合流することになる。付近には三傍示山（一一五八メートル）があり、名のとおり伊予、阿波、土佐の三国の境をなす山である。

平山

へんろ道が土佐街道と合流する地が交通の要所・平山である。土佐街道は楮・三椏・碁石茶などモノを運ぶ主要幹線であり参勤交代の道。へんろ道は金毘羅詣の人々も行き交うため平山は、かつては宿屋（旅籠屋島屋）・居酒屋・うどん屋などが建ち並び、さながら宿場町の形態をなしていたという。

地名アラカルト④

－忘れられた神田－

古来より、日常は辛い山や畑や田んぼでの仕事。神の前に同化する日こそハレであり、非日常の米を食することができる。週休二日でない「月一日の休養日」。それが、正月の若水迎えから田打ち正月の儀式から霜月の収穫祭（新嘗祭）と種籾の聖別儀式など折々の神事となってきたのだろう。私の母は、めでたい日に餅をつき、ぼた餅をまるめ、押し寿司をつくった。ここという時に米の力を借りずにはおれないのが日本人なのだろう▼ハレの日に神事を賄うためにあてがった田が「神田」である。四万十町宮内には、正月田、五月田、七月田、彼岸田、七日田、九日田、四時田、燈明田、祝い田、神道田、説得田、馬附田、神楽田などの小字が刻まれている▼農業機械の普及によって共同の結いが廃り、野良での共食もなくなってきた。土地から豊かさをいただくのではなく、いかに肥料を施し、生産性を上げどのように加工をして貨幣経済の中で勝ち残るか。もはや投資と収奪と競争の三次産業化した「農」となった▼「神田」の役割が消えた田はムラ社会が崩壊するシグナルなのだろうか。

徳島県三好市池田町佐野牛頭（民宿岡田）
～　二九・三キロメートル／一〇時間四九分
香川県観音寺市本大町（本大ビジネスホテル）

活動日記

池田町佐野の「民宿岡田」を七時十五分に出立。靴を履こうとすると乾燥剤が入っていた。なんともさりげない思いやり。錫杖の座布団といい、おにぎりのお接待弁当といい、たくさんチカラいただきました。ちづるさんの笑顔も最高でした。

御主人手作りの地図で六十六番札所雲辺寺へ向かう。二時間で稜線にたどり着いたが、霧雨となった。気温も今季一番の寒さで雨具がちょうどいい具合となった。雲辺寺ロープウェイでも参詣できるとあって山寺ながら今までにない参詣者がいた。

「大興寺まで食べる所がないので青空屋さんに昼食のお願いをしたら」と納経所でお助けの言葉をいただいた。「民宿青空屋」も遍路仲間では有名な宿である。雲辺寺と大興寺の

66番札所雲辺寺の五百羅漢像（三好市池田町）

間にあり昼食に寄ろうと思ったが、留守風なのでスルーし先を急いだ。

武四郎が「へつそう村」としるす地名が小松尾寺（大興寺）の所在する手前に記されている。粟井とか奥谷とかの集落は見えるが「へつそう」は見えなかった。白藤大師堂で民宿岡田のお接待おにぎりをいただく。大師堂の寄進者石板に「ヤマギシ会」の文字を久しぶりに目にした。ヤマギシズム生活実験地が観音寺にあるのだろう。若い頃、鶴見俊輔が『思想の科学』誌上に発表したヤマギシズムといわれる農業を基盤とした山間の共同体に共感した論考を覚えている。同じような共同体運動にイスラエルの「キブツ」もあり、学生時代、友人の山沖幸喜が熱く語っていた。全共闘時代の蜃気楼のような遠い記憶を懐かしく思った。

六十七番札所大興寺は雲辺寺から下った麓の際をいくつものため池を縫うように進むと、杜（もり）のなかに佇んでいた。ここから三豊平野の田園を抜け、観音寺の市街地へと向かう。

六十八番札所神恵院、六十九番札所観音寺は同じ仁王門と納経所を併用している不思議な札所だ。十七時前に納経を終え、琴弾公園が見える裏山の琴弾山へ登りたかったが時間がない。

今日の宿に着いたのは十八時になっていた。マンションとアパートが混在したような「本大ビジネスホテル」。ＧＯＴＯトラベル利用で二千七百九十五円とは驚きだ。それに千円の地域クーポンも付いている。洗濯の合い間に、隣が「大阪王将」だったので「町中華で飲ろうぜ」風の田舎ではできない体験をしてみた。作法は玉袋筋太郎の真似で、瓶ビールの大を注文し、喉を両手でさすり気道を確保し、「六・三・三は大人の義務教育」と唱えて、注いだグラスを一気に飲みほす。「ぷあー」と毒気を吐き出すのが生臭遍路の修行である。「大阪王将」には、ハーフメニューも各種あるので一

人遍路には最適だ。コロナ禍での酒場は久しぶりで、嬉しくなりちょっと飲み過ぎてしまった。明日の七十番札所本山寺から七十八番札所郷照寺までのロングルートをイメージして二十二時に眠りについた。

雲辺寺（第六十六番札所 巨鼇山（きょごうざん） 千手院（せんじゅいん） 雲辺寺（うんぺんじ））

御詠歌：はるばると雲のほとりの寺に来て　月日を今は麓にぞ見る

宗派：真言宗御室派　本尊：千手観世音菩薩（経尋作）　開基：弘法大師

創建：延暦八年（七八九）　所在：徳島県三好市池田町白地ノロウチ

「四国高野」、今なら天空寺　雲辺寺は四国霊場の中で一番の九一一メートルの標高に立つ札所で「四国高野」と呼ばれる。

寂本は「雲の中に堂宇が立つ。雲辺の名がつけられたのも、まことにそのとおり」といい、「西に伊予国、北に中国地方の国々、東南に讃岐、阿波、土佐の三国が眺望できる。四国全土へ広がり四国坊といって四か寺があった。古来から讃岐国の札所に属す」と述べ、雲辺寺の縁起や山号の巨鼇山（大亀）の由縁を記す。また、寂本の雲辺寺図には「千手院・観音・〇体佛・御影堂・五所権現」とある。

五来重は、この巨鼇山の山号の「亀」や、本尊の千手観音（造形が帆掛け船の形）が「海の観音」であることから海洋信仰に大師信仰が加わって雲辺寺が創建されたという。

参道脇の五百羅漢五百体の石像群は圧倒的な迫力がある。平成十年から七年越しで寄進により設

えられたものだが、自分似のもの、嫌いな上司、近所のおんちゃんなど探し当てるのが楽しい。たぶん、立ち止まり見入ってしまうことだろう。

大興寺（第六十七番札所　小松尾山（こまつおざん）不動光院（ふどうこういん）大興寺（だいこうじ））

御詠歌：植ゑ置きし小松尾寺を眺むれば　法の教への風ぞ吹きぬる

宗派：真言宗善通寺派　本尊：薬師如来（伝弘法大師作）　開基：弘法大師

創建：天平十四年（七四二）　所在：香川県三豊市山本町辻

小松尾という熊野修験の寺　六十七番札所大興寺は熊野修験の色濃い札所であり、真言と天台が同居し、本堂の左が大師堂で右が天台大師堂となっている。熊野神社を探したが分からなかった。後で地図を見てみると本堂の裏側に小松尾地区集会所と熊野三所権現の社があった。寺の歴史の一つに熊野権現を鎮守する神宮寺としての時代もあったのだろう。四国八十八ヶ所は弘法大師の脈絡を中心に縁起を説明しているが、実際は熊野修験や高野聖、六部の修行僧など多様な人々に支えられ綿々と繋がれてきたのだ。本堂の左側に大師堂があり、右側には天台大師堂があるのもその多様性を示している。

熊野三社信仰の発祥と成立については、豊島修の『熊野信仰と修験道』に詳しいが、要約すると、熊野三所権現は那智・速玉・本宮の三所を祀るもので、那智の主神は熊野牟須美大神（伊弉冉尊・本地仏は千手観音）、速玉の主神は速玉之男神（伊弉諾尊・本地仏薬師如来）、本宮の主神は熊野家津美御子大神・本地仏阿弥陀如来）である。那智と速玉は「海の熊野」と呼ばれ紀州の海岸線

となる大辺路が「海の修験」としての行場であった。また、本宮は「山の熊野」と呼ばれ田辺市から本宮へ向かう中辺路が「山の修験」としての行場であったという。熊野と吉野大峰山を結ぶ大峰山修行路が十一世紀初頭に開かれて、「那智」を中心に成立した「海の修験」から「山の修験」の「本宮」に中心が移行していったとある。

寂本の小松尾寺図には、熊野・薬師・大師があって、そこからの石段の下に大興寺が描かれている。これからも熊野と本地仏薬師如来を祀る社僧が住む別当寺が大興寺であることが分かる。また、真言と天台が同居していることから、最初に熊野修験（聖護院・本山派）が天台僧院を創建し、その後弘法大師信仰が興隆するなかで真言系の修験者（当山派）が四国高野と呼ばれる雲辺寺に向かう道場拠点として利用したのではないかと考える。

神恵院（第六十八番札所 七宝山（しっぽうざん） 神恵院（じんねいん））

御詠歌：笛の音も松吹く風も琴弾くも　歌うも舞うも法の声々

宗派：真言宗大覚寺派　　本尊：阿弥陀如来　　開基：日証上人

創建：大宝三年（七〇三）　　所在：観音寺市八幡町

二つの札所と一つの納経所　神恵院と観音寺の納経所は一つになっている。一度に二つの札所詣りができるので、歩き遍路は助かった気分にもなるが、それなら岩本寺と金剛福寺の間となる中村（四万十市）にでも札所を譲ったらいいのにとも思う。

神恵院は、明治の神仏分離で琴弾八幡宮の本地仏・阿弥陀如来を安置していた当時の札所・本地

堂を廃寺にするところであったが、観音寺がそれを引き受けたという経緯である。

琴弾八幡宮を越すと寛永通宝の砂絵で有名な有明浜となる。粒子の細やかな砂浜で踏めばキュキュと音がする鳴き砂現象のある所を「琴ヶ浜」と呼び、琴姫伝説も語られる。全国に二十カ所はあるといわれるが、琴弾はそれに由来した地名だろう。この有明浜は今では四国で一番有名なマテ貝掘りのスポットである。

寂本の琴弾八幡図には、琴弾山（七宝山）の高みに本社がありその両脇に住吉社と武内社が鎮座し、下りながら、若宮社、天神社、舞台があり、鳥居の両脇に弁才天、鹿嶋社、その隣に本地堂、十王堂が配置されている。

観音寺（第六十九番札所　七宝山（しっぽうざん）観音寺（かんのんじ））

御詠歌：観音の大悲の力強ければ　おもき罪をも引きあげてたべ

宗派：真言宗大覚寺派　　本尊：聖観音世音菩薩　　開基：日証上人

創建：大宝三年（七〇三）　　所在：観音寺市八幡町

琴弾八幡宮の神宮寺　琴弾八幡宮の神宮寺として宝光院を建立。大同二年（八〇七）弘法大師はこの寺の第七世住職として入山し、琴弾山の中腹に中金堂、東金堂、西金堂などを建立し、中金堂に本尊とする聖観音菩薩堂を安置し寺名を七宝山観音寺に改めたという。

武四郎の軌跡

■徳島県三好市

さの村（池田町佐野）六拾六番巨鼇山千手院雲邊寺（六十六番札所雲辺寺）

■香川県観音寺市

へつそう村（粟井町別所集落）つじ村（山本町辻）六十七番小松尾山醫王院大興寺（六十七番札所大興寺）植田村（植田町）七寶山神照院普門寺（不明）観音寺町（観音寺町）六十八番琴弾八幡宮（六十八番札所神恵院）六十九番七寶山神惠院観音寺（六十九番札所観音寺）生木の不動（生木地蔵）かうか村（小岡）流岡村（流岡町）不動瀧（不動滝）吉岡村（吉岡町）

武四郎は雲辺寺へのへんろ道をさの村（池田町佐野）からの急登を選んでいる。六十六番札所雲辺寺は讃岐分として数えられるが、所在は武四郎が記す「阿州三好郡はくち村（池田町白地）」である。ここから六十七番札所大興寺へ下る道筋について「是より打ぬけに小松尾寺へ行に下り坂道よろし。山中山ワサビ多し。とることを堅く禁ずる也。」と遍路ルールを述べている。武四郎の記す「へつそう村」。真念は「池ふたつ有ふたつめにしるし石有」として次に「べつそう村此間野原」と記している。二つの池は粟井町の新池と岩鍋池と思われることから、大原集落付近と思われる。『角川日本地名大辞典』「香川県の小字一覧」に粟井村の段に「別所」「本荘」「向本荘」の字があることから「別所」の転訛かもしれない。別所は寺に寄宿する聖などの寄宿地。

川之江東ＪＣＴは四国中央市柴生町。寛政九年（一七九七）の柴生村明細帳に「べつそう（別

宗）」の枝村があり、柴生の小字として別宗がある。近くに同じ地名があることは共通に意味するものがあるのだろうが、今の段階では分からない。

生木地蔵

武四郎は観音寺を打ったあと「生木の不動」を詣で「（観音寺）出而田道三丁程行而道の傍に、此仏像古来より此処ニ大なる楠有しが、去天保六年（一八三五）二月十七日夜誰ともしれず不動の尊像を半ニ彫たりしと。」と記している。大野原の生木地蔵のことであろう。観音寺市指定文化財となっている生木地蔵の説明には「当時の住人森安利左衛門豊秀が天保七年（一八三六）に一人娘の病弱を案じ彫り上げたもの」とあるのでこれに違いない。ただ「観音寺から三丁」とか、次が「かうか村（小岡）・流岡村（流岡町）」と位置的には相違している。生木の仏像も「不動」としているが、不動は仏法を守らないものを調伏するためにすさまじい忿怒相で表現されているのに対し、地蔵は坊主頭で豪華な装飾品はなく錫杖を持つこともある素朴で優しい眼差し。形が全く違うので武四郎の記録間違いかと思う。

『ミステリーな仏像』は観音寺市の「大野原の生木地蔵」と四国中央市金生町の「切山の生木地蔵」の二体を紹介している。切山の生木地蔵は二代目で昭和五十四年（一九七九）に仏師の荻田文昭が造立したもの。新刻像は今でもみずみずしく綺麗に保たれているという。へんろ道から少し外れており時間の都合で寄れなかったが、訪ねてみたい生木地蔵である。

小松尾寺という「あだな」

武四郎も「小松尾寺」と度々述べているが、六十七番札所小松尾山醫王院大興寺の通称である。寛永十七年（一六四〇）の記録に「辻村五一一石余　小松尾五四石余」とあることから辻村の枝村としれ寺領周辺を呼ばれたものだろう。澄禅は「小松尾寺」、真念は「六十七番小松尾山」と記している。このように札所を愛称で呼ばれている所は東寺（二十四番札所最御崎寺）、津寺（二十五番札所津照寺）、西寺（二十六番札所金剛頂寺）、足摺山（三十八番札所金剛福寺）、寺山（三十九番札所延光寺）、稲荷（四十一番札所龍光寺）、菅生山（四十四番札所大宝寺）、佐礼山（五十八番札所仙遊寺）がある。へんろ石も愛称で刻まれている場合が多い。

ちなみに観音寺は十六番札所観音寺と六十九番札所観音寺と二つの札所があるが読みが違う。また大日寺も四番札所大日寺と十三番札所大日寺と二十八番札所大日寺の三ヶ寺あり、国分寺は十五番札所國分寺、二十九番札所国分寺、五十九番札所国分寺、八十番札所国分寺と四県全部の国分寺が札所となっている。

読みの間違いやすい札所を個人的に挙げると、十一番札所藤井寺、二十四番札所最御崎寺、二十五番札所津照寺、三十二番札所禅師峰寺、四十三番札所明石寺、五十三番札所円明寺、五十四番札所延命寺、六十四番札所前神寺、六十五番札所三角寺、六十八番札所神恵院、七十番札所本山寺、七十一番札所弥谷寺、七十四番札所甲山寺、七十六番札所金倉寺、八十二番札所根香寺。五十三番札所円明寺と五十四番札所延命寺の元の名称は同じ「圓名寺」であったが前後の札所、混同を避けるために明治のころ通称の延命寺を寺号としたとのことである。寺を「てら」と訓読みするのは藤

井寺だけであるが、藤井寺球場が有名なので読み間違いはないようだ。語尾に寺の付かない札所は、五十五番札所南光坊、六十八番札所神恵院の二つである。

地名アラカルト⑤
－行路の安全を守る岐神－

桂井和雄氏は「高知県下の船戸の地名は、かつて行路の安全を守る道の神、岐神（ふなと）が祭られていたことであろう。」と述べ県内の船戸地名を紹介している（土佐民俗選集Ⅱ「土佐地名覚え書き」ｐ 259）▼一方で、川は水運の要であるとともにあちらとこちらを遮るモノでもあったことから、その遮断性を克服するために、「渡し」を設えた。それを地名に刻んだものが「渡り上り」である。「船渡」のフナドもあることから、舟渡しの場所（戸）を示す「船戸」もあるだろう▼奥四万十山の暮らし調査団が調べた高知県下の全小字 116, 991 ヶ所に、「船戸・舟戸地名」が 94 ヶ所、「渡り上り」が 52 ヶ所刻まれている▼大字若しくは集落名で分布検索をするのには「電子国土 Web（下記の QR コード）」が便利だ。このサイトで「船戸」を検索すると高知県に 4 ヶ所見えるが、中国、瀬戸内、九州、高知県幡多地方に分布していないことがわかる。

電子国土 Web

香川県観音寺市本大町（本大ビジネスホテル）
～　三七・七キロメートル／一〇時間二八分
ＪＲ予讃線「丸亀駅」
香川県坂出市久米町（ホテルニューセンチュリー坂出）

活動日記

雲辺寺の標高は九一一メートルで札所の中で一番高い所にある。昨日のその下りが足にボディブローのような痛みを蓄えているようだ。

七十番札所本山寺の近くにある「本大ビジネスホテル」を七時前に出立。今日は、本山寺を皮切りに、十一キロメートル歩いたのち五百段を超える石段を上る七十一番札所弥谷寺がある。そこから七十二番札所曼陀羅寺、七十三番札所出釈迦寺、七十四番札所甲山寺、七十五番札所善通寺、七十六番札所金倉寺、七十七番札所道隆寺、七十八番札所郷照寺の九つの札所を回る予定で、坂出に宿を予約した。

大きな間違いは、距離の歩行時間だけを計算して、参拝の

70番札所本山寺（三豊市豊中町）

時間を加味してなかったことから、道隆寺で十七時になってしまった。
昼飯抜きで、保存食のチーズとチョコレート、カロリーバーを食べながら歩いたにもかかわらずこのありさまである。あと三時間歩く力はない。道隆寺からＪＲ丸亀駅まで歩き坂出駅まで電車を利用して「ホテルニューセンチュリー坂出」に到着したのは十八時三十分を過ぎていた。
それにしても「歩道」は、車道の付録。縁石ごとにかさ上げされた歩道は段差の連続で疲れてくると腹の中に怒りもたまってくるが、我慢して歩く。これも修行ということか。国道や県道など「道路構造令」によって建設されるが、設計思想が車中心の考えなのだろう。「四国遍路道を世界遺産に」の運動も色あせてしまうほどだ。
四国の札所には長宗我部軍の焼き討ちの話が至る所にある。天正の兵火で本山寺侵入の際、住職に刃をかけたところ脇仏の阿弥陀如来の右手から血が流れ落ち、驚いた長宗我部軍は退去し本堂は兵火を免れたという。
今日参拝した八つの札所の多くが神仏習合の痕跡を残していた。弥谷寺は山全体が修験行場であり霊山であった。道隆寺の大師堂の裏側に妙見宮がある。
明日からは「欲」の煩悩を抑えた、余裕のある歩き方にしよう。

本山寺（第七十番札所　七宝山（しっぽうざん）持宝院（じほういん）本山寺（もとやまじ））

御詠歌：もとやまに誰か植江ける花なれや　春こそたをれたむけにぞなる

宗派：高野山真言宗　　本尊：馬頭観音　　開基：弘法大師

創建：大同二年（八〇七）　所在：三豊市豊中町本山甲

本当の奥の院は興隆寺跡　大同二年（八〇七）平城天皇の勅願により「長福寺」を開基し、天正の兵火で長宗我部軍が侵攻の後、「本山寺」となったとある。

七宝山の山号は神恵院、観音寺と同じである。

寂本の本山寺図には、仁王門と思われる所の左側に五所権現があり、正面に観音堂。その後側に五輪塔五基があってその北に籬をはさんで持宝院となっている。

四国遍路情報サイトには七宝山宝積院妙音寺が奥の院としているが、五来重は「本山寺の奥の院は、もと長福寺といったようです。石切り場のようなところを通って本山寺から三キロメートルほど山の中に入ると、寺の跡がありますが、参道には鎌倉時代中。末期当たりの五輪塔がたくさん残っています。現在、その中でも完全な姿の五輪塔が五、六基本山寺の境内に移されています。奥の院の寺地に宝篋印塔が二基残っている。霊場に行かれたら、まず奥の院を訪ねてください。そうするとそのお寺の本質がよく分かると同時に、四国遍路とはいったいどういうものかということが分かってきます。さらに奥に入ると滝があります。ことによると、この当たりに本当の奥の院があったのではないか。」と奥の院の位置を「長福寺跡」と比定している。『西讃府志』に「興隆寺本山寺ノ奥院ト云　本尊薬師佛　空海ノ作　山頭ニ岩屋、求聞持堂、及古石塔数十アリ」（国立国会図書館デジタルコレクション）とあり、「興隆寺遺跡の石塔群」は三豊市の文化財に指定されているので、本山寺の奥の院は興隆寺跡でり、そのことを五来重は長福寺跡と記述したのだろう。

妙音寺は、寺伝によると白鳳五年、七世紀後半に創建された讃岐国最古の寺院とあるが、五来重

のいう奥の院の役割や海との関連性からすると疑問も残る。

本山寺の本尊は馬頭観音。観音菩薩の一尊であるが、多くの観音が女性的な優しいまなざしとなっているが馬頭観音は目尻の上がった憤怒の形相をしている。「馬頭」の名称から馬に結びついた民間信仰となり、荷運びとして利用した馬の供養塔として街道に馬頭観音石仏が祀られるなど日本独特の馬頭観音信仰となった。へんろ道にも多くの馬頭観音が見受けられる。この馬頭観音のありかから、往古の街道ルートや馬捨場、競馬場の跡などを発見することがある。

弥谷寺（第七十一番札所 剣五山（けんござん） 千手院（せんじゅいん） 弥谷寺（いやだにじ））

御詠歌：あくにんとゆきつれなんも弥谷寺　ただかりそめも良きともぞよき

宗派：真言宗善通寺派　本尊：千手観世音菩薩　開基：行基菩薩

創建：天平年間（七二九～七四九）　所在：三豊市三野町大見

これぞ行場の三点セット　石段の脇には岩山が迫りその岩壁に堂宇が設えられ、摩崖仏がその間に点在する。まさに行場のような弥谷寺である。山岳修行する行場は、窟籠りする洞窟と険難な行道や垢離をとり滝行する滝が立地要件となっているようだが、山号からも行場であることがうかがえる。当然ながら弥谷山は霊山であり海に向け龍神へ火を焚いたことだろう。

寂本の弥谷寺図の右半分は無数の五輪塔が描かれている。左半分は仁王門から薬師窟、岩松窟、千手院、聞持窟、鎮守、護摩窟、二尊、弁才天とあり途中には摩崖仏が無数にあり、弥谷山の最上段に観音堂が描かれている。まさに瀬戸内の島々の人が死者供養に来る霊山である。

曼荼羅寺（第七二番札所 我拝師山（がはいしざん） 延命院（えんめいいん） 曼荼羅寺（まんだらじ））

御詠歌：わずかにも曼荼羅拝む人はただ　再び三度帰らざらまし

宗派：真言宗善通寺派　本尊：大日如来　開基：弘法大師

創建：大同二年（八〇七）　所在：善通寺市吉原町

我拝師は「わかいち」「若一王子」 弥谷寺から山中のへんろ道を抜けると東方にラクダのこぶのような我拝師山の姿を見ることとなる。

この我拝師山を曼荼羅寺と出釈迦寺は同じ山号とする。「五岳山」の一つではあるが信仰の中心となる行場である。五来重は西行『山家集』の「その辺の人は、わかいしとぞ申しならひたる」を引用し、「わかいし」は辺路に多い若一王子のこと。もとは若一王子が祀られていて地元では「わかいち」といっていたのを、坊さんが弘法大師に関係づけて「我拝師山」といったのではないか。平安時代末期か鎌倉時代初期の弘法大師信仰から「わかいち」から「わがはいし」に変わり、さらに「我拝師」となったのではないかと推考している。

捨身岳（捨身ヶ嶽禅定）という別名がある。捨身は修行の場であり西行も次の歌の詞書に「まんだら寺の行道どころへのぼるは、よの大事にて、手をたてたるやうなり。」と、曼荼羅寺の行場である我拝師山に登っていくのは大変なことで、切り立った崖のようだと描いている。

めぐりあはむことの契ぞたのもしき
きびしき山の誓見るにも

西行（岩波文庫山家集、一一三ページ）

出釈迦寺（第七十三番札所 我拝師山（がはいしざん） 求聞持院（ぐもんじいんしゅつしゃかじ） 出釈迦寺）

御詠歌：迷いぬる六道衆生救わんと　尊き山に出づる釈迦寺

宗派：真言宗御室派　本尊：釈迦如来　開基：弘法大師

創建：奈良後期～平安時代前期　所在：善通寺市吉原町

捨身とは空に飛ぶこと　澄禅は、曼荼羅寺に荷をおいて「出釋迦山」に上ると記し、「近年、堂を造立したが暴風で一夜で吹き崩れたという。ここは曼荼羅寺の奥の院である」と述べている。それから二十五年後の四国遍路を綴った寂本は「出釋迦寺」として、昔は塔があったが、西行のころには塔の礎石があったといい、この山は五岳の一つで昔から堂もなかったが宗善入道が追善供養のため麓に建立したそうだと述べている。寺の縁起では創建時期を奈良後期～平安時代前にされたということか。

甲山寺（第七十四番札所 医王山（いおうざん） 多宝院（たほういん） 甲山寺（こうやまじ））

御詠歌：十二神味方に持てる戦には　己と心かぶと山かな

宗派：真言宗善通寺派　本尊：薬師如来（伝弘法大師作）　開基：弘法大師

創建：平安時代初期　所在：善通寺市弘田町

北方の守り神　寂本は、昔は大伽藍であったが今は荒涼としている。盛衰は世に数あることと述べ、甲山寺図には薬師と多宝院の堂宇と岩穴だけが描かれている。

この岩穴には毘沙門天が祀られている。四天王の一つであり、北方の守護神である。善通寺の北

を守護するために創建されたことが分かる。

山号が医王山、御詠歌が十二神、本尊が薬師、寺名が甲（兜）とくれば、頼もしい北方の守り神である。

善通寺（第七十五番札所 五岳山誕生院善通寺）

御詠歌：我すまばよもきゐはてじ善通寺　ふかきちかいの法のともしび

宗派：真言宗善通寺派　本尊：薬師如来　開基：弘法大師

創建：大同二年（八〇七）　所在：善通寺市善通寺町

西院と東院の大伽藍　寺名の善通寺は、弘法大師の父・佐伯の諱「善通（よしみち）」を取って「善通寺」と号したと記されている。澄禅は「寺号・院号は大師の舅・善通という造立した人の名」と書くが大師の舅も意味不明だ。五来重は、道長とか田公という名前は出てきても大師伝のどこにも善通なる人物はでてこないという。『南海流浪記』には「抑善通之寺ハ大師先祖ノ俗名ヲ即寺号ト為ス云々」とあることから、本田善光の善光寺のように、やはり先祖の聖の名を付けたのだろうと推考する。

山号の五岳山について、寂本は「五岳とは香色山、筆山、出釈迦山（我拝師山）、中山、火上山の五つの峰」と記している。

寂本の善通寺図には、西に進むと観音と十善坊があり、橋を渡って仁王門らしき門をくぐると地蔵、天神、経蔵があり、左に誕生院、正面に護摩堂と金堂、大師堂がある。その裏に香色山が描か

れている。橋を境に西院と東院に分かれている。

東院は伽藍と呼ばれ、西院は誕生院と呼ばれている。やはり、四国一の大寺である。

金倉寺（第七十六番札所 鶏足山（けいそくざん） 宝幢院（ほうどういん） 金倉寺（こんぞうじ））

御詠歌：まことにも神仏僧をひらくれば　真言加持の不思議なりけり

宗派：天台寺門宗　本尊：薬師如来　開基：和気道善

創建：宝亀五年（七七四）　所在：善通寺市金蔵寺町

天台修験の開祖・智証大師の道場　武四郎は「智證大師誕生之所也とかや。以前は天台の道場なりしが、いつとなく真言ニ変ぜしとかや。また寺を通善寺（※ママ）とも云るよし也」と記す。弘法大師の姉が嫁いだ先の和気氏の氏寺で、貞観元年（八五九）に道善寺は地名の金倉庄にちなんで金倉寺に改めた。姉の子が円珍（智証大師）で、弘法大師の甥に当たる。円珍は、弘仁五年（八一四）金倉に生まれ、十五歳で比叡山に上り十二年籠山行を修め、大峰、葛城、熊野三山を回峰した。この円教・密教・修験の三道融会を掲げる天台修験（本山派）の開祖となったのが智証大師円珍である。

円珍は、仁寿三年（八五三）に唐に渡り、帰国後、延暦寺の第五代座主となった高僧である。円珍死後、比叡山は慈覚大師円仁の「山門派」が主流派となり、円珍門下は園城寺（三井寺）に下り「寺門派」の拠点となった。園城寺は天台別院とも呼ばれ、東大寺、興福寺、延暦寺とともに本朝四箇大寺となった。円珍は遣唐使ではなかったようだが唐で修法した「入唐八家」（最澄、空海、

常暁、円行、円仁、恵雲、円珍、宗叡）に名を連ねている。

その関係もあってか、園城寺の荘園が金倉庄としてこの地にあり、金倉寺に関わる『金蔵寺文書』が残っている。百通以上の古代・中世を物語る貴重な古文書であるが、どういう経緯をたどったのかは不明だが、所蔵されているのは高野山・金剛三昧院である。

道隆寺（第七十七番札所　桑多山（そうたざん）明王院（みょうおういん）道隆寺（どうりゅうじ））

御詠歌：ねがいをば仏道隆に入りはてて　菩提の月を見まくほしさに

宗派：真言宗醍醐派　本尊：薬師如来　開基：和気道隆

創建：和銅五年（七一二）　所在：仲多度郡多度津町北鴨一丁目

第五世理源大師は真言修験の中興の祖　『香川叢書』の「道隆寺温故記」によると、延暦二十一年（八〇二）和気朝祐が堂宇を建立し、道隆寺と号した。朝祐の父が道隆で、その兄善通が多度郡に善通寺を建てたのを見て、那珂郡に建てたという。縁起によると桑園の大木で薬師如来を彫り堂宇を建立したことから、桑園乙長寺とも桑多寺とも呼ばれたという。鎌倉期は一時衰えていたが、嘉元二年（一三〇四）八月、鴨庄下村地頭沙弥本西（堀江氏）が田畠一〇四町余を寄進し、僧円信を助けて伽藍を修造して新たに御影堂を造るなどして再興、氏寺としたという。第三世住職に法光大師、第四世住職に智証大師、第五世住職に理源大師と名だたる高僧が住持を務めた。法光大師は弘法大師の弟、真雅僧正といわれた。智証大師は先に述べたとおり天台修験の開祖で本山派修験道である。理源大師は聖宝と名乗り、役行者没後、百数十年の大峯山を再開し、修験道の教儀を確

立。貞観十六年（八七四）京都の東、醍醐山に醍醐寺を開創し、真言宗醍醐派の基を固め、真言密教を核とした当山派修験の総本山となる。修験道中興の祖といわれる。

道隆寺の隣に鎮守妙見神社がある。弘法大師信仰に加え、戦国期頃から妙見信仰で妙見社も信仰を集めたという。妙見は道教における北辰信仰（北極星や北斗七星）であり、北天にあって動かない北極星（北辰）は宇宙を支配する最高神とされた。仏教の北辰妙見菩薩、神道では天御中主神（アメノミナカヌシ）である。妙見菩薩は、「妙なる視力」で、わが国では密教や修験道で重要視されていった。信仰の対象としての妙見は、各地に妙見山の地名を刻むとともに、古来より時を知り方位を測る装置でもあった。空海は室戸岬で明けの明星が口から体中に入り、宇宙と一体となる悟りを開いたのであるが、空海も全国を遊行するにおいて北極星測量を行ったであろう。森下年晃は『星の巫―縄文のナビゲーター』で、全国の星地名の分布から、細野、程野、最御崎寺といった星の転訛した「ホソ」「ホツ」地名を含め、縄文の言葉、縄文の方位測量の謎を解く面白い論考が述べられている。

寂本の道隆寺図には、明王院から境内に入ると正面に薬師、その右に妙見社があり、周辺は田園と松林が描かれる。江戸期は大師堂もなく簡素な寺社であったようだ。

武四郎の軌跡

■香川県三豊市

七十番七寶山持寶院本山寺（七十番札所本山寺）上寺村（不明）伊勢林村（不明）笠岡

村（豊中町笠田笠岡）勝間村（高瀬町下勝間）鞍蓮華地（不明）新明村（高瀬町新名）大見村（三野町大見）七十一番劔五山千手院弥谷寺（七十一番札所弥谷寺）

■香川県善通寺市

ひとの村（碑殿町）ミいの村（三井之江）よし原村（吉原町）七十二番我拝師山延命院曼荼羅寺（七十二番札所曼荼羅寺）七十三番我拝師山出釋迦寺（七十三番札所出釈迦寺）廣田村（弘田町）七十四番醫王山多寶院甲山寺（七十四番札所甲山寺）仙遊ヶ原（仙遊町）白方村（西白方）海岸寺（海岸寺）善通寺町（善通寺町）懺悔橋（下馬橋）七十五番五岳山誕生院善通寺（七十五番札所善通寺）はつか橋（廿日橋）筆山（筆ノ山）七十六番鶏足山寶幢院金倉寺（七十六番札所金倉寺）桂村（葛原）加茂村（北鴨）七十七番桑田山明王院道隆寺（七十七番札所道隆寺）中津村（中津町）鹽合村（塩屋町）櫂堀光明庵（光明庵・櫂堀の井戸）丸亀（丸亀城下）

本山寺を出立し「上寺村」「伊勢林村」と記しているが不明である。弥谷寺と善通寺は絵図も含め詳細に記録しており、我拝師山の曼荼羅寺、出釈迦寺や甲山寺、海岸寺と弘法大師の誕生と修行の故地が続く。弘法大師が修行した香色山・我拝師山・筆山・火上山・中山の五岳山や屏風ヶ浦を紹介し大師誕生の系譜も述べている。

ここには歌の旅人・西行上人の庵が二つある所でもある。

下勝間の宝塔

武四郎は勝間村の段で「道より右の方半丁斗田の中図するごとき宝塔有。土俗の云に、越後の国八百比丘尼が建しもの也と云伝ふ」として絵図「勝間村宝塔之図」を描いている。全国的にも例を見ない異形十三重塔である。現在の名称は「威徳院勝造寺層塔（八百比丘尼塔）」と言われている。武四郎の「勝間村宝塔之図」を読んでみると「（梵字?）サ、ヒリ、ラ、パ、アー　惣高天大余、裏ニ、天和二戌年（一六八二）三月六日と彫刻○○……」と書かれている。地元の解説には「一層から二層に永和四年（一三七八）三月六日の銘、塔身上部の四方に梵字が刻まれるが風化のため判読は困難。空海の一夜建立、若狭国の八百比丘尼の建立などを伝えるが、南北朝期の戦乱で犠牲になった民衆の供養塔の説が強い。延宝六年（一六七八）丸亀藩主京極高豊によって修復された（石塔記）」と書かれている。さてどちらが正しいのだろうか。

武四郎は「皷蓮華地」の段を宝塔の次に起こしているが、これも不明である。

西行の四国旅

奈良吉野の「西行庵」と西行終焉の地・河内の弘川寺の「西行の円塚」を訪ねたのは大阪がコロナ蔓延の真っただ中のときであった。山本洋夫婦の随行として吉野の大峰修験道場・桜本坊を参詣した後だった。吉野の桜も弘川寺の西行桜もちょうどの見頃であったが、一週間早い開花のためか静かな佇まいだった。旅に生涯を埋めた西行が生きた平安末期。時代の潮目といえる様相であった。

藤原義清（西行）は、摂関政治の衰退と白河法皇の院政、武士の台頭と源平の戦い、有力

寺社領・荘園の廃退と僧兵化、末法思想による新宗教運動、そんな混沌とした時代の元永元年（一一一八）に武家の子として生まれ、鳥羽院の下北面武士として二十二歳まで奉仕していた。

出家（僧名・円仁）したのが保延六年（一一四〇）で、失恋説がもっぱらの動機である。

「歌聖」とも呼ばれた歌人・西行であったが、聖は「高野聖」のことである。高野聖は、僧籍のなかでは低い身分とみられるが、出家し高野聖になるということは、仏を背に天下御免の自由往来が保証されることである。高野山はもとより奥州、四国と渡り歩いた西行であるが、歌の名声もあり、高野聖として寺社の勧請に大いに力を発揮したことだろう。

四国に来た訳は二つあった。一つは弘法大師の故地を巡ることである。もう一つは崇徳院の白峯陵を詣でることであるが、八十一番札所白峯寺の段で述べることとする。

『山家集』の詞書に「讃岐の国へまかりて、みのつと申す津につきて……」「讃岐にまうでて、松山の津と申す所に、院（崇徳）おはしましけむ御あとたづねけれど……」「白峯と申しける所に、御はかの侍りけるにまゐりて」「曼荼羅寺の行道どころへ登るは、世の大事にて……」「我拝師山とその山をば申すなり。その辺りの人は、わかはいしとぞ申しならいたる……」「大師のおはしましける御あたりの山に、庵結びて住みけるに……」と地名を記している。

四国の上陸地は讃岐国の「みのつ」とある。国土地理院の地形図を読むと荘内半島から塩飽諸島を望むつけ根に宅間港があり、併せて「三野津湾」と書かれているからここであろう。周辺の刻まれた地名を読み取れば、中世の三野津（津は湊の意味を持つ）は現在の宅間港付近ではなく汐木山・山条山・葛ノ山の山際まで深く入り込んでいた所のようで、地形図には汐木山、三野町吉

津、宗吉瓦窯跡、浅津、砂押など海岸線の地名を刻んでいる。高瀬川河口の遠浅の海は中世から干拓が行われたというから塩づくりも行われていたことだろう。この汐木山は揚げ浜式製塩法で最後に焚き上げる薪の採取地となるのが「塩木山」である。香南市香我美町上分に「四沖」、高知市春野町甲殿に「塩木谷」、須崎市多ノ郷に「汐木」、須崎市土崎に「汐木割」、須崎市押岡に「潮木」、四万十町興津に「塩木山」があり、これら塩田の後背地となる里山であることから間違いなかろう。

武四郎は七十二番札所曼荼羅寺の段で「西行上人寓居の舊地」「笠かけ桜」「水茎の岡」。七十五番札所善通寺の段で「西行庵」「西行三本松」と、四カ所に西行故地と思われる記述がある。

なにごとも変はりのみゆく世の中に
おなじかげにてすめる月かな

西行（続拾遺五九五）

香川県坂出市久米町（ホテルニューセンチュリー坂出）
JR予讃線「丸亀駅」
～　三四・七キロメートル／一一時間〇三分
ことでんバス「根香口」
香川県高松市西の丸町（ハイパーイン高松駅前）

活動日記

坂出の宿を立ち、昨日終点の丸亀駅に帰って歩きはじめる。七十八番札所郷照寺、七十九番札所天皇寺、八十番札所国分寺を打って今日はゆっくりの予定。昼近く「山下うどん店」を見つけた。「うどん県」の香川で初のうどんとなる。店構えは通りから外れた奥まった所なのだが多くの客が詰め掛けている。香川県はうどんで食費を節約してその分教育費に回すという。その日暮らしの酒飲み県とは違い、どうりで賢そうな人が多い。うどん店から小高い坂を越えたら国分寺となる。ところが十三時前に国分寺の参詣が終わってしまった。つい、欲が出た。明日は雨の予報もあるので、山寺の

79番札所天皇寺（坂出市）

八十一番札所白峯寺と八十二番札所根香寺を打つことにした。途中、何度か出会った「へんろの南くん」に再会。天皇寺、白峯寺、根香寺、国分寺のルートで今日は国分寺の宿という。ギリギリ根香寺を十七時前で間に合うとの話をいただく。白峯寺をゆっくり見たかったのだが時間がない。根香寺を十六時四十分と時間内で着いたものの、下山が大変だった。

納経所で「ＪＲ鬼無駅まで二時間。香西付近のバス停まで一時間。十七時五十二分高松行きがある」とのこと。鬼無へ向かったが、武四郎が香西に立ち寄ったことを思い出し踵を返す。とっぷり陽の落ちた車道をライトで照らしひたすら歩く。バス停「根香口」で時計を見たら十七時五四分。

バス停根香口（高松市）

遅延を期待して十八時まで待ったが通った後のようだ。タクシーに電話して高松駅の宿「ハイパーイン高松駅前」までお願いした。明日もまた「根香口」からの振り出しだ。短い行程計画がかえってあだとなり、明日もまた昨日と同じ後戻りの遍路旅となる。

それにしても、どうしたことか疲れがない。酒井阿闍梨の千日回峰行のように錫杖を鳴らしながら気張って歩いたのが良かったのか。土のへんろ道は足に優しいのかもしれない。

ホテルで頂いた千円の地域クーポンを持って近くの居酒屋「六車」で乾杯となった。

郷照寺（第七十八番札所 仏光山（ぶっこうざん） 広徳院（こうとくいん） 郷照寺（ごうしょうじ））

御詠歌：踊り跳ね念仏申す道場寺　拍子を揃え鉦を打つなり

宗派：時宗　　本尊：阿弥陀如来　　開基：行基菩薩

創建：神亀二年（七二五）　　所在：綾歌郡宇多津町

四国の玄関は多様な宗派の道場　御詠歌に「道場寺」と詠まれているように、澄禅、寂本ともに道場寺と記す。寂本の道場寺図には海を背に青ノ山を少し上ると鐘楼堂があり正面に阿弥陀堂があり、右手に本坊らしき堂宇と熊野社が描かれている。

郷照寺となったのがいつかは分からないが、寺の縁起では、理源大師がこの寺で籠行の修行をしたり、『南海流浪記』の道範阿闍梨が配流先の仮寓となったり、時宗の一遍上人の逗留先であったりとか、四国の玄関口として多くの宗派が関わり、真言・時宗の法門が伝わることになり四国霊場でも特異な存在であった。道場寺の寺名の由来は一遍上人が三カ月間逗留し融通念仏の道場を開いたことによるもので、四国霊場唯一の時宗寺院となっている。この一遍の口称念仏・踊り念仏は御詠歌にも詠まれているが、これと共通するのが庚申念仏である。

本堂の隣には庚申堂がある。庚申信仰は中国の道教を基に仏教・密教・神道・修験道や民間習俗と絡み合った歴史となって庚申塔や庚申堂が建てられた。江戸時代は庚申信仰が一番盛んな時期であったという。「話しは庚申の晩にする」という俗言が今に伝わり、庚申信仰（庚申待）は労働の休息日、娯楽の一面を持ち、一夜を徹して楽しんだという。その庚申講を担っていたのが山伏・行者の修験者であったことだろう。広江清の『近世土佐の修験』に土佐の事例を詳しく説明してい

る。明治政府の神仏分離令や修験者の追放令から庚申塔は撤去され、一気に庚申信仰は衰退していった。

庚申塔は主要街道沿いや賽の神として村界にも設置されるなど「道標」の役割も担っていた。庚申塔を結ぶと昔の往来道が明らかとなるので、その分布と位置情報を知りたいものだ。

天皇寺（第七十九番札所　金華山高照院天皇寺）

御詠歌：十楽のうき世の中をたづぬべし　天皇さえもさすらいぞする

宗派：真言宗御室派　本尊：十一面観世音菩薩　開基：行基菩薩／中興：弘法大師

創建：天平年間（七二九～七四九）　所在：坂出市西庄町天皇

弘法大師から天皇さんへ　天皇寺の縁起には、天平年間に当地を訪れた行基がこの地で鉱石が産出されることからカナヤマヒコの座する山として山号を金山とし金山中腹に薬師如来を本尊とした金山摩尼珠院を建立し、神仏習合の地であることを現した。その後、弘仁年間（八一〇―八二四）に空海が訪れ現在の位置に金華山妙成就寺摩尼珠院として中興したとある。その後崇徳天皇がこの地で崩御し御廟が建てられ、摩尼珠院が崇徳天皇社の永代別当職に任じられ、神宮寺として現在の地に移転した。いつの頃か、札所は「金山権現」から「崇徳天皇社別当寺妙成就寺」となっていった。このことから「天皇寺」「天皇さん」と呼ばれるようになった。話の続きは明治の神仏分離令により別当寺妙成就寺は廃寺。崇徳天皇社は白峰宮となり、初代宮司に摩尼珠院主が就任した。明治二十年（一八八七）に摩尼珠院筆頭末寺の高照院が当地に移り「金華山高照院天皇寺」として札

所となった。

この札所の複雑な歴史を知るには、五来重のいう奥の院を理解することである。また、明治維新の裏面史も理解する必要がある。

慶応四年（一八六八）明治天皇の勅使一行は崇徳上皇の御霊を鎮魂するため崇徳院の京都へ還御を執り行った。崇徳院の怨霊伝説は天皇家にとって解決すべき七百年の課題であったのだ。

武四郎は、「七十九番金花山摩尼珠院」と記しているが、現在の札所の奥の院となっている。

澄禅は、『四国辺路日記』に、坂瀬（坂出）という塩屋の浜を通って讃岐浜街道の右の山際道を上り「野沢ノ井」という十町ほど東の山にある金山薬師から流れる泉があるとして、霊験ある「八十蘇の水」の説話を紹介し、二町ほどで「崇徳天皇」と記す。

また澄禅は、金山権現と天皇寺の経緯について、

「崇徳天皇（白峯宮）　世間流布の日記には崇徳天皇とあるが、大師が定めた札所は金山薬師である。崇徳天皇崩御後、玉体を八十蘇の水に何十七日浸したその跡ゆえにここに、宮を立て源為義・為朝の影像を守護神とした。本堂に十一面観音を安置しほかに七堂伽藍の数カ寺が立つ。子細を知らない遍路修行者が、この寺が繁栄したため札所と思い込んだことが始まりで、これは誤り」と述べている。札所は金花山悉地成就寺摩尼珠院（金華山摩尼珠院妙成就寺）といい、寺は退転し俗家の屋敷となっていると記している。柴谷宗叔は『江戸期の四国遍路』に澄禅の四国辺路日記の現代語訳を載せているが、摩尼珠院について「現在の七十九番奥の院摩尼珠院は天皇寺の南一・五キロメートル、坂出市西庄町城山の城山山上近くの滝の脇にあり本尊不動明王。明治初年の神仏分

離で別当だった摩尼珠院が廃寺となり、後に末寺の高照院を持ってきて再興した。現在、高照院天皇寺というのはこのためである。」と説明している。

寂本の崇徳天皇図には、野沢水、石薬師、境内に入り崇徳、鎮守、本堂、摩尼珠院とある。

国分寺（第八十番札所 白牛山（はくぎゅうざん） 千手院（せんじゅいん） 国分寺（こくぶんじ））

御詠歌：国を分け野山をしのぎ寺々に　詣れる人を助けましませ

宗派：真言宗御室派　　本尊：十一面千手観世音菩薩　　開基：行基

創建：天平十三年（七四一）　　所在：高松市国分寺町国分

旧国分寺遺構は特別史跡　四国の国分寺は四ヶ寺とも札所となっている。なかでもこの讃岐国分寺は創建当時の遺構をよく留めており国の特別史跡に指定されている。

寂本の国分寺図には仁王門らしき門をくぐり右手に塔跡と千手院、円林坊があり、左手に金堂跡、そこを進むと正面に観音堂、その右に不増不減水、薬師堂、四十余社、春日社（鎮守）がある。

白峯寺（第八十一番札所 綾松山（りょうしょうざん） 洞林院（どうりんいん） 白峯寺（しろみねじ））

御詠歌：霜寒く露白妙の寺のうち　御名を称ふる法の声々

宗派：真言宗御室派　　本尊：千手観世音菩薩　　開基：弘法大師、智証大師

創建：弘仁六年（八一五）　　所在：坂出市青海町

神と仏と天皇を祀る寺　仏と天皇と神を一堂に祀る全国に類のない寺院。

太古からサヌカイトを産出する五色台は、当然ながら霊山として信仰され、やがて辺路修行者の行場となり、白峯大権現を祀り堂宇が設えられるようになった。山頂で焚く篝火は航海安全の海民に感謝され信仰の山として繁栄してきたのだろう。境内には神と仏の習合された堂宇が立ち並び、それに崇徳院の頓証寺殿、西行腰掛石も加わるワンダーランドだ。

寂本の白峯寺図には大師堂、千体仏、経塚、塔跡、薬師、観音、四柱の神社、洞林院、一乗坊、真蔵院、西行腰掛石、御供所、崇徳天王、十一面、相模、天皇御庙、為義、為朝、児ヶ嶽百余丈、青海などが記されている。鎮守は蔵王権現、奥の院は山の神である相模坊天狗。

根香寺（第八十二番札所 青峰山（あおみねさん） 千手院（せんじゅいん） 根香寺（ねごろじ））

御詠歌：宵の間の妙降る霜の消えぬれば　後こそ鉦の勤行の声

宗派：天台宗　本尊：千手観世音菩薩　開基：弘法大師、智証大師

創建：弘仁年間（八一〇～八二四）　所在：高松市中山町

千手観音は船の帆柱　根香寺の縁起に、「五色台の主峰、青峰山に佇ずむ、かつての巨刹。五つの山に金剛界曼荼羅の五智如来を感じた弘法大師は、密教修行の地とし青峰に「花蔵院」を建立されました。後に大師の甥に当たる智証大師が訪れた際、山の鎮守である一之瀬明神に出会い、「この地にある毘沙門谷、蓮華谷、後夜谷に道場を作り、蓮華谷の木で観音像を作りなさい」というお告げをうけました。智証大師は蓮華谷の木で千手観音像を彫造し、「千手院」を建て安置しました。この霊木の切り株から芳香を放ち続けたことから「花蔵院」「千手院」を総称して根香寺と

名づけられたといわれます。」とある。両寺ともに本尊が千手観音で、白峯寺と兄弟みたいなものだ。千手観音は像背後に設えた大手、小手が船の帆柱のようであるため海の民に熱く信仰されたのだろう。

武四郎の軌跡

■香川県丸亀市
丸亀（丸亀城下）
■香川県綾歌郡宇多津町
宇多津村（宇多津町）七十八番佛光山道場寺（七十八番札所郷照寺）青の山（青ノ山）
■香川県坂出市
坂出村（元町）北西庄村（西庄町）七十九番金花山摩尼珠院（七十九番札所高照院天皇寺）八十はの清水（八十蘇場の清水）城山の社（城山神社）皷が岡（鼓岡神社・木の丸殿）加茂村（加茂町）
■香川県高松市
八十番白牛山千手院国分寺（八十番札所讃岐国分寺）六妻山（六ツ目山）正花寺（正花寺）
■香川県綾歌郡綾川町
国分別当瀧宮龍燈院（滝宮神社）

■香川県坂出市

大やぶ村（大屋富町）高屋村（高屋町）遍照院（遍照院松浦寺）天皇社（青海神社・煙ノ宮）春日の社（春日神社）不動瀧（稚児ヶ滝）遍路坂（へんろころがし）神谷社（神谷神社）頼朝塚（不明）湛空上人塔（不明）八十一番綾松山洞林院白峯寺（八十一番札所白峯寺）勅願門（勅願門）崇徳陵（崇徳天皇白峯陵）閼加井（閼伽井）

■香川県高松市

南是ヶ峯清水庵（足尾大明神）八十二番青峰山千手院根香寺（八十二番札所根香寺）香西浦（香西西町）

武四郎は七十九番金花山摩尼珠院を詣でて「此処は則崇徳天皇崩御ましまして棺に入奉り、しばらくここえ置まゐらせし古跡なりと。寺ハ妙成寺と云。」と記している。遍路は天皇寺で納経をすませるだけだろうが寺名の変遷が複雑な歴史を物語っている。

武四郎の足跡は複雑怪奇。崇徳天皇の故地・皷が岡を訪ねると、讃岐の龍灯伝説の地・国分別当瀧宮龍燈院（滝宮神社）を、踵を返して瀬戸内海の大やぶ村（大屋富町）に向かう。青年武四郎ならではの行動力か、二回の四国訪問をまとめたことによるるのか。

天皇という寺

普通なら「天皇」文字を冠するのはおこがましいと思うのだが境内正面の大石に「天皇寺」と刻んでいる。全国に天皇を刻む地名があるが地形図で四国内を探すと次の七カ所が見られる。

愛媛県西条市丹原町長野の天皇（牛頭天王宮からきたものか）
愛媛県西条市福武の天皇（崇徳上皇が伊曽乃神社参拝へ行幸したときの行宮・仮の宮）
香川県高松市林町の天皇（香川県立図書館から九百メートル北上した市立林小学校付近）
香川県仲多度郡まんのう町四條の天皇（天皇集会所がある）
徳島県美馬郡つるぎ町半田の天皇（小字名）
高知県香南市夜須町国光の天皇集落（池田王、土御門上皇、尊良親王など土佐は遠流の地）
高知県香南市香我美町徳王子の天皇（山本幸男『香我美町の地名考』に安徳天皇の行在所）

このように、土佐は流謫（るたく）の地として土御門上皇などが送られてきたことから、行宮の故地などを後の人が地名としたことはあるかもしれないが、その多くは牛頭天王信仰由来の地名と思える。徳川吉宗の時代、「吉」の字は恐れ多いということで「芳」の字に改称した例は数ある。どうして「天皇」の字を当てたかは後日調べる必要がある。

高知県の字一覧には天皇を冠した地名が、「天皇（安芸市川北）」「天皇（香南市香北町根須）」「天皇（高知市鏡狩山）」「天皇（高知市春野町弘岡上）」「天皇（土佐市家俊）」「天皇（土佐市市野々」「天皇山（四万十市蕨岡）」「天皇（四万十市西土佐口屋内）」「天皇（土佐清水市宗呂）」「天皇（宿毛市橋上町神有）」「天皇山（宿毛市橋上町楠山）」「天皇山（三原村下切）」にある。

松山の津

崇徳院が保元の乱で流罪となり、着いた先が「松山の津」。今の青海川の河口より上流に当たる

雌山と雄山の東麓付近の入江が「松山の津」であったと説明板が示している。

ただ、松山の津がこの位置であるという確たるものはなく、『保元物語』や『平家物語』などの各種写本や崇徳院や西行の和歌などから比定されたものである。松山の津や湊を示す地名は香川県の小字一覧や国土地理院地形図にもなく、当地の景観を見ても四国一の名港であった痕跡は見いだせない。

松山の波のけしきはかはらじを　かたなく君はなりまさりけり　西行

（松山の景色は昔と変わらないのに、崇徳院は跡形もなく消えてしまわれた）

船の停泊地を表す「みなと」は「水戸・湊・港」の漢字で表記される。つまり、み（水）・な（助詞・の）・と（門）が原義で、川水が海に入る所ををさしたもの。古代においては川湊である。『土佐日記』には、土佐の国府から京へ帰る通過地を「大津」「浦戸」「大湊（候補地多い）」「奈半の泊（奈半利）」「羽根」「室津」「土佐の泊（鳴門市土佐泊浦）」「阿波の水門（鳴門海峡）」などと記されている。このように「みなと」を表す日本語は「津」「泊」「湊」「浦」のほか徳島には「岐」がある。基本的には船が停泊する所であるが、「浦」は海や湖が湾曲して陸地に入り込んだ所をいい、海辺の村里となり結果として船の出入りもする場所となったもの。

この船の停泊地を表す「みなと」の全国分布は、

浦　島嶼部、リアス式海岸を持つ都道府県に多い。日照地名の裏を意味する場合も。

津　福岡県、兵庫県など西日本に多く、四国では高知県が多い。

湊　全国に分布。湊、古湊、小湊、大湊、湊町、湊川など。

泊　北海道、新潟県に多く見られる。トマリはアイヌ語ではない。

崇徳院、七百年の怨霊

慶応四年（一八六八）八月二十六日、明治天皇の勅使一行（大納言中院通富らが）が崇徳上皇の御陵である白峯陵に来て明治天皇の宣命（京都白峯神社への遷宮と官軍に刃向かう東北賊徒の鎮定）を述べ、崇徳院の京都へ還御を執り行った。その日は崇徳上皇の命日（長寛二年（一一六四）八月二十六日）でもあり、七百年を経て崇徳院の御霊を鎮魂することになった。崇徳院の祟りは菅原道真、平将門とともに「三大怨霊」と呼ばれ、百年おきに起こる崇徳院の祟りは、長州藩が京都御所に乱入する蛤御門の変（一八六四）となった。孝明天皇は崇徳院の御霊を京都に戻し鎮魂する意思であったが疱瘡で急死（暗殺説、存命説もある）。その遺志を継ぎ勅使の派遣に至ったという。明治天皇の即位に一年七カ月要したのはこのためだという。これが明治維新の隠れた史実である。

これにより崇徳院の祟りは天皇家においては鎮まったのかもしれないが、将軍から天皇に権力は移ったものの「脱亜入欧」の国づくりの基軸は、これまでの日本の越し方を大きく変えるものとなった。司馬遼太郎『坂の上の雲』の書き出しを長いが引用する。

まことに小さな国が、開化期を迎えようとしている。小さなといえば、明治初年の日本ほど小さな国はなかったであろう。

産業といえば農業しかなく、人材といえば三百年の間、読書階級であった旧士族しかな

かった。

明治維新によって、日本人ははじめて近代的な「国家」というものをもった。誰もが「国民」になった。不慣れながら「国民」になった日本人たちは、日本史上の最初の体験者としてその新鮮さに昂揚した。この痛々しいばかりの昂揚が分からなければ、この段階の歴史は分からない。

社会のどういう階層のどういう家の子でも、ある一定の資格を取るために必要な記憶力と根気さえあれば、博士にも官吏にも軍人にも教師にもなりえた。

この時代の明るさは、こういう楽天主義から来ている。

今から思えば実に滑稽なことに米と絹の他に主要産業のないこの国家の連中がヨーロッパ先進国と同じ海軍を持とうとした。陸軍も同様である。財政が成り立つはずは無い。

が、ともかくも近代国家を創り上げようというのは、もともと維新成立の大目的であったし、維新後の新国民達の「少年のような希望」であった。

ＮＨＫドラマ「坂の上の雲」に久石譲のエンディング曲「スタンドアローン」が流れる。「わたしは信じる　新たな時がめぐる　凛として旅立つ一朶の雲を目指して」。曲も詩もいいがスタッフロールにうつる雷鳥坂が未来に飛ぶ滑走路のようで「一朶の雲」に乗り移ろうとする。そんな明治も日露戦争を境目にかわっていったようだ。その明治から百五十年。勝ち組と負け組の分断が一層進み、希望格差のある世界となった。一周遅れのスタートラインに立つ者に、「自助」「共助」をススメる政治の貧困では「少年のような希望」は生まれない。

この明治維新は近代的な「日本」の始まりではあったが、同時に「日本」の歴史を改ざんした始まりでもあった。一つは日本人の定義であり、二つは日本の起源である。

網野喜彦は『「日本」とは何か』で「〝日本〟が地名ではなく、特定の時点で、特定の意味をこめて、特定の人々の定めた国家の名前―国号である以上、日本国の成立・出現以前には、日本も日本国も存在せず、その国制の外にある人々は日本人ではない。」と述べ、持統朝の六八九年に施行された飛鳥浄御原令（あすかきよみはらりょう）で、天皇の称号とともに、日本という国号が公式に認められたと明確に記している。

この江戸の末期、武四郎の探検した「アイヌ」は日本国ではなく、日本人ではなかった。また、南の琉球王国も明治十二年（一八七九）の「琉球処分」までは琉球人であった。江戸末期の「日本」には、北海道も沖縄も含まれてはいないのだ。この明治維新政府は、記紀の神話をもとに、日本国の成立は、神武朝の即位の日＝紀元節（西暦紀元前六六〇年二月十一日）とした。この万世一系の皇国神話は、今も神武天皇と呼称するなど、刷り込みの呪縛に息をひそめて生きている。

歴史学者は過去の反省に立ち、明治百五十年の今こそ、「国家と宗教の明治維新」を再検証していただきたい。崇徳院の怨霊の鎮魂は、そこから始まる。

香川県高松市西の丸町（ハイパーイン高松駅前）
ことでんバス「根香口」
～　十九・八キロメートル／六時間一四分
香川県高松市林町（サンロイヤルホテル）

活動日記

ことでんバス停「根香口」から歩く。市街地のへんろ道は街角散歩のようで楽しい。

住宅街の真ん中に不釣り合いな地蔵堂や細い曲がりくねった一本の土道。時にはホームセンターの間を貫くへんろ道もある。店員さんにこの道ですよねと問うと「面白いでしょ。れっきとしたへんろ道。コーンで区切っているのですがね。自由に店内のトイレを使って休んでください」と笑って話していた。

小さな畑で落花生を収穫していた。「昨日はサツマイモの収穫。ええもんはみんなに配って、残りもんを家で食べる。身体が痛いがこれが楽しみ」正直もんの老婆である。「次の一宮寺で、御健勝を祈願いたします」といって別れた。途中、香東川

ホームセンターのへんろ道（高松市成合町）

を渡るへんろ道は沈下橋である。小さな丸い「遍路道シール」を頼りに右に左にと進む。

街中のへんろ道は暮らしに近く、道中談義が弾み楽しい。

今日は八十三番札所一宮（いちのみや）寺を正午に納経し、隣の旧国幣中社で讃岐式内二十四社の一つの「田村神社」を参詣した。明治の神仏分離で分けられたかと思いきや、近世になって松平高松藩主が田村神社から一宮寺を分離し札所にしたという。

ただ、武四郎は「八十三番一ノ宮蓮花山大寳院　本社田村大明神　素波久羅大明神社（略）右の五社を祭れり。又別当所とて神毫山蓮花院……」と別当寺として書かれている。

また、武四郎は次に田村神社から仏生山の法然寺に寄っている。高松藩主の菩提寺である。

小雨も上がり、ゆっくりと散策できた。

昨日は「山下うどん店」、今日は「宮武うどん」。うどん県は、どれも製麺所の隣の倉庫で食べるのがルールなのか。安くて客多密。三分ルールでかき込んだ。

ここから三十分で香川県立図書館と文書館がある。今日の本番はここで香川県の史資料を閲覧すること。文書館で香川県の小字のデータベース化について聞いてみた。「今の段階では、計画もありません」とのこと。対応していただいたのは職員の小野さん。なまりから「高知の幡多の出身ですか？　私は小学三年まで中村南小学校に通っていました」とのこと。ゆっくり小野さんと話をしたかったが忙しそうで遠慮した。

高知県も公文書館を旧県立図書館に今年発足した。十年くらい前に松本市文書館（もんじょかん）を訪ねたとき、館長が「もんじょかんと公文書館とは大きく違う。もんじょかんと文書館（ぶんしょ）とも違う」

とのことだった。「個人の古文書も取り扱うので文書館（もんじょかん）とした」という。五年前に沖縄県北谷町の職員と友達になった。その町の公文書館は、町民共有の財産を未来に伝えるための施設として「中間書庫（役場職員が使っている公文書を三～五年経過したら市民も閲覧できる制度）」を設けている最も先進的な施設だ。四万十町の新たな文化的複合施設では、中間書庫機能、文書館（もんじょ）機能も備えてもらいたいものだ。

今日は図書館近くのホテル「サンロイヤルホテル」に十六時前に着いた。このホテルの所在地が高松市林町の「天皇」に所在する宿であることを知った。

一宮寺（第八十三番札所　神毫山（しんごうざん）大宝院（だいほういん）一宮寺（いちのみやじ））

御詠歌：讃岐一宮の御前に仰ぎ来て　神の心を誰かしら言ふ

宗派：真言宗御室派　　本尊：聖観世音菩薩　　開基：義淵僧正

創建：大宝年間（七〇一～七〇四）　　所在：高松市一宮町

神仏分離のさきがけ　創建は大宝年間と古く当時は「大宝院」と呼ばれていたが諸国に一宮寺が建立の際に行基菩薩が堂宇を修復し「神毫山一宮寺」と改名。大同年間には弘法大師が訪れ伽藍を再興し、真言宗に改宗された。

その後、延宝七年（一六七九）には高松藩主によって讃岐一ノ宮・田村神社の別当職を解かれ江戸初期にあって神仏が分離された。御詠歌はこの江戸期以前の神仏習合時代の歌である。

澄禅は「一ノ宮　社壇も鳥居も南向き、本地正観音」とだけ記す。寂本は「蓮華山一宮寺大宝院

神社は寺の前方、別に屋敷を構えてある。左に花の井がある。寺の本尊は聖観音立像。寺内には別に稲荷社がある」と述べ、一宮図には大宝院と田村大明神は籬で仕切られ神社本殿の裏に花ノ井が、大宝院には鐘楼と稲荷が描かれている。

武四郎の軌跡

■香川県高松市

香西浦（香西西町）八十三番一ノ宮蓮花山大寶院（八十三番札所一宮寺）神毫山蓮花院（不明）賜紫本山佛生寺法然寺（仏生山来迎院法然寺）高松（高松城下）

武四郎は「八十三番一ノ宮蓮花山大寶院　本社田村大明神　素波久羅大明神社（略）右の五社を祭れり。又別当所とて神毫山蓮花院　本尊は弘法大師の作にして御長三尺五寸の聖観音立像也。傍ニ大師堂」と記している。別当所とあることから社僧が一ノ宮を含め統括していると思っていたら、江戸時代に高松藩主により田村神社から分けられたという。

続いて、武四郎は田村神社から仏生山の法然寺に寄っている。高松藩主の菩提寺である。ただ、高松城下については「八千餘軒の城下ニ而頗る繁花の地也。市中寺院、神社多し。然れどもしるすにいとまなければ略す。」とだけ記している。

当国第一の産物は「塩」

武四郎は丸亀の「とき川（土器川）」の段で「是より東は塩浜多し」、宇多津村では「半は農家、漁家、塩浜稼等也。（略）此辺り海辺は皆塩浜にして当国第一番之産物也。」と塩浜について書いてある。

「敵に塩を送る」といわれるほど塩は命の源である。岩塩床から採掘するすべのない日本は、全てを海水からの塩づくりとなる。山間では塩を確保するため「塩の道」が各地につくられた。特に海を持たない信州長野は千国街道終点に塩の道の尻という意味の「塩尻」地名を刻んだ。塩地名は全国にある。地元の小字から探すと、消えた道が復元できることになる。高知県香南市では「塩の道」を地域資源として活用する取り組みをしている。赤岡から物部への中世大忍庄への往還道でもあり、終点となる物部の山崎に「塩集落」がある。その裏山には「塩峯公士方神社」があり、塩の道沿いには丁石や馬頭観音が佇み昔の往来を物語っている。塩の道筋には「塩売」「塩ノ畝」「塩ノ峯筋」「塩」「塩里」「シヲウリ」の小字がある。

塩づくりは大変な作業であった。

塩分濃度は三パーセント。多雨多湿の日本では天日だけでは塩づくりとならないことから、塩の結晶を作る技術を進化させてきた。

来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに
焼くや藻塩の身もこがれつつ

藤原定家

古代の製塩法は、定家の歌にも詠まれる「藻塩焼き」製法である。その後江戸初期になって気候の安定した瀬戸内沿岸で普及したのが「入浜式塩田」と「平釜」で、濃縮・煮詰めの併用法式であった。ちょうどそのころの記録として澄禅の『四国辺路日記（一六五三）』がある。

澄禅は土佐の入野、田野浦に来たころ「平らな砂の連なる所。ここで塩焼海士の作業を見る。粗末な身なりで男女の区別もつかない。女が小さい子を脇に挟んで来て子供を白砂の上に置いて、入れ物に水を汲んで柄の長い柄杓で砂に掛け染み渡らせる様子は、さすがに熟練した仕事ぶりと感心してしまうほどだ」と江戸初期の製塩の様子を記録している。

戦後になって濃縮工程が「流下式塩田」となり、入浜式塩田の過酷な作業から解放されることになった。五十数年前の小学校の修学旅行（一九六六）で宇多津の流下式塩田を見学した。一面の孟宗竹を逆さに吊るした小屋組み群であったように記憶している。今では製塩は化学的な工場生産。宇多津の塩田もなくなり、埋め立て造成により市街地となっている。さぬき浜街道にはチェーン店や量販店がひしめきあっている。遠くには四国電力坂出発電所やコンビナートが見え、瀬戸大橋が架っている。宇多津は新興の町、転勤族も多いのか「大東建託」賃貸住宅が一円に広がる。

五十年前の「流下式塩田」は、都市の資金が「流下」した仮面の街になってしまった。

香川県高松市林町（サンロイヤルホテル）
～　二六・一キロメートル／九時間二〇分
香川県さぬき市志度（たいや旅館）

活動日記

昨日からの弱い雨が今日も続く。

八十四番札所屋島寺へのヘンロ道は石畳の整備された道であるが、これが足に一番のダメージとなる。その道横の土道を選びながら足を進めた。屋島寺は本堂の隣が狸大明神でその隣が熊野権現社となっている。この太三郎狸は日本三名狸で屋島の守護神といったところか。

屋島は小学校の修学旅行でかわらけ（素焼きの皿）を投げた所。栗林公園にある小さな動物園にも行った。今は閉園になっているという。泊まったとこは丸登美旅館。五十年ぶりに泊まろうかと思ったがへんろ道から外れており断念した次第。納経所で「八栗寺側の道は雨で滑るので来た道を帰るように」と指摘され、足をいたわりながらゆっくりと下山し

84番札所屋島寺境内の狸と熊野権現社（高松市）

た。時間もたっぷりあるので、源平合戦の地や遍路道の父といわれる眞念の墓がある洲崎寺を訪ねた。真念は当時の遍路ガイドブック「四国遍路道指南」を書くとともに札所やへんろ道の基礎をつくった人である。へんろ道の文句をぶつぶついう凡人も眞念の前では感謝の祈念をした。

八十五番札所八栗寺は歓喜天の鳥居をくぐり仁王門へと続く。仏教の守護神の天部であるので神仏習合とは違うかも知れないが、五剣山の名が示すように山岳修験の匂いもするが、資料もないので分からない。

そこから長いアスファルトの下り道がヘンロ道となり、牟礼町から志度町へと続く。牟礼町は高松市となり、志度町はさぬき市となった。境目が分からない二つの町ではあるが、内情はいろいろあるらしい。

八十六番札所志度寺は参道や寺庭が雑然としいて清心な気持ちを減退させる。どこが本堂か大師堂かも分からない迷路で、立派な五重塔もあるのに生い茂った樹木の陰になっている。ガッカリ札所ワースト3には入るだろう。「たいや旅館」は夕食がないので近くの飲食店を訪ねた。その人に伺ったら「住職はお医者と僧侶の二足草鞋。何を言っても聞く耳を持たん」とのこと。眞念さんはどう思うだろうか。

明日は長尾寺と大窪寺で香川県を修めることになる。

屋島寺（第八十四番札所　南面山（なんめんざん）千光院（せんこういん）屋島寺（やしまじ））

御詠歌：梓弓屋島の宮に詣でつつ　祈りをかけて勇む武夫

宗派：真言宗御室派　　本尊：十一面千手観世音菩薩　　開基：鑑真和上
創建：天平勝宝年間（七四九～七五六）　　所在：高松市屋島東町

熊野さんも狸さんも　澄禅は「開基は鑑真和尚。和尚来朝時にこの沖を通ったが、南に異様な気配があると島に船を着けて見て、寺院を建立する霊地と感じて北の峰に寺を建てた。南面山と号した。わが国の律寺の最初である。」と記す。

寂本の屋島図は仁王門を抜けると左に千手院、正面に観音堂と池、右隣に阿弥陀、釈迦、千体仏、熊野、荒神を描いている

八栗寺（第八十五番札所　五剣山（ごけんざん）観自在院（かんじざいいん）八栗寺（やくりじ））

御詠歌：煩悩を胸の智火にて八栗をば　修行者ならで誰か知るべき
宗派：真言宗大覚寺派　　本尊：聖観世音菩薩　　開基：弘法大師
創建：天長六年（八二九）　　所在：高松市牟礼町牟礼

八は聖数、八国か八栗か　寺の縁起は「天長六年（八二九）、大師がこの山に登り求聞寺法を修めた時に、五振りの剣が天振り注ぎ、山の鎮守蔵王権現が現れた。そして「この山は仏教相応の霊地なり」と告げられたので、大師はそれらの剣を山中に埋め鎮護とし大日如来像を刻み五剣山と名付けた。」とある。縁起は大日如来とあるが本尊は聖観音である。

この五剣山に登れば八か国を見渡せることから「八国寺」と称していたが、弘法大師が唐に留学する前に入唐求法の成否を占うために八個の焼き栗を植えた。無事帰国し、再び訪れると、芽の

出るはずない焼き栗が芽吹いていた。これが八国寺を八栗寺へ改名した由来である。古代の日本で「八」は聖数であるとともに数が多い意味も持たせていた。八島、八雲、八咫烏、八百八町、八百万などで、八栗もその一つだろう。また、弘法大師伝説に三度栗（岩本寺ほか）、二度栗、七立栗といった栗の説話もたくさんある。栗は救荒食であるとともに、円空など木食（もくじき・草木のみを食べる修行）をする修行僧の食料であったことだろう。

武四郎の軌跡

■香川県高松市

高松（高松城下）八十四番南面山屋島寺（八十四番札所屋島寺）むれ村（市牟礼町牟礼）佐藤継信忠信の墓（佐藤継信の墓）駒たて岩（駒立岩）洲崎寺（眺海山洲崎寺）八十五番五剱山千手院八栗寺（八十五番札所八栗寺）たい村（牟礼町牟礼・田井集落）大野村（牟礼町大町）

■香川県さぬき市

八十六番補陀落山清浄光院志度寺（八十六番札所志度寺）

『新版松浦武四郎自伝』によると、武四郎は四国を二度訪れている。一度目は備前から讃岐（丸亀）に入り東に回り碁の浦から阿州に入り淡路に渡る。二度目は阿波の撫養に入り讃岐の八栗山麓の村で年を越し、正月から四国遍路を順打ちで回って、六月下旬結願し、箸蔵寺、剣山に行って、撫養から淡路、紀州へと渡ったと思われる。二度目の祈願を八栗寺でしたのだろう。

さぬき市という合併地名

平成合併後の新高松市は、八栗寺のある牟礼町も構成することになる。大町、原と町並みは続く。讃岐街道が琴電と交差していつしか「さぬき市」に入っていた。平成の合併ではこのような「ひらがな自治体」が多く誕生したが、さぬき市もその一つ。構成する旧国名の「讃岐」ではおこがましく、ひらがなの優しいイメージを採用したのだろう。銀行もしかりで、経営統合の結果吸収されたイメージをなくし、お堅いイメージを避けたのか「みずほ」「りそな」となった。

以前にも「むつ市（一九六〇）」「いわき市（一九六六）」「つくば市（一九八七）」などひらがな自治体名称は命名されたが、平成の合併では一気に増えた。

明治の合併では新市町村の命名に当たり「命名指針」が示された。①大町村と小町村が合併するときは、大町村名を採用②著名な名称が存在するときは、その名称を採用③同一規模の町村が合併するときは、旧町村名の一部をそれぞれとって折衷（合成）する。この明治二十二年の大合併で七万の市町村が一万五千に減少した。その命名指針べつの傾向としては①が四十パーセント、②が五十パーセント、③が十パーセントとなっている。

平成の合併では命名について、「市町村合併法定協議会運営マニュアル・基本編」の「新市町村の名称」の節で次のように示された。

「協議の基本項目において最も意見が分かれることが予想される項目の一つです。（略）特に新設合併の場合、旧市町村間のメンツも絡んで解決困難な場合が少なくありません。また、合併協議会で決定した名称に対し、住民からの反対の声が上がり、合併協議そのものが

破たんしたケースもあります。過去の事例では、紛糾した場合には協議会自身で判断がつかず、首長の判断、又は住民の意向に委ねられることが多いようです。」

これにより多くの合併協議会は新市町村名称を公募により意向調査を行うこととなったが、この手順においても名称決定が合併協議の破たんを招く要因ともなることから、マニュアルは次の文言を加えている。

「意向調査の際に現在の名称を入れるかどうかで紛糾する可能性があります。現在の名称を入れると、人口規模の最も大きい市町村の名称が選ばれるという危惧があるためです（略）具体の名称については、従来は関係市町村の名称の一部を単純に合わせたものも多かったようですが、最近はその地域の歴史・文化や地理的特性、名称の知名度・定着度、住民公募の結果等から住民の一体感を醸成しやすく、対外的にも覚えやすい名称を選択することが多いようです。」

この文言が「人口規模の最も大きい市町村の名称が選ばれる危惧」を回避する行動となり「名称の知名度、対外的にも覚えやすい名称」による命名へと誘導されることになった。

高知県の特徴的な事例は「四万十」である。土佐の小京都で有名であった中村市を中心に中村市・佐賀町・大方町・西土佐村の法定合併協議会が「四万十市」の名称を決定していたが途中で破たん。残る中村市と西土佐村の構成で合併が決定し、その名称を継承して四万十市となった。かたや、四万十川中流域に当たる高岡郡窪川町・幡多郡大正町・同郡十和村の新町名称は公募手続きを踏まえ「四万十町」と地理的特性の共通性、名称の知名度、自治体を売り込む戦略性から決定され

た。結果として、隣り合わせで市制と町制の違いはあるものの二つの「四万十」自治体を生むことになった。中村市の名称は中世以前からの地名であり、高知県西部の中核的な役割を担う自治体であった。それを廃してまで合併を進めるエネルギーが増していたということだろうが、中村市民は複雑な思いであっただろう。

吾川郡伊野町の場合も同じような構成町村への配慮と対立回避から「いの町」になったものと思える。吾川郡伊野町、吾北村、大川村の法定合併協議会は新町名称を公募し、最多四候補の伊野町、いの町、新伊野町、仁淀川町をもとに「古くから紙の町として全国的にも名が知られており、また、公募で過半数の支持を得ている」ことから調整方針案を「伊野町」としたが、協議の結果「いの町」に決定された。人口規模の最も大きい伊野町の名称を継承するものの他の自治体に配慮する方策としてひらがな読みを自治体名称とした経緯である。同じ意味から郡名をひらがなに変えて自治体名称とするなど全国でもひらがな自治体は広がりを見せた。

どうして「ひらがな自治体」が増えたのか。新市町村の名称は統合のシンボルととして日常的に使われ継続的に歴史を刻んでいく対象であるのに、自治体名称が合併を丸く収めるための道具として限られた期間の妥協の産物として生まれた出生の不運としかいいようがない。地名の漢字二字は『延喜式』の「凡諸国部内郡里等名、並用二字、必取嘉名」以来の不文律と思っていたらそうでもないのだ。平成の合併に当たって地名研究者が新市町村の名称の決定に当たっての提言をした話を聞いたことがない。

日本学術会議の提言「地名は公共財」

地名や地物は公共財である。日本学術会議が令和元年（二〇一九）に「地名標準化の現状と課題」を報告した。日本学術会議の委員の任命拒否については立憲主義に反する暴挙として話題になって今も継続しているが、日本学術会議の活動についてはあまりアナウンスもされていない。長い引用になるが、学術会議の活動を理解する機会でもあり、また地名のあり方について明確なルールを示す重要な提言であるためその要旨を引用する。

「地名（一部の施設名を含む。以下同じ。）は、それを使用する者又は当事者間で適切に理解されれば使用の目的を達する場合が多い。一方において、地域の管理、基本図の調製、河川、道路、鉄道、駅、橋、トンネルその他公共性のある構造物等の表示等のため、行政の執行上使用されることも多く、この場合は、一定の秩序の下に使用される必要がある。近年、国際交流、地方創生、観光等の行政課題が重要視される中、地名使用の秩序の意義は、一層高まっている。地名は地域を成長させるための、時と空間を繋ぐ重要な無形文化資産である。

地名の命名又は改変を行政として行う場合、その主体は原則として市町村となるが、住民の意思は当然尊重されるべきである。実際問題としては、地域住民の範囲、市町村外の住民の意思、首長及び議会の責任と権限等にかかわる難しい問題があり、市町村による地名の命名又は改変について何らかのルール、ガイドライン、助言と調整の仕組み等があることが望まれる。

地名は本来、国民全体の文化的歴史的共有財産であるにも関わらず、地方公共団体が個別

に命名権を保持し、私企業が駅名や施設名など地名表記に関わる場合のガイドラインはない。地名表記は漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字など多様であるが、使用方法についての明確な基準を策定する機関を欠くため、教育・文化行政において地名表記が統一されておらず、教育現場にも影響を与えている。

公的な地名に限っても、その命名、改廃、運用の妥当性や整合性を確保するための法律は、個別法としても基本法としても存在しない。地名に関する総合的、基本的な法律が存在しないということは、国として総合的、基本的な仕組みも機関も存在しないことを意味する。少なくとも公的に使用される地名については、その命名、改廃、運用等に関し、基本理念、手続き、責任の所在等を定めた基本法の制定を検討する必要がある。

①地名標準化の必要性（公的機関による地名の表現方法等の規範の確立）
②地名の統合管理（地名の命名、表記等に関する国・地方・民間の横断的ガイドライン）
③地名専門家の育成（地名の適切な助言のできる専門家の育成と地名収集の促進）
④国際的対応の強化（国連地名標準化会議など国際的な学術団体へ地名専門家を派遣）
⑤地名集の作成（国内で使用される地名を標準化した地名データベースの作成）」

日本学術会議の提言を手に取る機会がないのであえて長文となるが引用した（下線筆者）。

高松を歩くときに「高松みんなの病院」、善通寺では「四国こどもとおとなの医療センター」の施設表示板を目にした。高知県立図書館と高知市民図書館は一緒になって「オーテピア高知図書館」となった。大好きだった「市民の図書館」の御影石はオーテピアの片隅に置かれていた。今も

新図書館に図書館運営の指針は受け継がれていると思うが、ネーミングは施策の表れでもある。○○市立図書館、○○市民図書館、○○・市民の図書館ではそれぞれ趣が違ってくる。追手前（おうてまえ）小学校の跡地に建てられたこと、仲間友人を意味するピアとを組み合わせオーテピアと地物の特定に覚えやすく親しみやすい願いが込められているが十年後に評価されることだろう。

コピーライターがやたらとひらがなを使い、政治家もカタカナ用語でけむに巻く始末である。こんなじだいについていけなくなったのはじぶんのとしのせいだろうか。エビデンスガナイカラワカラナイ。

四国遍路 二十四日目（さぬき市志度～87・88～さぬき市多和）

香川県さぬき市志度（たいや旅館）
～　二四・六キロメートル／八時間四七分
香川県さぬき市多和兼割（八十窪）

活動日記

志度の「たいや旅館」の朝食をしっかりいただいて出立。晴れてはいるが長袖、長ズボンでも少し寒く感じる。昨日参拝した八十六番札所志度寺の前を通る。山号は補陀落山であるが、この鬱蒼とした木々では「渡海」はできない。

八十七番札所長尾寺までは真っすぐ南進する。すっきりした境内で朝のお勤めをすませた。宿を八十八番札所大窪寺の脇にある宿「八十窪」に予約した。「十三時には着くわよ」とのこと。ゆっくり進むことにした。

さぬき市前山の前山ダム湖畔に道の駅「ながお」とその前に「おへんろ交流サロン」がある。休憩がてら展示物を見て、「さぬき市へんろ資料館」の片桐孝浩館長（文化財保護指導員）に話をうかがった。松浦武四郎の道中雑誌の記録し

珍しい英語表記の橋名版（さぬき市長尾）

た地名をたどっていると遍路の意図を話すと「松浦武四郎の話をした遍路はあなたが初めて」と驚き、加えて「武四郎は遍路の所作を文献で示した初めての人ではないか」と説明をいただいた。志度寺の話、旦過という遍路地名の話、高群逸枝の娘巡礼記の話などお聞きした。他のお遍路さんも来場するので「詳しくはメールでおたずねします」とその場を終えた。

前山からは「花折山へんろ道」を歩くことにした。峠越えの山道で汗はかくが、土道で足に優しい。幾分登るとおじさんに遭遇。この山五町歩くらいの山主という。「これが、珍しく採れたクリシメジよ」と自慢げに差し出した。「この一帯を遍路の散策できる場にしたい」という。樫村さんは九十一歳である。志度町の町長を四期やって平成八年（一九九六）に引退したとのこと。「国の効率化のもとで合併したが、元気がなくなった」と嘆いていた。

樫村さんは元志度町長（さぬき市前山）

大窪寺に着いたのは十六時になっていた。さすがに結願寺なのか全体の空間に元気ある。宿泊は「八十窪」。有名女将の赤飯とソーメン汁をいただいた。客は四人。東京都、神奈川、大阪とコロナビック三の登場である。逆打ち歩きの人、電動自転車で別格も含め回ってる人、十回以上結願し逆打ちシールを貼って回っている人。九十歳超えの女将は、女子初のプロ野球スカウトとなる乾絵美さんの祖母である。若女将などと話は弾んだ。明日の最適なルートも皆さんに教えていただいた。

今日の歩く距離は二十キロメートルくらいと少なかったが充実した一日だった。

長尾寺（第八七番札所 補陀落山（ふだらくさん） 観音院（かんおんいん） 長尾寺（ながおじ））

御詠歌：あしびきの山鳥の尾の長尾寺　秋の夜すがら御名を唱えよ

宗派：天台宗　本尊：聖観世音菩薩　開基：行基

創建：天平十一年（七三九）　所在：さぬき市長尾西六五三

東讃の鎮護・讃岐七観音の一つ　所在地が長尾街道の北、町の中心の字「観音（かんのん）」にある。『長尾町史』によれば、慶長の地検帳、承応の宗門改帳にも「観音寺」とあることから、字名（ホノギ）として呼ばれたのだろう。

長尾寺略縁起には天平十一年（七三九）行基が開基し聖観音像を安置、天長二年（八二五）藤原冬嗣再興とある。境内から奈良時代の古瓦が出土していることから創建が八世紀後半であることは間違いない。

その後、天和三年（一六八三）高松藩主松平頼常が讃岐七観音の一つとし、真言宗を天台宗に改め宝蔵院（極楽寺）から離末させて東讃の鎮護とし、寺名を観音院長尾寺と改めた。

寂本の長尾寺図には長尾街道に町家が連なり茶屋もある。仁王門をくぐると左に本坊観音院、正面に観音堂、右側に鎮守の天照大神と阿弥陀堂が描かれている。天照大神は熊野では「若一王子」として祀られている。補陀落山の山号と天照大神と観音信仰を合わせてみたら長尾寺は志度寺から分離していったものと思える。奥の院は、志度寺との間にある玉泉寺。

大窪寺（第八十八番札所 医王山遍照光院 大窪寺）

御詠歌：南無薬師諸病なかれと願いつつ　詣れる人は大窪の寺

宗派：真言宗　本尊：薬師如来　開基：行基

創建：養老元年（七一七）　所在：さぬき市多和兼割

法螺貝を左手に持つ薬師如来　大窪寺の本尊は薬師如来。薬師如来は無明の病を直す法薬を与える医薬の仏として、普通なら左手に薬壺を持っているのだが、ここは法螺貝である。澄禅は「大師御所持の六尺ほどの鉄錫杖、同法螺、同大師御筆の紺紙金泥の旧訳仁王経がある。」と記しているが、この法螺貝かどうかは不明である。寺の背後にある女体山の山域を修業の場とした修験者たちの拠点だったのだろう。法螺貝は「天界の音楽なれば、一度之を吹き奉れば、其の響き十方世界に周偏して、諸々の不浄を清め、邪気を除き、悪気魔障立ち所に降伏せしめ奉る」という法具である。修験道の記憶をとどめる薬師の像容である。

「医王」を山号、院号に刻んだ札所は、医王山大窪寺のほか、二十二番札所医王院平等寺、二十三番札所医王山薬王寺、四十六番札所医王山浄瑠璃寺、七十四番札所医王山甲山寺の五ヶ寺あり、本尊はいずれも薬師如来である。

武四郎の軌跡

■香川県さぬき市

八十六番補陀落山清浄光院志度寺（八十六番札所志度寺）奥院（地蔵寺）ながゆく村（志

度・長行集落）ミやにし村（造田宮西）八十七番補陀落山観音院長尾寺（八十七番札所長尾寺）まえ山村（前山）がく村（さぬき市多和額北）八十八番医王山遍照院大窪寺（八十八番札所大窪寺）

武四郎は志度寺を過ぎて「此辺り砂糖を多く作れり。是より三十丁斗南ニ当りて日内山と云山有」と記す。志度寺から長尾寺、大窪寺にかけてのへんろ道は、南下する一本道である。前山から二つの道に分かれる。一つは「花折山へんろ道」、二つは「女体山へんろ道」である。女体山は大窪寺の奥の院・胎蔵峰を経由するが、武四郎は額村（多和額）を記していることから同じように花折へんろ道を歩いた。

和三盆を伝えた遍路

武四郎は砂糖づくりの地として志度（さぬき市）、撫養（鳴門市撫養町木津）、かんやけ村（上板町神宅）、田中村（土成町土成田中）の四地区を記録している。この辺りは今でも和三盆の生産地で、産地を付した「讃岐三盆白」「阿波三盆」がある。和三盆は独特の風味と適当な粘性があることから各種の和菓子の原料としてなくてはならない砂糖である。

サトウキビを搾ってそ糖汁を釜で煮詰め、酒絞りのように圧搾し、蜜をのぞいたものに水を加えながらさらに五、六回圧搾するという製法である。この和三盆の製法をもたらしたのは四国遍路の薩摩人・関良助であった。良助は湊川（東かがわ市湊川）で病気となり村の人に看病され九死に一生を得て無事帰国することになる。土地の医師向山周慶の恩義に報いようと、門外不出であった

サトウキビの種を讃岐・湊川に持ち込んでサトウキビの栽培と砂糖の製造を教え、改良を加えた製法で和三盆が完成されたのが「讃岐三盆白」であった（この伝承の疑問視説もある）。寛政二年（一七九〇）に、三盆糖を高松藩主に献上したという記録が残っている。同じように「阿波三盆糖」は引野村（上板町引野）に住む篤農家で山伏であったという丸山徳弥（一七五一～一八二六）が九州日向から来た遍路に「この地はサトウキビ栽培がいいのではないか」と聞き、苗入手を決意し日向延岡へ渡ってこっそりと持ち帰り、独力で栽培から製造までなしとげたという。この「砂糖製造法伝授に関する誓約書」が安楽寺に現在も保管されている。

武四郎が四国を旅するときに、伊勢の話をするとありがたがって泊めてくれたという。遍路は文化の伝道師であるとともに、ものづくりの技術や種子や苗（稲・麦・サトウキビ・ミカンなど）の伝播の役割も担っていた。

香り米・ヘンドヨリ・幾治ヨリ

高知の食文化史にも詳しい近藤日出男の『まぼろしの稲を訪ねて』に「仁井田巡り自動車唱歌」がある。当時の窪川から仁井田までの車窓の風景が映しだされ、仁井田米・香り米の掛け合い漫談にも似た軽妙な喋りもよく、仁井田界隈の風俗が描かれている。この唱歌に「台地の仁井田の

ヘンドヨリの選定者・市川幾治

ヘンドヨリのご飯と来たら、そりゃあ、もう美味しうて、あごを手拭で吊って置かねばなりません」と歌われている。この香り米の一つ「ヘンドヨリ」について近藤は「この品種は、四国遍路を巡る人たちが少しずつ各地に持ち出していたようで、私が調査したころには、九州各地、中国地方にも広まっておりました。」と述べている。この「ヘンドヨリ」を選りすぐった人が市川幾治（四万十町烏手）で別名「幾治ヨリ」とも呼ばれる。近藤日出男の『何を食べてきたのだろう』に詳しく述べているが、愛媛県生涯学習センターＷｅｂ『えひめの記憶』にも土佐の稲の伝播について記載されているので一読願いたい。

愚草の川柳集⑫選

「はやにえ」

2018 / 冬

枯れ枝に速贄おどる秋の空
とんでれらおちてれらしてオスプレイ
不可逆の少女の像は歩を数え
化粧剥げ「日本会議」の刺青浮く
ひがらめに希望と言う名の選別機

※「はやにえ」は、モズ類などの「貯食行動」。近年、貯えた餌の消費がオスの性的な魅力を高める効果をもつことが実証された▽「とんでれら」は蚊取り線香の CM。モスキートとオスプレイの音遊びが面白い▽「不可逆」は慰安婦問題日韓合意の「日韓間の慰安婦問題が最終的かつ不可逆的に解決されることを確認する」▽「希望の党」も、小池の選別発言で一気に冷め切った。毎日毎日のコロナ会見で小池の刷り込みが変容する恐ろしや。したたかな女帝。

HP「四万十町地名辞典」引用

四国遍路 二十五日目（さぬき市多和～板野町）

香川県さぬき市多和兼割（八十窪）
～ 三四・六キロ／九時間三一分
徳島県板野郡板野町吹田字平山（旅人の宿道しるべ）

活動日記

大窪寺の下「八十窪」を六時三十分に出立。直接、市場町に下るか、それとも大坂越えにするか悩みながら足を進めた。宿は三番金泉寺の近く「旅人の宿道しるべ」に決めていた。三十五キロメートル超えのロードゆえに足に優しい土道の大坂越えを選択した。五名トンネルから讃岐と阿波の境目を過ぎ中尾峠の土道を歩くと、後は車道脇を白鳥から引田へと歩かねばならない。大窪寺を過ぎるとすぐに「さぬき市」から「東かがわ市」となる。どういう訳か、平成の合併では「ひらがな市町村」が増えたが、ひらがな表記とする意図はいまだに理解できない。

昼過ぎに、やっと大坂越えの「坂元」にたどり着いた。坂本（坂元）の多くは峠越えの麓の村に付けられる往来地名で

大坂峠（讃岐と阿波の国境）

ある。ヘンロ道を尋ねると老婆が入り口まで先導してくれた。「私らも若い頃、この道で阿波によういった」という。次の札所では老婆のご健勝を祈念しないといけない。

国境を越えてなお稜線を快調に登る。阿波側になるとこれがお節介なコンクリートの道となる。道路管理者にとっては景観と維持補修の楽さからいいと思うかもしれないが、この硬さが遍路泣かせの道となる。概算で数千万円という工事費用を土道のまま草刈等の維持補修を地元に委託すれば数十年はやってくれるだろうに。

一人ぶつぶついいながら大坂を下り、今日の宿「旅人の宿道しるべ」に十六時に着いた。今日は無理せずにゆっくりだ。それにしても宿のネーミングが気に入った。「旅人」もいいが、「道しるべ」もいい。一泊二食で四千四百円も驚きで、たぶんバックパッカーの基地ではないだろうか。窓の外は徳島自動車道。「ちょっとうるさいのでおまけする」と御主人がいっていた料金なのだろう。

明日は一番札所霊山寺から乱れ打ちだ。

武四郎の軌跡

○ルートその一（十番札所切幡寺への山道）

■香川県さぬき市

八十八番医王山遍照院大窪寺（八十八番札所大窪寺）

■香川県東かがわ市

中野村（五名・長野集落）

■徳島県阿波市
狸合村（市場町日開谷為後集落）犬かけ村（市場町大影）境（香川・徳島県境）ひかひ谷御番所（市場町日開谷）
○ルートその二（一番札所霊山寺への浜辺道）
■香川県さぬき市
八十八番医王山遍照院大窪寺（八十八番札所大窪寺）
■香川県東かがわ市
中野村（五名・長野集落）白鳥村（白鳥）白鳥宮（白鳥神社）引田（引田）
■徳島県鳴門市
碁の浦（北灘町碁浦）鬼の尾村（北灘町折野）萬臺山鬼骨寺（鬼骨寺）撫養湊（撫養町黒崎・大桑島・小桑島・斎田・北浜・南浜など）岡崎（岡崎海岸）里村（里浦町里浦）木津上（撫養町木津）護国山長谷寺（長谷寺）遍路霊場第一番札所竺和山一乗院霊山寺（一番札所霊山寺）
○ルートその三（三番札所金泉寺への逢坂越）
■香川県さぬき市
八十八番医王山遍照院大窪寺（八十八番札所大窪寺）
■香川県東かがわ市
中野村（五名・長野集落）白鳥村（白鳥）白鳥宮（白鳥神社）引田（引田）逢坂越（大

坂峠）

■徳島県東板野郡板野町

大寺村（大寺）第三番亀光山釋迦院金泉寺（三番札所金泉寺）

武四郎は八十八番札所大窪寺からの順路を前述のように三通り案内している。

一つ目は山道路、二つ目は浜辺路、三つ目は逢坂越である。「我は両道ともニ通りたり」と書いている。

この海辺路は、天保五年（一八三四）十月、武四郎十七歳の自伝にある「備前を過て讃岐（丸亀）に到り、東讃碁の浦（鳴門市北灘町碁浦）を過て阿州に至り」の順路である。四国に初めて渡った武四郎が、金毘羅詣でと讃岐一国打ちをして、翌年の四国遍路に向けた事前調査をしたのではなかろうか。鳴門の記録もこのときに詳しく書いたものと思える。このルートは高野山正智院の阿闍梨・道範が配流先の讃岐を紀行した『南海流浪記』ルートではないか。引田、水主、長尾町、三木町を通る南海道ではなかったか。ちなみに南海道の讃岐の駅家は、引田（ひきた）駅、松本（まつもと）駅、三谿（みたに）駅、河内（こうち）駅、甕井（みかい）駅、柞田（くにた）駅の六駅で香川県道二号線沿いと思われるが、比定地は数少ない。

山道は二度目の四国に渡ったときに一番札所から十番札所まで打って日開谷番所を越え八十八番札所大窪寺を経て八栗山で年を越したもようである。

三つ目の逢坂越は「逢坂番所より入らば此寺（三番札所金泉寺）のうらに来る」と簡単な記録のためこの逢坂越は通ってないように思える。

「一番より順に札を納めんと思ふ人は、此村（五名・長野集落）より白鳥か引田へ出其より碁の

浦の番所を入て、阿州牟屋（撫養）の湊ニかかりて一番より順ニ打てよし。」と道は少し遠いが眺望がいいと進める。

徳島県の小字は「グーグルマップ」で

徳島県は小字のポリゴン座標値をグーグルマップに提供しているのか、徳島県域では小字を調べることができる。平成七年（一九九五）に発生した阪神・淡路大震災をきっかけに制定（平成十九年）されたのが地理空間情報活用推進基本法。総務省官僚だった飯泉知事の肝いり事業かもしれない。

武四郎が讃岐と阿波の国境の村として「狸合村」と書いているが比定する地名がなかなか見つからないとき、松浦武四郎を研究している兵庫県西宮市の黒須さんに教えていただいたのが「為後」である。グーグルマップで見ると徳島県阿波市市場町日開谷為後とある。それもポリゴン座標値として小字の範囲まで記されている。小字の集約さえできていない状況で「見える化」まで取り組む徳島県にエールを送りたい。ちなみに、四国では愛媛県が個人的に字一覧をデータ化していると聞いたが、香川県はまとめていないとのこと。高知県は、「奥四万十山の暮らし調査団」が県下全域、十一万の小字をまとめて公表しており、当団体のホームページ『四万十町地名辞典』で利用することができる。

愚草の川柳集⑬選

「ふくべ」

2018 / 夏

忖度の　筆を曲げては蜜を祇め

上を読むひらめひがらめ出世魚

象徴の　鳥は青いか籠の鳥

※ 1947 年 9 月 23 日の米国機密資料が公開。「米国による沖縄占領を日米両国に利する」という昭和天皇の見解であった。平成天皇は沖縄を１１回訪れたのは過去でなく未来でなく「今」を真摯に向き合い「青い鳥」をささげるシグナルのようではある。ただ、慰霊や祈りは被害者への気持ちではあるが加害者としての立場はいっそう弱くなっている。オキナワも「琉球処分」の痛みから前に進めない。平成天皇は上皇とならずに市民となって沖縄被害者、戦争被害国に謝罪すればなおよかったのに。

https://www.archives.pref.okinawa.jp/uscar_document/5392

HP「四万十町地名辞典」引用

徳島県板野郡板野町吹田字平山（旅人の宿道しるべ）
～　三七・三キロメートル／一一時間〇〇分
徳島県吉野川市鴨島町知恵島（GHチャンネルカン）

活動日記

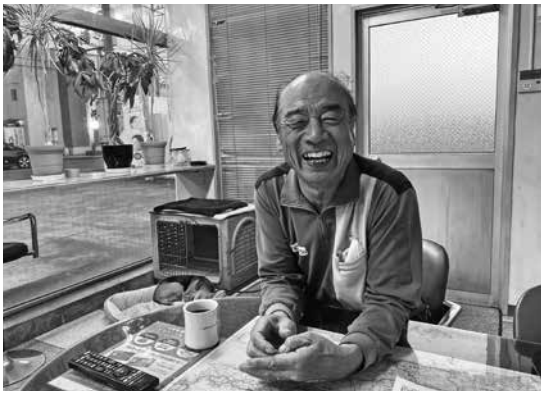
「旅人の宿道しるべ」の主人が朝食後に、一番札所霊山寺まで車で送るという。ルールに反するが十番札所まで回るには日程がきついので四キロメートルの歩きをカットした。一番札所霊山寺、二番札所極楽寺、三番札所金泉寺、四番札所大日寺、五番札所地蔵寺、六番札所安楽寺、七番札所十楽寺、八番札所熊谷寺、九番札所法輪寺、十番札所切幡寺と一気にまわり十一番札所藤井寺のお膝元、鴨島のゲストハウス「チャンネルカン」が今日の宿である。

大日寺のへんろ道で、標石を調査する三人連れに出会った。その一人、徳島県の職員で埋蔵文化財担当の早渕さんにいろいろお話を伺った。昨日岩本寺から金剛福寺を調査して大洲回りの三百五十キロメートルを走ったという。昨日会っ

遍路標石調査（板野町那東）

たさぬき市へんろ資料館の片桐館長は「四国遍路に行政が絡むといいことがない」と阿波・蜂須賀と土佐・山内の例を挙げて説明してくれた。調査は、記録だから行政でも許されるだろう。声かけしていろいろ教わることができた。

六番札所安楽寺から、だんだんと紀州・熊野の影響を受けた札所が多くなる。安楽寺が所在する「引野」は和歌山・日置の荘園の転訛だろう。安楽寺の北側に熊野神社が鎮座する。八番札所熊谷寺の「熊」も熊野神社に影響したものだろう。本堂の横に熊野神社遥拝所の案内がある。熊ノ庄という常会もある。ぷんぷん熊野が匂う。



「高知はボッタクリや」（阿波市市場町ＧＳ）

全国三千社の熊野神社にはそれぞれ由来はあろうが、四国霊場との関係を帰ってじっくり調べよう。

もう一つ気になったのは、長宗我部元親の四国覇権における残虐行為。札所の多くは焼き討ちに遭っている。お姫様の塚にも長宗我部の兵に惨死されたとある。四国でお遍路するのは高知県民が多いというが、懺悔の訪問でもあろう。

切幡寺をおえ、大学の同級生をビックリ訪問した。市場町の小さな瀬尾石油店の御主人である。高知より二十円も低く、価格競争で大変だという。夜八時まで営業しているということで、奥様に店を任せて四十年ぶりの話をし夕食をご馳走になり宿まで送ってもらった。

一番札所から病気平癒のお願いする人が一人増え、山本さん、高垣さん、壬生さん、佐々木さんの四人となった。間違いなく届けました。

霊山寺（第一番札所 竺和山（じくわざん） 一乗院（いちじょういん） 霊山寺（りょうぜんじ））

御詠歌：霊山の釈迦のみ前にめぐりきて　よろずの罪も消え失せにけり

宗派：高野山真言宗　本尊：釈迦如来　開基：行基菩薩

創建：天平年間（七二九～七四九）　所在：鳴門市大麻町板東塚鼻

左手に薬壺を持つ釈迦如来　御詠歌は「罪障消滅」。一番で四国遍路の目的を諭されたようだ。

四国霊場の本尊は薬師如来が多く、釈迦如来は五ヶ寺だけである。本尊は見えないので確認は取れないが御影の像容を見ると左手に薬壺を持っているようで薬師如来ではないかと思う。

釈迦如来の像容は「誕生仏」「釈迦如来」「涅槃仏」の三様がある。釈迦の誕生日とされる四月八日・花まつりには、あの天上天下唯我独尊の姿である「誕生仏」に甘茶をかける習俗がある。よく見かける釈迦如来は出家した比丘のような粗末な衣一枚の姿で螺髪（らほつ）という巻いた髪の毛の質素な姿と白毫に特徴がある。三つ目の涅槃仏は釈迦が入滅する様子を表したもので、手枕で横たえた姿である。北枕はこの姿をいう。九番札所法輪寺の御影が涅槃仏である。

寂本は霊山寺図に本堂を中心に御影堂、大日、阿弥陀、天神の堂宇を、別枠に大麻権現、中宮明神、西宮、聞持堂を描いている。寂本は「大麻彦権現は今この寺の奥の院だという。この神社は阿波国の一の宮となっている。」とある。また四国巡拝の最初の札所と述べつつ、「道場寺（七十八番

札所）、井戸寺（十七番札所）から始拝する者もいる。みな路次の都合によるものだろう。」と当時の撫養から阿波に入るもの、丸亀から讃岐に入るもの、それぞれ四国上陸地近くの札所から打ち始めると遍路の実際を話す。

極楽寺（第二番札所 日照山（にっしょうざん） 無量寿院（むりょうじゅいん） 極楽寺（ごくらくじ））

御詠歌：極楽の弥陀の浄土へ行きたくば　南無阿弥陀仏口ぐせにせよ

宗派：高野山真言宗　　本尊：阿弥陀如来（伝弘法大師）　　開基：行基菩薩

創建：奈良時代（七一〇～七九三）　　所在：鳴門市大麻町檜字段の上

霊山寺から十分　澄禅は「本尊阿弥陀。退転して小庵に堂守の禅門」とだけ記す。寂本も「物の変わるのは世の常のことで、荒廃してしまった」と嘆いている。

すぐ隣に熊野神社があるが、寺の縁起には何もない。

金泉寺（第三番札所 亀光山（きこうざん） 釈迦院（しゃかいん） 金泉寺（こんせんじ））

御詠歌：極楽の宝の池を思ただ　黄金の泉すみたたえる

宗派：高野山真言宗　　本尊：釈迦如来（伝行基作）　　開基：行基菩薩

創建：天平年間（七二九～七四九）　　所在：板野郡板野町大寺字亀山下

堂の扉が板野を分ける　寂本は「ここのところを板東といい板西という両郡の名は、この堂が両郡の境目にあり、堂の扉の東と西とで郡を分けたから」と郡名の由来を書いている。また「この寺

は弘法大師が開基、金泉の跡もある。中古に亀山法皇（一二四九―一三〇五）が勅願し再興されたとある。亀山法皇の御廟もあった」と記している。

縁起は定かでないが、当初「金光明寺」と命名されたと伝えられる。弘仁年間（八一〇～二四）弘法大師が日照りに苦しんでいるのを見て、この地に井戸を掘られた。この霊水が「黄金の井戸」とされ、寺名の「金光明寺」を「金泉寺」に改めたとある。

亀山法皇は熊野を厚く信仰していたことからか周辺に熊神社は多い。

大日寺（第四番札所 黒巌山（こくがんざん） 遍照院（へんじょういん） 大日寺（だいにちじ））

御詠歌：ながむれば月白妙の夜半なれや　ただ黒谷にすみぞめの袖

宗派：東寺真言宗　　本尊：大日如来（伝弘法大師作）　　開基：弘法大師

創建：弘仁六年（八一五）　　所在：板野郡板野町黒谷字居内

万人講はクラウドファンディング　澄禅、寂本ともに「黒谷寺」と記す。

澄禅は「本尊大日如来。堂舎は零落していたのを、地元の杢兵衛という無二の信心者である大富貴の在家が近年再興して立派にした。」とあり、寂本は「杢兵衛が鐘楼を鋳造し時刻を報じたとあり、別に遍照は大日如来であることから大日寺ともいう。」と述べ、黒谷寺図には遍照院、大日堂、天照大神に鐘楼堂を描いている。

五来重は、住持某が「万人講」で大日寺を復興したことについて「作善をする人が一万人なら功徳は一万人というのが万人講の考え方。これは共同体で全て事をおこなうという共同体の原理。大

衆の支持によるものは残っても、国家によって建てられたものは残らない」と政治と宗教の関係を述べる。今で言ったらお手盛り補助金事業は失敗するが、クラウドファンディングは成功するということか。

地蔵寺（第五番札所 無尽山（むじんざん） 荘厳院（しょうごんいん） 地蔵寺（じぞうじ））

御詠歌：六道の能化の地蔵大菩薩　導き給えこの世後の世

宗派：真言宗御室派　本尊：延命地蔵 胎内仏・勝軍地蔵菩薩　開基：弘法大師

創建：弘仁十二年（八二一）　所在：板野郡板野町羅漢字林東

地蔵菩薩より五百羅漢が有名　地蔵寺の奥の院は五百羅漢。今ではこちらが有名になって寺の所在地も板野町羅漢である。

澄禅は「昔は門中に三千坊、今も七十余か寺ある。」と述べる

御詠歌の「この世後の世」は、地蔵菩薩には現世と来世の利益があるということ。薬師如来は現世の病気・災難の救済を、阿弥陀如来は「ええとこいけよ」と来世安穏の仏。現当二世の利益が地蔵菩薩にあるのだから如来より菩薩が偉いみたいだ。

本尊に胎内仏とあることから熊野に関係することがうかがえる。寂本も「熊野の神が現れて霊木を弘法大師に」と地蔵寺の縁起を記している。

安楽寺（第六番札所 温泉山（おんせんざん） 瑠璃光院（るりこういん） 安楽寺（あんらくじ））

御詠歌：かりの世に知行争うむやくなり　安楽国の守護をのぞめよ

宗派：高野山真言宗　　本尊：薬師如来（伝弘法大師作）　　開基：弘法大師

創建：弘仁六年（八一五）　　所在：板野郡上板町引野字寺ノ西北

「駅路寺」は温泉付きの道の駅　澄禅は「駅路山浄土院、本尊薬師如来」とだけ記し、寂本は「瑠璃山日光院瑞雲寺　この所には昔から温泉があって、諸方の病人が久しく浴治の利を得ている。これはまことに衆生の苦をあわれみ救済するものだ。ために弘法大師は薬師如来の尊像を高さ一尺三寸に作り、精舎伽藍を立て安置した。昔温泉があり温泉山といったものだが、今は瑠璃山という。温泉は中古に人獣の屍を入れたことから廃絶した。元は安楽寺。太守から寺領をもらい瑞雲寺に改められた」と書き、瑞運寺図には薬師堂、天照大神と宿坊らしき施設が描かれている。

現在地より北西の安楽寺谷に弘法大師が安楽寺を創建したもので、温泉が廃れるとともに寺も荒廃し、駅路寺の瑞運寺ができてからそこに移ったということだろうか。また、この地の引野は古来「日置の庄」と呼ばれた広大な荘園であったという。『熊野新宮文書』に阿波国日置庄があり、南朝方の長慶天皇から紀伊熊野新宮に当庄地頭職が寄進された荘園のようだ。上板町の七條・鍛冶屋原・泉谷・引野と土成町高尾周辺に比定される庄園で先に述べた小字「熊の庄」も熊野の荘園であったことを刻んだ地名であろう。この日置の庄が転訛して「引野」になったという。

「駅路寺」は慶長三年（一五九八年）に定められた徳島藩蜂須賀家政公が定めた制度。池田から宍喰までの主要街道に八ヶ寺を定め、四国遍路や旅人の宿泊、茶湯接待の施設であるとともに悪人・盗賊人の取り締まりも目的であった。

十楽寺（第七番札所 光明山蓮華院 十楽寺）

御詠歌：人間の八苦を早く離れなば　到らん方は九品十楽

宗派：真言宗単立　本尊：阿弥陀如来（伝弘法大師作）　開基：弘法大師

創建：大同年間（八〇六～八一〇）　所在：阿波市土成町高尾字法教田

阿弥陀はあの世の浄土十楽　澄禅は「十楽寺　悉く退転し、堂も形ばかり。本尊阿弥陀如来は首だけ。」と痛ましいほどの寺の様子である。寂本は「この寺の由来は聞いていない。弥陀を安泰させることを十楽という。おそらくこの本尊を念じ奉ずれば、ここより遠くないところに楽園があるのだ、ということを示そうとした寺である」と澄禅から三十五年後の様子を述べている。由来もないということで、首だけの本尊も新しくなり再興したということだろう。

すぐ近くには、熊野神社が小字・熊の庄に鎮座する。

熊谷寺（第八番札所 普明山 真光院 熊谷寺）

御詠歌：薪とり水くま谷の寺にきて　難行するも後の世のため

宗派：高野山真言宗　本尊：千手観世音菩薩　開基：弘法大師

創建：弘仁六年（八一五）　所在：阿波市土成町土成字前田

法華持経者の熊野修験者が開いた寺　紀州の熊野権現が現れ「末世の衆生を永く済度せよ」と告げられ、小さな金の観世音菩薩像を授け、虚空はるかに去っていったという。弘法大師はその場にお堂を建てて、千手観音像を彫造し、その胎内に金の尊像を納めて本尊にされた、と伝えられてい

る。

熊谷寺は千手観音と補陀落信仰を併せ持つ海の見えるお寺である。千手観音は海の修験・那智大社の本地仏でもある。縁起を含め熊野神社と関わりの深い札所である。

御詠歌について五来重は「奈良時代以前から山岳修行者が法華経を読んでいた形跡がある。法華経を実践する行者〝持経者〟が薪を担って本尊の周りを回る「薪の行道」をする。それが「薪とり」であり、水をくむから水熊谷になり熊谷（寺名）となった。」と説明する。御詠歌にはこのように歴史が刻まれた歌もあるということだ。寺の縁起は弘法大師を登場させなければならないので熊野権現が現れたことになっているが、実際は熊野修験者が小さな堂宇を開き笈の中の小さな仏を胎内仏として安置したということと思う。

法輪寺（第九番札所 正覚山（しょうかくざん） 菩提院（ぼたいいん） 法輪寺（ほうりんじ））

御詠歌：大乗のひほうもとがもひるがえし　転法輪の縁とこそきけ

宗派：高野山真言宗　本尊：涅槃釈迦如来　開基：弘法大師

創建：弘仁六年（八一五）　所在：阿波市土成町土成字田中

珍しい寝釈迦と難解な御詠歌　澄禅は「法輪寺　本尊三如来。堂舎寺院悉く退転して小さい草堂のみ。」と記す。寂本は「白蛇山法輪寺　この地は山遠く、田野の中にある。一堂はかやぶき屋根で、弘法大師の御作である釈迦如来、一尺五寸（四十五センチメートル）の像が安置されている。」と述べる。澄禅の三如来は誤記載か。現在の本尊は寝釈迦といわれる涅槃釈迦如来で四国霊場では

ここだけである。法輪寺の涅槃仏は七十センチメートルと書かれているものもある。

御詠歌は「大乗の誹謗」「転法輪」など難しい仏教用語が出てくるが、小乗と大乗は比較の問題ではないが、大のほうが立派に見えるのは日本が大乗仏教の国からかもしれない。違いは、自分が悟ることによってはじめて他を悟らせることができる（小乗）、自分が悟ることは後回しにして民衆を悟らせてやる（大乗）の違いで、どちらも正しい。ただ、寝釈迦の姿はタイを思い浮かべ小乗仏教かと思わせ、御詠歌とのギャップを感じる。

切幡寺（第十番札所 得度山（とくどざん） 灌頂院（かんじょういん） 切幡寺（きりはたじ））

御詠歌：欲心をただ一筋に切幡寺　後の世までの障りとぞなる

宗派：高野山真言宗　本尊：千手観世音菩薩　開基：弘法大師

創建：弘仁年間（八一〇～八二四）　所在：阿波市市場町切幡字観音

水に流すは仏の寛容　四国霊場は、街中より山寺がそれらしく似合っているが、ここにきて三百三十三段の上り参道は厳しい。

切幡寺がいう縁起は「弘法大師が機織りの女に着物のほころびを繕う布を所望。女は機にかかっている布を切って差し上げた。女は仏門に入って（得度灌頂）精進したいと望むと即身成仏して千手観音菩薩に変身した」というもので、そこから、得度山・灌頂院・切幡寺と山号、院号、寺名が付けられた。寂本の『四国徧礼霊場記』には「空から五色の幡一条が降ってきてこの山に落ちた。このことを伝えようと、弘法大師は寺を建て切幡寺と名づけた。」と幡が降ってきたと述べる。五

来重は「水神信仰は麻の幣を立てて神様に上げていた。幡をあげるというのは、もともと幣をあげること。布を織る機ではなくて幡だと思う。切幡寺には流水灌頂会がある。」と寂本の説を補完している。「流れ灌頂」とは、亡くなった人の身に着けていた布の一部を人型に切って加持水に浸し水をかけてもらう儀式である。

水はやはり清めの装置で、滝行も墓に水をかけるのもカタチを示す所作なのだ。コロナ禍の手洗いも重要な所作である。

武四郎の軌跡

■徳島県鳴門市

遍路霊場第一番札所竺和山一乗院霊山寺（一番札所霊山寺）大麻彦神社（大麻比古神社）第二番日照山極楽寺（二番札所極楽寺）

■徳島県板野郡板野町

河端村（川端）大寺村（大寺）第三番亀光山釋迦院金泉寺（三番札所金泉寺）おかの宮大師堂（岡の宮）犬ふし村（犬伏）なとう村（那東）第四番黒岩山遍照院大日寺（四番札所大日寺）第五番無盡山荘厳院地蔵寺（五番札所地蔵寺）奥院五百羅漢（奥の院五百羅漢）

■徳島県板野郡上板町

かんやけ村（神宅）七條村（七條）ひのき村（引野）第六番温泉山瑞運院安楽寺（六番札所安楽寺）

■徳島県阿波市

高尾村（土成町高尾）第七番光明山十楽寺（七番札所十楽寺）原田村（土成町吉田原田市の一）どなり村（土成町土成）第八番普明山眞光院熊谷寺（八番札所熊谷寺）田中村（土成町土成田中）九番正覺山白蛇院法輪寺（九番札所法輪寺）秋月村（土成町秋月）切幡村（市場町切幡）小豆洗清水（小豆洗大師）十番得度山灌頂院切幡寺（十番札所切幡寺）大野島村（市場町大野島）大八島（不明）吉野川（吉野川）

■徳島県吉野川市

麻植村（おえ）（鴨島町西麻植）

吉野川という「四国のいのち」

武四郎は吉野川の段で「阿州大一番の大川也。川上は土州、豫州の極山中より来る。永代無銭渡し也」と記す。四国での流路延長は四万十川に次ぐものの、流域面積は四国一位で、「四国三郎」の異名を持ち坂東太郎（利根川）、筑紫二郎（筑後川）とともに日本三大河川と呼ばれる。

武四郎は阿州の川として他に、あくい川（鮎喰川）、つめた川（冷田川）、法花川（法花川）、かつら川（勝浦川）、鶴瀬川（那賀川）、さかせ川（福井川）、くだり川（不明）、母川（母川）、すきて川（河内川）を記録している。

高知新聞連載コラム『土佐地名往来』には「吉野川が初めて文献に現れるのは鎌倉時代の初めとのこと。その由来について一つには〝川岸がヨシにおおわれていた〟から。また一つには川の流域

にある高越寺（徳島県吉野川市）が奈良・吉野山の蔵王権現の分身なので〝大和と同じように麓の川を吉野川と呼んだ〟とも伝えられるようだ。」と紹介している。奈良・吉野川は『古事記』由来の地名で『万葉集』にも十六首詠われるほどの名所である。桜の吉野と熊野は修験の地でもあり、全国に伝播されるのも自然といえる。

徳島と和歌山の地名関連も不思議である。「那賀郡・那賀郡」「海部郡・海部郡」「牟礼・牟婁郡」「勝浦郡・那智勝浦町」など同一地名が多く見られるのは阿波と紀伊の歴史的交渉の結果ともいえる。

同じ命名の意図からなのか、吉野川は全国に分布する。

・床丹川支流（北海道佐呂間町）・常呂川支流（北海道北見市）・名寄川支流（北海道名寄市）・石狩川支流（北海道深川市）・馬淵川支流（青森県三戸町）・最上川支流（山形県南陽市）・北上川支流（宮城県大崎市）・荒川支流（埼玉県深谷市）・紀の川の上流域名称（奈良県）・吉井川支流（岡山県美作市）・四万十川支流（高知県中土佐町）・大野川支流（大分市）・吉野川（宮崎県日向市）

吉野川の上流域に「早明浦ダム」がある。ダムの右岸広場には「四国のいのち」の記念碑が設えてある。最初は「四国はひとつ」の銘であったが当時の高知県知事溝渕増巳が「水はひとつになったが、ほかのことはまだ一つになっていない」とした経緯がある。徳島県は洪水調整による恩恵を受け、香川県は香川用水（分水）として生活用水と工業用水の恩恵を受けた。

香川県で開催される高知県人会では必ず知事が出席し、あいさつの冒頭に「高知県・早明浦ダムへの感謝」を述べる。早明浦ダムの利水配分率は徳島県四十八パーセント、香川県二十九パーセン

ト、愛媛県十九パーセント、高知県四パーセントであり、香川県の感謝の意図がよく分かるが、当時の水を必要とする環境や政治力学での配分結果であろう。ただ、ダム湖に沈む村は高知県である。その「亡所」が渇水時期に現れてくる。大川村の旧役場庁舎跡である。「亡所」は何らかの理不尽な力によって押しつぶされた生活の場である。その力は時に災害であり戦争であり国家権力であり、札束のチカラで有無を言わせなかったこともあっただろう。「亡所」を人身御供にして、都市は経済的に栄えていった。

黒谷村という「黒」

武四郎は「四番黒岩山遍照院大日寺　板野郡黒谷村ニ有り」と記している。

地名には色を付した地名が多い。赤は「閼伽井」のアカであり、タタラ製鉄の「朱」のアカでもある。時代により色の使われ方も変化していることから、色地名から地名が本来の持っている過去の歴史を読み解くこともできる。

四国霊場八十八ヶ寺の山号・院号・寺名に刻まれている色を調べてみると

白　二十二番白水山医王院平等寺・八十番白牛山千手院国分寺・八十一番綾松山洞林院白峯寺

青　三十六番独鈷山伊舎那院青龍寺・八十二番青峰山千手院根香寺

黒　四番黒巌山遍照院大日寺

赤　三十九番赤亀山寺山院延光寺

わずか八十八ヶ寺の資料ではあるが「白」が多いのは高貴な色としたことによるものだろう。

「青」は、仲松弥秀、谷川健一、筒井功が「青の世界」について論述しているがアオ・オーが墳墓葬制の地名だという。「黒」は善意と悪意の両極の意味を持つ。

四万十町の旧十和村は、昭和の合併時に併せて大字「黒川」を「里川」に、「烏」を「古城」に、「四手」を「昭和」に、「細々」を「河内」に改称した。黒、烏、四（シ）といった字を縁起が悪いとして改変したのだろうが、どうして黒が嫌われるのか。

「黒」は、人類が最初に獲得した色である。

古代から人々は火を燃やして暖をとり、食べ物を煮たり焼いたりして生活してきた。火の使用により煤がたまり、それを集め墨を得ることができた。暮らしの中で発見した、最も縁のある色であったし、「伝える道具」として利用された色であったのだろう。福田邦夫は『色の名前５０７』で「日本語の基本色彩語として真っ白、真っ黒、真っ赤、真っ青といえるのも基本の四語だけである。しかし、真っ白い、真っ黒いはいえても真っ赤い、真っ青い、はないので、日本語の最も根源的な基本色彩語は、どうやら白と黒の二つになりそうだ。それが八世紀頃に白、黒、赤、青の四語になり、平安時代には赤のカテゴリーから黄色が独立し、さらに青から緑が分かれ、その前後に紫のカテゴリーが成立した。」と述べている。最古の基本色彩である「し・ロ」と「く・ロ」「ア・お」と「ア・か」の音韻の対になっており、どれも語尾に「い」を付ければ形容詞活用ができる。「緑い」とは言えないのは、色を発見した歴史の違いによるものだろう。その色を固有地名として大地に刻んできたのが黒川であり、この地の黒谷である。

国土電子Ｗｅｂで基本四色を検索すると「白地名」が五千百十四カ所、「黒地名」が四千五十カ

所、「赤地名」が三千七百二十カ所、「青地名」が二千六百三十四カ所、ヒットした。郵便局などの地物名称も含まれるので地名としては不確実ではあるが大まかな理解はできる。

また、高知県の字一覧で検索すると「黒地名」が五百七十九字で黒岩106・黒石70・黒松54・黒滝48・黒見13、「白地名」が五百五十一字で白皇77・白石59・白岩41・白王28・白滝28、「赤地名」が四百七十字で赤松62・赤坂34・赤土29・赤滝29・赤石27・赤岩16、「青地名」が百九十二字で青木103という結果で、黒の字を含む字が一番多いことになる。

地図においては色彩が記号としての役割を果たしている。明治の土地台帳の字限図にも反映され、道は赤い線、川谷は青い線であり、神社地は赤で塗られていた。国土調査による集成図でも色分けは踏襲され、いわゆる「赤線」「青線」といわれる法定外公共物（長狭物）のことである。地図に必要な重要要素は境界である。慶長時代ころまでの国境・郡境の色は紫色であった。境界は聖域としての境であり、聖性を帯びた国家的な意味合いからふさわしい色として紫が使われていたが、江戸期以降は黒に転換された。天皇から幕府への権威の移管である。それ以降の国家的な絵図における郡境の色彩として使われることから古地図の制作年代を判断する目安となる。

黒田日出男は『境界の中世・象徴の中世』で「赤・黒の対は軍事的機能を表わす色彩範疇であり、青・白は王権ないし祭祀の色彩範疇である」と述べている。白は天皇の服色、黒は奴婢の服色として両極をシンボライズしてきた。

豊かな色彩を持つ黒も、古代には身分を表す色としては最も低い階位であったが、鎌倉時代となり武士が強さや権力を誇示するため鎧などに「漆黒」の使用が普及していった。今のレクサス、B

ＭＷの黒やブラックカードのイメージとして今でも権威の象徴色となっている。
今のイメージではどうだろう。犯罪の容疑があることを俗に「クロ」といい、ブラック企業、ブラックマーケット、黒の商人など、不正、非合法な経済活動を「ブラック・黒」と表現する。
時代とともに色の持つチカラは変化している。

愚草の川柳集⑭選

「夜とぎ」

2018/ 暮

知の拠点　盲千人　マッチ擦り

おぞましきアラブの春の　夜とぎ哉

転生のほとけ苦界　鬼と化し

逝きゆきて　苦海浄土に生きる　女

※いつも川柳集タイトルの意図を考える編集子だが、「夜とぎ」はアラブの春を詠んだ一句しかない。北アフリカ、中東では独裁政権から解放される民主化運動を「アラブの春」と呼んだが、あれから10年、宗教と政治と外部干渉の三つ巴戦▽2018年もいろいろあったが、愚草が一番許せないのは「高知県立大の焚書問題」のようだ▽石牟礼道子「ゆきゆきて神軍」は天皇にパチンコを発射した奥崎謙三の映画。「知らぬ存ぜぬは許しません」は愚草に共通するテーマである。

HP「四万十町地名辞典」引用

四国遍路 二十七日目（吉野川市鴨島町～11・12～神山町）

徳島県吉野川市鴨島町知恵島（ＧＨチャンネルカン）
～　二五・二キロメートル／一〇時間二一分
徳島県名西郡神山町阿野本名（植村旅館）

活動日記

鴨島のゲストハウス「チャンネルカン」を六時に出立。朝食と昼食の段取りを近くのコンビニですませる。十一番札所藤井寺で十二番札所焼山寺までの行程を聞くと六時間とのこと。「へんろころがし」が六箇所あるらしくしょっぱなは「一／六」とあった。歳相応にゆっくりと足を進める。途中地元の人に出会い行程をお聞きすると「植村旅館」まで行けるとのこと。「十三時には焼山寺に着いて十六時三十分には植村旅館に着くよ」と教えられた。途中、二人連れの母娘と後先しながら進み、藤井寺からちょうど五時間、十二時三十分に到着した。十三キロメートルのへんろ道ではあるが、「長戸庵」「柳水庵」「浄蓮庵」と適度な目標もあり、調子よく前に進むことができる。

浄蓮庵の一本杉（神山町下分左右内）

焼山寺へのへんろ道は、誰もが納得するヘンロ道の代表格。達成感は格別だ。

同行の人とは、十二番札所焼山寺で一緒になり会釈し労をねぎらい言葉を交わした。遍路は一人旅だから、知り合っても長い話は御法度。付かず離れずの関係である。

母娘の二人とは焼山寺を下った鍋岩集落で再会し、互いに大きく手を振って別れを告げた。分かり合うということはこういった「同苦」なんだなと感じた。

山の暮らしで二男一女を大学へ（神山町下分地中）

下る途中の「杖杉庵」は四国遍路の礎を築いたといわれる衛門三郎の墓所である。その下で私道（ヘンロ道）の掃除をしている人に出会い、労いとともに山の暮らしを尋ねた。「今は、スダチ栽培と梅干し生産。他に働きはない。昔は木を売って息子娘を阪大、徳大、高知女子大にやることができた。二人は医者にナッチョル」という。ここは外人さんがよーけ通るとこらしく、今はコロナで静かやとも加えていった。話が止まらず、区切りを探しながら手を挙げて「お達者で」と別れを告げた。

神山町の「地中（じちゅう）」地区は山の中腹に広がる集落である。たぶん「焼山寺寺中」の転訛だろう。この道はいったん「鍋岩」集落の下まで降りるが再び上り「玉ヶ峰」の峠を越えそこから天空の集落を「府中」「宮分」「川平」と進み「本名（ほんみょう）」の植

村旅館へ降り立つ。山で行程を教えてくれた地元のおじさんの言うとおり、到着は十六時三十分であった。

昨日のゲストハウスは外人さん中心なのかシャワー。植村旅館は足を伸ばせる長めの浴槽で、つい「極楽〜極楽〜」と言ってしまった。

明日は徳島市内だ。

藤井寺（第十一番札所 金剛山一乗院 藤井寺）

御詠歌：色も香も無比中道の藤井寺　真如の波のたたぬ日もなし

宗派：臨済宗妙心寺派　本尊：薬師如来（伝弘法大師作）　開基：弘法大師

創建：弘仁六年（八一五）　所在：吉野川市鴨島町飯尾

「天正の兵火」は二十八ヶ寺の札所が焼失　澄禅は「藤井寺は本堂東向き、本尊薬師如来。景色は素晴らしい。仁王門は朽ち失せ礎のみ残り、寺楼、本堂の跡も所々に残っている。今の堂は三間四面の草堂。二天、二菩薩、十二神、仁王などの像は朽ちた堂の隅に山のごとく積み重なる。庭の傍に小庵があり、法師形の者が出てきて仏像修理の勧進をというので奉加した。」と記し、荒廃した堂宇と聖勧進の途上であることを述べる。天正十年（一五八二）、長宗我部の兵火により全山を焼失した後の状況であった。三十五年後に訪ねた寂本は「寺の前には鐘楼があり、傍らには地蔵堂がある。鎮守の祠もあり、寺の下には仁王門も構えてある。」と再興の様子を書いている。

天正の兵火は、源平の合戦や信長の比叡山焼き討ちと同じ構図だろう。源平の戦いに熊野社の最

高権力者・別当湛増が自らの僧兵（熊野水軍）を参戦させ勝利に導いた。熊野別当は、全国に所領を持つ荘園領主のＣＥＯであり、荘園所領を結ぶ海上航路の権益も握っていた。軍事面では熊野水軍の最高司令官である。このような権力権益を保持するための僧兵と武士集団との衝突が比叡山の焼き討ちであり天正の兵火であったと考える。

天正の兵火後、七十年も経過し、今なお復興しない荒廃した札所の数々。長宗我部も悪いが、万人講など復興機運が起こらないのは民衆の心から乖離していった寺院側の驕りもあるのではないか。

ここから焼山寺まで嶮しい十三キロメートルの「へんろころがし」となる。

焼山寺（第十二番札所　摩盧山（まろざん）正寿院（しょうじゅいん）焼山寺（しょうさんじ））

御詠歌：後の世を思えば恭敬焼山寺　死出や三途の難所ありとも

宗派：高野山真言宗　　本尊：虚空蔵菩薩　　開基：役行者小角

創建：弘仁六年（八一五）　　所在：名西郡神山町下分字地中

地蔵と虚空蔵　御詠歌の「死出や三途の難所」と言われるほど遍路難所の一番である。次は横峰寺、雲辺寺、神峯寺といった所を歩き遍路は思い起こすが、徳島弁では「どこもなんじょなんじょ」。

澄禅は「本尊虚空蔵菩薩。堂の右に御影堂。鎮守は熊野権現。奥の院禅定という秘所が山上にある。岩屋、求聞持修行の所、赤井という清水、山上（弥山）には蔵王権現」と記す。寂本は「鎮守は熱田明神祠、さらに左は熊野権現社と拝殿、鳥居がある。（中略）本社（山上）が弥山（みせん）権現と

いう蔵王権現を祀っている。」という。この弥山について、五来重は「頂上のことをいう」と述べる。仏教の世界観で中心となるのが須弥山であることから、仏を祀る中心・山頂ということか。西日本に多く、奈良吉野・大峯奥駈道の弥山、広島宮島・厳島神社の弥山、鳥取・大山の弥山禅定、愛媛・石鎚山の弥山など全て霊地である。

本尊の虚空蔵菩薩は、空海が室戸岬の御厨人窟に籠もって虚空蔵求聞持法を修したという説話はよく知られている。虚空蔵菩薩とは、大地の蔵である地蔵菩薩と対となる、字のとおり天上の全てのものを蔵することであり「広大な宇宙のような無限の智恵と慈悲を持った菩薩」という意味である。そのため智恵や知識、記憶といった面での利益をもたらす菩薩として信仰されてきた。四国霊場では太龍寺と最御崎寺の本尊も虚空蔵菩薩であり修行の山寺である。明星が虚空蔵菩薩の化身とされていることは、空海の『御遺告』の「土左ノ室生門ノ崎ニ寂暫ス。心ニ観ズルニ、明星口ニ入リ、虚空蔵光明照シ来リテ、菩薩ノ威ヲ顕シ、仏法ノ無二ヲ現ズ。」のとおりである。

谷有二の『日本山岳伝承の謎』は太山寺の段でも紹介したが、この「虚空蔵」のほか、「逆川」「金山」「大同二年」なども金属地名というが、この地名が結構、へんろ道筋に出合うから不思議だ。

武四郎の軌跡

■徳島県吉野川市

麻植村（鴨島西麻植）十一番金剛山藤井寺（十一番札所藤井寺）長戸庵（長戸庵）

■徳島県名西郡神山町

柳の水庵（柳水庵）一本杉の庵（浄蓮庵・一本杉の庵）そうち村（下分左右内）十二番摩盧山性壽院焼山寺（十二番札所焼山寺）杖杉庵（杖杉庵）そうち村（下分左右内）阿川村（阿野地ノ平・阿川集落）

十一番札所藤井寺から十二番札所焼山寺へのへんろ道は第一級の「へんろころがし」である。それでも長戸庵、柳水庵、一本杉の浄蓮庵と折々の休む場所（修行の場）が設えてあるので長時間の道のりもしんどいながらリズミカルに進む。武四郎は焼山寺への最後の上りを「其坂十八丁登るに如何ニも遍路中第一番と思われる」と書くほどだ急登である。

そうち村という「左右」の話

武四郎はそうち村（左右内）について「山家也。谷のここかしこに家居す。」と記すように、狭隘な左右内谷の小平地に人家が点在する集落である。この左右内谷の南側、鮎喰川を挟んだ対岸に左右山（そうやま）がある。

左右内で「そうち」と読む。「そ・うち」なのか「そう・うち」なのか判別できないが、神山町下分に二つの「左右内」と「左右山」の小字があり、どちらも「そう」で「さゆう」と読まないところに何か意味するものを感じる。高知南国ＩＣ付近にも「左右山（そやま）（南国市国分）」がある。

日本語は左と右にそれぞれ違った意味を持たせている。高知では埋葬の帰宅後に箕に乗せてある塩をコマシ跨ぎしてとって浄めるがこのときも「左回り」である。初巳の正月（その年に亡くなった人の正月）に飾る注連縄の類を「左縄」にするのも、「ひだり」を不吉なものとして忌み嫌った

ものが習俗として残ったものだろう。日常生活のうえでは右を上位（右尊）として、左を「逆さごと」として忌ごとに使われてきた。

ただ神の領域となるとこれが逆転し左が上位（左尊）となる。神殿の前における座順は、神から見て、左側が上座。また神饌（神への供え物）の順序も、中央が最上位だが、次の順は神から見て左側となる。最上位の米を中央に置く場合でも幾分左に寄せるという。神社の注連縄も左ナイで、それを飾る場合もナイ始めを神から見て左側に設えることになる。社殿を回る場合も左マワリ（時計と反対）、神の前に進むときは左足を先に出し、退くときは右足からさがる（進左退右）。神輿を担ぐ場合も左肩でなければいけないというほど、神事ではなんでも「左」で間違いなかろう。

『字統』には「右手に祝祷の器を持ち、左手には呪具の工をもって神に祈ること。左右は神事の用語」とかかれている。「在我先王之左右、以佐事上帝」とあるよう、左と右の二文字を合わせて帝（神）を補佐する意味を持っているのだろう。先に左を書くことから順序としては左が優位を表しているということか。

古来から左と右に、「吉と凶」「聖と俗」「正と邪」の対の意味を持たせてきた民俗の歴史がある。また、東西南北といった方角地名は数知れずあるが、左右の方向はどこを基準とするかで違ってくるので地名としては特定しづらく命名されなかったのだろう。左右を刻んだ地名は意外と少ない。

高知県の大字・小字一覧で見た結果は次のとおりである（右近、○左衛門といった名前地名及び左古（サコ）地名を除く）。

美市物部町押谷「サヲカ」、香美市土佐山田町の大字「佐岡」、南国市の大字「左右山」、南国市国分「左右山村札場など」、南国市明見「右坂山」、本山町古田「右城」、本山町寺家「右城」、本山町七戸「右城谷」・「左城」、高知市土佐山高川「仙ドガ右」、高知市土佐山東川「右立」、高知市弘岡「岡左右」、土佐町西石原「左リガ谷」、四万十町芳川「右庵山」、四万十町下津井「左川口」、四万十市安並「左ヶ谷」、四万十市蕨岡に「右石野山」と「左石野山」、四万十市に大字「右山」と「佐岡」、宿毛市沖ノ島母島「左ノ瀬山」

弥山という霊山

焼山寺の「山を焼く」は龍燈信仰を想起させ、山上の「弥山（みせん）」は修験者の行場であり霊の宿る神聖な所である。どの山も物語を持っていて、その呼称で歴史が見えてくる。

山を意味する名称は「山（やま・さん・せん）」や「丸（まる）」や「森（もり）」の他、「岳（たけ）」「峰（みね）」「駒（こま）」「嵓（ぐら）」「仙（せん）」「岫・久木・釘（くき）」などたくさん見られる。日本人にとって山といえば富士山である。日本の超一流名クライマーであり地名研究者である古川純一は『日本超古代地名解』でこう述べている。

アイヌ語で山をフチと言い、それが富士山の語源であるという。駿河国風土記では福地と書いてフジである。富士山の「サン」は山の呼称としては、大陸から伝わった新しい呼び名である。常陸国風土記では「駿河國の福慈の岳に至り」とある。岳は西アジアのウル国のウル語でダカンであり、それが紀元数千年前に沖縄人によってもたらされた。沖縄本島の山の呼称は岳が四十で山が四のみである。対馬では岳は七で山が四十二となり、佐渡ヶ島ではつ

いに岳は○になり、山が四十一、山(さん)が六、峯が三になる。山と岳は日本に渡来した時期がことなっていることの証明である。（中略）日本の山の呼称は古い順に書くと、峯(ね)、根(ね)、峯(みね)、岳(だけ)、やま、山(さん)であるが、「富士山」にはこの全部の呼称があり、古くから親しまれてフチ、フジの呼び名があったことになる。

徳島では「丸」と語尾につく山が多い。ラグビー日本代表のあのルーティーンのしぐさで有名になった五郎丸という山もある。「森」が語尾に付く山も愛媛県と高知県に多い。マルもモリもムロ・ヒムロという語とともに神聖な樹林を表したものだろう。松尾俊郎は『地名の探求』で「山名の分布から見た地域的差異、交通路に関するもの、動植物の関係、気象現象とのかかわり、あるいは語源的に外来語との関係を考える上にも、山名は特異の対象ともなり、その地名的性格は複雑である」と山国日本の生活を考えるうえで山の持つ地名の意味を説明している。

私の家の裏山は「吹(ふき)の峰(とう)」というが反対側の集落は「ふきのみね」と呼ぶそうだ。そういえば四国で一番山らしい秀麗な山に「三嶺(さんれい)（一八九四メートル）」があるが、徳島県側では「みうね」と読みがふられる。土地が変われば名も変わる。

稲木と脱穀（焼山寺の麓・鍋岩）

ランドマークとなる高い山、信仰の山は別にして、暮らしの中で山名が使われる機会はあまりない。薪材の伐採や狩猟のため地元の山に入るにしても、「梼谷の右の山へ行ってくるけんね」とか「木屋ノ谷（こやんたね）から入る」と川谷の名前で特定することが多い。

地名アラカルト⑥

－四万十川－

四万十川の名称について時系列で各説を示すと①四万十の流れを集めた／1789 天明 9 年／宮崎八野右衛門の説②上流の四万川と中流の十川とを合わせた／1858 安政 5 年／防意軒半開の説③上流の四万川と下流の渡川とを合わせた／1811 文化 8 年／岡宗泰純の説④アイヌ語シマ説／1897 明治 30 年／寺石正路の説⑤アイヌ語シ・マムタ説／1928 昭和 3 年／寺田寅彦の説⑥アイヌ語シマト説／1953 昭和 28 年／建設省渡川工事事務所の誤写説⑦アイヌ語シマム・トー説／1997 平成 9 年／大友幸男の説⑧四万石を十回流す流域山地の流送可能材木数説／1999 平成 11 年／野本寛一の説⑨四魔（曼）・渡（十）川の吉田孝世による文学的創作説／1999 平成 11 年／腰山秀夫の説▼地名は共同で使用する符号である。地元の人にとっては「大川」「本川」で十分ことが足りる。『四国徧禮道指南』の遍路ガイドブックが出版されたのが貞享 4 年（1687）であるが、「大河」とだけ書き四万十川とは記述されていない。▼「四万十川」の初出文献資料を『土佐物語（1708 宝永 5 年）』としているが、同時代の土佐国地誌である『土佐州郡志』を初出とするのが正当と思う。中村郷中村土居村の段に「渡川　在村西宿毛往還路源自津野山出與豫州川合是四万十川之下流過村入下田浦」と記す。

徳島県名西郡神山町阿野本名（植村旅館）
～　三〇・一キロメートル／九時間三一分
徳島県徳島市元町（スマイルホテル徳島）

活動日記

神山町の「植村旅館」を逆打ち遍路の同宿者と六時前の朝食、六時十五分には出立となった。ホノルルマラソンにも出場したという健脚者でも藤井寺までのロードは心配なのだろう。やはり、東京の人は物静かだ。納経所で「あなた、高知でしょ。明るく喋るからすぐ分かる」と言われる。喋るというよりは愛想よく声をかけると自己分析。和顔施、愛語施は無財の七施の二つである。

今日はアスファルトの遍路道の連続だ。

宿から三時間歩いて十三番札所大日寺。バス停は「一宮札所前」とある。阿波国一之宮の一宮神社ではスズメバチの巣を退治していた。総代さんとはスズメバチ談議はしたが肝心の大日寺との関係について聞くことを忘れた。そこから、

潜水橋のへんろ道（神山町阿野駒坂）

十四番札所常楽寺、十五番札所国分寺、十六番札所観音寺、十七番札所井戸寺と昼までに終えることができるほど離れることなく札所が続く。

今日は徳島市内で「四国遍路と徳島藩」という徳島城博物館の特別展を参観した。第一章で弘法大師信仰と衛門三郎伝説の展示があった。石手寺から岩屋寺、石鎚山にかけて熊野信仰が強い地域で衛門三郎の熊野信仰がいつしか弘法大師伝説に置き換えられたと記述があった。焼山寺下にある「杖杉庵」が衛門三郎の墓所でありその縁起も書かれていたが、熊野信仰、高野聖など四国遍路を育てた周辺の説明はなく「四国遍路は弘法大師信仰」のとステレオタイプの解説しかない。得てしてこういうものだろう。第二章で蜂須賀藩主の「駅路寺」の展示もあった。遍路の庇護政策のみの記述で物足りなかった。第五章の旅する巡礼者と迎える地域は、巡礼者の数や宿泊の方法、へんろ道とは何か、テーマから期待するものがあったが展示資料の不足など掘り起こしが足りない感じがした。松浦武四郎の紹介があったのは評価できる。巡礼者の所作などについて記述されたのは武四郎の『四国遍路道中雑誌』が初出と思われるが、巡礼者の所作等についての展示はなかったのは惜しまれる。徳島県図書館に行く予定であったが時間切れで本日の日程終了。

大日寺（第十三番札所　大栗山（おおぐりざん）花蔵院（けぞういん）大日寺（だいにちじ））

御詠歌：阿波の国一宮とはゆうだすき　かけて頼めやこの世のちの世

宗派：真言宗大覚寺派　　本尊：十一面観世音菩薩　　開基：弘法大師

創建：弘仁六年（八一五）　　所在：徳島市一宮町西丁

大日寺は大日如来ではない神仏分離の不思議　寺名から本尊が大日如来かと思ったら十一面観音菩薩である。それには深い歴史があった。

澄禅は「一宮は松竹の茂っている中に東向きに建つ。前に五間ほどの反り橋があり、拝殿は左右三間。殿閣は立派だ。本地十一面観音。」、寂本は「大栗山華蔵院大日寺　この寺は弘法大師以前の開基のようだ。大師がここに遊ばれ大日如来の像を刻み安置されたから大日寺という。今の本尊である十一面観音菩薩は一宮の本地だといわれる。この寺の奥の院といわれるところは、ここから十八町西にあり、本尊は薬師如来。山上には滝権現があり本地は不動明王の石像。花蔵院というのは、花の谷・花の蔵というところがあり、これによって名付けられた」と書き記されている。また、寂本の一の宮図にはあくい川（鮎喰川）に沿って大日寺があり、焼山寺からの道を隔てて本社が東向に描かれ、春日、伊勢、八幡、丹生の脇社がそえられている。御詠歌にも「阿波の国一の宮」とあるが、室町時代以前はここが一宮だという説もあるのでその時代に詠まれた歌なのか。阿波の一の宮は大麻比古神社（別当寺・霊山寺）と思ったが、寂本の真意は不明である。また、奥の院は十八町（二キロメートル）西にあるというから、建治寺（徳島市入田町金治）のことに間違いない。

武四郎は「名東郡一ノ宮村ニ在。又寺号を大日寺とも云り。別当は花蔵院ニ而、社家は笠原丹後と云て別ニ在る也。」とある。

江戸期は一の宮神社が札所。本地仏は十一面観音である。澄禅の時は一ノ宮の一宮寺（本地堂）に本尊が安置され、寂本の時に大日寺が里に下りてきて、十一面観音を本尊としながら旧寺名の大日寺を引き継ぎ、もともと寺にあった大日如来は脇仏となったということか。紛らわしい話である。

常楽寺（第十四番札所 盛寿山（せいじゅざん） 延命院（えんめいいん） 常楽寺（じょうらくじ））

御詠歌：常楽の岸にはいつか到らまし　弘誓の船に乗りおくれずば

宗派：高野山真言宗　本尊：弥勒菩薩　開基：弘法大師

創建：弘仁六年（八一五）　所在：徳島市国府町延命

四国霊場唯一の弥勒菩薩　弥勒菩薩が本尊となるのは四国霊場でここだけである。

澄禅は「本尊は弥勒菩薩。ここも小さい草堂」とだけ記す。寂本は「昔の本堂は七間四方もあったと思える。今は礎石が残っている茅葺の家の傍らに一庵だけがあるが人は住んでいない」と二人とも衰退した寺の様子を綴っている。武四郎の時代になると「境内茶堂、茶店有。又門前ニ而止宿するニもよし」と四国遍路の興隆がうかがえる。

隣が奥の院で、生き木の地蔵がある。五来重は「奥の院の成立にはいろいろあり長尾寺などは隠居寺を奥の院といっている。ここの場合は分からないが（隣に奥の院）札所を二カ所持っているお賽銭も二倍になりますから」と手厳しい意見が付せられている。

國分寺（第十五番札所 薬王山（やくおうざん） 金色院（こんじきいん） 國分寺（こくぶんじ））

御詠歌：薄く濃くわけわけ色を染めぬれば　流転生死の秋のもみじ葉

宗派：曹洞宗　本尊：薬師如来　開基：行基菩薩

創建：天平十三年（七四一）　所在：徳島市国府町矢野

国家から離れた国分寺の末路　御詠歌は「人生いろいろ」と、島倉千代子の歌のようだ。

澄禅は「小さい草堂。本尊は薬師如来。梁も棟も朽ち果て仏像の体もそろっていない。」、寂本は「国家鎮護のための教化がなされて、さほどの年月も経っていないのに多くの国分寺は官吏とか豪家によって侵掠され荒廃した。ずっと昔でもこんな状態であった。だから千年経った現在では朽ち果て、往時の面影が失われているのも無理からぬことだ。今はこの地も廃れ名ばかりである。小堂一宇に薬師如来を安置し、清貧の高野僧がひとり寂しく住んでいる。ああ」と荒廃ぶりを嘆いている。国分寺図にも礎石の残る境内に茅葺の庵と弥勒堂が描かれその裏に塔跡と天神が添えられている。

四国八十八ヶ所霊場はどこも繁華に造営を進めている。かたや、田舎の産土神社は消滅集落とともに朽ち果てようとしている。田舎のお寺も兼業でやっと本堂を維持している状態だ。二極化する世界は宗教界にも言えることだ。「欲望の資本主義」を止揚するテーゼを示せない宗教界は「国分寺」に似ている。

観音寺（第十六番札所 光耀山（こうようざん） 千手院（せんじゅいん） 観音寺（かんおんじ））

御詠歌：忘れずも導きたまえ観音寺　西方世界弥陀の浄土へ

宗派：高野山真言宗　本尊：千手観世音菩薩　開基：弘法大師

創建：天平十三年（七四一）　所在：徳島市国府町観音寺

八十八ヶ所の選考基準は「この指たかれ」　ここは、カンオンジ。街の中の小さな札所である。

澄禅は「本尊は千手観音。ここも荒れていた。小さな草堂も軒端が朽ちて棟柱が傾いている。形ばかりである。昔の寺の跡という畠の中に大きな石が並んでいる。近くの人に、いつからこのよう

になったのかと聞いたが分からないという。お堂は近くの百姓たちが話し合って時々修理するという。」と述べている。五来重は「村の八幡宮の別当寺」。ことは言わないまでも八十八ヶ所をそろえるときに割り込んできた寺もあるという。境内の右肩に八幡神社と惣社大明神を合祀した由緒書きの石碑がある。

井戸寺（第十七番札所 瑠璃山（るりざん） 真福院（しんぷくいん） 井戸寺（いどじ））

御詠歌：面影をうつしてみれば井戸の水　結べば胸のあかやおちなん

宗派：真言宗善通寺派　　本尊：七仏薬師如来　　開基：天武天皇

創建：白鳳二年（六七三）　　所在：徳島市国府町井戸北屋敷

本名は明照寺　澄禅は「井土寺は堂舎がことごとくなくなり、昔の礎のみ残る。二間四面の草堂が本堂である。本尊薬師如来。寺はくず家、あさましいありさま。」と記す。札所が続く鮎喰川流域であるが江戸初期にはことごとく荒廃している。

寂本も「瑠璃山明照寺真福院は別名井戸寺と呼ぶ。里の名から来ている。古い本尊は胴体が朽ち御首だけが残っている。今の本尊は大師の御作で座像五尺。日光月光の脇士と四天王の像がある。鎮守は八幡社と楠明神」と述べている。

井戸寺には、七仏薬師如来と十一面観音と日光月光菩薩と四天王と八幡神社と楠明神と多様な神仏がそろい踏みしている。五来重は飛鳥白鳳に建てられた古い明照寺と水神の庶民信仰に大師伝説が加わった堂宇ができ、いつしか一緒になったと推考している。

武四郎の軌跡

■徳島県名西郡神山町

阿川村（阿野地ノ平・阿川集落）廣野村（阿野広野）

■徳島市

入田村（入田町）一ノ宮奥院（建治寺）観正寺（観正寺）十三番大栗山花蔵院一宮寺（十三番札所大日寺）十四番盛壽山常楽寺（十四番札所常楽寺）十五番法養山金色院国分寺（十五番札所國分寺）十六番光耀山千手院観音寺（十六番札所観音寺）かうの村（国府町府中）井土寺村（国府町井戸）十七番瑠璃山明照寺眞福院（十七番札所井戸寺）徳島（徳島城下）

武四郎が広野村（神山町阿野広野）を歩くとき「此辺道の傍に竹を立是にわらじをくくり付け、銭の丸を四ツ、五ツ位ヅツ書て直段をしらしうり置。また重箱ニ蓬餅を入道のはたにうり置。昔しより是を一ツとして盗去りしものなしと云伝ふ也」と良心市方式の商いを紹介し、人情純朴な阿波、土佐、南予は良心市方式でも盗人の心配はないが、東予から讃岐にかけては「お化け遍路」が多くて良心市は成り立たないと感想を述べる。江戸末期においてさえ経済格差が貧困を生み貧しさが悪さを醸成する。そんな負のスパイラルは今も同じということか。

令和の時代になって賽銭泥棒が多発していると監視カメラの映像がニュースに流れる。

止宿するによろし

武四郎は「止宿するによろし」と各地で宿を案内する。本人が泊まったかは定かでないが五十六カ所に書き留めてある。また、茶堂、茶店、茶屋、茶所と使い分けてあるが、詳細の説明はない。

「茶堂」について、武四郎は「二王門入て茶堂」「境内ニ茶堂」と書いていることから、茶堂は札所が運営する無料宿泊所ではないか。十五カ所で「止宿するニよろし」と茶堂を案内する。四国南西部に多い「お茶堂」は、村の大師堂の役割とともに遍路の接待や宿泊にも利用されているが、これと同じ機能を有するものと思える。今でも境内にある無料宿泊所は三十七番札所岩本寺などにある。

「茶屋」は、休憩場所を提供するとともに注文に応じて茶や和菓子を提供する。滞在消費を目的として寺社の門前や峠や景勝地に小屋掛け風に設えたもの。門前の参拝客に「一服一銭」でもてなしたのが始まり。『東海道五拾三次』にも茶屋が多く描かれている。基本的には宿泊サービスはしない。今の車社会における「サービスエリア」といったとこか。

「茶店」と記した所が一番多い。「門前茶屋、茶店有。止宿するニよろし」と書いているが、止宿する所が茶屋なのか茶店なのかは分からないが三十四カ所で「茶店」を示し、「茶屋」は三カ所だけと少ない。このことから「茶店」は「茶屋」の役割とともに簡易な宿泊場所も提供したのではないかと考える。「茶所」は一カ所しか記載されていない。

四国遍路 二十九日目（徳島市～18・19～勝浦町）

徳島県徳島市元町（スマイルホテル徳島）
～ 二八・九キロメートル／八時間四七分
徳島県勝浦郡勝浦町坂本（ふれあいの里さかもと）

活動日記

徳島市の「スマイルホテル」を七時十五分に出立。通勤通学に忙しい朝の幹線道路を南に進む。今日は、十八番札所恩山寺、十九番札所立江寺を参拝し、明日の山寺・二十番札所鶴林寺と二十一番札所太龍寺を登るために麓の「ふれあいの里さかもと」に宿を取った。鶴林寺への登り口から六キロメートルくらい離れているため送迎があるという。道の駅で待ち合わせ、宿に着いたのは十六時くらいだった。

街中の遍路道は生活の匂いがする。特にゴミステーションが地域に特徴があって面白い。香川や徳島では、ステーションを利用できる者の常会名と世帯主の氏名が書かれているのには驚いた。高松市の公営住宅では住宅番号とともに入居する世帯主の氏名も団地の入口に掲示してある。だれも、異議

喜田貞吉の銅像（小松島市櫛渕）

がないようなので不思議である。

へんろ道すがらに巨木や銅像などに出会う機会が多い。今日のイチ押しは恩山寺の山門にある「ビランジュ」の巨木と「喜田貞吉」の銅像だ。ビランジュは別名バクチノキ、身ぐるみ剥がされ赤肌を出している様子だ。喜田は歴史学者で『賤民とは何か』の本を読んだ。差別と被差別の構造を歴史的に考察した著書であった。銅像の説明に小松島市櫛渕の出身とあった。恩山寺の付近に源義経上陸の地の碑があった。大阪の渡辺湊から出陣し嵐によりこの地につき、ここから屋島に向かったという。田辺湛増率いる熊野水軍は屋島の合戦には間に合わなかったというからこの地には来てなかったか。

今日の宿の坂本地区には「慈眼寺」がある。この宿も気に入ったのでぜひ再訪し、慈眼寺と星の不思議を見て感じたい。

恩山寺（第十八番札所 母養山（ぼようざん） 宝樹院（ほうじゅいん） 恩山寺（おんざんじ））

御詠歌：子を生めるその父母の恩山寺　訪らひがたきことはあらじな

宗派：高野山真言宗　本尊：薬師如来　開基：行基菩薩

創建：天平年間（七二九～七四九）　所在：小松島市田野町字恩山寺谷

花折は祈りのしるし　寺の縁起は「弘法大師の生母・玉依御前が讃岐の善通寺から訪ねてきた。だが、寺は女人禁制、大師は山門近くの瀧にうたれて七日間の秘法を修し、女人解禁の祈願を成就して母君を迎えることができた。」というもの。創建当初は大日山福生密厳寺であったが、弘法大

師により再興され母親を迎えて寺名を改めたという。

恩山寺へは花折坂と弦巻坂の二つの坂がある。花折は花や柴（榕・榊）を手向けることで、それ以上いけない結界の場所や路傍の神であったりする所に「花折」「枝折」「柴立」の地名が各地に刻まれている。信仰地名でもあり、昔の往来を示す地名でもある。長尾寺から大窪寺に向かう途中、前山のおへんろ交流サロンからの山越えも「花折山へんろ道」である。

「ハナ」は突端、岬を意味する言葉でもある。この恩山寺の尾根のハナに「源義経上陸の地」の石碑が立っており、すぐ近くに「弁慶の岩屋」もある。中世はここまで海だったのだろう。その西の島（今は陸続き）に恩山寺奥の院・金磯弁財天がある。

立江寺（第十九番札所 橋池山（きょうちざん） 摩尼院（まにいん） 立江寺（たつえじ））

御詠歌：いつかさて西のすまいのわが立江　弘誓の舟に乗りていたらむ

宗派：高野山真言宗　　本尊：延命地蔵菩薩　　開基：行基菩薩

創建：天平十九年（七四七）　　所在：小松島市立江町字若松

四国第一の「心の関所」　澄禅は「本尊地蔵菩薩、庫裏は西向き、坊主は無学だが利発で富貴第一で、破損した堂寺を再興したという。堂寺の様子は誠に無能さを感じさせる。景色は立江の名にふさわしい。海の入江がここまで川のように三里入り込んでいる。」と思いのまま述べる。寂本の立江寺図は、立江村の八石橋を過ぎて参道が続き、境内に本堂・大師堂・本坊・鐘楼などが描かれる。海が立江寺まで入り込んでいたのだろう。武四郎は「境内に石の八ッ橋と云もの有」として鎮

守熊野権現を記す。

『阿波志』によると地蔵寺とも称されたようで、蜂須賀家政の入部に伴い、もと清水谷（きよず）にあった当寺を現在地に移したとある。また『四国霊験奇応記』には「四国第一の御関所なれば霊験日々に感応ますます盛んにして恐れざる者一人もなし、四国七八合も札納て此立江寺より一寸も先に行れず跡にもどる人数多あり」と立江寺が四国霊場の最大の難所と書かれている。四国霊場には国に一つずつ「関所寺」とされる札所があったという。阿波の国は「立江寺」、土佐の国は「神峯寺」、伊予の国は「横峰寺」、讃岐の国は「雲辺寺」である。通行手形による関所ではなく邪悪なものはこの先には進めないという「心の関所」。立江寺には江戸時代、不倫の末に夫を殺して、不倫相手と四国遍路をした女が本尊の前で黒い髪が逆立ちして一歩も進めなかったという「黒髪堂」の説話がある。心当たりのある方よくよく注意のこと。

武四郎の軌跡

■徳島市

徳島（徳島城下）二軒屋村（二軒屋町）つめた川（冷田川）法花川（八万町法花）西塔村（西須賀町）

■徳島県小松島市

ゑた村（江田町）しほ村（芝生町）田野村（田野町）十八番養母山恩山寺（十八番札所恩山寺）奥院（金磯の弁財天）紫雲山釋迦庵（釋迦庵）つかまき坂（弦巻坂）立江町（立

江町）十九番橋池山地蔵院立江寺（十九番札所立江寺）

■徳島県阿南市

中ノ庄（羽ノ浦町中庄）寳珠山拳正寺（拳正寺）

■徳島県小松島市

くしぶち村（櫛渕町）

■徳島県勝浦郡勝浦町

星寺（星谷寺）星谷村（大字星谷）坂本村（大字坂本）横瀬村（三渓）かつら川（勝浦川）與川内村（三渓）坂本村（大字坂本）きわだ村（大字坂本稲原・黄檗集落）灌頂ヶ瀧（灌頂ヶ瀧）鶴山奥院（慈眼寺）

立江寺の南に「取星寺」がある。所在地は羽ノ浦町明見とあることから、妙見信仰を刻んだ地名である。弘法大師が太龍寺で修行のとき、地上に禍をもたらす妖星があり、それを撃ち落とし、納めた所が「取星寺」である。また、鶴林寺の麓の生名の対岸に「星の岩屋」や「星谷寺」がある。森下年晃の『星の巫』にアイヌ語と日本語の共通の祖語とする縄文語としての「星」に大きな意味を持つという。その星・細地名の点の分布から線、面の物語となる。

「星」という行場

星といえば北極星。漢名は「北辰（ほくしん）」で、中国では天空の星座がこの星を中心として回転することから、古来方位を定めるために利用され、崇拝された。「北辰」は古くから日本に伝わり和名では

「子の星」「一つ星」などと呼ばれた。

もう一つの星が柄杓の形をした「北斗」である。この柄の方向によって時を計り季節を知る重要な星であるとともに、それを占い支配するものが司祭となり、民を支配していったのだろう。日本でも平安以来、この北極と北斗を本地とした妙見菩薩信仰が盛んになり各地に妙見堂が建てられた。

高知県の小字一覧で、「妙見」を刻む地名として「妙見山」「妙見谷」「妙見田」「妙見ヤシキ」「明見」「明現」などが七十三カ所ある。

『高知県神社明細帳』には星神社が百一社ある。北川村木積の星神社（旧郷社）は「お弓祭」が有名で高知県無形文化財に指定されている。同じく四万十町十川の星神社の「幡多神楽」も高知県無形文化財に指定されている。近年、『北斗の拳』とコラボして有名になった。

徳島県勝浦郡勝浦町坂本（ふれあいの里さかもと）
～　二四・九キロメートル／九時間三三分
徳島県阿南市新野町秋山（山茶花）

活動日記

旧坂本小学校を活用した「ふれあいの里さかもと」の保健室でいい朝を迎えた。いつもの二杯飯でエネルギーを蓄え出立。鶴林寺の登り口まで六キロメートルほどあるが車で送ってくれるサービスがある。当然甘えて同宿の人と送っていただく。途中、横瀬で降りて「星谷」に寄ることにした。今日は、二十番札所鶴林寺、二十一番札所太龍寺、二十二番札所平等寺の三ヶ寺であるが山越えが三つあるコースで、宿は平等寺から歩いて八歩の「民宿山茶花」に泊まる予定である。

鶴林寺への登りは、ゆっくり一時間三十分。地元の健康ウォーキングに利用されているみたいで登り口には金剛杖が置いてある。ほぼ全コースコンクリートやアスファルトで舗装されているが一部、土道を選択できるところもある。いっ

廃校の宿「ふれあいの里さかもと」

たん降りて次の太龍寺に向かうのだがやはり下りがしんどい。水井(すいい)橋を渡って太龍寺への登尾となる。上流部に行き着くと消えた集落があった。お宮があり廃屋があり石垣の段々畑には去る者の決意がうかがえる杉が植えてある。もう五十年前の記憶だろう。ここは国指定の史跡「若杉山遺跡」がある所。数千年暮らした歴史を消し去るものは山で暮らせない政治の貧困、都市の論理そのものだ。そんな苛立ちを抱えながら歩くヘンロである。

太龍寺は地内全体に重厚さが漂う。坂本の宿で同宿した二人と出会い、昼のおにぎりを一緒に食べた。下りの道を尋ねると「イエローブックの十一版には載ってないが、新ルートがある」とのこと。新ルートは、登り道から始まり不思議に思っていたら「舎心ヶ嶽」に着いた。修行の弘法大師が高野山を望む坐像がある。遠く徳島や阿南、その向こうの海も見える。海が見えること、海につながっていること、海から見えること、これが補陀落渡海の要となるのだろう。

下りの道は、その舎心ヶ嶽を巻いて、太龍寺の谷向かいの稜線を阿瀬比まで下ることになる。平等寺には下り終えてまた大根峠を越さなければならない。平等寺に着いたのは十六時過ぎだった。平等寺はコロナ禍に対応したリモート参拝で有名な所。ちょうど、十六時二十分からYou Tubeでのライブ配信をしているさなかであった。

今日の宿は平等寺の隣の「山茶花の宿」である。くつろげる宿とは、このことだろう。

今回はここでひとまず打ち切り、再開は十一月十七日から十日間の予定である。宿の女将さんにもそのことを告げ錫杖をひとまず預けて再会を約束した。

四国遍路の完結まで少しの猶予を。

鶴林寺（第二十番札所 霊鷲山 宝珠院 鶴林寺）

御詠歌：しげりつる鶴の林をしるべにて　大師ぞいます地蔵帝釈

宗派：高野山真言宗　本尊：地蔵菩薩（伝弘法大師作）　開基：弘法大師

創建：延暦十七年（七九八）　所在：勝浦郡勝浦町生名鷲ヶ尾

大師勧請の鎮守熊野権現　釈迦が沙羅双樹の林の中で亡くなると沙羅の林は鶴のように真っ白になったということで、釈迦の涅槃を「鶴林」という。霊鷲山は釈迦が最後に説法した所。なんともありがたい寺名である。寂本の鶴林寺図には多くの堂宇が描かれている。順に記すと、猟師墓、仁王門、荒神、八幡、春日、六地蔵、菩提樹とあって、北宝院、不動院、愛染院、宝積院、東蔵院、石室院と坊が続き、水神、閼伽、手水、鶴林寺本坊、護摩堂となって、ここから本堂に向け、鐘楼堂、鶴守神、手水、本堂、大師堂があって鎮守（熊野権現社）、弁天となる。

鶴林寺、太龍寺など、ここ周辺は弘法大師にとっても重要な行場であったのか、寂本も札所だけでなく取星寺、慈眼寺の紹介も詳しくしている。五来重も書いているように初期の四国の辺路は讃岐の我拝師山から、大滝山、高越山、焼山寺山、灌頂ヶ滝（慈眼寺）、鶴林寺、太龍寺のルートであった。ほぼ一直線であり、ここから直角に南西へ向かうと室戸となる。山林斗藪の修行者は星を知り方位を知るすべを持っていたのだろう。

奥の院は、慈眼寺である。

太龍寺（第二十一番札所 舎心山 常住院 太龍寺）

御詠歌：太龍の常にすむぞやげに岩屋　舎心聞持は守護のためなり

宗派：高野山真言宗　　本尊：虚空蔵菩薩　　開基：弘法大師

創建：延暦十二年（七九三）　　所在：阿南市加茂町龍山

身を捨てるか、心をとどめるか　澄禅は「大龍寺（※ママ）は山号捨身山、本堂南向き、本尊虚空蔵菩薩。宝塔・御影堂・求聞持堂・鐘楼・鎮守社のある大伽藍。古木が寺を囲み景色のいい天下無双の霊地」と述べる。寂本は「舎心山常住院太龍寺」と書いている。「捨身」と「舎心」と二つの漢字が当てられている。「捨身」は自分の命を仏に捧げること。「舎心」はこの太龍寺の「北舎心ヶ嶽」に来て初めて知った。『字統』によると舎は、祝祷を収める器の上から長い針器でこれを突き通す。これによって呪能を失うので捨てるの意味となる。すなわち舎は捨の初文と解説する。また、一方では祝祷の器を破る意から内容を外に宣べる意となり、おく・やどるの意を持つようになった、とある。捨てるととどめ置くでは正反対のようだが、ここでの「舎心」はここに立つ人の心を舎（とど）めるという意味だそうだ。自殺する心をとどめるのは分かるが、仏への修行の場としては「捨身」が正しいように思う。澄禅と寂本の三十五年間で寺の持つ意味まで変わるのか不思議だ。

平等寺（第二十二番札所　白水山（はくすいざん）医王院（いおういん）平等寺（びょうどうじ））

御詠歌：平等にへだてのなきと聞く時は　あらたのもしき仏とぞみる

宗派：高野山真言宗　　本尊：薬師如来　　開基：弘法大師

創建：弘仁五年（八一四）　　所在：阿南市新野町秋山

コロナ禍のリモート参拝　平等寺本堂のライブ配信やリモート参拝は有名である。読経の時間や回数が多いのにも驚かされる。そう大きくはない境内ではお接待もしていた。本堂に行くと手を振ってしまうのはライブ配信のせいだ。

この寺には「箱車（躄車）」が奉納されている。平等寺には「通夜堂」があって長期間滞在し祈願できたという。奉納に当たって本人が書いた由来書き「四週間通夜し躄全快」がある。

高知縣土佐郡地蔵寺村付の者筒井林之助（三十三才）は、大正十年五月脊髄病となり病勢日夜に重り遂に躄となり、此時日頃信仰せる弘法大師に御利益得んものと躄車を作り、父福次（五十六才）の手厚き看護を受けつゝ西國順拝の途に登り、大正十一年十二月十日下旬當山に参拝し、四週間程通夜し日夜當院主様の御加護を受けて一心に御本尊様に平癒を祈願してゐた所、漸次に此の痛みは薄紙を剥ぐ如く和らぎ、両杖にて歩行する事が出来る様になり、父と共に有難涙に御禮を御本尊様に申し、喜びのあまり車を奉納致します。大正十二年十月十七日　高知縣土佐郡地蔵寺村　筒井林之助。

箱車といえば小栗判官の説話が有名である。蘇生するために箱車に引かれて熊野の湯の峰に向かった。熊野詣において湯垢離場として栄えた日本最古の湯「つぼ湯」である。小栗判官説話にまつわる「車塚」「力石」「蒔かずの稲」などの故地・地名が熊野本宮大社のすぐ近くに残っている。

ここ平等寺にも、弘法大師が護摩修行をしたという「護摩ヶ谷（護摩堂）」、塔が建っていた「塔ヶ峰（愛宕神社付近）」「蓮池（池の跡）」など地元の人しか知らない地名が残っているという。地名は漢字だけで理解するのは間違いとなる。この寺の所在地は新野だが、古文書では「荒田野」

となっている。たぶん後に佳名に改めたのだろう。平等寺からへんろ道をそれて新野駅に向かう途中の字名が面白い。「馬場」「入田」「室ノ久保」「反古田」「鉛ヶ谷」「花坂」と興味のある小字が続く。入田と鉛ヶ谷は入がニフ（丹生）で「赭（まそほ）」、鉛は鳥居の朱となる「鉛丹」。反古田は旦過の費用に充てる仏供田の一つか。地内には「室姫神社（室比賣神社）」や岡山城という中世の山城もある。

武四郎の軌跡

■徳島県勝浦郡勝浦町
　廿番靈鷲山寶樹院鶴林寺（二十番札所鶴林寺）

■徳島県阿南市
　大井村（大井町）鶴瀬川（那賀川）廿一番舍心常住院大龍寺（二十一番札所太龍寺）南の舍心（舍心ヶ嶽）山口村（不明）あせび村（阿瀬比町）おおね坂（大根坂）あらた村（新野町）廿二番白水山醫王院平等寺（二十二番札所平等寺）

※「山口村」は「あせび村」の次の村で「おおね坂」を通れば道外れとなる。

武四郎は「星寺」「慈眼寺」と詣でてから二十番札所鶴林寺、二十一番札所太龍寺へと向かう。五来重は『四国遍路の寺』で「おそらく初期の四国の辺路は、讃岐から大窪寺を経て阿波に出ると、藤井寺で山に入り、長戸庵、柳水庵を経て、ほとんど直線で焼山寺山に登ったと推定できます。それから東に鬼籠野に下がって、高鋒山の旭ヶ丸を越えると鶴林寺の奥の院である慈眼寺の洞窟にでます」と述べ、空海が修行をした「阿波の辺地」は藤井寺、焼山寺、鶴林寺、太龍寺、薬王

寺という線だという。

「亡所」という捨てられた村

白鳳地震（六八四年）では土佐国の「黒田郡」が消えたという。戦争では米軍・普天間基地の接収に「オキナワ」の一万四千人が追われ、原発事故では「フクシマ」が亡所となった。高知県芸西村には集団移転の「久重山（くえやま）」がある。

「亡所」は災害や戦争、支配者の圧政、政治の貧困など何らかの理不尽なチカラで押しつぶされた生活の場であると『世界』の連載記事「亡所考（二〇二一年一月号～）」は定義する。

亡所の象徴のような久重山。離村した村人が三十年も続いて同郷会を開いている記憶の村である。そんな亡所が四国山間どこにでも見られるようになったのは「第二の火」が要因といえる。峠越えのへんろ道の傍らには炭窯の廃墟を幾度となく目にする。昭和三十年代の都市ガス・ＬＰガスの普及という石油エネルギー革命により、木炭需要が激減したのであった。炭焼きで暮らしが成り立たなくなり焼き子は次々と山を下りていった。いわゆる「過疎化」の始まりである。四国山間の村々では十年で三十パーセントは人口減となった。そんな過疎地域に国は「過疎法」という法律で財政支援する一方で、木材の輸入自由化という第二の仕打ちを行った。国産材自給率は激減し、昭和三十年（一九五五）に九十五パーセントであったものが昭和四十五年（一九七〇）には四十五パーセント、平成十四年（二〇〇二）には二十パーセントまでに落ち込んだ。セイジノヒンコンで生活の場は押しつぶされた。

二十番札所鶴林寺を下って大井集落から水井集落に渡り、二十一番札所太龍寺への上り道に入る所が若杉山である。若杉山辰砂採掘遺跡の説明板があった。辰砂は墳墓の石室や棺に塗られる鮮やかな赤色を発する水銀朱で、ここ若杉山は古墳時代の採掘方法を知ることができる全国唯一の遺跡である。松田壽男の『古代の朱』には全国三百六十五地点の水銀鉱床を調査して辰砂を示す「ニフ（壬生・入）」の地名や神社を探し当てている。古代から暮らしをつないできた若杉山集落も今は「亡所」である。集落を去る人は必ず屋敷地に杉桧を植える。もう帰らないという覚悟であるのだろうが、風呂場のセメント跡や廃墟となった神社はいっそう「亡所」を証明しているようである。

「第三の火」は原子力である。亡所は「フクシマ」とカタカナ書きされた。広島、長崎も原爆で「ヒロシマ」「ナガサキ」となった。どちらもいつか再生できる亡所であるが、その原因をどうして廃絶できないのか。それは過去の秩序（遺産）に胡坐をかく二世政治家にはできない所作である。コロナを克服したら「ノーモア」の百万人デモを金曜日広場でやったらどうだろう。

戦争での亡所は「オキナワ」だろう。沖縄に上陸した米軍は普天間飛行場建設のため宜野湾など

若杉山遺跡の説明板（阿南市水井町）

四つの集落を強制接収し、約一万四千人が「亡所」となった。本土では復興政策が図られたが沖縄は放置状態で「忘れられた島」と当時いわれていた。昭和四七年（一九七二）本土に復帰したものの、五十年後の今でも、全国の米軍専用施設の七十パーセント（一八五ヘクタール）が沖縄に集中するという。ちなみに東京都は五パーセント（十三ヘクタール）、北の守りといわれる北海道は二パーセント（四ヘクタール）に満たない。

「亡所」はいつの時代も寄り添うという政治家の二枚舌に翻弄され、切り捨てと抵抗のベクトルがメビウスの輪のように周回する。

愚草の川柳集⑮選

「ひとや」

2019 / 秋

あとのない氷のカベと砂のクイ

千一夜　もしやカショギ氏筆執るや

寸鉄の一切なりゆき　ヒ首なきや

ＡＩの指紋ふきとる　碁石哉

文子の死　ひとや調べるセレナーデ

※「ひとや」とは何だろう。大正中津川には農家民宿「はこば」があり、そのおかみさんが客子（ひとこ）さん。その宿の隠語かなと思いつつ調べてみたら「獄」の意味という。最終句でわかった。愚草の世界観、生き方がよくあらわれた川柳集が「ひとや（獄）」。最終句「文子の死」はさっぱり読めない歌だったが、ネットで金子文子とわかった。

HP「四万十町地名辞典」引用

四国遍路 三十一日目（阿南市新野町～23～美波町日和佐）

徳島県阿南市新野町秋山（山茶花）
～　二七・八キロメートル／八時間五六分
徳島県海部郡美波町日和佐浦（ホテル白い灯台）

活動日記

十八日ぶりにＪＲ牟岐線新野駅に着いた。前回焼山寺の麓で手を振って別れた母娘の二人にすれ違った。区切り打ちをしていると言っていたので間違いないと思うが、互いにマスクをしている。一瞬であったため声をかけることができなかったことを後になって悔やんだ。

平等寺門前の「民宿山茶花」を朝六時三十分に立ち、アスファルトの道を快調に足を進めた。同宿の出利葉さんは国道五十五号線を選択し先を急ぐという。もう一人のＫＥＩＫＯさんは、ゆっくりの出立という。「月夜」「鉦打」と、久しぶりの歩きを楽しむ。武四郎は「田井村」を通っているので海岸通りを選んだ。由岐坂峠を越えると田井の浜となる。

田井の浜には海水浴シーズン限定の臨時駅がある。降りれ

田井の浜臨時駅（美波町田井）

ばもうそこには海が広がる。当然ながら線路は砂浜に並行して走る。程なく木岐から海岸のウバメガシの魚つき林に沿ったへんろ道となる。数時間アスファルトを歩くと足先がへたってくるが土道は優しくマッサージしてくれる。

和顔施のお接待を受けたのはこの「木岐のへんろ道（俳句の道）」だった。「高知の言葉が懐かしい。長男は高知医科大を卒業し医者として高知で勤務している。次男は難病で先だって亡くなった。遍路道の整備やお接待を数十年やっている」という。数十年前に木の納め札を持った高知の遍路さんに出会った。再会したいが名前も聞かなかったので探しようがないという。皆それぞれに事情があるものだ。次男さんの追善供養を次の薬王寺でするので名前はと聞くと「灘」だという。しっかりご祈念すると約束した。

薬王寺の手前に「白い灯台」という温泉ホテルがあったのでコーヒータイムにした。ついでに「泊まれますか」と聞くと、ＯＫで、ＧＯＴＯトラベルの手続きもしてくれるとのこと。宿を予約し荷物を置いて二十三番札所薬王寺への「打ち戻り」となった。

薬王寺の本堂の横に鎮守社があった。扁額もなく社名が分からない。納経所で聞くと白山大権現という。山号は医王院なので皆さんの病気平癒をしっかりご祈念した。お接待の山茶花・特大おにぎりを参拝後にいただいた。薬王寺の門前は若者の街になっていた。ゲストハウス、こだわりの中華そば屋、手仕事の小物屋、おしゃれなカフェ。おじさんは中華そば屋に入っておにぎりの別腹として小の醤油中華そばにした。チェックインが十五時三十分というので時間調整に美波町図書館に立ち寄った。

美波町には「由岐」「木岐」「牟岐」と「岐」の字が多い。岐（くなど）の神は悪霊が集落に入るのを阻む

神、道中安全の神であるが、ここの岐は城の柵であり、海岸城砦として海部氏が住む湊村を意味すると郷土資料に書いてあった。

当日、前日では宿の手配がだんだん難しくなってきた。先を読んだ早めの予約に切り替えよう。明日は人気の宿である「はるる亭」が取れた。それもＧＯＴＯトラベルだ。これから長ーい海岸線を歩くことになる。五キログラム締まった身体を前に進めよう。二十二日には南国で友人山本洋に会う予定のため先を急がなければならない。

薬王寺（第二十三番札所 医王山無量寿院 薬王寺）

御詠歌：皆人の病みぬる年の薬王寺　瑠璃の薬をあたえましませ

宗派：高野山真言宗　本尊：厄除薬師如来（伝弘法大師作）　開基：行基菩薩

創建：神亀三年（七二六）　所在：海部郡美波町奥河内字寺前

一番人気の厄ぬけ札所　ひときわ目につくのが瑜祇塔である。塔の下の「金亀」が「世界建立」を表し、塔の上の五本の相輪（五峯）に布された梵字が、金剛界三十七尊を表しているという。薬王寺は厄除けの寺院として有名であるが、四十二歳の厄年で訪ねたとき「高知なら窪川にある薬師寺が本家ですよ、なぜそこに詣でないか」と言われた。四国では東の薬王寺、西の薬師寺といわれるそうだ。

澄禅は「本尊薬師。焼失して再建する人なく仮設小屋。仁王門が焼けて仁王は本堂にある。庫裏も南向き、こちらは再興して立派」とあるが、寂本は「その昔は寺院が雲から抜き出ていたほどだが、火災に遭って礎石だけになっているところが多い」と述べながら、寂本の薬王寺図には六地

蔵、安養院、南蔵院、中之坊、下之坊、仙蔵坊、東坊、牛王社、池之坊、持宝院、正覚院、北室、上之坊、神明院、本坊があり、仁王門を上ると本堂と塔、鐘楼、大師、鎮守がある。周囲には、山神、護摩堂、愛宕社、住吉社、釈迦堂があり、山上には求聞持所、天狗岳となる大伽藍となっている。それでも寂本は「元のように広大壮麗なものになったが、けれど多くの少宇はいまだに復興することができていない」という。鎮守は白山権現、奥の院は怪岩奇窟の玉厨子山と紹介している。

武四郎はこれとは違って堂宇の説明に「大師堂、二重の塔、釈迦堂、鎮守金毘羅、偸伽山白山、庚申堂」と「奥院」を記している。

武四郎の軌跡

■徳島県阿南市

あらた村（新野町）廿二番白水山醫王院平等寺（二十二番札所平等寺）月夜村（新野町月夜）三日月庵（月夜御水庵）鉦うち坂（鉦打坂）さかせ川（福井川）小野村（福井町小野）

■徳島県美波町

坂（由岐坂）たい村（田井）とまこえ坂（苫越坂）おう坂（山座峠）ひわさたい村（美波町恵美須浜田井）おた坂（不明）くだり川（不明）北かわち村（北河内）日和佐浦（日和佐浦）

武四郎は、新野から南下して月夜に入る。弘法大師は路傍の石で一夜を明かそうとする。錫杖で

清水を湧かせ、水底の石に薬師を刻み、三日月庵（月夜御水庵）を立て、この地を「月夜」と名づけた。次の坂瀬川では尖りのない蜷の大師説話を語る。鉦打坂から小野を通り由岐坂から海沿いに日和佐に向かう。

さかせ川

本流の流れと逆に流れる川を「逆川（さかさかわ・ぎゃくがわ・さかさまかわ）」といい全国に分布する。この「さかせ川」もサカサが転訛したものだろう。現在は福井川と河川名称は変わっているが鉦打付近の橋柱に「さかせ橋」と刻んでいる。別に逆川の地形的特色があるわけではない。

さかせ橋（阿南市福井町日の地）

「逆川」は、タタラ製鉄に関連する地名の一つといわれる。

産業考古学に詳しい谷有二の『日本山岳伝承の謎ー山名にさぐる朝鮮ルーツと金属文化ー』、『「モリ」地名と金属伝承』で、全国のタタラ製鉄や鉱業の歴史を調査する中でタタラ製鉄遺跡周辺に残る関連地名を統計的にまとめその論考を表している。その地名が「逆川」であり、「鍛冶」「タタラ」「フイゴ」「フク」「番子」「藤」「ホト」「妙見」などで、複数分布していればタタラ製鉄関連地名ではないかと疑うことができると述べている。

そのキーワードの一つに「一つ目伝説」があると書いている。

一ツ目の神である天目一箇神（アメノマヒトツノカミ）は鍛冶の神で、鍛冶の神が一つ目である神話伝承は、ギリシャ神話のキュクロープスなど世界によくあることという。燃えさかる火を見つめることによる職業病といえば笑われるだろうか。木を道具として農耕に使用していた昔、鍛冶の発達・伝播による鉄の鍬や鋤の出現は画期的な産業革命となったことだろう。現在のトラクター普及以上の農業生産性向上に寄与したことは確かで、農耕にかかる信仰として天目一箇神（天一）を祭ることは当然のことといえる。谷有二は、天目一箇神は民間信仰にも息づき「ひょっとこ（火男）」「鎌倉権五郎景政の片目伝説」などにも関係するという。『角川日本地名大辞典』の四国四県の字一覧を見たが正確に採取されておらず不明であったが、「一ツ……」の他、「鍛冶」「タタラ」「フイゴ」「番子」「藤」「逆川」「ホト」「妙見」など複数分布していればタタラ製鉄関連地名ではないかと疑うことができる。妙見山、虚空蔵山が金属に関わるのは、金属鉱脈の見立て技術を身につけた山岳修験者が全国を移動して金属の山々に、自分たちが信仰する妙見神・虚空蔵神を祀ったためであるとも述べている。四万十町戸川の小字を調べていたら「一ツ風呂」「鍛冶屋林」「ホドヲ子」「藤九郎山」「古カヂヤ」「ノツチ山」と複数あった。ぜひ興味のある地区を調べてもらいたいものだ。

多々羅橋（徳島市勝占町）

この「逆川」については、地形的な逆さ川もあるとしながら、山形の鉱山歌「タタラ唄」の

コラー　タタラ吹け吹け、吹け、吹けタタラ
吹けば吹くほど　金がわく
石が流れる　木の葉が沈む
なぜかその川　逆川

を紹介し、『古事記』のイザナギ（伊邪那岐）、イザナミ（伊邪那美）、カグツチ（火之迦具土）、カナヤマヒコ（金山彦）の神話から逆川の語源を導き出している。詳しくは紹介できないが逆川は興味をそそる地名である。

ついでに「大同二年」。平安初期の大同年間は八百六年から八百十年のわずか四年間ではあるが、四国霊場の内、十ヶ寺の札所の創建年が大同二年（八〇七）である。土佐室戸の三ヶ寺と禅師峰寺、南予の三ヶ寺、讃岐の善通寺、曼荼羅寺、本山寺で大同年間を含めれば十二ヶ寺となる。柳田国男は「大同二年や大同年間は、神社の縁起には非常に人気のある年号」とあるが理由は示されていない。谷有二は大同二年伝承が熊野・吉野修験の影を読み取っている。修験者には鉱脈を探す特殊な能力が備わっているのかもしれない。五来重は「大峰の修験僧が、金剛蔵王権現という仏教に存在しない仏をつくりだした理由も、埋蔵する金属を支配する王という意味があったのではないか」と推論している。

四国全部の字一覧でタタラ製鉄関連地名を悉皆調査して鉱業地図のレイヤーと重ねれば新たな発見につながる。

鉦打

逆瀬川（福井川）を渡る所が「鉦打」集落である。松山の浄土寺にある国の重要文化財「空也上人立像」は、鹿の角の杖を持ち、唱える六字の名号が口から出ており、鉦（しょう）を叩きながら踊り歩く、空也そのものの姿である。井戸を掘り、橋を架ける作善とともに諸国を遍歴する「聖」である。この鉦打坂は土佐街道随一の難所といわれ山道に行き暮れて病に倒れる遍路も多いことから鉦打薬師堂、鉦打大師堂が建立された。遍路死者を弔う聖が定住した集落を鉦打として名を刻んだのだろう。

峠の鯖（生飯）

山師の弁当はびっくりするくらい大きい。箸でスコップのようにすくい口いっぱいに入れ、「もっそうめしの最後の一口は、後ろに投げて山の神さんにあげてダレにとりつかれんようにする」といった。『大辞泉』には「さば（生飯）　生飯の唐音〝さんぱん〟からという。「散飯」「三把」「三飯」とも書く。食事のときに自分の食物から取り分けた飯粒。屋根などに置き、鬼神・餓鬼に供え、鳥獣に施すもの。」とあることから、どうも鯖ではなくて生飯のようだ。鯖大師の「鯖」も「生飯」なのだろう。

牟岐は南海道の駅・武芸

平城宮から出土した木簡に「阿波国那賀郡武藝驛」と「阿波国那賀郡薩麻驛」が見える。薩麻驛

は不明であるが、この武藝驛は牟岐（海部郡牟岐町）である。

この牟岐と同じように海部郡の地名に、志和岐、由岐、木岐、牟岐と「岐」地名が続く。「キ」について牟岐町立図書館で調べたら①南海道の「武藝驛」②室町時代の麦の里から海産物を献納した記録に「麦井」とある。これが転訛して牟岐③摂津国の兵庫北関に入関した船の記録『兵庫北関入港納帳』に「牟木（麦井）」に船籍を置く船が十四回入港した記録④牟は釈迦牟尼仏で大きい意味、岐は港のある村落という意味⑤戦国時代、観音山城の城主が牟岐大膳⑥「岐」は城（ギ）からきており「海に面した海岸城塞のある海部の住む村」の説があり、中世以前には「牟岐」という漢字の地名は出ていない。牟岐浦（海辺の村落）と呼ばれていたものと結論付けている。「岐」の地名が牟岐だけでなく、徳島南部の海岸線に連なっていることから「海辺の集落」を意味する地名のように思える。阿波と紀州は地名にも多くの類似性を持つ地域である。この「キ」地名が、紀州ではないが熊野（牟婁地域）の海岸沿線に、

市木（南牟婁郡御浜町）、羽市木（熊野市）、遊木（熊野市）、二木島（熊野市）、寄木神社（熊野市）、三木里町（尾鷲市）、三木浦町（尾鷲市）、三木崎（尾鷲市盛松）、久鬼町（尾鷲市）、久木崎（尾鷲市）　※西から海岸線を国土地理院地図で検索

と散見され、那賀郡（海部郡）の「岐」地名と地形的関連性が見られる。

愚草の川柳集⑯選

「しっぺい」

2020 / 初夏

仇情け　竹箆返しのコロナ哉

温暖化　焼け棒杭にコアラ哉

崖っぷち　軌むグレタの声ひびき

鬼胎児は祖父の股より生まれけん

汚染水　コントロールは先に棄て

※温暖化を止めるのは地球人の役割。モノ言わぬコアラといいモノ申すグレタさんといい、悪い大人ははずかしくなってしまう▽「コントロール」は、８年前、東京オリンピック誘致の演説で当時の安倍首相が「The situation is under control」（福島第一原発の状況はコントロールされている）と虚偽発言▽嘘を許さない愚草の姿勢は一貫しており「川柳」で問い詰めている。

HP「四万十町地名辞典」引用

四国遍路 三十二日目（美波町日和佐～海陽町）

徳島県海部郡美波町日和佐浦（ホテル白い灯台）
～　三五・八キロメートル／九時間〇五分
徳島県海部郡海陽町久保（温泉民宿はるる亭）

活動日記

二十三番札所薬王寺を終え、これから二日間ただ歩くことに専心する修行である。

宍喰の温泉民宿「はるる亭」で温泉に入って評判のご馳走をいただく。その楽しみを頼みにひたすら歩く。足先がへたってくると温泉を夢見つつ一歩と半歩を進める。

途中、お接待を受けた。「お金ですみませんがコーヒーでも飲んで休んでください」と、手作りの紙袋をいただいた。昨日は無財の和顔施とおっちゃんの飴ちゃんパックだったが、現金で五百円も入っていた。名前も聞かず失礼をしたが、権兵衛さんの奥さんということで必ずご報告いたします。

牟岐図書館にも立ち寄った。図書整理日で休館だった

お接待袋（海陽町大里）

が、郷土図書のタイトルだけでも閲覧をと懇願すると気持ちよく中に案内された。遍路姿は威力がある。帰りには大きく手も振ってくれた。昨日、美波町図書館で見た『牟岐のことば地名民俗』の前ページを読み忘れたのでこっそりパシャをした。やはり東洋町は隣のまち。平尾賞を受賞した地元の歴史研究家・原田英祐さんの書籍は全部揃っていた。

今日の四十キロメートル近い道程で一番の景観は「那佐の海」、二キロメートルはある長い島を結んだ砂州とその入り江に浮かぶ神の島。牟岐の出羽島も素晴らしい景観だ。船で渡らないといけないので今回は断念した。高知がＵＳＡ（宇佐）ならこちらはＮＡＳＡ（那佐）。金剛福寺の足摺はＩＳＡ（伊佐）で高知はＴＯＳＡと、ＳＡ（佐）が多いのはどうしてか。帰ったら調べよう。

明日は、民宿徳増だ。

武四郎の軌跡

■徳島県海部郡美波町

日和佐浦（日和佐浦）二十三番醫王山無量壽院薬王寺（二十三番札所薬王寺）奥院（玉厨子山）

■徳島県海部郡海陽町

たかそね村（高園）母川（母川）なき坂（那佐・牟岐）なき村（那佐・牟岐）宍喰浦（海洋町宍喰浦）

武四郎の記録は、薬王寺の奥の院（玉厨子山）を「……と云もの有よし」とあることから、聞

き書きで本人は行ってないのかもしれない。「奥の院」から途中がなくて「たかそね村」となっている。難渋するへんろ道ではあるが風光明媚な「八坂八浜」を忘れている。絵図には「八坂八浜」（東からの順路）が描かれているため絵図の地名を書き写した。

ムキ浦（牟岐）、**アヲ坂**（牟岐大坂）、内ツマ（内妻）、ナロ口（不明）、**シタ坂**（歯朶坂）、**松坂**（牟岐松坂）、**フクラ坂**（福良坂）、行基庵（行基庵）、サハセ村（鯖瀬）、サカ浜（不明）、**ハキ坂**（萩坂）、**カジヤ坂**（鍛冶屋坂）、**シロツナハマ**（苧綱の浜）、**楠坂**（楠坂）、アワノ村（粟ノ浦）、イセ■村（伊勢田下）、モウラ（三浦）、アサカワ（浅川）、**カリト坂**（借戸坂・からうと坂）、アシセサキ（網代崎）　※太字が「八坂八浜」

カリト坂はカロウト坂

遠い昔、カロウトの話を聞いたことがある。多分、椿原の家籠戸のことであったが内容はよく覚えていない。寒い風が通り抜けるような「カロート」の音が今も耳に残っている。

このカロウト、ＮＨＫ新日本風土記で放映していた。尾瀬の福島側の入山口となる雪深い奥山・福島県桧枝岐村では江戸時代から昭和三十年代までの風習として、ヒノキでしつらえたカロウト（唐櫃。実物は脚がない）を嫁入りに持たせ、男は成人になり渡されたという。このカロウトは、普段は衣装箱であるが、持ち主が亡くなったときには棺になるとのこと。冬場雪深いこの地ではすぐには棺をしつらえることができないことから、事前に備えた知恵である。それとともに、人生の終焉の備えは、臨終只今の覚悟でもあり、生きることへの潔さを感じるカロウトである。また、

桧枝岐村の墓地も雪かきや墓堀りができるよう道沿いにつくられているという。貧村ゆえ僧侶も居つかないこの村では、村人が寄り添い葬送の儀を行ったであろうし、日常的にも道端で祈りの手向けが行われていることだろう。

この全国に分布する「カロウト」について、松永美吉の『民俗地名語彙辞典』は「カロウトは、カレ（枯・涸）との関係ある語で〝末端〟をも意味する。」として桂井和雄の説を引用している。

桂井和雄は『土佐民俗選集（二）』の「土佐地名覚え書き」に、高知県内各地のカロウトの地名を示し「現地踏査によれば、峠のように見えながら、勾配のきわめてゆるやかな切り通しの道であることが共通していた。土佐市北地のカロウトの遠望は、カメラを通してのぞいて見ると、西日の影が差すその深い切り通しの道は、大きな墓地穴の底を連想させた。」という。土佐市の国道五十六号線沿いに「カロト青果」の看板がある。

四万十町金上野にあるカロウト越は、桂井氏のいう切り通しの道である。望めば横倉山と同じ土佐修験の山「五在所」が鎮座し、その麓には「市野瀬」（イチの語は神をあがめるの意の「斎（いつ）く」のイツと同じ語源）があり、峠としての結界の地でもある。

峠の多くは村界であり、そこには悪霊や災いが入ってくるのを防ぎ、村を出ていく旅人の安全を守る賽の神（道祖神・祠・石仏）が祀られた。

この世とあの世、世俗と修験、日常と非日常。その空間を仕切る事物は鳥居・注連縄・暖簾・箕と塩・躾り口など多様であるが、その結界の地を聴覚化し呼び継がれたのが「カロウト」ではなかろうか。

「カロウト」地名について、桂井は「大きな墓地穴の底」と表現し、郷土史家・岡村憲治は幡多地域の事例から「小さい内地（うとち）」と解釈している。中世の葬制の変化により使われなくなり、「カラ」となった遺体を納める空間（納骨棺・洞穴）の「ウト」が、カラウト・カロウトに転訛したのではないかと思う。物としての棺も、墓石の下に設けた石室も、結界である峠としての空間も、同じくカロウトと呼ばれるようになったと考える。

長宗我部地検帳には県内各地に多くのカロウト地名が記録されていることから中世以前の地名であることは確かである。

また、民俗研究家の筒井功は『葬儀の民俗学』や『「青」の民俗学』で「日本古代の葬制は洞窟葬である。古墳時代の横穴葬、塚を築く古墳も要するに洞窟葬の延長である。その葬法は、日本人の宗教観・他界観の反映であった。」と述べている。柳田國男も「石器を使っていた時代の人骨は出て来るのに、いかなる古い村にも中世以前の墓場というものがない」と述べていることから「カロウト」は各地の葬制と洞窟や峠の地形との関連、青地名との関係などを現地踏査することにより地名由来を発見することができると考える。

カロウト地名の分布が大川（四万十川、仁淀川、物部川など）沿いには出現しないことから葬制の相関性が一つの発見になるかもしれない。

余談だが、唐櫃は、脚を四、六本付けた蓋のある収納箱で湿気から衣服・書物などを守る役割を担った。これと同じ機能を持つ「おひつ」は蓋はあるが脚がない。今では炊くから保温まで一体化した器具をジャーと呼んでいるが、昔は炊いたご飯を「おひつ」に移し余分な水分を取る最後のひ

と手間の調理道具（けっして容器ではない）があった。

また、櫃でも脚のないものは、倭櫃（やまとびつ）と呼ぶそうだ。脚がないのに唐の字を当てているが、本来は亡き骸のカラの櫃で「カラヒツ」である。

またまた、余談だが「おひつ」も夏になるとご飯がすえるので「そうけ」にいれた。それも取っ手のついたもので風が通る所にひっかけ吊るしたものだった。秋にはふかし芋をどっさりそうけにいれていた。白米の消費を減らすため夕飯前に芋をたらふく食わすことが貧しい家庭の食料戦略だった。おやつのない戦後世代はまさに「一杯食わされた」。

箕もそうけもおひつも暮らしからなくなった民の芸。箕つくりの職としてのサンカ社会がなくなり、つくる技がなくなり、すえるという味蕾も衰え、箕をつかってふるい分ける仕方など、民芸を失うことが暮らしの知恵を退化させていくのだろう。

生活するチカラの弱くなった「ヒト」はいつしか絶滅危惧種になるのではと考えてしまう。

暮らしの中で「チンする」は立派な動詞になっている。食文化の大革命である。食の素材は自ら菜園尻（しゃえんじり）（自宅の周辺の畑）で育て、実を選別し、煮詰め、挽き、干すなどの加工を加え、醸し、蓄え、その一部を一夜の食とする。それらの過程を短縮した「冷凍食品」をチンすると、モノの時空が湯気の中から食卓に広がる。なんと便利な世界になったものだ。

人生の最期もチーンとなって火葬されるが、煙突の先にはその人の歴史が煙となって空に消えていくのだろう。あと三十年先の話と思いたいが。

四国遍路 三十三日目（海陽町～室戸市佐喜浜町）

徳島県海部郡海陽町久保（温泉民宿はるる亭）
～　二八・九キロメートル／八時間〇五分
高知県室戸市佐喜浜町尾崎（民宿徳増）

活動日記

今日も歩くだけの遍路が始まる。

朝まだき雷とともに大雨となっていた。心配した通り朝から雨である。美味しい朝食をいただき、雨具を整えいざ出立。

意気込んだものの降ったり晴れたり、降りつつ晴れるなど決まりの悪い天気である。十一月下旬というのに気温は二十五℃くらいになるという。

宿から程なくホテルリビエラししくいの前を通る。二十二番札所平等寺脇の山茶花とホテル白い灯台で同宿となった遍路仲間ＫＥＩＫＯが泊まっている宿だ。ここも人気のある宿らしい。泉質がぬるっとして肌にすこぶるいいみたいだ。

宍喰から水床（みとこ）トンネルを抜けると高知県東洋町甲浦となる。四年前にも川村与惣太の和歌をたどっての旅をした。甲

仏頂造り（東洋町白浜）

浦は天然の良港で二股のつけ根に熊野神社が鎮座する。狭い境内には神社なのに梵鐘があるから珍しい。旧道を進んだのには訳がある。仏頂造りという民家様式を見るためだ。玄関の脇に設え、夜は雨戸、昼は止金を外してぬれ縁となり、物を売ったり手仕事をしたり、当然ながら風通しも良くなる仕組み。道端での談義も弾んだことだろう。甲浦地区にはなかったが、白浜地区に入ると通りの山側に数軒連なって残っていた。海側は道路拡張で今風の家になったとのこと。家主にお願いして仕組みを展開してもらった。写真の通りである。これは何と呼びますかと問うと「知らん」と一言いって家の中に消えた。数軒先の奥さんに聞くと「仏頂造りとも店とも言います」とのこと。開放された地域共有の空間。いい財産なのにもったいないと思った。

今日は土曜日だ。いっぱいトドが泳ぐ生見海岸を想像していたら誰もいない。朝九時は早いのかもしれない。野根を過ぎると「東映オープニングの波濤」が延々と続く。それも半日だ。景色は少しずつ波濤から玉砂利の潮騒へ、ゴロゴロ石の乾いた波音へ、また波濤と繰り返す。山側に車道から一段上がった歩道があるが、段差があり、グレーチングが滑り、側溝の穴に錫杖が入り込むなど実に歩きにくい。海側を歩けば気も休まるが、国土交通省は「安全のため山側をお歩きください」とアナウンスする。馬鹿野郎と小声でいって海側を歩く。振り向くと虹が後を追ってくる。歩きながら昼メシ食ってるから「虹さんお先にどうぞ」。

野根には別格明徳寺（東洋大師）がある。真言密教と書いてある。寺には紙垂を巡らしている不思議な境内だ。すぐ近くに六部堂があり、この地区の郷社「野根八幡宮」もある。

それにしても「東洋町」とは気張ったネーミングだ。昭和の合併協議で深夜になって決まったと

いう。ただし、役場の所在地は野根と甲浦が相譲らず十五年くらいは双方のジプシー庁舎。やっと決まったのが東洋町の真ん中ということで「生見」になった。隣の地区が「相間」なのにそこにはならなかった。

高知県にはいったらお酒は控えようと決めていたが、着いた民宿「徳増」で風呂に入り体重計で計ったら驚きの七十五キログラム。ま、いいかと、玉袋筋太郎のマネをして「六・三・三は大人の義務教育」をやってしまった。今日は特別。

武四郎の軌跡

■徳島県海部郡海陽町

宍喰浦（海洋町宍喰浦）御番所（古目番所跡）

■高知県安芸郡東洋町

籾峠（古目峠）番所（東股番所跡）桑名将監古城跡（御殿跡）甲の浦（甲浦）白濱町（白浜）すきて川（河内川）いくみ坂（生見坂）あいま坂（相間坂）野根浦（野根丙）大師堂（東洋大師・明徳寺）藤越御番所（伏越番所跡）ふしこえ坂（伏越坂）飛石（飛び石）はね石（跳ね石）ごろごろ石（ゴロゴロ休憩所）

■高知県室戸市

法界庵（佛海庵）入木村（佐喜浜町・入木集落）おさき村（佐喜浜町・尾崎集落）

武四郎は宍喰の番所を越して土佐国に入る。当時の土佐の甲浦番所における遍路の扱いをつぶさ

に書き記している。阿波とは違って遍路ルールが厳しかったようである。

「甲の浦番所と云。則往来手柄并に船上り切手を改め、此所より入切手と云ものを出す。其よりして当国に而は其泊り泊りに而村長の印形をとり行也。何月何日此処泊りと書て印形を押出す。若此印形を失念する時は、先へ行て一宿たりとも宿かす人なし。又木賃宿に而もゆるさず。また庄屋よりのさし宿に而も中々出来がたし。遍路の衆よく心得べきことなり。」

強羅とゴウロ

澄禅は「野根の町に至る。材木集散する港町である。西は大きな山だ。京都・大阪に出荷する薪になる材木を産出する山である。」と述べている。

この海岸には丸く大きな石がゴロゴロとあることからか「ゴロゴロ石」の地名がある。武四郎が歩いた当時は、海からすぐに山となり、山手は断崖で潮の引き際を見計らって進むしかなく、地名に刻むほどだれもが難渋したことだろう。谷合などの石の多い土地。転じてその小石のこともゴロ・ゴラともいう。ゴウラ・ガアラという地名とともに、全国に多い地名。農作業に適さない土地として命名したのだろう（民俗地名語彙辞典）。

箱根の「強羅（ごうら）」や北アルプスの「野口五郎岳（昔はゴウロウ岳と呼ばれた）」も同じ意。沖縄では川の流れをゴウラと呼び、小石からなる浜も小浦と呼ぶ。川の流れがゴウゴウ、岩石がゴロゴロ、潮騒のコロコロというオノマトペからきた地名だろうか。

地名の研究では柳田国男の影響が大きく、箱根の「強羅」を例にして岩石の露出している小地域

と説明したことから、解釈のスクラムとなったのかもしれない。また、柳田國男は「土佐にはことにゴウロという地名が多い」と言及している。

この土佐にゴウロが多いということから調べてみたら、原田英祐の『四国東南部　方言辞典』に「ごーろ＝野根別役の小字名、ゴーロやゴロクは昔の林産物集積加工地に由来する地名」とあった。また、原田はゴロク・ゴウロク地名について、昔材を搬出する榑（くれ）の寸法が長さ二間×幅厚五・六寸が主要な規格だったことから、製材地などにこの地名が刻まれているという。従来の地名辞典には説明されていない内容を、地道に歩いて聞き取った結論に共感する。ゴウロ・ゴウロク地名の高知県下の小字は、

東洋町野根丁（ゴウロ）、安芸市僧津（ゴウロ）、香南市夜須町国光（ゴウロウザコ）、香美市香北町岩改（上中ゴウロ）、香美市物部町神池（中ゴウロ）、高知市鏡葛山（郷路）、仁淀川町吉ヶ成（ゴヲロ）、津野町芳生野（郷呂）、津野町北川（ゴヲロク）、梼原町上西の川（郷六）、四万十町瀬里（ゴウロヲ）

安芸市僧津は海岸まで三キロメートルと奥山とはいかないが、その他は木材産地である。奈半利町のコゴロク廃寺跡の所在地が長宗我部地検帳に記録される古五六村ということから、高知県下には小字だけでなく微細地名として多く残っていることだろう。

七十番札所本山寺の隣に高良神社がある。五来重はよく分からないと前置きし「高良八幡はKorea（朝鮮）から来た可能性がある。福岡県の久留米の場合は〝高良八幡〟、炭鉱地帯の田川に近い八幡は〝香春八幡〟と称している。」と述べる。確かに高良神社は西日本に多く、グーグル

マップで検索できる四国内の高良神社は十社ある。『高知県神社明細帳』によると高知県内では、東洋町河内（高良神社……高良玉垂之命）、田野町田野（八幡宮……応神天皇・神功皇后・高良玉垂）、安田町東島（城八幡宮……応神天皇・神功皇后・高良玉垂）、香南市徳王子（高良神社……武内宿祢）、四万十市蕨岡（高良神社……武内宿祢）の三社がある。

地名アラカルト⑦

－消えた地名「田野々」－

田野々は、四万十町発足前の旧大正町役場の所在地となる大字。中世以前、長宗我部地検帳にもでてくる由緒ある「田野々村」である。この田野々は、「平成の合併」という地名潰しの大惨事により『消えた地名』となった▼大正町史資料編には「田野々村は、中央に丘陵（森駄場）を残し、旧河道跡に平地が開けた地名であり、地名の『たのの』は『たなの』がなまり変わった言葉で、段丘のある開き地に由来するといわれている」とある▼類似地名として「○野々」がある。近くには「神野々（四万十町数家）」、「市野々（黒潮町）」、「姫野々（津野町）」、「宮野々（中土佐町）」、「槇野々（中土佐町）」。この「野々」の前にくる「市（佾）」も「姫」も「宮」も「槇」も神仏に関連する用語である▼子どものころ「のーのーさん」と神様仏様を幼児言葉で呼んでいた記憶がある。『高知県方言辞典』にも「のーのー」の項に「【幼】神様・仏様。梼原・中土佐・窪川」とある。ノノ・ノウノウが単なる幼児言葉や方言だけでは説明できない古い言葉のようである▼「タ」は①平の意で、耕作用地の意に用いられる。②ヘタ（辺）、ハタ（端）のタ、遠近を表すアナタ、コナタのタがあり、場所を表すタがある▼中世、上山郷に入ってきた「熊野神社」と関連付けて、「田野々」を平坦な神領地と理解したい。

四国遍路 三十四日目（室戸市佐喜浜町～24・25・26～奈半利町）

高知県室戸市佐喜浜町（民宿徳増）
～　四五・三キロメートル／一二時間二〇分
高知県安芸郡奈半利町（ホテルなはり）

活動日記

室戸市佐喜浜町尾崎の民宿「徳増」を日の出とともに出立し、日の入りから二時間後の十九時までの十二時間歩いた。マイ健康運動量計で六八、一九一を示している。内子町から久万高原町まで歩いた七一、一四三に次ぐ記録だ。

民宿「徳増」はイチ押しの宿だ。夕食も朝食も一品ごと漬け物に至るまで懇切丁寧に説明してくれる。「卵は、土佐ジローの室戸産、焼き魚は椎名漁港に揚げられた……の一夜干し、野菜は自分ちの畑のもの、漬け物は九十八歳のおばあちゃんが漬けたもの……」と主人がグループごとに説明する。昨夜の金目鯛の煮付けもカツオのたたきも、刺身も、オデンも美味しかった。ネット予約でもなかったのに、女将さんの説明ではＧＯＴＯトラベルの手続きだけでなく高知県版

三世代民宿・徳増（室戸市佐喜浜町尾崎）

のＧＯＴＯ交通費の申請手順まで至れり尽くせりだ。そのうえに、次の宿までのザック配達サービスまでしてくれる。こんな楽をしていいものかと考えつつ今日の長行程に即決お願いした。

納経セットの頭陀袋とウェストポーチの軽装。ポーチにはライトと冷やすスプレー湿布を入れて軽々楽々で足を速めた。

御主人が「着替え、雨具など必要のないものを袋に入れて送ることもオーケー」と言っていたのを聞き流した。最御崎寺で気が付いた。これでは歩き遍路と車遍路の区別がない。格好だけでも軽いザックを背負っていたらよかったと反省。日焼け止めクリームも忘れた、モバイルバッテリーも忘れた。ＹＡＭＡＰのログが未記録となるのを恐れ機内モードにしたり、バッテリー節約には気を揉んだ。顔は日焼けでヒリヒリする。「ひろしでキャンプ」ご指定のライトもどこまで持つか心配でエコ使用。

それでも、不動産速度の時間五キロメートルの歩きを確保できたのも、四十五キロメートル歩けたのも「ザック配送サービス」のおかげ。

明日の朝、どこが痛くなるかは知らないが、奈半利町のホテルでゆっくり休もう。

今回の収穫は「川村与惣太の墓所」に詣れたことだ。

最御崎寺（第二十四番札所 室戸山（むろとざん） 明星院（みょうじょういん） 最御崎寺（ほつみさきじ））

御詠歌：明星の出でぬる方の東寺　くらき迷いはなどかあらまし

宗派：真言宗豊山派　　本尊：虚空蔵菩薩　　開基：弘法大師

創建：大同二年（八〇七）　所在：室戸市室戸岬町

空と海の景色　最御崎寺は境内だけでは理解できない。山下の明星石や岩窟、愛満願権現など全体を俯瞰しなければならないという。その一つが今の呼び名で「御厨人窟（みくろど）」と「神明窟（しんめいくつ）」である。寂本は三つの窟屋を紹介しているが山下の岩窟には如意輪観音の石像、その東側の大窟には愛満願権現を建立、東窟には天照大神の社があると記すが名前はない。現在の案内板には「正面向かって右側の洞窟が修行をしていたとされる〝神明窟〟で、左側が生活をされていたとされる〝御厨人窟〟である。」と説明している。このふたつの窟を通称「みくら洞」もしくは「みくろ洞」と呼んでいる。

寂本から二十年後、土佐の地誌『土佐州郡志』には「観音窟　如意輪観音（略）俗謂一夜建立者也」「御厨人窟　在観音窟東北二町（略）安置権現及明星之像」「神明窟　御厨人窟北昔曰大師勤行之處後勧請大神宮」とある。また、『南路志』にも「北則号御厨人窟」とある。寂本の『四国偏礼霊場記』や『土佐州郡志』における窟屋の並びは、西から順に並べると観音窟→御厨人窟→神明窟となる。

五来重は、求聞持窟は虚空蔵菩薩を祀る所。御厨人窟の隣の小さいとがった洞窟が求聞持窟だと推論する。つまり、庫裏（御厨人窟）→本堂（求聞持窟・本尊虚空蔵菩薩）→鎮守海洋神（神明窟・天照大神）とするのが堂宇の並びの自然な姿だという。

「修行者が修行するためには、必ずお供がいります。お供の人が炊事をしないと修行が続けられません。室戸岬の場合はどうやら二人の従者がいたようです。高野山ではその二人を愛慢・愛語菩薩として奥の院に祀ってきました。」と二人の料理番を御厨人と書いたのが訛ってみくろ洞となっ

たのだという。御厨は神の台所。神に供える神饌を用意する部屋である。

また、五来重は「最御崎寺は、本来は〝火つ御崎寺〟で、火を焚く所。いつしか岬の先端にある寺という意味で〝最御崎寺〟の字が書かれるようになったと述べ、弘法大師の悟りの根本である求聞持、辺路修行について次のように説明している。

「求聞持の場所には、真言を繰ること、行道をすること、聖火を焚くこと、と三つの条件が揃わなければならない。つまり海を神様とするところの宗教が行われた場所が、この当たりなのです。これが辺地というものです。海と陸の境を修行する辺路修行がのちに遍路になりました。弘法大師より先にすでに海洋宗教があった。弘法大師は青年時代に海洋宗教の辺路修行というものに入っていきました。特に新しい法として求聞持しながら辺路修行をしています。」

四国遍路の原点ともなる辺路修行。それゆえに五来重は昔の信仰が残る「奥の院」を詣でなければ寺の歴史が分からないとくどいほど言っているのだ。

津照寺（第二十五番札所　宝珠山（ほうしゅざん）　真言院（しんごんいん）　津照寺（しんしょうじ））

御詠歌：法の舟入るか出づるかこの津寺　迷ふ我身をのせてたまへや

宗派：真言宗豊山派　本尊：地蔵菩薩（楫取地蔵）　開基：弘法大師

創建：大同二年（八〇七）　所在：室戸市室津

岬を回る船人が海上安全祈願　室戸の湊が『土佐日記』（九三五）に描かれている。「室津の泊」

の場所について室津か、原池か、津呂かと論争になっているが、いずれにしても土佐日記に「櫂取らの北風あしといへば、船いださず。海賊追ひくといふ事絶えずきこゆ。」とあるように、岬の先は航路としても難渋で、海賊の危険もあったことだろう。

その二百年後を記したものが、平安末期の説話集『今昔物語集』（巻十七・地蔵菩薩値火難自出堂語 第六）である。ここに津照寺（津寺）の本尊地蔵菩薩に関する霊験譚が載っている。平安時代の地蔵信仰ということで四国では古くて有名な話だったのだろう。その冒頭に「今ハ昔、土佐ノ国ニ室戸津ト云フ所有リ、其ノ所ニ一ノ草堂有リ、津寺ト云フ、其ノ堂ノ檐のきノ木尻皆焦レタリ、其ノ所ハ海ノ岸ニシテ人里遥ニ去テ難通シ」とあることから、古いだけでなく東寺や西寺に劣らず全国に知られた寺である。この説話の内容は、野火が寺に移り、小僧が津村の「火事だ」と応援を頼むと村人が参集する。堂の前庭に地蔵菩薩と毘沙門天が立っていた。毘沙門天が消した後だった。小僧は地蔵菩薩であった。「不思議なことはあるものだ」と、これから後、津を通り過ぎる船はこの寺を詣でるようになったというものだ。ここで神仏にお願いすることは「梶取」として当然のことであったのだろう。ちなみに鎮守は妙見である。

この室津の港は、寂本の『四国徧礼霊場記』（一六八九）の「津寺図」にも同じ位置に描かれている。これに先立つ六十年前、寛永七年（一六三〇）二代藩主山内忠義の願いにより最蔵坊が修築したもので、津照寺の東側に流れていた川を西側に移し、算用礁（さんようばえ）を上削するという難工事で、川湊を堀り湊に変えたものであった。最蔵坊は東寺（最御崎寺）の再興だけでなく、津呂湊の開削など、「作善」により、喜捨を募った。この後に、野中兼山の藩工事が延べ百七十万人の人力で行わ

れるが、最蔵坊の「万人講」こそ歴史に残すべき民の記録である。

金剛頂寺（第二十六番札所 龍頭山光明院 金剛頂寺）

御詠歌：往生に望みをかくる極楽は　月のかたむく西寺の空

宗派：真言宗豊山派　本尊：薬師如来　開基：弘法大師

創建：大同二年（八〇七）　所在：室戸市元乙

龍頭か龍燈か　五来重は寺名について「西寺（金剛頂寺）の山号は龍頭山光明院です。本当は龍宮に捧げる火という龍燈でなければなりません。龍燈であってはじめて光明院が意味を持つからです。龍頭ですと龍の頭になってしまします。」と延べる。

金剛頂寺に出てくるのは龍でなくて天狗である。寂本もこのことを、弘法大師が楠木の洞の中にいる天狗に出会い、修行の邪魔をされた。大師が不動火界の呪を唱えると退散したと書いている。

また、寂本の西寺図には、仁王門の左に金剛頂寺、茶堂がある。階段を上ると右に鐘楼堂があり正面に本堂、左に若一、弁才天、大師堂があり、本堂の後ろに鎮守十八所を描いている。ただし、本文では「本堂の右に建つ社は若一王子で、当山の地主神である。左は十八所で、これは王城の上社十八神を勧請したものだ。」となっている。武四郎は「鎮守熊野社」とある。地主神と鎮守社とは違うのだが鎮守社はどちらだろうか。奥の院は元川の最上流域にある式社であった池山神社であったが、奥山にあることから近年合祀されたと聞いた。池山神社の由緒に「金剛頂寺舊記曰之当山奥院也二里餘而■頂池……」とある。祭神は大海命で宗像三女神の弟神といわれる珍しい神で、

宗像氏を結びつけるために創作された神ともいわれる。

最御崎寺もそうだが金剛頂寺も女人禁制で、修行者しか入れない特別な場所である。

武四郎の軌跡

■高知県室戸市

おさき村（佐喜浜町・尾崎集落）かふか坂村（室戸岬町・鹿岡集落）しない村（室戸岬町・椎名集落）上ミつ村（室戸岬町・三津上集落）下ミつ村（室戸岬町・三津下集落）ヒシャゴハイ石（ビシャゴ碆）廿四番室戸山明星院最御崎寺・東寺（二十四番札所最御崎寺）津呂浦（室戸岬町・津呂集落）津浦（室津）川（室津川）うきつ浦（浮津）道崎（行当岬）くろミ村（吉良川町乙・黒耳集落※黒耳は元の先、吉良川の手前）もと村（元乙）二十六番龍頭山光明院金剛頂寺（二十六番札所金剛頂寺）きら川村（吉良川町甲）川（西ノ川）はね浦（羽根町乙）

■高知県安芸郡奈半利町

かりやうご村（加領郷）名張浦（奈半利）

尾崎からも同じような遍路道が続くが、それでも、朝日をいただければ元気になる。武四郎もそう思ったことだろう。

この尾崎村で、武四郎は地元の暮らし事情である干し芋や虎杖（イタドリ）の作り方・調理方法を説明し、街角での遍路に向けた商いなど江戸末期の民俗の記録も行っている。

何を食べてきたのだろう

武四郎は「此辺多く甘藷を作る。皆彫ミて干おき是を夏分より、また来秋迄の喰とする。米は到而少し。また此辺りに虎杖をとり来りて喰。其餘山野に有るとあらゆる艸をもち来り喰よし也。」と土佐の食料事情を記している。四国遍路でも山間部での食事に興味を持って記録しているが、とりわけ土佐の記述が多いのは米が少なく貧しいゆえに「あらゆる艸」を食べてきたことによるのだろう。『四国遍路道中雑誌』に記した食べ物（生産物を含む）をあげると、

土佐　甘藷・虎杖・あらゆる艸・蓬餅・大角豆（ささげ）・キシ子（二期作目）・津蟹（モズクガニ）・蜀黍（キビ・とうもろこし）

伊予　蜀黍・塩

讃岐　ワサビ・塩・甘藷・粉類・砂糖・醤油

阿波　鳴門わかめ・甘藷・粉類・蕎麦めし・海苔・青海苔

中世の土佐一国の地検帳『長宗我部地検帳』には切畑（焼畑・山斜面の開墾地）に作付けされた作物の名が記載されている村もあり、ここから当時の食糧事情が垣間見える。横川末吉が「安芸郡北川村地検帳」を集計したものによると、イモ（里芋・五十一パーセント）、ソハ（蕎麦・二十三パーセント）、ヒエ（稗・十四パーセント）、アワ（粟・四パーセント）、アツキ（小豆・三パーセント）、マメ（大豆・三パーセント）、ササケ（大角豆・一パーセント）となっている。

虎杖と熊野信仰

「イタヅリ」地名は高知県下各地に見える。イタヅリ、板取、虎杖川、板ツリサコ、イタヅリ谷、イタヅリ田、イタヅリバタ、イタヅリハラなど山川や田畑などの接頭語として使われることが多い。

イタヅリは土佐の郷土料理に使う食用植物「いたどり」の高知方言であり、イタンポ（幼／県下全域）、イタッポ（幡多）、イタンコ（幼／安芸・香美）の地域方言がある。暮らしに身近な食用植物であるためサコや谷を付して自生地を地名化したものと思えるが、かたや忌避された虎杖の話もある。虎杖を食べれば「七日の穢」という俗諺は「熊野の縁起」によるものである。

熊野権現が天竺から垂迹した由来を描いた絵巻『熊野本地絵巻[8]』に詞と絵で詳しく描かれているが「虎杖と熊野社」の関係を理解するために全体のあらすじを紹介する[9]。

印度まかた国の大王に世継ぎがないことから後宮に千人の后を召す。大王は六年目にして千人目となる后を五衰殿へ訪ね、容顔美麗で観音信者であった后は懐妊。九百九十九人の后は嫉妬して大王に讒奏し、大王は妊娠中の五衰殿を山中に遺棄する。王子は死骸の乳房をすい虎狼にもまれて成長し王宮にかえるが王位を捨て神国日本に飛来したという。これが「熊野の縁起」で、大王は本宮証誠殿（熊野本宮大社主祭殿／家津御子・素戔嗚／阿弥陀如来）、五衰殿は那智の結宮両所権現（那智大社／夫須美・伊邪那美／千手観音）、王子は若宮（若一王子／天照大神／十一面観音）であるという。九百九十九人の后は後を追って日本へ渡る途中、暴風で海中に沈みその霊が赤い虫となって熊野の「虎杖」にとりついた。このことから熊野詣の途中で虎杖にさわってはいけない、食

べてはならないという俗諺となったのである。

この話は熊野の御師（おし）や山伏・修験道・比丘尼によって全国に広められ熊野社の勧請が進むとともに地名にも刻まれていったことだろう。この忌避された虎杖が土佐の食用植物にもなったいきさつは何か。民俗地名として今後、探求したい。

『四万十町地名辞典』の高知県の字一覧によると、次のとおりである。

板のつく地名にはガケからきたもの（民俗地名語彙辞典）、イタは動詞イタブ（痛）の連用形で、物が損なわれることから崩崖などの崩壊地形・ガケ地から来た地名（地名用語語源辞典）の場合もあるので現地確認が必要である。

虎杖谷（安芸市穴内）、虎杖谷（南国市才谷）、板取（南国市廿枝）、植松板釣畑（南国市大埇）、板ツリ迫（本山町沢ヶ内）、虎杖サコ（高知市鏡大利）、イタツリ谷（高知市鏡小山）、イタツリゴチソ（仁淀川町坂本）、虎杖サコ（越知町横畠北）、虎杖原（津野町三間川）、虎杖川（梼原町上成）、虎杖野（中土佐町大野見大股）、虎杖谷（四万十町七里・同町床鍋）、イタドリ田（四万十町仁井田）、板取山（四万十町志和）、虎杖山（黒潮町鈴）、板取谷（黒潮町入野）、虎杖山（四万十市下田）、イタツリ谷（土佐清水市立石）、虎杖渕（土佐清水市横道）、イタツリサコ（三原村亀ノ川）、虎杖カラス（宿毛市和田）

田舎の暮らしぶり・遍路商い

武四郎は遍路をお客さんにした商いを紹介している。「蓬餅を皆重ニ入而道の傍ニ出し、銭の丸

を書きうり置り。」は蓬餅代金を銭の絵にしているということで、今風の良心市方式のようである。また「皆四国へんろども春より夏にかかりて暖気になるにしたがいひ、無用の着類をうる故ニ在中より街道すじえ来りて皆着類をうれうれとすすむ」は道理にかなった商売で、「着物のうりものはないかよ」の声が聞こえるようだ。歩き遍路は少しでも身軽くしたいもので、今は宅急便で自宅に送っていることだろう。

阿波の阿野村でも「道の傍らに竹を立て是にわらんじ（※ママ）をくくり附、銭の丸を四ツ、五ツ位ヅツ書て直段をしらしうり置。また重箱ニ蓬餅を入道のはたにうり置。昔しより是を一ツとして盗去りしものなしと云伝ふ也。惣而阿波、土佐より伊予宇和島、大洲領分丈は人気まろくして少しもかかる少しの盗賊のうれひはなしと。松山、西条辺か讃岐へかけてはお化遍路多くしてかかることは少しもなし。」と当時の四国遍路の地域特性を述べ、「お化遍路」が地域によってはいることを喚起している。純朴・正直と都市化が相反するのは今に限ったことではない。武四郎が歩く時代はまさに「近代」の入口である。

渡辺京二の『逝きし世の面影』は、幕末・明治の外国人訪日記録をつぶさに精査し、彼らの目に映った開国以前の日本を知ることで近代といわれる日本が何を滅ぼしてきたかを問うた本である。渡辺は「滅んだ古い日本文明の在りし日の姿を偲ぶには、私たちは異邦人の証言に頼らねばならない。なぜなら、私たちの祖先があまりにも当然のこととして記述しなかったこと、いや記述以前に自覚すらしなかった自国の文明の特質が、文化人類学の定石通り、異邦人によって記録されているからである。」と述べ、「（西洋の）強固な優越感と先入観にもかかわらず、彼らが当時の日本文明

に賛嘆の言葉を惜しまず、進んで西欧文明の反省にまで及んだこと」に強い感銘を受けている。当時の日本が歩もうとしていた「西欧化」と「富国強兵」への道は西欧が中国に対してとった行為を強固な教訓としたからに違いない。

欧米人の記録で驚かされるのは「暮らしの基本となる衣食住の生活の豊かさ」の証言である。私たちが教えられた江戸期の封建社会は士農工商の身分制度と悲惨な百姓など土地に縛られた下層民の貧しい暮らしと、それに抵抗する百姓一揆などのイメージである。しかしながら異邦人の記録は「貧乏につきものの不潔さはなく、彼らの家屋は必要なだけの清潔さを保っている。」「山の上まで見事な稲田があり、海の際までことごとく耕作されている。」「成文化されない法律と無責任な支配者によって奇妙に統治されているにもかかわらず、その国民の満足そうな性格と簡素な習慣の面で非常に幸福なのだ。」と記されている。徳川時代の年貢は過酷で時とともに重圧的であったという通説は全くの誤りで、時とともに農民に余剰が残るようになったとトマス・C・スミスは述べている。つまり、江戸期の前後に検地された石高は再査定が行われることなく固定している。

この固定された石高に対し、農業生産性は絶えず向上し作物の収量も増大したことは周知のとおりである。この生産性の向上により食糧の輸入なしに江戸を含めた都市人口が増大した。農業人口が増えれば余剰は食いつぶされるのに、都市の雇用（商工業）に吸収され安全弁となっていたという。この時代とともに農村の人とモノの余剰が生まれたことが、江戸期の文化の高揚につながり、江戸中期の遍路の発展につながったといえる。江戸末期の「お陰参り」が五百万人。当時の人口が三千万人として六人に一人は数カ月休んで伊勢に詣でたことになる。貧しくとも悲惨な暮らしのイ

メージは微塵もない。

武四郎は伊勢街道の商家のせがれ。江戸末期の特に田舎の暮らしぶりに興味があったのだろう「簡素とゆたかさ」「勤勉と工夫」「平穏な日常」を異邦人と同じように切り取っている。

川村与惣太

江戸時代の安芸の歌人・川村与惣太は、西寺（金剛頂寺）の別当職を五十二歳（一七七二）で辞し、東は甲浦より、西は宿毛の松尾坂まで土佐一国を巡遊し『土佐一覧記』を著した。地名や故事とともに自らの五百六十九首の歌で綴った「安政の土佐風土記」ともいえる。土佐の地誌である『土佐州郡志』の半世紀後、『南路志』の三十八年前の地名を記録した貴重な文献史資料である。与惣太の歌碑五基は室戸市役所前と南国市十市・石土池と大正に（四万十町大正、同町江師、同町下津井）にあるので機会があれば訪ねてみてはどうだろう。

上山　山里の物さびしさはま柴焼く　けぶりも雲にまがふ夕暮　（大正振興局前）

胡井志　今宵しも夢にも見つる故郷を　こひしの里に草枕して　（江師温泉）

矢立森　かり人の矢立の森を分け行けば　妻こもるとや鹿ぞ鳴なる　（下津井・ダム湖畔）

武四郎は与惣太が吟遊した五十年後の土佐を歩いたことになる。

愚草の川柳集⑰選

「コロナ考」

2020 / 秋

不条理の世に食みでる　コロナ哉

コロナなき真空地帯に　人はなく

国亡びメディア囀る　雲の上

私物化のモノサシ呑んでるヌエ一尾

※疫病は戦争と飢餓とともに人類の三大災禍といわれる。そんな災禍に、昔は異形の妖怪「アマビエ」で、今「自粛」。どちらも祈り頼み▽呼吸できない息苦しい世界を「真空地帯」という。戦後のベストセラー『真空地帯』。「軍隊＝真空地帯」でもって、影絵のように日本を浮きあがらせている野間宏の作品。それに共感した愚草▽「ものさし」はだれもが共通してものを測る基準。裸の王さまがモノサシになっている日本。科学者のいない政権は小さなマスクを配り、侍従・瓦版も「忖度」する不思議な国でアリス。

HP「四万十町地名辞典」引用

四国遍路 三十五日目（奈半利町～27～安芸市穴内）

高知県安芸郡奈半利町（ホテルなはり）
～　二九・五キロメートル／九時間二五分
土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線穴内駅（安芸市穴内）
高知県香南市野市町東野（高知黒潮ホテル）

活動日記

今日の宿は野市の「高知黒潮ホテル」。友人の山本洋に会うために遍路沿いで一番近い宿にしたが、面会の十七時までには間に合わせるのは到底無理で、ごめん・なはり線穴内駅からひとまず列車に乗ることにした。

二十六番札所神峯寺の往復を計算に入れてなかったといういつものミステイク。

神峯寺の麓の茶屋に寄ると「リュックはそこの丸椅子に置いといて」という。何かと思えば、頭陀袋の軽装で打ち戻りできるサービスなのだ。往復で二時間半の身軽さは筋斗雲に乗るようでありがたい。出来立ての赤飯を買ってコーヒーを注文した。

27番札所神峯寺の仁王門と神峯神社の鳥居

神峯寺の仁王門に並んで神峯神社の鳥居がある。明治以前の神仏習合時代には神峯神社が元札所だったという。奥の院ともいえるこの神社はさらに四百メートルの石段を登らなければならない。そんな訳なのか誰も神峯神社を参拝する人はいない。五来重は『四国遍路の寺』で「奥の院を詣でなくては札所の本来の由来は分からない」と述べている。どこの札所も弘法大師の由来の記述のみで終わっている。世界が宗教戦争（テロ）を呈している今こそ神も仏も大切にする普通にいい加減な宗教観がかえって求められるのではないか。そういった寛容さを持っているのが修験の方たちのように思える。

銘酒「美丈夫」（安芸郡田野町）

上の写真は「美丈夫」で有名な浜川酒造（田野町）の酒蔵。奈半利から田野に入り国道から旧道に進むと新町にある。隣の安田町には高知の雄「土佐鶴」酒造があり、今人気の玉の井南酒造場の「南」もある。この小さな町にビックな酒蔵が続くのだ。

昨日の野根八幡宮、佐喜浜八幡宮、吉良川の御田八幡宮、羽根八幡宮、今日の田野八幡宮、安田八幡宮、伊尾木八幡宮、安芸・東浜八幡宮、新城の城八幡宮と、歩いた遍路道沿いの海の街には八幡宮が多い。それも海まで参道が導かれている。八幡さんは全国に四万四千社あるというから熊野系神社の三千社など少ないものだ。

今日は久しぶりにゆっくりと山本洋と話ができた。「黒潮温泉」につかりながら、食事もとり少しのお酒も嗜みながら、マスクをつけたり外したりで楽しんだ。

明日は、穴内に戻って仕切り直しだ。

神峯寺（第二十七番札所 竹林山（ちくりんざん） 地蔵院（じぞういん） 神峯寺（こうのみねじ））

御詠歌：みほとけの恵みの心神峯　山も誓いも高き水音

宗派：真言宗豊山派　本尊：十一面観世音菩薩（伝行基作）　開基：弘法大師

創建：天平二年（七三〇）　所在：安芸郡安田町唐浜

燈明巌がコロナで光る　唐浜から標高四百メートルほど車道を縫うようなへんろ道を登ると一時間半程度で駐車場に着く。程なく神峯寺の仁王門と神峯神社の鳥居が並び二つに道が分かれることになる。これが神仏習合の札所の痕跡となる。

『皆山集』によると、現在地より北四キロメートルのヒワダガ森にあった神峯神社は元和年間（一六一五―二四）に社殿などが焼失。その後現在地に再建され、廃寺となっていた別当寺・神峯寺の十一面観音を納めた。当時の様子について、澄禅は「麓の浜より一里、早起きして峰に登り札を納める。本堂三間四面、本尊十一面観音。寺は麓にある。無礼な僧である。」と書き、寂本は「一時火災があってさびれてしまった。今は本堂と大師堂、鎮守社のみである。麓に養心庵というのがあり、参詣する人はここで休憩する。」と記す。

神仏分離前には、本堂に十一面観音を祀り、本殿を観音堂と称していた。別称、神峯寺（しんぽうじ）。しかし

険しい山の上のため神官も社僧もそこには住まず、四国遍路も唐浜の岡にあった養心庵を山下の札所として遥拝していたという。明治初年の神仏分離で本尊十一面観音は金剛頂寺へ移し、寺号を廃して観音堂を社殿としたという。明治二十年（一八八七）になって神社の下に新たに寺地を開いて再興した。

神峯寺から神峯神社に向かう人はまずいない。石畳を十五分ほど登れば仰ぐような神峯神社。現社殿は嘉永六年（一八五三）の再建された和様と唐様を取り合せたものである。近くに「燈明巌（とうみょういわ）」がある。異変が起こる前兆にこの岩が青白く光るという。コロナ・パンデミックではどうだっただろうか。

武四郎の軌跡

■高知県安芸郡奈半利町
名張浦（奈半利）川（奈半利川）

■高知県安芸郡田野町
たの浦（田野）よき浦（不明）

■高知県安芸郡安田町
安田川（安田川）安田浦（安田）たうの濱（唐浜）二十七番竹林山神峯寺（二十七番札所神峯寺）

■高知県安芸市

おふ山（下山・大山岬）かうの村（下山・河野集落）いおき村（伊尾木）安喜浦（安芸）
しんせう馬場（穴内乙・新城集落）

武四郎は、神峯寺へは麓の唐浜から往復三時間となることから、「午後三時」過ぎたらダメという。南アルプス農鳥小屋の親父さんだけではない登山ルールの基本である。武四郎は十六歳で戸隠山を登るなど、数あまたの日本の山を登っている。ウオルター・ウェストンを「日本近代登山の父」と呼んでいるが、武四郎は真の「日本登山の父」ではないか。

イシイモと石蛤

弘法大師伝説は武四郎も数多く紹介しているが、仏教の教えの「因果応報」に関する説話として、東寺（最御崎寺）のイシイモ（不喰芋）と神峯寺の石蛤（くわづ貝）がある。武四郎は「此処に不喰芋と云もの有。其ゆわれは此あたりに而媳が芋をあらひ居たるを、大師乞給ふニ奉らざりしかば其芋皆かたくなりしと云伝ふ。然し其はとも有此芋は本艸綱目に出たる野芋のことなるかと思わる。」として下の絵図を示している。同じように神峯寺の麓の唐浜で取れる蛤を弘法大師に接待しなかったため石のように固いくわずの貝になったというもの。土佐の人はモノをやるのが大好きな気質と思いきや二つの説話に出くわし驚いた次第である。高松市内のへんろ道で出会った老婦人を思い出す。「小さい畑で野菜を作って、きれいなものは皆さんに配って、残り物を食べよるがよ」とのこと。決して四国の人は欲張りではない。

最御崎寺のイシイモ（『四国遍路道中雑誌』巻之二）
写真提供：松浦武四郎記念館（三重県松阪市）

四国遍路 三十六日目（安芸市穴内～28・29・30～高知市高須新町）

高知県香南市野市町東野（高知黒潮ホテル）
土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線穴内駅（安芸市穴内）
～　三八・一キロメートル／一〇時間三七分
とさでん交通御免線県立美術館通駅（高知市高須新町）
高知県香南市野市町東野（高知黒潮ホテル）

活動日記

今日は二十八番札所大日寺、二十九番札所国分寺、三十番札所善楽寺の三カ寺の予定。

宿の高知黒潮ホテルにランドリー設備がなく手洗いをした。バスルームのロープは壊れており錫杖を代用した。脱水機がないため朝になっても乾いていない。仕方なく連泊とした。安芸の穴内駅まで列車で戻り四十キロメートルくらいの行程となるのでザックに頭陀袋と少しの物品を入れて歩くことができた。

今日のねらいは、香我美町岸本の「イの丸」「ハの丸」などの「丸地名」の聞き取り調査と香長平野の条理制の痕跡を示す「坪」地名の所在地の写真を撮ること。

へんろ石バス停（南国市下末松）

岸本の三十代の女性は「ここがハの丸ということは聞いたことがあるが使うことはない。地区名も一区、二区と別れている」。八十代の女性は「別から嫁に来たので知らない。ここが四区と五区の境」と示してくれた。風の強い日で外に出ている人がいないのでここで諦めた。

大日寺から国分寺への途中、松本大師堂から舟入川を越し、南国市西山で坪地名を九十代の女性に聞くと「野中（兼山）さんが開いてくれた。一の坪は確かこの向こう」と教えてくれた。先に進むと大将軍神社の鳥居があった。その杜の向こうが上野田の一ノ坪がある所。十七時までに善楽寺に入らなければならないので先を急いだ。

南国市の下末松に「へんろ石」のバス停と「へんろいしまんじゅう」の饅頭本舗の看板を見つけたが肝心の遍路石が見つからない。地元に根付いた通称地名だろう。

国分寺では次郎柿のお接待を受けた。なんぼでも持って行けというが、空のザックに全部入れてもしょうがない。ありがたく一個頂いたが食べる時間がない。岡豊の高知歴史民俗資料館前で徒歩を断念しタクシーにお願いして善楽寺の納経門限に間に合わせた。

明日の行程に合わせ高須の「西村商店」で打ち止めし夕食とした。野市の宿へはとさでん交通の電車（三百八十円）とタクシー（千六百円）を利用した。

今日の良かったことは手結の「お茶屋餅」を食べることができたこと。食べながら歩いて港を見ると跳ね橋が徐々に上がっているところを見ることができたこと。

あと、三日で家に帰れる。

大日寺（第二十八番札所 法界山（ほうかいざん） 高照院（こうしょういん） 大日寺（だいにちじ））

御詠歌：露霜と罪を照らせる大日寺　などか歩みを運ばざらまし

宗派：真言宗智山派　本尊：大日如来　開基：行基菩薩

創建：天平年間（七二九～七四九）　所在：香南市野市町母代寺

かつての大伽藍も廃仏毀釈で廃寺　本尊は平安時代作の金剛界大日如来。『南路志』には「往古は寺領八百石、寺数廿五ケ寺」とあり、大寺であったことがうかがえる。

澄禅は「ここも太守が最近修理した。堅固できれいな造りである。庫裏は茅屋。住職が隠居し弟子に寺を譲ったが弟子の行跡、女癖が悪いとの評判が立ち、真偽のほどは定かではないが、昨年夏に自殺したので隠居が再住した。このような事情があってか、日が暮れたのに宿泊を断わられた。」と遠慮なく書き、寂本は、本堂の奥で大きな楠で薬師如来（奥の院・爪彫り薬師）を彫り、その傍らから霊水湧出と説明し、「この寺も昔は二十五ヶ寺、寺領も七、八百石あった。」と記されている。生木の仏像は各地にあるが大日寺の奥の院もこれに当たる。

明治の土佐の廃仏毀釈は全国的にも厳しく大日寺も例外ではなかった。武田和昭は納経帳の記録から札所の変遷を研究しているが、『四国へんろの歴史』に廃仏毀釈の影響を詳しく述べている。それによると、大日寺も明治四年（一八七一）には廃寺となり、残された納経帳を見ると「明治五年奉納本尊大日如来法界山」とあるがこれは二十九番札所国分寺と同筆とみられることから、国分寺が代行したもの。その後の明治八年納経帳には「トサ大日寺」とあることからそのころには旧態に復したと推考している。

国分寺（第二十九番札所 摩尼山（まにざん） 宝蔵院（ほうぞういん） 国分寺（こくぶんじ））

御詠歌：国を分け宝を積みて建つ寺の　末の世までの利益残せり

宗派：真言宗智山派　本尊：千手観世音菩薩　開基：行基菩薩

創建：天平十三年（七四一）　所在：南国市国分

星供の根本道場　寂本は「今の本尊は千手観音菩薩で、不動明王と毘沙門天を脇士としている。」と述べているが「今の本尊」というくだりが気になるところで、五来重も「古代において栄えたお寺はみな薬師如来が本尊です。それがどうして千手観音になったか」と述べ、どこの国分寺も国家の庇護がなくなった後、塔頭の二、三ヶ寺が残る。ここの国分寺もその一つの寺である宝蔵院が国分寺の名で残っていった。宝蔵院の本尊が千手観音であった。不動・毘沙門の脇侍から修験の色が濃く醍醐三宝院ではないかという。

当寺の縁起にはその点の記載がないが、土佐国分寺は「星供の根本道場」であると次のように書かれている。

弘仁六年（八一五）、弘法大師四十二歳の厄年に四国八十八ヶ所を開かんと発願なされ、浪華より船出して土佐の大津へ上陸なされたのが恰も節分の當日であった。遥かに瀧の音が聞こえたので其處に到着になり齊戒沐浴して心身を清め、勤念修業遊ばさる。その時生身の毘沙門天王巖上に出現し給ふ。大師其の尊像を彫刻して、其瀧を毘沙門の瀧と名づけ當山の奥之院に指定さる。現今の瀧本の毘沙門堂が夫れである。而して直に當山へ参拝なされ御自身厄年の危難を免れんため、又末世の衆生の災難を除いて開運幸福を得るやうにとの思召よ

り、八祖相承星供の秘法を勸修遊ばされた。廣い日本で大師が四十二歳の厄年の節分に星供を勸修遊ばされた寺は、他にはないので當山を星供の根本道場と言ひ、大師を星供大師と申すのは此の由来に依るのである。

こんなにも明確に書かれるとなんともいえない。奥の院は毘沙門の滝（南国市岡豊町滝本）

善楽寺（第三十番札所 百々山（どどざん） 東明院（とうみょういん） 善楽寺（ぜんらくじ））

御詠歌：人多くたち集まれる一ノ宮　昔も今も栄えぬるかな

宗派：真言宗豊山派　本尊：阿弥陀如来　開基：弘法大師

創建：大同年間（八〇六～八一〇）　所在：高知市一宮しなね二丁目

「しなねさん」の別当寺　山号が「百々山（どどざん）」。百々は全国に分布する地名で、水音の轟く所をいい、「十（と）」かける「十（と）」で百を表したもの。トオトオ、ドオドオ、ドドと転訛したのだろう。百だけでドウと読むのは四万十市に百笑（ドウメキ）、百目木（東北地方）にある。

土佐国一ノ宮の高鴨大明神（地元ではしなねさん）の別当寺。

澄禅は「社僧に神宮寺、観音院の両寺。」とある。寂本は一宮図に参道の左に神宮寺、右に長福寺（観音院）を描き、本文には「神宮寺の本尊は阿弥陀如来、脇士は観音、勢至菩薩の金剛像」と記している。

武田和昭『四国へんろの歴史』で二つの別当寺についての次のように説明している。宝永八年（一七一一）の納経帳には「百々山観音院長福寺」、宝暦三年（一七五三）の納経帳には「百々山観

音院善楽寺寺」とある。善楽寺が退転し再興され長福寺となり再び善楽寺に改められたという経緯だ。また、天保十一年（一八四〇）の納経帳には「一宮別当神宮寺」と「土州一宮百々山善楽寺」の二つがあり二カ所で納経していたとみられる。また、明治の神仏分離における大きな混乱についても次のように述べている。まず神宮寺を善楽寺に合併したが、善楽寺も廃寺となり、本尊は国分寺に移され納経されていたが、その後、明治九年（一八七六）になり安楽寺（高知市洞ヶ島町）に本尊を遷座し札所となった。昭和四年に地元の信者が埼玉県の東明院の薬師如来を移して善楽寺を再興し、国分寺から大師像も移された。このことから三十番札所の混迷が平成六年まで続くことになったのだ。

今でこそ平穏な四国霊場ではあるが、明治の神仏分離は札所の混乱ばかりでなく、札所であった神社も経済的に大変だっただろう。明治以降の混乱期を過ぎた四国霊場は、それまでの修験者や六部、聖といった四国遍路を支えた「サポーター」まで記録から遠ざけ、弘法大師の修行形態からほど遠い「弘法大師信仰」一辺倒になっていった。

武四郎の軌跡

■高知県安芸市

しんせう馬場（穴内乙・新城集落）やなかれ山（赤野甲・八流集落）

■高知県安芸郡芸西村

わじき村（和食）

■高知県香南市

手井山（夜須町手結山）手井村（夜須町手結）ミなと村（夜須町手結港）やす濱（夜須町）きしもと村（香我美町岸本）赤岡村（赤岡町）二十八番法界山高照院大日寺（二十八番札所大日寺）菩提寺村（野市町母代寺）びやうじ村（野市町父養寺）

■高知県香美市

ものい川（物部川）とさかしま村（土佐山田町戸板島）いわお村（土佐山田町岩積）

■高知県南国市

松本村（松本）上のだ村（上野田）はたいた村（廿枝）川（国分川）國分村（国分）二十九番護國山國分寺（二十九番札所国分寺）川（笠ノ川）坂（不明）八幡村（岡豊町八幡）天龍寺村（岡豊町定林寺）坂（逢坂）

■高知県高知市

一ノ宮村（一宮）三十番一之宮百々山神宮寺（三十番札所善楽寺）本社高加茂大明神（土佐神社）阿曾う村（薊野）ひしま橋（比島橋）垂水の渡し（絶海）

武四郎は手結の餅のことを書いていないが「麓に茶屋あり。」とだけは記している。ニッキの香りのある練あんの真っ白なモチ。創業二百年近いというからお殿様はもちろん武四郎も食べた

手結のお茶屋餅（香南市夜須町）

ことだろう。安芸や室戸に行くときは高知東自動車道を利用せずにこの「お茶屋餅」を必ず買っている。眼下の手結港可動橋はちょうど上にあげられていて船舶が通っていた。

ここから、岸本、赤岡、大日寺、廿枝、国分寺へのへんろ道は昔と同じだろう。廿枝の手前の末松では「へんろ石」のバス停や「へんろいしまんじゅう」の看板があった。へんろ道であることは間違いない。

ものい川

武四郎は「ものい川」と記す。澄禅は「言云川は一言しゃべるうちに洪水になる川だという。」と、真念は「物部川・ものいかわ　大水の時は大日寺ゟの市町へもどり舟わたし有」と述べ、二人とも「ものいかわ」と呼んでいる。寛政の四国遍礼名所図絵も「物井川」と書いていることから江戸期における川名は「ものい川」に間違いない。

現在の物部川は「物部郷」に由来するといわれる。和銅七年（七一四）の『続日本紀』に「土左国人物部……」、延暦二四年（八〇五）の『日本後紀』に「香美郡少領外従六位上物部鏡連家主」とあり物部郷の豪族と考えられている。淡路島の洲本に「物部」の地名があり、平城京から出土した和銅七年（七一四）の木簡に「淡路国津名郡物部里」と記されている。物部という地名は全国に十七カ所あり「毛乃倍（ものべ）」の読みが付されている。物部は朝廷のもとで軍事や刑罰を担当していた古代の職業集団で、「物部の八十氏（や・そ・うじ）」と呼ばれて諸国に分布していた。『和名抄』には十二の物部郷があり、国土地理院地形図には次の大字がある。

兵庫県洲本市物部、兵庫県朝来市物部、長崎県壱岐市郷ノ浦町物部本村触、滋賀県長浜市高月町物部、京都府綾部市物部町、栃木県真岡市物井・物部小学校・物部郵便局

土佐の物部川の経緯は、次のとおり。宝永四年（一七〇七）頃に編纂された『土佐州郡志』には高知龍馬空港に近い物部村の段に「物部川　源出韮生槇野山流入海鮎魚多舩而渉」とあり、上流域の村々も「経村入物部川」とあることから、当時の藩の統一名称は物部川となったのだろう。享保一九年（一七三四）の『土佐幽玄考』には「在物部河鏡河下流之西」とある。これは、往古より鏡川と呼ばれていたが、元禄年間（一六八八―一七〇四）五代藩主山内豊房が城下を流れる潮江川・大川・南川などと呼ばれていた川名を鏡川と定めた。これにより、同名であった鏡野（香美郡）の鏡川を改めることになったとある。

文献史学では物部川で一件落着だろうが、澄禅や真念、武四郎など旅人は地元の人に聞いて川名を記していることから、「ものい川」と呼ばれたのはどうしてか。栃木県真岡市物井にある物部小学校の地名が気になるところであるが、先におくこととする。

大きな河川の名前はその区域を利用する地元の人にとっては川であり大川であり、特定する必要がなく本川での暮らしに何の支障もない。小谷の名前が細かに名付けられているのは特定する必要があるからだ。外来者が流域全域を一つの河川名称とすることで混乱するだけである。

二期作という消えた季語

武四郎は「はたいた村（南国市廿枝）」で「余が此処を通りしは三月廿日前なりしが、田おうゆ

る処も有。」と述べ、禅師峰寺を打って「種﨑村」にさしかかると「此当り皆田うえ最中也。此辺ニ而聞くに此稲を七月中に刈取、其株にひつじと申生出たるが、又九月下旬ニは実のるよし。青米多くしてよろしかざれどもキシ子に皆遣ふよし。キシ子と申すわ、自からの家ニ而の遣ひ料也。実に肥沃にして富貴の国なり。」と二期作の様子を記している。

土佐の気候が温暖だとして「（天保六年）三月廿日前」と記録にとどめていることからこれを新暦換算すると、一八三五年四月十七日となる。四月初旬に田植えをして七月中に刈り取り、その後切株に萌芽する二番穂を「ひつじ（穭）」といい、自家消費米に使われることを「キシ子」と呼ぶようである。本来の二期作は同じ田んぼで一年に二度稲を栽培し収穫することであることから、二期作ではないがそのさきがけのようである。『高知県方言辞典』にはヒツジもキシコも項を起こしてないが、高岡郡津野町辺りで「きしらう」を「同じとき、同じようなことがある。」の意味を持つとあるから「キシ子」は同じことが繰り返される二番穂の小さいさまを表した言葉かもしれない。

第二期作稲が栽培されはじめたのは藩政中期。年間二回の米作により当時の食糧供給に重要な役割を果たしたが、藩政末期から明治初年にかけては種々な事情のために香長平野でも絶滅に瀕したという。一度復活したものの、減反政策で大幅に落ち込み、今では、一期作目は新米として高い人気ではあるが、二期作目は飼料米として使われているようだ。

それでも、「二期作」は高知の温暖な気候を示す春の風物詩としてテレビで放映される。

四国遍路 三十七日目（高知市高須新町～31・32・33・34～土佐市高岡町）

高知県香南市野市町東野（高知黒潮ホテル）
とさでん交通御免線県立美術館通駅（高知市高須新町）
～　三〇・二キロメートル／九時間四一分
高知県土佐市高岡町甲（ビジネスイン土佐）

活動日記

高知市内の三十一番札所竹林寺、三十二番札所禅師峰寺、三十三番札所雪蹊寺、三十四番札所種間寺を訪ねる。

竹林寺は高知市街地を流れる鏡川と浦戸湾が一望できる五台山にある。中学校の友達、泰ちゃんと初めてデートした場所だ。当時はロープウェイがあった。今は牧野植物園も拡充され人気の観光スポット。へんろ道はその園内を通り、登り詰めると左側が牧野富太郎記念館となる。黙って入ることもできる「不思議なお接待」だ。コンコン山の東側を巻いて南門の右側に遍路専用の秘密の出口がある。もうそこは竹林寺だ。

竹林寺はいつも綺麗に整備されている。少し紅葉した石段のプロムナードが清新な気持ちにさせてくれる。右脇に日吉

牧野植物園内のへんろ道（高知市五台山）

神社の狛犬があり、一方は親駒が子駒を褒める姿、もう一方は親駒が子駒を叱る姿となっている。五台山の麓には夢窓疎石の遺構と言われる「吸江庵（ぎゅうこう）」や吸江庵を再興した高僧「絶海（たるみ）」の地名も見える。

五台山から、へんろ道を南に下ると禅師峰寺となる。

禅師峰寺は太平洋を広く見渡すことができる。海に関係する人が多く参詣することだろう。ちょうど昼になった。正午のチャイムがご当地の歌手なのか演歌が流れる。

ここから、浦戸湾を渡って雪蹊寺に向かうが、浦戸大橋ルートと渡船ルートがある。種崎から長浜に向かう県営渡船は一時間に一本（毎時十分発）しかないので時間の都合によるが、へんろ道ではここしかできない体験なのでお勧めしたい。それも無料である。自転車、バイク、徒歩の四人が乗船していた。対岸へはものの五分で着き、雪蹊寺へは十五分だ。

海の遍路道（高知市種崎）

雪蹊寺で同年代の遍路と知り合った。聞けば宿も土佐市高岡の「ビジネスイン土佐」という。一緒に宿まで同行となった。話しながら歩くのは初めての体験だった。

宿につき、続きの話を近くの居酒屋「へんしも」で深めた。活きのいい魚が入った時に店を開くというこだわりの亭主で、魚は最高、土佐ジローのメニューも絶品で肝ニラ炒めやすき焼きをい

ただいた。

残り二日の行程で結願となる。宿をどこにするか思案するところだ。

竹林寺（第三十一番札所札所 五台山（ごだいさん） 金色院（こんじきいん） 竹林寺（ちくりんじ））

御詠歌：南無文殊三世）の仏の母ときく　我も子なれば乳こそほしけれ

宗派：真言宗智山派　本尊：文殊菩薩　開基：行基菩薩

創建：神亀元年（七二四）　所在：高知市五台山

五台山は県民のユートピア　五台山は学びと遊びと祈りが織りなす県民の聖地である。この五台山で象徴となるのが竹林寺の五重塔である。この竹林寺へのへんろ道は牧野植物園のなかをフリーで通り抜ける秘密の扉もある粋な計らいだ。寺観はすがしく純信・お馬が手を取り合って石段を下りてきそうな雰囲気だ。

澄禅は「本尊文殊景色がよく、五台の語源となった五つの峰がある。」と述べる。四国霊場で文殊菩薩が本尊となっているのはここだけである。寂本の五台山図は竹林寺本坊の前で、一宮からの道と城下吸江道と禅師峰寺道（山中五町）の三本のへんろ道が交わることになる。周囲には中坊、北室、東坊、南坊、妙高寺、大威院の六坊があり、そこから仁王門をくぐると正面に文殊堂があり、右に護摩堂、左に鐘楼、大師堂と三重塔となる。周辺には行基（開山堂）、山王権現（鎮守）、経蔵、弁才天、池、奥の院弥陀、宝篋印塔、五輪塔が設えてある。

禅師峰寺（第三十二番札所 八葉山（はちようざん） 求聞持院（ぐもんじいん） 禅師峰寺（ぜんじぶじ））

御詠歌：静かなるわがみなもとの禅師峰寺　浮かぶ心は法の早船

宗派：真言宗豊山派　本尊：十一面観世音菩薩　開基：行基菩薩

創建：大同二年（八〇七）　所在：南国市十市

海に祈る禅定の師　澄禅は「禅寺峯師　本尊十一面観音、仁王門あり。天台宗から真言宗に転宗。中興開山を進闘上人という。」とあり、寂本は「この山を弘法大師はいたく心を寄せて、天からキャという梵字が降ってきたのでそのまま本尊とした。」と記し、奥の院と号する竜穴が二つあり、寺の前に御手洗という大きな池があるという。禅師峰寺図には、海際の高福寺道（雪渓寺）から山に取りつくと左右に本坊と脇坊があり、山を上り途中に仁王門。それをくぐりさらに上ると大きな岩と本堂。左に大師堂、右に鎮守が描かれている。五来重は「この岩が磐境（いわさか）というもの。海の神を祀る場所が辺路修行者の霊場になったという。」と述べている。囲む岩が神域の境であり、磐境は祭祀場である。古代遺跡のストーンサークルに共通する基層信仰だろう。足摺にある唐人駄馬巨石群、宮之浦岳の巨石群など神々のままごととしかいいようがない。

雪蹊寺（第三十三番札所 高福山（こうふくざん） 幸福院（こうふくいん） 雪蹊寺（せっけいじ））

御詠歌：旅の道うえしも今は高福寺　のちのたのしみ有明の月

宗派：臨済宗妙心寺派　本尊：薬師如来　開基：弘法大師

創建：弘仁六年（八一五）　所在：高知市長浜

長宗我部元親の秦神社と菩提寺　創建当初は「保寿山高福寺」で後に「慶雲寺」と改称。長宗我部地検帳（天正十六年・一五八八）には「慶雲寺」とある。長宗我部元親が臨済宗として再興し、長宗我部家の菩提寺として元親の法号から寺名を「雪蹊寺」とした。寺名は変遷するが御詠歌は高福寺と詠む。

長宗我部元親没後に訪れた澄禅は、「高福寺　中古より禅宗になって、本尊は薬師如来。前住職は妙心寺派の大和尚である。保福山雪蹊寺という。」と記す。また、寂本は「本尊は薬師如来で両脇士も弘法大師の作。保寿山高福寺　長宗我部元親がこの寺を菩提寺にしたため、関山派の僧侶が住んで雪蹊寺と改めた。」と書いている。また、武四郎は「保寿山高福寺」と記す。

江戸期以降「少林山雪蹊寺」であるはずだが記録が混在しているのはどうしてか。二人とも旧寺名の高福寺と記すのは、弘法大師ゆかりの寺名を変えるのは許しがたいということだろうか。四国霊場で臨済宗の札所は藤井寺と当寺の二カ寺である。廃仏毀釈の混乱の後にも弘法大師に配慮してか、雪蹊寺みずから、少林山から高福山に改めている。幸福院の院号といい、遍路におもねった名づけはいかがなものだろう。

本尊は澄禅、寂本ともに、薬師如来としているが、同じ江戸期中期の土佐一国の地誌である『土佐州郡志（一七〇〇）』には「雪蹊寺　済家僧住持号保福山本尊観音（略）高福寺後改慶安寺」とあり、江戸後期の『南路志（一八一五）』には「少林山雪蹊寺　旧号高福寺　慶雲寺　高福山　本尊馬頭観音・勢至」と両地誌共に本尊を観音（馬頭観音・勢至菩薩）と記している。本尊の違いはただごとではないが、そのいきさつはいまだ分からない。

明治の廃仏毀釈では、明治初年に廃寺となり、明治十二年（一八七九）に再興が許可された。明治五年の納経帳に「三十三番奉納薬師如来　竹林寺」とあることから、竹林寺が納経を代行していたようである。明治十六年の納経帳には「奉　医王尊　雪蹊寺」と再興されている。

五来重は「種間寺にある御座大師が雪蹊寺の奥の院」というが、御座大師は種﨑にある。

種間寺（第三十四番札所 本尾山（もとおざん） 朱雀院（しゅじゃくいん） 種間寺（たねまじ））

御詠歌：世の中にまける五穀のたねまでら　深き如来の大悲なりけり

宗派：真言宗豊山派　本尊：薬師如来　開基：弘法大師

創建：弘仁年間（八一〇～八二四）　所在：高知市春野町秋山

二つの縁起と二つの寺　種間寺の縁起では、用命天皇の御代（五八五―八七）、四天王寺の造営のために百済から招かれた工匠や仏師が、帰途の航海中、土佐沖で暴風雨に遭遇し秋山の湊に寄港。彼らは海上安全のために薬師如来の像を刻み、本尾山の頂上に祀ったということである。その後、山の下に朱雀院（庫裏）ができた。本堂と鎮守が上にあり麓が納経所である。

もう一つの縁起は、弘法大師が唐から持ち帰った五穀の種をまいたことから種間寺という寺名になったというもので、この方が有名である。

五来重は、種間寺と本尾山薬師堂とは別のもので、後に一緒になって本尊を薬師如来、寺名が種間寺となった。種間寺から二キロメートルほど海岸に近い丘陵が本尾山。その南面崖の下が旧奥の院だと言う。

寂本の種間寺図は、高福寺道から清瀧寺道に行く途中、川（新川か）を渡ると朱雀院と弁財天池。そこから上り、山頂には本堂と鎮守が描かれている。本文に「今の堂は正保三年（一六四六）前藩主の山内忠義が昔のごとくに本尾の山頂に建てたものだ。三代藩主山内忠豊は寛文九年（一六六九）鎮守社を再建した。」と述べている。現在の種間寺の位置ではない本尾山に種間寺があることになる。この鎮守を『高知県神社明細帳』で調べたら秋山字堂ノ西に鎮座する春日神社の由緒に、「神社記云本堂脇種間寺鎮守春日社勧請来歴不相知寛文九忠豊公御建立」とあり寂本の記述と一致することから、種間寺の移動とともに現在の当寺の西上に遷宮されたということになる。また『南路志』には「本尾山朱雀院種間寺　本尊文殊」とあることから、元の種間寺は文殊で、本尾山朱雀院と一緒になったときに薬師如来となったのだろう。その他、南路志には「龍池説話」「白字の般若」など興味のある記述がある。

武四郎の軌跡

■高知県高知市

垂水の渡し（絶海）三十一番五臺山金色院竹林寺（三十一番札所竹林寺）川（下田川）下田村（下田）十市村（十市）卅二番八葉山求聞持院禪師峯寺（三十二番札所禅師峰寺）種﨑村（種﨑）こざ町（種﨑）川（浦戸の渡し）みませ浦（御畳瀬）長濱村（長浜）卅三番保壽山高福寺（三十三番札所雪渓寺）坂（唐戸）もろき村（春野町東諸木）秋山村（春野町秋山）卅四番種間寺本尾山朱雀院（三十四番札所種間寺）守山村（春野町森山）廣園

村（春野町弘岡）

■高知県土佐市

ニ淀川（仁淀川）高岡町（高岡）

武四郎は種崎から浦戸に渡る「浦戸の渡し」を「川」と記している。今も遍路道として「海の道」があるのはここだけである。当時は「渡しせん壱人前三文」の船賃がいるが、現在は高知県営渡船として無料で一時間に一本運行されている。雪渓寺、種間寺、仁淀川へと続くへんろ道は現在も同じである。一番の観光地「桂浜」には立ち寄ってないことから、この時代はそう有名でもなかったのだろう。今では坂本龍馬の銅像と同じ目線で太平洋の向こうを見ようというイベントがある。高知は、なんでも龍馬頼み。弘法大師頼みの四国霊場とステレオタイプは同根だ。

四萬八川という仁淀川

武四郎は「二淀川」の段で「舟渡し。此川を四萬八川とも云えり。川源阿波、讃岐、伊予辺より来る故に水深く、諸流落合而くるがゆえに四萬八川と云へり。船せん廿四文。」と説明するが、実際は、大河ではあるものの伊予国の石鎚山系を源として土佐に流れる四国第三の川である。武四郎は仁淀川の別称として「四萬八川」を挙げている。

雪渓寺からの同行遍路（仁淀川堤防）

仁淀川の概説として、片岡雅文の『土佐地名往来[10]』（高知新聞連載コラム）を紹介する。古くは〝みわがわ＝神河〟と呼んだらしい。祭事の神酒をつくる水にこの川を使った（土佐風土記逸文）。これとは別に「によどがわ」の川名も昔からあったとして片岡は二つの由来説を述べている。①贄殿川説は、この川で取れた鮎を朝廷へ献上することによる。「贄（にえ）」は天皇に捧げる魚や鳥のこと。「贄殿（にえどの）」は国から送られてきた贄を納める殿舎で、仁淀川は鮎の名産であることから「贄殿川」が転訛したもの。「贄」地名は各地に散見される。②似淀川説は、高岳親王が入唐の途中、高岡に立ち寄り、山城国の淀川に似ていることから「似淀川」と名付けたというもの。片岡は諸説あるなかで「贄殿川」が根拠はないものの妥当ではないかという。『土佐州郡志』には「ニ淀川」と記される。山城国で淀川とは言ったというのは、淀川が下流域の川名であることから疑わしい。贄殿川について『延喜式』の巻二十四、二十五の主計寮の部（全国の庸調の割当、全国の特産物が記録）を当たってみたが、土佐からの献納品に堅魚（カツオ）とともに年魚（鮎）を見ることができた。が、贄・贄殿から仁淀川由来の意図を探すことはできなかった。全国の「贄」地名を見ても、長野の「贄川」は温泉があった時代は「熱川」と書かれたが、温泉が枯れて「贄川」の漢字を当てたという。三重県の「贄浦」は伊勢神宮と深い関係にあり神饌の魚をこの地から持ち込んだという。はたして仁淀川の鮎が贄として地名になるほどの由緒があるようには思えないし、贄殿との関連性は何もないように思えるが、仁淀川の研究者に教えてもらいたいものだ。

澄禅は「新居戸ノ渡」と記している。新居戸が二淀に転訛したものとも考えられる。

武四郎の「四萬八川」説は初めて聞くが、「諸流落合」どことなく四万十の支流を集めたという

四万十川の由来に似ている。武四郎に川名を聞かれた地元の人がひょうきんに「四万八川」といったのか、上流の仁淀川第一支上八川の下流だから「しもやかわ」と冗談で言ったのを「四萬八川」と書き留めたのかもしれない。

地名アラカルト⑧

－ここだけの地名「サイノウ」－

高知県下の小字「サイノウ」は 51 ヶ所あり 39 ヶ所が四万十町窪川地域に分布する▼川野茂信は『長宗我部地検帳のホノギについて』でサイノウの県下の分布図を示し「サイノウは窪川台地に集中」と述べる▼境界地名である「サイ（賽）」と畦道を示す「ノウテ（縄手）」の最終音のテが消音した「ノウ」の合成音が「サイノウ」で、山寄りの畦道をこのように呼ぶこととなった。多くは長宗我部地検帳のホノギとして見られる中世以前からの地名である▼田と山谷の際、水利の始点の位置にある田として特定した名称で呼ばれたのではないか。それが周囲のランドマークとなる地形的な特徴や周辺樹木、耕作者を合成し「坂サイノウ」や「柿サイノウ」、「仲間サイノウ」と地名化▼稲作にとって境界とは山の神から田の神に変わる時間的な境界と里山と田の境となる空間的な境界の二面性がある。千葉徳爾は「ノウテは縄手ではなく、苗代のノウシロを短縮したノウではないか」という。私も同感する。

Google マイマップ

高知県土佐市高岡町甲（ビジネスイン土佐）
～　四〇・八キロメートル／一〇時間五〇分
高知県須崎市安和（民宿安和の里）

活動日記

朝六時のまだ薄暗い中、ビジネスイン土佐にザックを置いたまま清滝寺に向かった。

ライトを持ってくるのを忘れた。急いで歩くうちに汗ばんできた。上着を脱ぐ時に錫杖を落とし、金具部分を破損させてしまった。朝起きて眼鏡も行方不明でその上に納経代も賽銭もないことに気づいた。

ま、錫杖は修理すればいいし、眼鏡はベットの脇にでも落ちているだろうし納経は今度来るときにすればいい。なるようになるさは般若心経のエトスと勝手に解釈している。そう考えると楽になる。

少し明るくなった山道の先にチョン、チョンと動くものがいる。八咫烏の水先案内ではなく、ジョウビタキのようだ。

横浪三里の渡船 530 円（須崎市浦ノ内）

「コッチ、コッチ」と鳴きながら飛び跳ねる。着けば七時前だが一人で祈りを捧げた。

気がついたことが、清瀧寺のサンズイを取ると青龍寺になること。何か意味があるかもしれないので帰ってから調べてみよう。弘法大師もこの青龍寺から石鎚山に向かったという。青龍寺の納経所で「本堂の隣に神社があるが、石鎚神社か」と問うと白山神社と答えてくれた。

明日の最終日のために宿を安和の「民宿安和の里」にしたものの、塚地峠や井の尻峠のへんろ道を選択したことで大いに時間を食ってしまった。そのうえに武四郎が歩いた浦ノ内湾の北側に決めたが、浦ノ内の入江は深く一向に前へ進まない。これでは宿に着くのが十九時を過ぎてしまう。歩くのをあきらめて、須崎市営巡航船、タクシー、列車を利用し移動した。

巡航船は三本しかないがちょうど一時間待ったら十五時五分発（深浦～横浪五百三十円）に乗れる。教えてくれたおじさんに「退屈だから待つ間トギをして」とお願いしいろいろと話を伺った。そういえば親戚の味元栄三がここでタイの養殖をしているはずだ。聞くとそうだという。おじさんの名は福本で、ここらには多い姓だそうだ。

タクシーに乗ったためにＹＡＭＡＰの軌跡（ログ）が直線化。最後にしてイレギュラーとなったが、これも楽し。最後の泊まりとなった宿では、一人ビールで乾杯した。

昨日、春野町の野菜農家のお嬢さんが「私のおばあちゃんが中土佐の大坂におって、お遍路さんの休憩所をやっているので寄ってって」と言っていた。大坂にするか添え蚯蚓にするか、明日の気の向くままにしよう。

清瀧寺（第三十五番札所　醫王山（いおうざん）鏡池院（きょうちいん）清瀧寺（きよたきじ））

御詠歌：澄む水を汲むは心の清瀧寺　波の花散る岩の羽衣

宗派：真言宗豊山派　本尊：厄除薬師如来　開基：行基菩薩

創建：養老七年（七二三）　所在：土佐市高岡町丁

神仏習合の清瀧寺　澄禅は「清瀧寺醫王山　本堂南向き、本尊薬師如来。ここも再興して立派である。真言宗、寺中に六坊ある。麓に八幡宮がある。」と述べる。寂本は清瀧寺図に麓に池と鏡智院と鐘楼。仁王門をくぐり石段を上り正面に本堂、左に弁財天、大師、真如墓、右に鎮守、カナハ松が描かれている。武四郎も「大師堂、真如親王、鎮守熊野社」と記している。寂本は真如について、大師御影堂の隣に真如親王（高岳親王（たかおかしんのう））の墓（五輪塔）がある。真如が入唐するとき、しばらくこの地に住んでいた。その地を御所の内と名づけていた。唐・インドまで遠遊のため前もって墓を築いたものと述べている。

『南路志』は「醫王山境地院清瀧寺」の段で、養老七年行基が伽藍於比山に建造し景山密院釋本寺と号したこと、弘法大師が高岡親王（真如）を供って清滝寺に来たこと、清瀧、鳴瀧、細瀧の三滝があったこと、当山鎮守神として山城国愛宕権現・八幡宮を勧請したこと、この高岳親王の故によりこの地が高岡となった、などが書かれている。また、境内の大師堂（御影堂）建立について、次のようにある。

美作国意伯と云道心者建立ツ云傳

当山旧記ニも、美作国野介村人当山古寺床ニ暫住居ト記有之

但奥ニ記御影堂休意棟札ニハ、延宝八年（一六八〇）休意造立ト有之
然ニ右御影堂ハ今之大師堂之事と云傳也。右休意、後改意伯由云傳。大師堂奉作事

寂本が来寺する十年ほど前のことである。澄禅が来寺したのが寂本の二十六年前でこのときは寺中に六坊あったということだから、火災か何かで荒廃したのだろう。美作の意伯は「当山古寺床ニ暫住居」しながら御影堂を作善したという。長い歴史のなか、寺の浮き沈みは当たり前のことであるが、高岡の地名とおなじタカオカであることから高岳親王（真如）の物語を付けくわえたのだろう。

『高知県神社明細帳』の松尾八幡宮（郷社・高岡町字八幡鎮座）の由緒には真如親王が京都石清水八幡宮を勧請したということになっている。澄禅も「麓に八幡宮」とあることから、本堂が山上にあり、六坊の一つである麓の八幡宮別当寺・鏡池院が納経所となっていたのだろう。愛宕神社の由緒には「神社牒云清瀧寺境内愛宕権現、棟札文曰応永廿二年（一四一五）乙未九月十九日上棟清瀧寺宮殿願主沙弥浄全。寛永十八年（一六四一）辛巳二月吉日造立山王権現在大願主対馬守忠安公……」とある。境内の愛宕権現や山王権現、麓の八幡宮別当寺など、ここも神仏習合の色濃い札所であったようだ。

どういった経緯なのか現在は琴平神社が鎮座している。東谷から嘉永年中（一八四八―五五）に遷宮されたと『高知県神社明細帳』に記録されている。境内の石碑には「琴平神社の創建は三百二十余年前（※一六七〇年前後）と推定される。神社本殿は〃奉再建山神宮〃とある天保二年（一八三一）の棟札によりこの時代のものと推定」と書かれている。『南路志』、『高知県神社明細

帳』との齟齬があり再調査する必要がある。

青龍寺（第三十六番札所 独鈷山（とっこうざん） 伊舎那院（いしゃないん） 青龍寺（しょうりゅうじ））

御詠歌：わずかなる泉にすめる青龍は　仏法守護の誓いとぞきく

宗派：真言宗豊山派　本尊：波切不動明王　開基：弘法大師

創建：弘仁六年（八一五）　所在：土佐市宇佐町竜

独鈷飛来の地は海を渡る札所　四国遍路で海を渡るのは浦戸の渡しと宇佐福島から井尻に向かうこの地だけだっただろう。青龍寺の縁起に、弘法大師が青龍寺を創建する際に、浦ノ内湾を船で渡り、お供をした八人が残って「竜の渡し」の船守を近代まで営々と伝えてきたという。昭和四十八年（一九七三）に宇佐大橋が架かっている。

青龍寺の寺名の由来は、弘法大師が入唐したときの師匠が恵果和尚で師匠のいた寺が青龍寺であった。投げた独鈷がこの地の松に留まっていたというもの。

澄禅は「青龍寺は本堂東向き、本尊不動明王。鎮守は白山権現。大師開山の折、中国の青龍寺に似ていたので青龍寺とした。獨鈷山伊遮那院、如意山光明法寺道場院、摩留山赤木寺龍宝院と多くの名がある。独鈷山というのは北東に独鈷杵に似た独鈷嶽があるから。頂上に不動堂があったが山火事で焼失した。本堂再興時に太守が小倉庄助に命じて六尺ほどの不動石像を造り、九尺四方の石堂に安置した。」とある。赤木寺の由緒も述べている。

澄禅は「独鈷山」「如意山」「摩留山」の三山を示し、如意山に本堂があり、本堂の北東となる独

鉆山に不動堂があったということで、消去法で察すれば摩留山は庫裏の裏山となるか。ただ、現在比定される奥の院は、寂本のいう「堂から四町ほど西に奥の院」の所である。いずれにしても、西からの順で、如意山に本堂があり、摩留山に庫裏があり、独鉆山に奥の院があることになる。

『南路志』には正保年間（一六四五―四八）に山内忠義公が本堂再興したことを記している。

武四郎の軌跡

■高知県土佐市

高岡町（高岡）卅五番醫王山鏡智院清瀧寺（三十五番札所清瀧寺）いせき村（井関）小川（波介川）つかじ村（塚地）宇佐浦（宇佐町宇佐）猪の尻浦（宇佐町井尻）龍村（竜）目洗清水（不明）卅六番独鉆投山伊舎那院青龍寺（三十六番札所青龍寺）宇佐坂（不明）

■高知県須崎市

かうそ村（浦ノ内塩間・高祖集落）しあい坂（浦ノ内塩間）出見村（浦ノ内出見）出見坂（出見坂）たちめ坂（立目坂）たちめ村（浦ノ内立目摺木）あるくま坂（赤熊坂）させう坂（サセブ坂）するき村（浦ノ内立目摺木）立石村（不明）どうめき坂（不明）横浪村（浦ノ内東分・横浪）奥浦村（浦ノ内西分・東分）佛坂（仏坂）かう田村（神田）とさき村（土崎町）鳥越坂（鳥越坂）今在家（お大師通り）すき川（新荘川）かどや坂（角谷坂）あわ村（安和）

塚地から宇佐へ越えるへんろ道、井尻の港から青龍寺へ向かうへんろ道と、山越えのへんろ道

が続く。青龍寺へは打ち戻りがいいと案内し、「猪の尻浦（井尻）へもどり、此処より船をやとい て、横浪と云へ船而行もよろし」と浦ノ内湾を船で西端・横浪まで行くことを紹介するが、船賃が高く、武四郎は横浪三里を「土州の八坂八浜」といい、このへんろ道を歩いたようだ。

土佐の八坂八浜

澄禅は「陸路は三里であるが、難所であるので昔より舟路を利用する人が多い。」という。この舟便は「御免の渡し」と呼ばれ、遍路本来は歩くべきだが、弘法大師の許可があるという。先に述べた弘法大師にお供をした舟守八人衆が権利を独占していたという。

武四郎の記す「八坂（ヌキナシ機坂）」は次のとおり。

【武四郎】	【真念】	
宇佐坂	うさ坂（はいかた坂）	※宇佐福島から坂本への山越え道
しあい坂	しあい坂（高祖坂）	※灰方から塩間の高祖に越える道
出見坂	出見坂	※千仏から出見の芝崎へ越える道
たちめ坂	たちめ坂	※出見の春日から立目へ越える道
あるくま坂	あかくま坂	※不明。浦ノ内立目摺木に小字「赤熊」
させう坂	させぶ坂	※不明。浦ノ内立目摺木に小字「サセブ」
	たていし坂	※不明
どうめき坂	だうめき坂	※不明

今在家

『土佐州郡志』の須崎村（須崎市）の段に古市町、職人町、原町、新町、芝町の五町区があり、洲﨑浦（須崎市）段にはの枝村として釣人町、今在家町とある。『長宗我部地検帳』の「土佐国高岡郡津野洲﨑地検帳」には「岡」「市」「浜」とあることから、洲﨑浦が「浜」に当たるだろう。今在家のホノギはないが、大善寺領が八筆ある。この大善寺は、真念が「土さき村、とりこえ坂、今ざいけ村大師堂」と記す、今在家の大善寺の大師堂のことだろう。

「今在家」の「在家」は、出家に対し在俗のまま仏道修行する意味なのだが、もう一方で、在郷、在所といった、田舎や村を意味したり、都市の近郊を表す場合もある。中世の荘園、寺領において宅地・田畑、住人を一つの単位で年貢等の賦課に当たってきたが、そのまとまりの領域が在家である。その本となるのが「本在家」で、新たなまとまりとなったのが「脇在家」である。一戸の発達段階が本家―分家であるのに対し、本在家―脇在家は在家支配が非農民に関しても向けられるなど、権力の支配構造、集落形成の発達段階が推定できる地名群である。地名としては本在家、今在家、新在家、向在家などがある。

全国の「今在家村」は二十九カ村あり、四国には愛媛県西条市今在家・愛媛県松山市今在家がある。また「新在家村」は二十八カ村あり、四国には四万十町土居（元新在家村）がある。同じ四万十町に「本在家」の村があったが明治九年の町村合併で七つの村が合併し七里村となった。

『地名用語語源辞典』では「今在家」について「近世の新田集落を表わす地名用語。西日本に多い。」とある。

高知県の字一覧に見られる在家関連の小字は次のとおりである。

今在家　いの町伊野、いの町小野、佐川町加茂、中土佐町大野見大股、四万十町弘見、四万十町戸川、四万十市久樹、大月町樫ノ浦、大月町口目塚（今池・いまざいけ）

新在家　芸西村西分甲、香南市夜須町夜須川、高知市鏡梅ノ木、高知市春野町森山、いの町勝賀瀬、土佐市宇佐町宇佐、土佐清水市津呂、宿毛市平田町黒川

須崎市安和岡在家　須崎市安和向在家　津野町芳生野乙尾在家

四万十市西土佐津野川カジ在家　南国市里改田在家田

佐川町黒原カラザイケ畑　須崎市土崎コサイケ　須崎市浦ノ内西分ザイケ田

愚草の川柳集⑱選

「宿痾」

2021 / 春

文明の宿痾の洞に　人は棲み
二枚舌　宿痾仮病に遣い分け
投資なき資本喪服の　終列車
資本主義　不要不急の置きみやげ

※世界報道自由度ランキング 67 位では、ほんとうの日本の姿がみえない。「投資なき資本」もそのとおりだ。小泉と平蔵のタッグは法人税率を下げ、雇用の流動化施策を実施。これで、大企業は労働分配率を下げ、先行投資や研究開発もせずに数百兆円の内部留保をためこんだ。日本の科学力ならコロナワクチンの開発などすぐやるかと思えば、技術力、裏技、奥の手なにもない。最高の政策は「自粛」だのみ、人だのみ。SNS の「いいね」に変わる「いかんぜよ」をつくってよ。佐々木愚草はそんな病巣を「宿痾」という。

HP「四万十町地名辞典」引用

四国遍路 三十九日目（須崎市安和～四万十町茂串町）

高知県須崎市安和（民宿安和の里）
～　二八・八キロメートル／九時間一二分
高知県高岡郡四万十町茂串町（三十七番札所岩本寺）

活動日記

長い道のりも今日が最終日となる。民宿「安和の里」の二杯飯でエネルギーを満タン補填。焼坂と大坂の県下でも指折りの険難な二つの峠を越え、七子峠にやっとたどり着いた。武四郎は添蚯蚓（そえみみず）を歩いているようだが、昨日、高知市春野町西諸木のハウス農家のお嬢さんが「おばあちゃんが中土佐の大坂でお接待しています」というので大坂のへんろ道に決めた。添蚯蚓は中土佐の市街地からすぐ山道となるが、大坂は奥深くまで平坦な農道と林道が続き、登り口から一気に急登となり、小一時間で七子峠となる。

峠には昨年オープンした「こころの七子茶屋」がある。御主人の山本哲資先生に頼まれた代参について「懇ろに○さんの病気平癒を祈念した」と伝え、コーヒーとミレービスケッ

こころの七子茶屋（四万十町床鍋）

トのお接待を受けた。二階はギャラリーとなっており、四国の数多い接待所を見てきたが確実に一番だと思う。

いつもの町だが歩くと長い道のりとなる。岩本寺に着いたのは十六時になっていた。山門前はサイクリングのホットスポットになっていたが、境内はもっと大きく様変わりしてポップアート空間に変身していた。岩本寺のアートは伝統だ。岩本寺本堂の格子天井に描かれたアートで、マリリンモンローが有名だ。本堂には本尊五仏が示されている。明治以前の札所であった「五社」の本地仏である。

門前の果物屋さんの北村さんに結願を報告して迎えの妻の車に乗った。

我が家はやっぱりいいなー。

ＹＯＨ３、ＭＩＺＵほか活動日記を読んでいただいた皆さん。ありがとう。今日が最終回です。関係者には後日、まとめた冊子をお送りしますので断らずにお納め下さい。

おしまい

武四郎の軌跡

■高知県須崎市

あわ村（安和）やけ坂峠（焼坂）

■高知県高岡郡中土佐町

くれ村（久礼）そへミミ坂（添え蚯蚓坂）

■高知県高岡郡四万十町

とこなべ村（床鍋）かげの村（影野）かいの村（替坂本）六たんじ村（六反地）かミあか村（神有）川井村（平串）うしろ川（仁井田川）仁井田村（宮内）卅七番五社（高岡神社・三十七番札所岩本寺）

武四郎は遍路道では土佐無双の三大坂といわれる「かどや坂」「やけ坂峠」「そへミミ坂」を越えることとなる。「海月庵跡」を過ぎてへんろ道を下ると「とこなべ村」となる。ここからは緩やかな下りの田園のなかを五社に向けて進む。

澄禅は「カトヤで休憩し一瀬渡って、カトヤ坂を越えて行く。峠から見れば谷の向かいに焼坂という十倍もありそうな大きな坂がある。気落ちしながらも谷底へ下って、土佐無双の大坂とされる焼坂を越えた。上り上って、谷へ下って、河を渡って久礼。」とある。久礼から「南西に行き、一里ほどある焼坂に劣らぬ坂を越え、山の中の野を行き、新田ノ五社に向かう。」とある。久礼からは「添え蚯蚓へんろ道」と「大坂へんろ道に」の二手に分かれる。澄禅は久礼の常賢寺に泊まって「久礼から南西」とあることから、常賢寺（常賢寺址）から長沢川を遡上する南西方向の添え蚯蚓坂に向かったと思われる。

仁井田五社と河野玉澄

武四郎は五社について次のように記している。

卅七番五社　従青龍寺十三り。高岡郡仁井田村ニ有。本社は五社明神。其外社内末社多し。別当岩本院と云て是より十餘丁久保川町ニ有。

本堂　本地阿弥陀如来。薬師如来。地蔵菩薩。観世音菩薩。不動明王。并て大師堂。其外堂舎多し。扨川を渡りもどりて十丁にして　久保川

江戸後期の四国霊場三十七番札所が仁井田五社。地元では五社さんと呼ばれる。

伝承によれば六世紀ごろ伊予の豪族・越智守興の子・越智玉澄が争いから当地に逃れこの地を開墾（新井田・仁井田）し、仁井田大明神を勧請した。玉澄は後に越智氏の後継者として伊予に帰り越智二十五代を継ぎその後「河野（かわの）」を名乗った初代とされる。河野氏の来歴を記した『予章記』文書には、小千益躬（越智）を祖先とし子孫に小千玉輿なる人物がおり、名を小千から越智に変え、さらに河野氏を名乗るに至ったとある。

天智天皇二年（六六三）の白村江の戦い（新羅・唐×百済・倭国）に倭国の越智守興らの水軍が出兵し、大敗戦となった。この白村江の戦いは東アジアにおける新秩序の到来となり、大国宗主・唐と朝鮮半島の冊封・新羅と倭国の新国家体制づくりとなった。

白村江の戦いは、倭国の連合政権の終わりであり、大化の改新（六四五年）？といわれる政治変動を含めた前後の半世紀にわたり混乱は続き、「日本」という新しい国家の体制の建設を模索し、ヤマト王朝への歴史の一元化の始まりとなったといえる。幕藩体制を廃し王政復古となった明治維新にも似た日本の分水嶺である。この混乱の中で越智玉澄が河野玉澄に羽化していったと考えるが、五社と伊予・河野の関連も含め、論考をまとめて次の機会に発表したい。

河野氏の家紋は、大三島神社の神紋である「折敷に揺れ三文字」と同じである。津野町や梼原町には多くの三島神社があるが、この勧請も京を追われた藤原経高が伊予を経て河野氏の支援により

高岡郡の津野山に入ったとされる。伊予と土佐、特に高岡郡との関係は深い。

その後、天平年間（七二九－七四八）聖武天皇の勅により行基が仁井田明神の傍らに天の七星を象徴した仁井田七寺を建立。その根本寺が福円満寺である。

弘法大師は弘仁年間（八一〇－八二四）にこの地を巡錫し、仁井田明神の御神体を五つの社に分けた。　※は、旧窪川町の地区別の持ち場

①東大宮（大日本根子彦太迩尊（孝霊天皇）・本地仏不動明王像）※松葉川
②今大神宮（磯城細姫命（孝霊天皇の皇后）・本地仏観音菩薩像）※仁井田
③中ノ宮（大山祇命・吉備彦狭嶋命・本地仏阿弥陀如来像＜大通智勝仏＞）※街分
④今宮（伊予二名洲小千命（河野玉澄）・本地仏薬師如来像）※郷分・立西
⑤森ノ宮（伊予天狭貫尊（小知始祖？）・本地仏地蔵菩薩像）※東又

の五社である。神仏習合の札所は、神峯寺（神峯神社）、龍光寺（稲荷神社）、栄福寺（石清水八幡神社）など数多くある。

五来重は神仏習合の札所について『四国遍路の寺』（下二四五ページ）で次のように説明している。

伊予の名族（河野）のいちばんの先祖が岩本寺の奥の院である所の五社にまつられて、しかも、そのもとは陵（みささぎ）です。ここは伊予を支配した越智氏の先祖の陵だということで、非常に重んじられたお宮でした（中略）御詠歌は〝六つのちり五つの社あらわして　ふかき仁井田の神のたのしみ〟となっています。神社が札所であるということを説明する歌と

して重要で、六つの塵というのは煩悩です。六塵煩悩という六種の煩悩を五つの社が現れて和合したというのが和合同塵（神仏習合）

五社の山の上にある陵が奥の院（札所）であり、神社をもって札所とするところが意外に多く、四国の一之宮はみな札所になっていると明治の神仏分離以前の神社と寺の関係を述べている。続いて、五来重は五社と伊予・大三島神社の関連についても、『南路志』（刊本③三一二ページ）記載のとおり中宮の本地仏が大通智勝仏であるとの記述を引用し、大三島神社（伊予国一之宮）の南光坊（五十五番札所）の本地仏も札所で唯一大通智勝仏を本尊にしていることから、大三島のもとは仁井田の五社だという仮説を立て関連性を述べている。

澄禅は「新田ノ五社は南向きに四社並び建ち、一社は小高い山上に建つ」と記す。

この五社さん。その宮司は岩崎さん、宮守は門前に住む人が河野さんであるが、歴史ある五社ですら神社の社会にあっても二極化と過疎化による複層的な沈滞傾向は進み、今では維持することすら大変な様相である。この件については冬月律の『過疎地神社の研究－人口減少社会と神社神道－』に詳しく四万十町旧窪川町の現況について実態悉皆調査を基に報告されているので参照されたい。

■ あとがき

十六歳の春。江戸アケミと二人で寝袋とテントをザックに詰めて鳥取へ向かった。理由はカミュの『異邦人』を読んで不条理な砂漠を体験したい。それだけだった。身なりは「紅衛兵」といわれた中村高校指定の赤いジャージ。それもアケミのズボンは破れて七分になっている。誰が見ても不審者の格好だが、「乗らんかよ」と声をかけてくれた。安来市では夕飯に風呂、アケミの便秘のマッサージ、朝食に昼の弁当とお世話になった。念願の鳥取砂丘で「太陽が眩しかったから」というつもりだったが小雨まじりの曇天だった。

中村高校を卒業するとき国鉄中村駅では、映画『祭りの準備』で原田芳雄がしたようにアケミが大きなしぐさと大声で万歳をしてくれた。本当はアケミがこのしがらみの田舎から抜け出すためにしてもらいたかったのだろう。アケミは明治大学の史学科に進み、有名なロックミュージシャンとなったが、一九九〇年に事故死となった。私は、「趣味・役場」の普通の暮らしで退職となった。

あれから十年たってしまった。東日本大震災やフクシマ原発事故の災禍は今のコロナの衝撃に似た混沌とした精神の暴走を感じた時だった。その三・一一のショックが冷めやらぬその月の末日に四万十町役場を退職した。

宮城県沖地震の時に役場に入り、東日本大震災で退職することになったのは深いえにしで

す。第二の神の火の危機になす術もなく暴走するさまは、核の時代の終焉とともに都市の論理による豊かな時代を考え直すことを予見しているようです。

大正町から四万十町となり、昨年は町の基軸となる二つの基本条例が制定されるなど、次の世代につないで去ることができることに感謝いたします。

退職後は以前からの夢だった、〇〇に取り組みたいと思っております。〇〇が何かは、「新しいわたし」の生き方。

お世話になった人への退職あいさつ文である。ハガキに記した「〇〇」の答えをやっとお世話になった方に、「この本」とともに伝えることができる。

町村合併の評価はそれぞれあるだろうが、ただ喉に刺さった骨のような違和感は今も続く。合併を問う住民投票を二度行い、十三票、三十票と僅差ながら新しい町に期待を寄せた。

平成十八年（二〇〇六）三月二十日は四万十町発足の日。その時に書いた詩を添える。

三月二十日

わたしたちの選択は
とどまることをしない
時代の与える機会ととらえ

そこから眼をとざすことなく
一人ひとりの身によせて
まことをつくりあげる

歴史がその時代に
人としてどのように共に生きてきたかを
つたえるものであるとすれば
山で暮らすことに誇りをもち
山とともにいきる姿を
紡ぎ、結んで、ひきついでいく

おおくの思い出をこえながら
豊かな「里」の世界で呼吸する
そこには
新しい
わたしが
はじまる

地名を拾いはじめて十年。

その学びのなかで松浦武四郎の『四国遍路道中雑誌』に出合い、四国遍路に刻んだ地名をたどることを決意した。当初は登山アプリＹＡＭＡＰに一日の「活動日記」をレポートしアップするだけであったが、欲張って武四郎のたどった四国の二百年後の暮らしを検証してみようと試みたのが本書のはじまりである。

明治百五十年の起点となる神仏分離という精神の装置の構造変革がどう変容してきたか。四国を歩いて答えが見えたわけでもないが、明治百五十年を考える機会となった。西洋列強に負けない明治の国づくりであったろうが、日本という国は豊かになったのか。「少年のような希望」を誰もが描けるようになったのか。明治の妖怪がいまだはびこり、四国の山々には「亡所」が広がる。コロナ禍での「Stay home」の合唱は、できる人、できない人、できえない人との格差が一層明確になり、「自助」・「自粛」に抑えられた精神は弱者への暴力へと向かう負のスパイラルとなっていく。

とは言っても悲観はしない。あと三十年は生きて不断の行動のなかで市民の歴史を紡いでいく。本書は独り言のような内容となったが、とりあえず六十七年分をまとめてみた。

三十年早く逝った江戸アケミに本書を捧げたい。

【付　録】

参考図書

○遍路研究書

近藤喜博『四国遍路』（桜楓社、一九七一年）
近藤喜博『四国遍路研究』（三弥井書店、一九八二年）
五来重『四国遍路の寺　上・下』（角川書店、一九九六年）
愛媛大学『四国遍路と世界の巡礼：公開シンポジウム』（二〇〇七年）
柴谷宗叔『江戸初期の四国遍路―澄禅「四国辺路日記」の道再現―』（法蔵館、二〇一四年）
武田和昭『四国へんろの歴史―四国辺路から四国遍路へ―』（美巧社、二〇一六年）

○遍路記録・体験記

承応二年（一六五三）澄禅『四國邊路日記』、柴谷宗叔『江戸初期の四国遍路』所収
貞享四年（一六八七）眞念『四國徧禮道指南』、稲田道彦訳注・講談社学術文庫
元禄二年（一六八九）寂本『四国徧礼霊場記』、村上護訳注・教育社
寛政十二年（一八〇〇）『四國遍禮名所図會全五巻』久保武雄一九七二復刻版
天保七年（一八三六）松浦武四郎「四国遍路道中雑誌」『松浦武四郎紀行集中』所収
大正七年（一九一八）高群逸枝『娘巡礼記』（朝日選書、一九七九年）
昭和四十七年（一九七二）土佐文雄『同行二人―四国霊場へんろ記―』高知新聞社
平成七年（一九九五）山本和加子『四国遍路の民衆史』新人物往来社
平成二十九年（二〇一七）袴克明『四国遍路日誌―風土と民俗史を巡って歩んだ四三日―』梧桐書院
平成三十年（二〇一八）黛まどか『奇跡の四国遍路』中公新書ラクレ

○遍路道と道標

『高知県歴史の道調査報告書第二集　ヘンロ道』（高知県教育委員会、二〇一〇年）
『阿波遍路道　雲辺寺道・大興寺道調査報告書』（徳島県教育委員会、二〇一七年）
小松勝記『ヘンロ道を辿る』（毎日新聞高知支局、二〇〇七年）
小松勝記『遍路標石　徳右衛門標石特集』（四国霊場六番安楽寺、二〇一五年）
『企画展「四国へんろの旅ー絵図・案内記と道標ー」』（愛媛県歴史文化博物館、二〇一二年）

○遍路地図

宮﨑建樹『四国遍路ひとり歩き同行二人・地図編』（へんろみち保存協力会、一九九〇年）
『四国遍路地図・1～4』（歴史を歩く旅マップシリーズ・東海図版）

○遍路解説書

頼富本宏『四国遍路とはなにか』（角川選書、二〇〇九年）
森正人『四国遍路ー八十八ヶ所巡礼の歴史と文化ー』（中公新書、二〇一四年）
山折哲雄『山折哲雄の新・四国遍路』（ＰＨＰ新書、二〇一八年）
愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路の世界』（ちくま新書、二〇二〇年）

○遍路資料

広江清編『近世土佐遍路資料』（土佐民俗学会・土佐民俗叢書三、一九六六年）
『憲章簿　第五巻』遍路編（高知県立図書館、一九八五年）

○巡礼関連書

新城常三『社寺と交通ー熊野詣でと伊勢参りー』（日本歴史新書、一九六〇年）
前田卓『巡礼の社会学』（ミネルヴァ書房、一九七一年）
佐藤久光『遍路と巡礼の社会学』（人文書院、二〇〇四年）
門田岳久『巡礼ツーリズムの民族誌ー消費される宗教経験ー』（森話社、二〇一三年）

西海賢二『旅と祈りを読む　道中日記の世界』（臨川選書、二〇一四年）

○宗教関連書

五来重『高野聖』（角川選書、一九七五年）

宮家準『熊野修験』（吉川弘文館、一九九二年）

○松浦武四郎関連書

吉田武三編「四国遍路道中雑誌」『松浦武四郎紀行集　中』（富山房、一九七五年）

松浦武四郎研究協議会編『シンポジウム「松浦武四郎」・北への視角』（北海道出版企画センター、一九九〇年）

「松浦武四郎の歩き方」『ＮＡＧＩ第四十七号冬』（月兎社、二〇一一年）

『幕末の探検家松浦武四郎と一畳敷』（ＬＩＸＩＬ出版、二〇一〇年）

木下博民『青年・松浦武四郎の四国遍路―宇和島伊達藩領内の見聞―』（風ブックス、二〇〇八年）

合田一道『松浦武四郎　北の大地に立つ』（北海道出版企画センター、二〇一七年）

笹木義友編『新版松浦武四郎自伝』（北海道出版企画センター、二〇一三年）

「没後一〇〇年記念特輯」『松浦武四郎研究会会誌』（松浦武四郎研究会、一九八八年）

更科源蔵『北海道と名づけた男　松浦武四郎の生涯』（淡交社、二〇一八年）

鈴木義昭『松浦武四郎とアイヌの大地』（ダイアプレス、二〇一九年）

○廃仏毀釈関連書

安丸良夫『神々の明治維新―神仏分離と廃仏毀裂』（岩波新書、一九七九年）

神仏分離百五十年シンポジウム実行委員会『神仏分離を問い直す』（法蔵館、二〇二〇年）

古川順弘『神と仏の明治維新』（洋泉社、二〇一八年）

○地名関連書

松永美吉『民俗と地名　民俗地名語彙辞典 上・下』（三一書房・日本民俗文化資料集成⑬⑭、一九九四年）

楠原佑介・溝手理太郎『地名用語語源辞典』（東京堂出版、一九八三年）
柳田国男・倉田一郎『分類山村語彙』（国書刊行会、一九七五年）
筒井功『風呂と日本人』（文春新書、二〇〇八年）
松田壽男『古代の朱』（ちくま学芸文庫、二〇〇五年）

○高知県関連書

『角川日本地名大辞典・39高知県』（角川書店、一九八六年）
緒方綜哲編『土佐州郡志』（一七〇四‐一七一一・刊本土佐史談会）
武藤致和編『南路志』（一八一三・刊本高知県立図書館）
片岡雅文『土佐地名往来』（高知新聞連載コラム、二〇〇三四月～二〇一九年三月）
近藤日出男『何を食べてきたのだろう』（高知新聞社、一九九六年）

○愛媛県関連書

『角川日本地名大辞典・38愛媛県』（角川書店、一九八一年）
『伊予国地理図誌（中・南予）』（伊予史談会、二〇〇九年）
『伊予国地理図誌（東予）』（伊予史談会、二〇〇九年）
半井梧菴『愛媛面影〈伊予史談会叢書第一集〉』（一九八〇年）
小泉道『伊予の説話資料の研究』（大明堂、一九八〇年）
愛媛県歴史文化博物館編『古地図で楽しむ伊予』（風媒社、二〇一八年）
堀内統義『愛媛の地名―小さきものへのめまい―』（えひめブックス21、二〇〇〇年）
土井中照『えひめ地名の秘密』（アトラス出版、二〇〇五年）

○香川県関連書

『角川日本地名大辞典・37香川県』（角川書店、一九八五年）

大塚敏　等編『西讃府志』（那珂多度同志会、一八九八年）
阿闍梨・道範『南海流浪記』（洲崎寺本、一二五八年）
『香川叢書　全三巻』（香川県、一九三九年）

○徳島県関連書

『角川日本地名大辞典・36徳島県』（角川書店、一九八六年）
『異説阿波志』（編者当不明）
阿波藩編纂地誌『阿波志』（佐野山陰ほか、一八一五年）

○二百年を読み解く本

渡辺京二『逝きし世の面影』（葦書房、一九九八年）
司馬遼太郎『この国のかたち』（文藝春秋、一九九〇～一九九六年）
北條勝貴『世界』「亡所考」（岩波書店、二〇二一年一月号～連載）
宮本常一ほか『日本残酷物語』（平凡社ライブラリー、一九九五年）

○参考にしたＷｅｂサイト

国土地理院電子国土Ｗｅｂ〈https://maps.gsi.go.jp/〉
グーグルマップ〈https://www.google.com/maps/place/〉
えひめの記憶〈https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/search〉
四国八十八ヶ所霊場会〈https://88shikokuhenro.jp/〉
旅する武四郎〈https://moguramoti.blog.ss-blog.jp/〉
日本古典籍総合目録データベース〈https://base1.nii.ac.jp/~tkoten/〉
四万十町地名辞典〈https://www.shimanto-chimei.com/〉
登山アプリ『ＹＡＭＡＰ』の「武内文治の活動日記」〈https://yamap.com/users/279155〉

四国遍路宿泊先等行程一覧

区分	到着地	宿	歩行時間	距離	歩数
1日目	幡多郡黒潮町上川口	民宿みやこ	時間 分 8:23	km 32.6	歩 51,038
2日目	土佐清水市大岐	民宿大岐の浜	10:46	35.4	66,711
3日目	土佐清水市大岐	〃	10:36	36.6	62,902
4日目	幡多郡三原村上長谷	農家民宿今ちゃん	7:50	21.4	36,195
5日目	南宇和郡愛南町増田	一本松温泉あけぼの荘	10:29	34.4	58,541
6日目	宇和島市津島町岩松	三好旅館	11:52	37.9	62,627
7日目	宇和島市高串	へんろ宿もやい	8:14	21.1	38,279
8日目	西予市宇和町卯之町	まつちや旅館	9:04	23.6	41,748
9日目	喜多郡内子町内子	民宿シャロン	9:23	33.2	58,059
10日目	上浮穴郡久万高原町	いやしの宿八丁坂	11:01	42.1	71,143
11日目	松山市浄瑠璃町	長珍屋	9:25	28.5	48,016
12日目	松山市道後多幸町	ビジネスホテルさくら	7:04	17.3	30,625
13日目	松山市北条	カフェと御宿まほろば	9:28	28.3	42,143
14日目	今治市古谷甲	仙遊寺宿坊	10:40	38.0	64,232
15日目	西条市三津屋南	ターミナルホテル東予	8:00	24.6	39,902
16日目	西条市大町	西条ステーションホテル	10:53	39.0	64,446
17日目	四国中央市三島朝日	ビジネスホテルマイルド	10:33	38.8	59,061
18日目	三好市池田町佐野	民宿岡田	6:36	20.6	33,927
19日目	観音寺市本大町	本大ビジネスホテル	10:49	29.3	57,020
20日目	坂出市久米町	ホテルニューセンチュリー坂出	10:28	37.7	59,148
21日目	高松市西の丸町	ハイパーイン高松駅前	11:03	34.7	60,797
22日目	高松市林町	サンロイヤルホテル	6:14	19.8	36,247
23日目	さぬき市志度	たいや旅館	9:20	26.1	50,321
24日目	さぬき市多和兼割	八十窪	8:47	24.6	40,636
25日目	板野郡板野町吹田	旅人の宿道しるべ	9:31	34.6	54,229
26日目	吉野川市鴨島町	ゲストハウスチャンネルカン	11:00	37.3	56,970
27日目	名西郡神山町阿野	植村旅館	10:21	25.2	50,476
28日目	徳島市元町	スマイルホテル徳島	9:31	30.1	56,252
29日目	勝浦郡勝浦町坂本	ふれあいの里さかもと	8:47	28.9	51,790
30日目	阿南市新野町秋山	山茶花	9:33	24.9	46,261
31日目	海部郡美波町日和佐浦	ホテル白い灯台	8:56	27.8	41,817
32日目	海部郡海陽町久保	温泉民宿はるる亭	9:05	35.8	54,315
33日目	室戸市佐喜浜町尾崎	民宿徳増	8:05	28.9	45,104
34日目	安芸郡奈半利町	ホテルなはり	12:20	45.3	68,191
35日目	香南市野市町東野	高知黒潮ホテル	9:25	29.5	50,365
36日目	〃	〃	10:37	38.1	60,400
37日目	土佐市高岡町甲	ビジネスイン土佐	9:41	30.2	47,825
38日目	須崎市安和	民宿安和の里	10:50	40.8	44,521
39日目	高岡郡四万十町茂串町	37番札所岩本寺（結願）	9:12	28.8	45,915
合　計			373:52	1,211.8	2,008,195
日平均			9:35	31.1	51,492

索引

〈あ〉
赤坂……99
新野……327
粟井坂……169

〈い〉
五十崎……136
石鎚山……190・196
石風呂……144・183
今在家……401
五百木……135
伊予……135・166

〈う〉
臼杵……136
姥ヶ懐……88

〈え〉
衛門三郎……146・153・156・299

〈お〉
追分……198
王子……139・141・197・226
往来地名……198
大洲……128

〈か〉
香り米……148・271
鉦打……339
我拝師山……226
亀……80・93・214・334
カロウト……56・344

〈き〉
木岐……333

〈く〉
熊野山……149・153
熊野信仰……141・155・215・281・287・309・326・362
熊井隧道……58
黒谷……293

〈こ〉
庚申……238
五在所ノ峯……56
五社……56・59・168・173
ゴウロ……351

〈さ〉
西行……199・226・233・242・246
坂……62
逆川……336
坂本……139・143・199・274
篠山……79・91・101・104
蹉跎……76
さぬき市……260

〈し〉
塩木……235
枝折……199・318
色彩地名……293

〈す〉
摺木……104

〈せ〉
聖数……168・258
西予市……122

〈そ〉
左右内……303

〈た〉
大同二年……338
田渡……136

早明浦ダム……292

駄場……99
旦過……143・160・327
〈ち〉
茶堂……315
〈つ〉
津……245
〈て〉
天皇……239・244
〈と〉
峠……62・119
道後……157・185
道前……181・185
鳥坂……125・127
土佐日記……246・357
十夜ヶ橋……128
〈な〉
中間……111
中辺路……41・141・151
中村……204
長谷……87
〈に〉
壬生……187・329
仁淀川……391
〈は〉
箱車……326
長谷……87
花折……267・317
〈ひ〉
引野……271・281・286
下川……121
平山……206・211
鵜田峠……130・137
〈ふ〉
吹上……70
札掛……99・103・125
双海……67
風呂ノ谷……144・158・176
〈へ〉
別所……144・176・218
へんど選り……148
ヘンドヨリ……271
〈ほ〉
方角地名……122・179
亡所……185・293・328
北条……178
星……231・320
〈ま〉
孫兵衛作……184
窓峠……112・119
松尾峠……14・32・91
〈み〉
弥山……302・305
三間……120
妙見……231・320
〈も〉
元結掛……107
物部川……381
〈や〉
山……305
〈よ〉
吉野川……291
〈わ〉
若杉山……323・329

【注記】

1　河治和香『週刊武四郎』（松阪市、第一号～第五十一号）。武四郎の人となりを毎週連載。ネットで検索できる。

2　佐藤久光『遍路と巡礼の社会学』（人文書院、二〇〇四年）一七〇ページ。

3　柳田国男『定本柳田國男集　第二十五巻』（筑摩書房、一九七〇年）「青年と学問」一一〇ページ

4　愛媛県生涯学習センターが運営するＷｅｂサイトの生涯学習情報提供システム。
〈https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/search〉

5　ロックバンド『ジャガタラ』ボーカル兼リーダー。本名江戸正孝（一九五三―一九九〇）は三十六歳で事故死。楽曲『タンゴ』『もうがまんできない』『つながった世界』ほか多数、著書『それから　江戸アケミ詩集』

6　奥四万十山の暮らし調査団『地域資料叢書19四万十の地名を歩く』所収「土佐上山郷・熊野神社の勧請における紀州熊野三山との関連性」を参照。ｈｐ「四万十町地名辞典」で閲覧可

7　千松信也『けもの道の歩き方』（リトルモア、二〇一五年）七ページ

8　サントリー美術館・コレクションデータベース「熊野本地絵巻」参照
〈https://www.suntory.co.jp/sma/collection/data/detail?id=644〉

9　五来重『熊野詣』（講談社学術文庫、二〇〇四年）一二七ページを要約した。

10　高知新聞の夕刊に週一回連載された片岡雅文記者のコラム。高知県下七三六カ所の地名が醸し出す古の景色を文献から読み解き紹介する「現代版風土記」。オーテピア高知図書館の高知新聞データベース閲覧可能。記事の要約はＨＰ「四万十町地名辞典」に掲載している。

■プロフィール

武内文治（たけうち ぶんじ）

1954年生まれ。「一身ニシテ二生ヲ経ル」は人生百年時代の大問題で、その処方箋となったのが「地名」の収集、聞書、記録、公開。歩く巨人・松浦武四郎のまねをして「200年後の四国遍路道中雑誌」をなぞってみました。

・ホームページ『 四万十町地名辞典 』編集子
＜https://www.shimanto-chimei.com/＞
・奥四万十山の暮らし調査団代表世話人
・日本地名研究所会員

※扉ページ『 東西蝦夷山川地理取調図』
提供：松浦武四郎記念館（三重県松阪市）

※この書籍は公益財団法人高知新聞厚生文化事業団助成事業補助金により制作・発刊したものです。

松浦武四郎の四国遍路をたどる
あれから二百年
コロナ時代のへんろ考現学

２０２１年９月30日　初版第一刷発行
著　者――武内　文治
発行人――坂本圭一朗
発行所――株式会社リーブル
〒７８０―８０４０
高知市神田２１２６―１
ＴＥＬ０８８―８３７―１２５０
装　幀――白石　遼
印刷所――株式会社リーブル

©Bunji Takeuchi, 2021 Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。
落丁本、乱丁本は小社宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
本書の無断流用・転載・複写・複製を厳禁します。

ISBN 978-4-86338-318-0